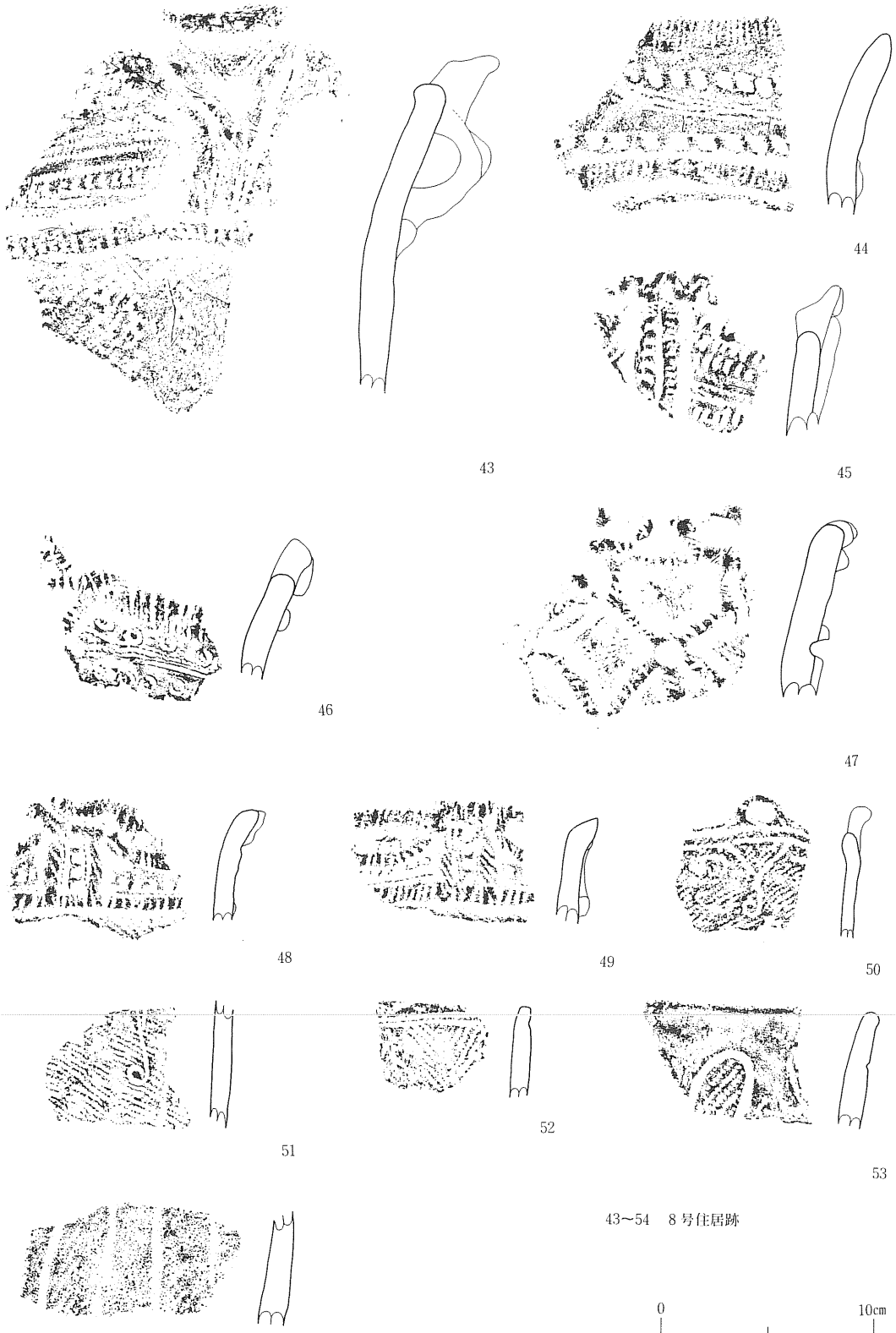
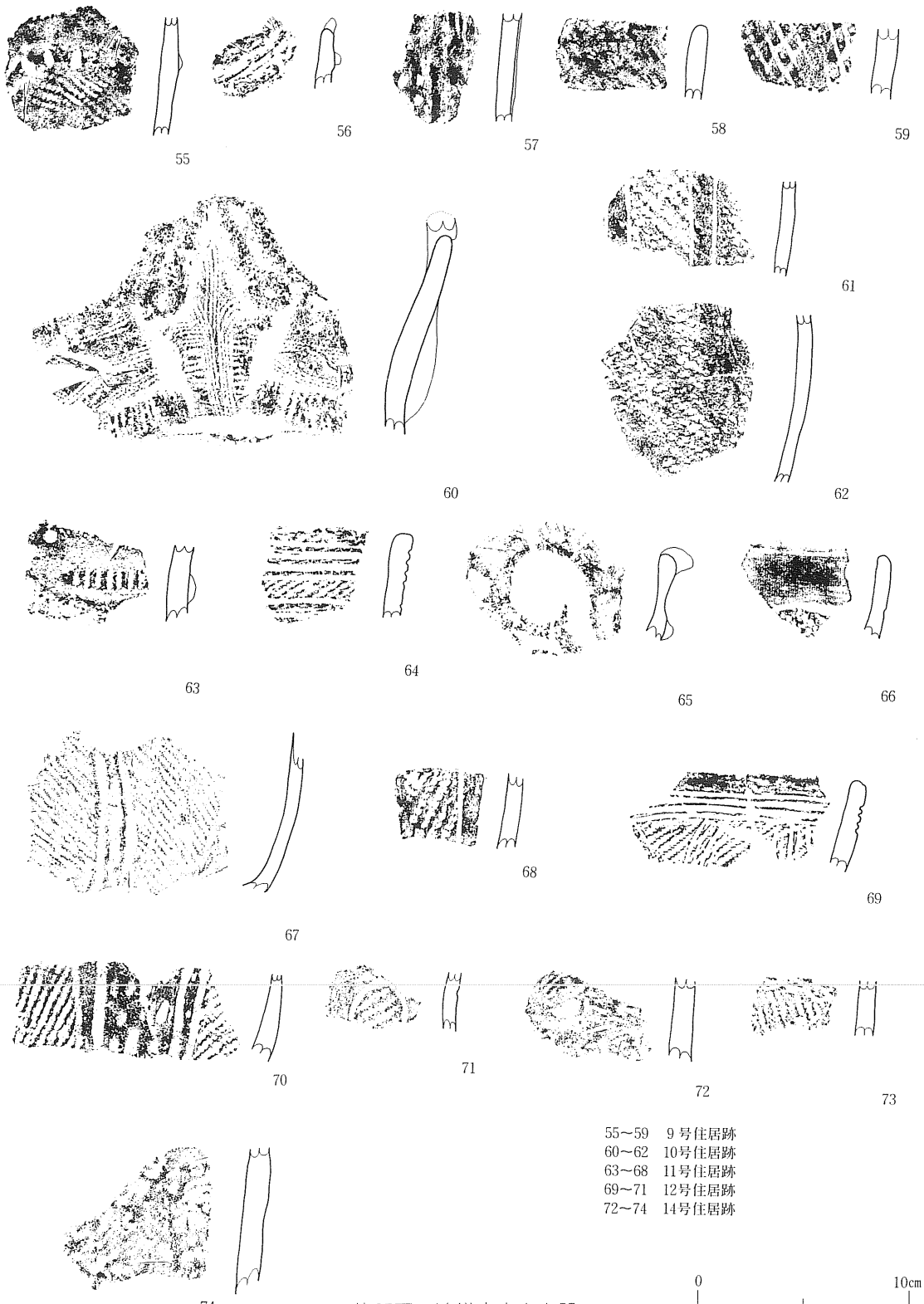
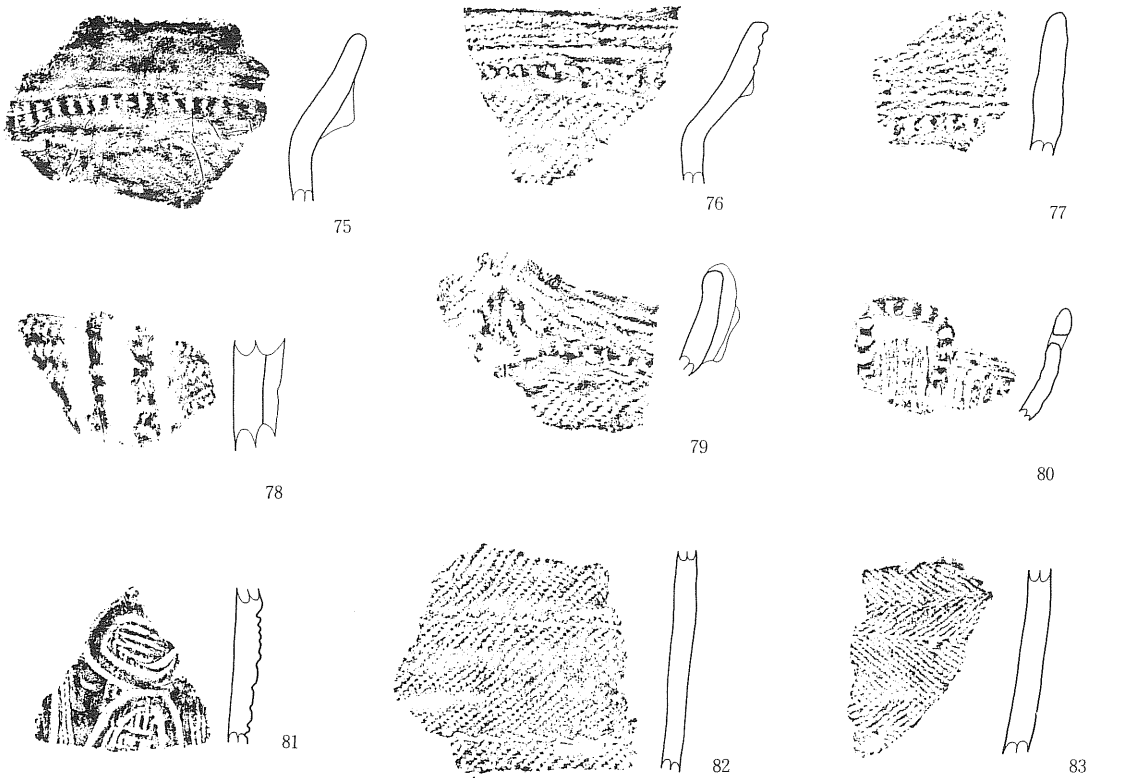


第24図　遺構内出土土器



55～59　9号住居跡
60～62　10号住居跡
63～68　11号住居跡
69～71　12号住居跡
72～74　14号住居跡

第25図　遺構内出土土器



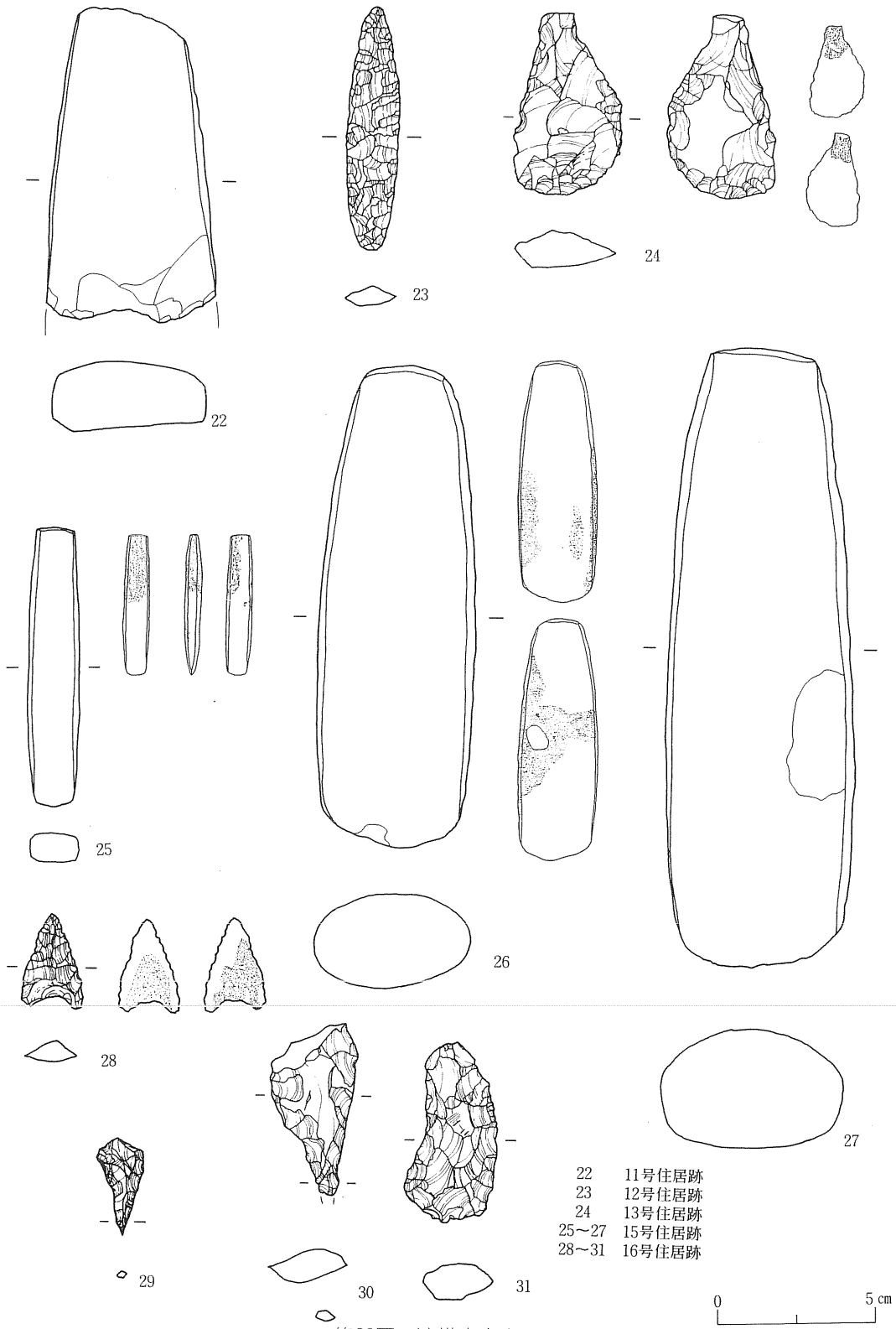
75～83　16号住居跡

第26図　遺構内出土土器

0　10cm

1	2号住居跡
2	3号住居跡
3	4号住居跡
4	7号住居跡
5～11	8号住居跡
12	9号住居跡
13～18	10号住居跡
19～21	11号住居跡

第27図　遺構内出土石器

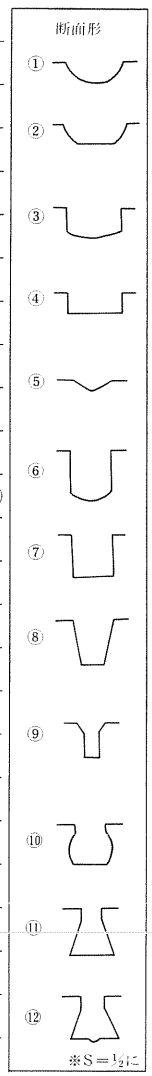


第28図　遺構内出土石器

第29図　遺構内出土石器

土 坑 一 覧 表

番号	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物
1	135	120	45	楕円形	①	第60図33(石錐)
2	100		33	円形	②	
3	95	90	34	楕円形	②	
4	110	100	22	楕円形	①	
5	88		40	楕円形	②	
6	90	65	14	楕円形	①	
7	140	100	22	楕円形	②	
8	72		20	円形	⑤	
9	91		12	円形	②	第60図34(石匙)
10	107	70	13	小判形	②	
11	70	60	10	楕円形	②	第61図50(磨石)
12	91	85	20	楕円形	②	
13	63	56	40	楕円形	①	
14	80	66	16	楕円形	②	第55図116、縄文、第60図35(磨製石斧)
15	172	95	22	隅丸長方形	②	第50図84～86、平安時代(内黒土師坏、赤褐色土器坏)
16	75	65	10	楕円形	②	
17	98	77	8	長方形	②	
18	172	154	25	楕円形	②	
19	96	69	26	楕円形	②	
20	265	164	48	楕円形	②	
21	188	146	14	長形	②	
22	146		105	円形	⑪	第55図117～119、縄文中期末
23	200	165	57	楕円形	⑤	
24	140	104	33	不整形	②	第55図120、縄文中期末
25	167	100	18	長形	②	第55図121・122、縄文中期・晩期
26	147	90	43	楕円形	②	
27	120		98	円形	⑪	第55図123、縄文中期末
28	90	83	10	楕円形	②	
29	72		12	円形	②	第55図123、縄文中期末
30	182	130	20	不整形	②	
31	92	66	13	不整形	①	
32	98	70	16	楕円形	②	
33	104	100	15	楕円形	②	第55図124～126、縄文晩期
34	108	98	22	楕円形	②	



番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
35	82		83	円形	⑪	
36	106	97	18	楕円形	②	
37	325	175	16	隅丸長方形	②	第55図127、縄文晩期
38	480	314	30	不整形	②	第55図128～130、縄文中期、第60図37（石鏃）
39	182	110	13	不整形	②	第55図131～135、縄文晩期、第60図36（磨製石斧）
40	90	77	35	楕円形	①	
41	165	135	104	楕円形	⑪	第50図87～89、縄文中期末、第61図51（台石）
42	66		10	円形	②	
43	144	85	30	小判形	④	
44	124	108	52	隅丸方形	②	
45	80	72	16	楕円形	②	第56図136・137、縄文中期末、第60図38（石鏃）
46	90		11	円形	②	第56図138、縄文中期
47	78	61	11	楕円形	②	
48	105	90	36	楕円形	②	
49	88	52	12	楕円形	②	
50	181	113	14	小判形	②	
51	52		13	円形	②	
52	87	77	25	楕円形	①	
53	92	60	31	楕円形	②	
54	91	66	10	楕円形	⑤	
55	95	65	45	楕円形	④	第56図139、縄文
56	123	105	118	楕円形	⑫	第56図140～144、縄文中期（大木10式） 第96図11（再利用土製品）
57	111	104	88	楕円形	⑫	第51図90～93、第56図145～147、縄文中期
58	100	73	20	楕円形	②	第51図94、第56図148、平安時代（須恵器）
59	88	62	13	不整形	②	
60	80	70	15	不整形	①	
61	77	70	95	楕円形	⑫	
62	67		15	円形	①	
63	100		46	円形	②	
64	75		39	円形	②	
65	90	85	18	楕円形	②	
66	92		20	円形	②	
67	120	104	94	楕円形	⑪	
68	79		21	円形	②	

番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
69	106	102	33	楕円形	④	
70	51	38	28	楕円形	④	
71	60	58	11	楕円形	②	
72	218	87	56	不整形	②	
73	95	82	44	楕円形	②	
74	101	94	46	楕円形	⑪	第57図149・150、縄文中期、第60図39（石鏃）
75	90	80	20	隅丸方形	④	
76	84	77	23	隅丸方形	④	
77	213	82	23	長方形	②	
78	62		22	円形	④	
79	102	92	24	楕円形	②	
80	178	96	21	不整形	②	
81	55		78	円形	②	
82	65		24	円形	③	
83	97	88	51	楕円形	⑦	第57図151、縄文
84	115	83	72	不整形	⑦	第57図152、縄文中期末（大木10式）
85	106		89	円形	⑦	第51図95、縄文晩期
86	120		93	円形	⑦	
87	80		25	円形	②	
88	100	84	63	楕円形	⑦	
89	105	72	16	楕円形	②	
90	220	192	212	不整形	⑪	第51図96、第57図153、縄文中期初頭
91	210	195	194	不整形	⑪	第57図154、縄文中期初頭
92	115	111	14	楕円形	②	
93	154	105	25	楕円形	②	
94	182	121	33	不整形	④	第61図52（くぼみ石）
95	160	125	19	楕円形	②	
96	205	166	23	不整形	④	第57図155、縄文中期初頭
97	110	76	66	楕円形	⑩	
98	188	94	99	不整形	⑧	
99	122	85	32	楕円形	①	
100	256	180	50	楕円形	②	
101	170	102	27	不整形	②	
102	190	170	10	楕円形	②	第57図156・157、縄文中期
103	78	61	19	楕円形	④	

番　号	規　模　(cm)			平面形	断面形	出　土　遺　物
	長軸	短軸	深さ			
104	80	70	62	楕円形	⑥	
105	132	96	62	不整形	⑧	第57図158・159、縄文中期初頭
106	98	72	60	楕円形	⑧	
107	140	133	32	楕円形	⑩	第57図160～162、縄文中期
108	152	130	24	楕円形	②	第57図163・164、縄文中期(円筒上層a式)
109	116	66	18	楕円形	②	
110	136	122	110	不整形	⑪	第52図97～99、第57・58図165～173 、縄文中期(円筒上層a式)、第60図40(石錐)
111	115	88	104	隅丸方形	⑦	第58図174、縄文中期(円筒上層a式)
112	225	164	8	不整形	②	
113	92	66	30	楕円形	②	
114	87	72	10	楕円形	②	第58図175、縄文
115	172	114	31	楕円形	④	
116	226	146	45	不整形	②	第58図176～180、縄文中期
117	176	88	76	不整形	⑦	
118	105	66	47	不整形	①	
119	75	70	21	楕円形	②	
120	110	91	116	楕円形	⑪	第58図100、第55図181～184、縄文中期初頭、第60図41(石錐)
121	93	83	13	楕円形	②	
122	112	74	18	楕円形	②	
123	92	86	14	不整形	①	
124	124	106	98	不整形	⑪	
125	85	65	14	不整形	①	
126	110		118	円　形	①	
127	78	60	17	不整形	①	
128	94	76	31	楕円形	②	
129	170	86	12	隅丸長方形	②	
130	111	78	24	楕円形	①	
131	84	58	80	楕円形	⑨	
132	90	58	60	不整形	⑦	
133	136	70	8	楕円形	②	
134	173	153	24	楕円形	②	
135	143	122	92	楕円形	⑫	第58図185、縄文中期初頭、第60図42(石鏃)
136	78	48	36	不整形	②	第58・59図186～194、縄文中期初頭

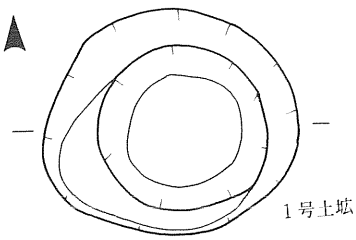
番　号	規　模　(cm)			平面形	断面形	出　土　遺　物
	長軸	短軸	深さ			
137	119		39	円　形	③	第60図43(ヘラ状石器)
138	99	85	18	楕円形	①	
139	156	91	22	小判形	②	第59図195・196、縄文中期初期、第61図53(石錘)
140	73		14	円　形	②	第59図197・198、縄文
141	93	60	11	楕円形	②	
142	125	58	28	楕円形	③	
143	85		15	円　形	②	
144	58		20	円　形	①	
145	104		46	円　形	①	
146	120	100	21	隅丸方形	④	第53図101、第59図199、縄文中期初頭(円筒上層a式)

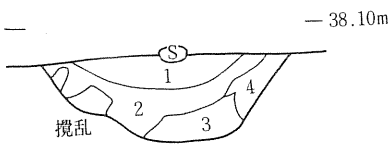
土器埋設遺構（第48・49図）

15基検出された。1・2・14号が第Ⅱ層面で、他はローム面で確認された。深鉢形・鉢形土器の埋設で、11号の東側には焼土がみられ、14号の埋設土器の中には川原石が入っていた。

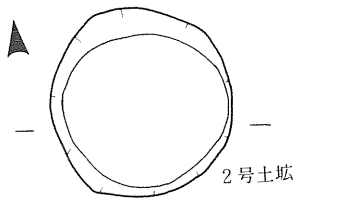
炉（第49図）

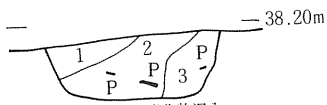
4基検出された。1～3号は第Ⅱ層面で、4号はローム面で確認された。1～3号は石囲炉で、底面が火熱を受け石も赤変していた。4号は石囲土器埋設部と石組部からなるいわゆる複式炉である。石囲土器埋設部は深鉢形土器の下半部を正立して埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は石を側面に組み、底面及び側面の石が火熱を受けている。炉の周辺にピットは数個検出されたが、住居の壁は確認されなかった。



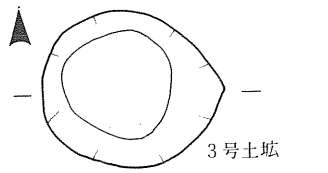


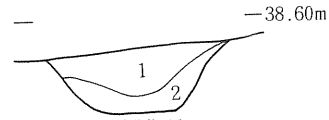
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黒色土、炭化物混入
第3層　黒色土、2層よりやや暗い、炭化物混入
第4層　黄褐色土、ローム粒子混入、ぼそぼそしている



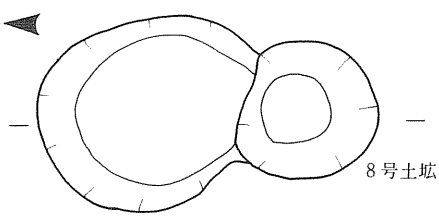


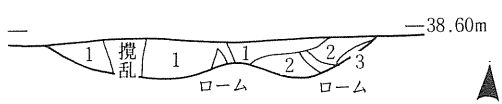
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　黄褐色土、ローム粒子混入



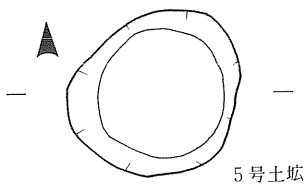


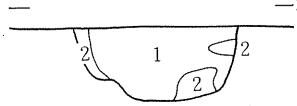
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ロームブロック混入



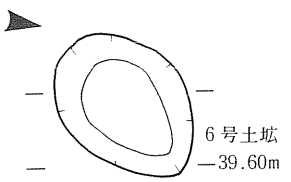


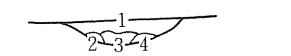
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、ぼそぼそしている



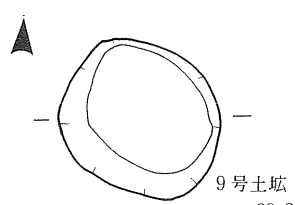


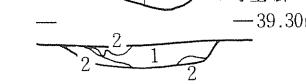
第1層　黒褐色土、焼土少量・炭化物混入
第2層　黄褐色土、黒色土粒子混入



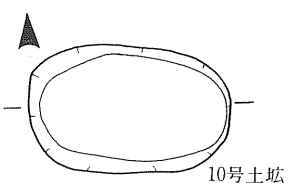


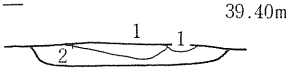
第1層　黒褐色土、しまり強、ローム粒子多量混入
第2層　黄褐色土、粘性強
第3層　暗褐色土、しまり強
第4層　明黄褐色土、粘性強、しまり強



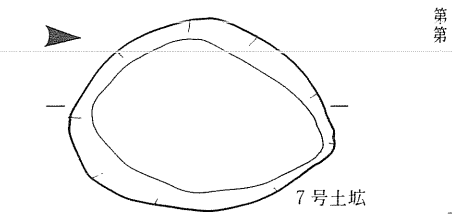


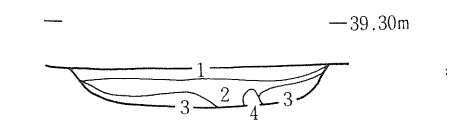
第1層　黒褐色土、粘性弱、しまり強、炭化物混入
第2層　暗褐色土、粘性強、しまり強、ローム粒子混入



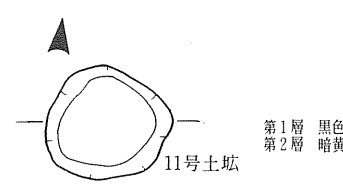


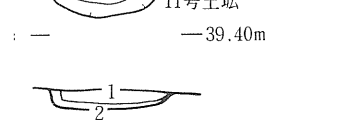
第1層　黒褐色土、しまり強、焼土混入
第2層　黒褐色土、炭化物少量混入



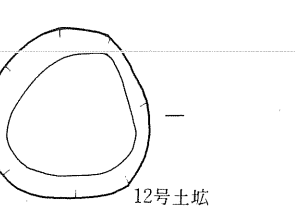


第1層　暗褐色土、炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土、ローム多量混入
第4層　黄褐色土、ローム粒子多量混入

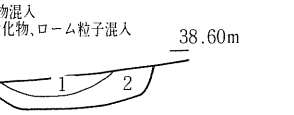


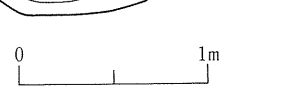


第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入

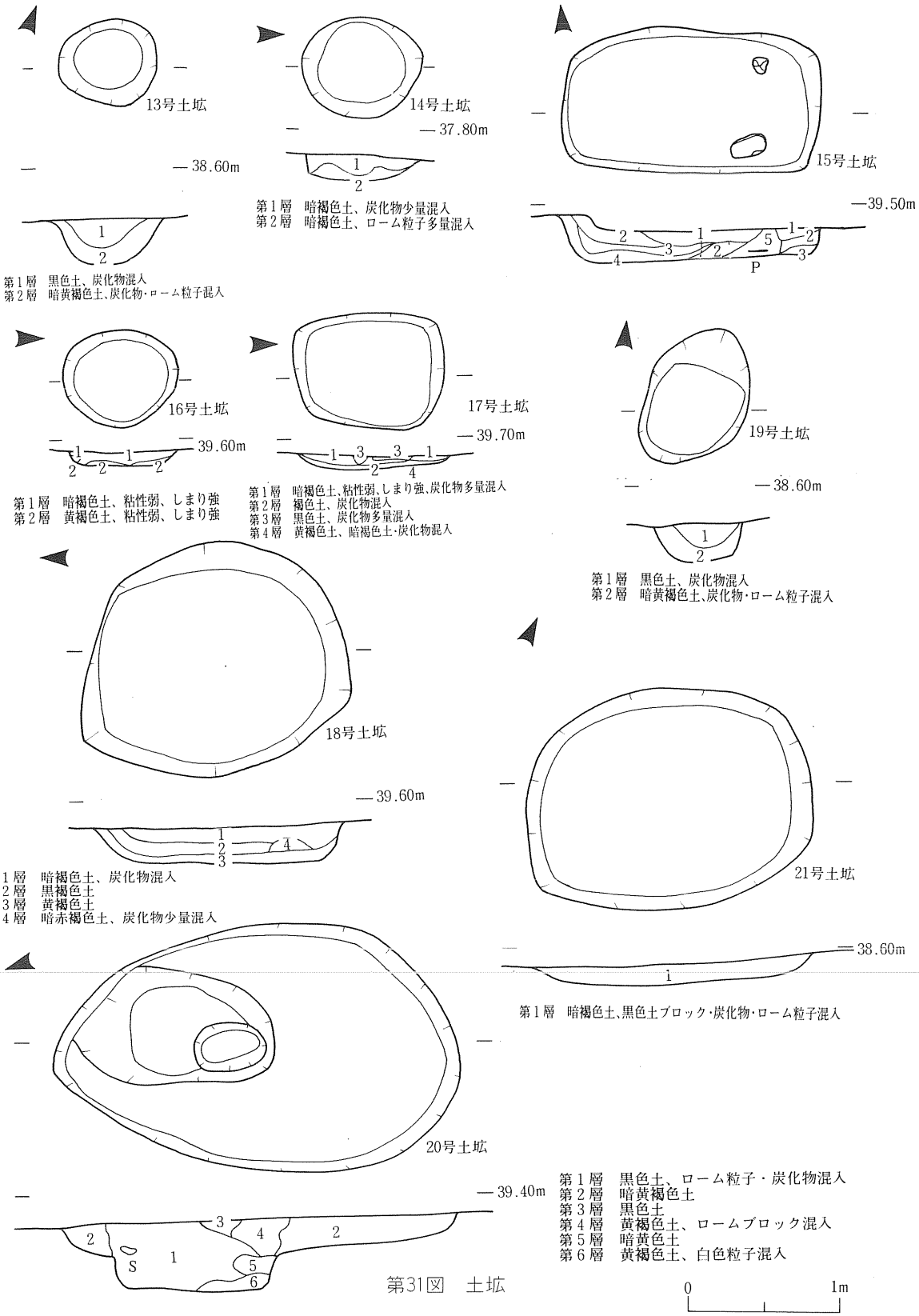


第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物、ローム粒子混入

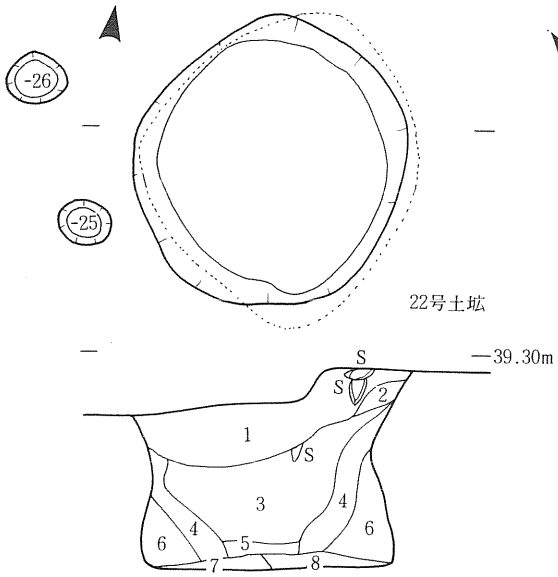




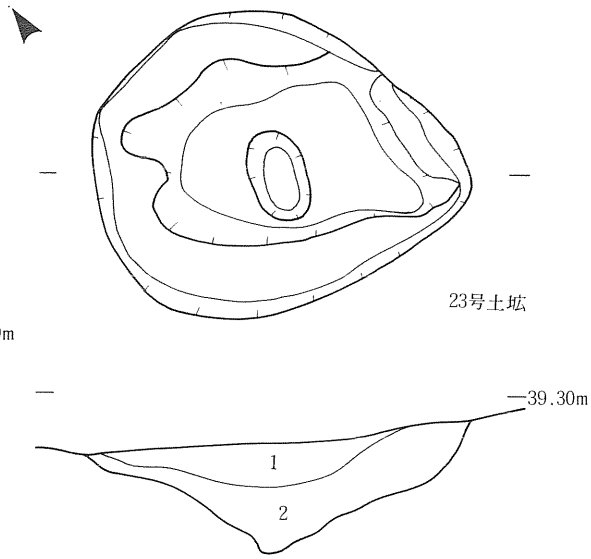
第30図　土坑


13号土坑
38.60m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
14号土坑
37.80m
第1層　暗褐色土、炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
15号土坑
39.50m
P
16号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土、粘性弱、しまり強
第2層　黄褐色土、粘性弱、しまり強
17号土坑
39.70m
第1層　暗褐色土、粘性弱、しまり強、炭化物多量混入
第2層　褐色土、炭化物混入
第3層　黒色土、炭化物多量混入
第4層　黄褐色土、暗褐色土・炭化物混入
19号土坑
38.60m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
18号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土
第3層　黄褐色土
第4層　暗赤褐色土、炭化物少量混入
21号土坑
38.60m
第1層　暗褐色土、黒色土ブロック・炭化物・ローム粒子混入
20号土坑
39.40m
S
第1層　黒色土、ローム粒子・炭化物混入
第2層　暗黄褐色土
第3層　黒色土
第4層　黄褐色土、ロームブロック混入
第5層　暗黄色土
第6層　黄褐色土、白色粒子混入
0
1m

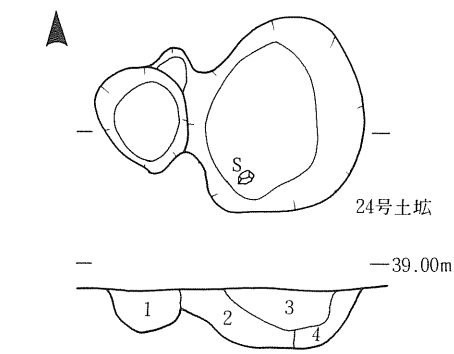
第31図　土坑



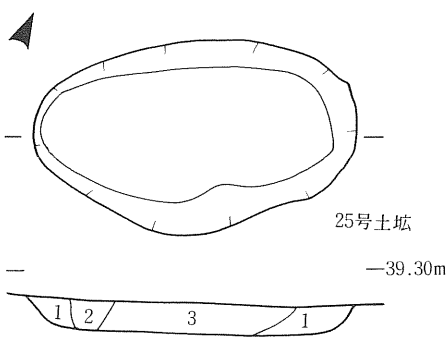
第１層　黒褐色土、炭化物少量・黄褐色土粒子微量混入
第２層　暗褐色土、黄褐色土多量混入
第３層　黒褐色土、炭化物少量・黄褐色土粒子少量混入
第４層　黒褐色土＋黄褐色土
第５層　黒褐色土＋黄褐色土、焼土・炭化少量混入
第６層　黄褐色土、ローム混入
第７層　赤褐色土、焼土
第８層　黒褐色土、炭化物多量混入



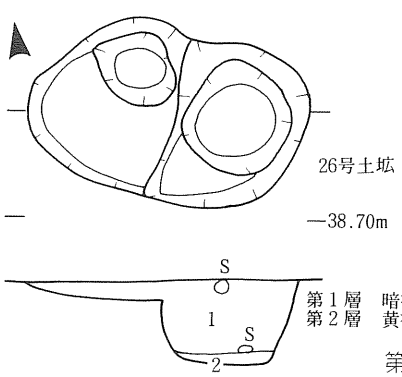
第１層　黒色土、炭化物混入
第２層　黄褐色土、しまり強、炭化物混入



第１層　暗褐色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第２層　褐色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第３層　黒褐色土、炭化物少量・黄褐色土微量混入
第４層　黄褐色土、炭化物多量混入



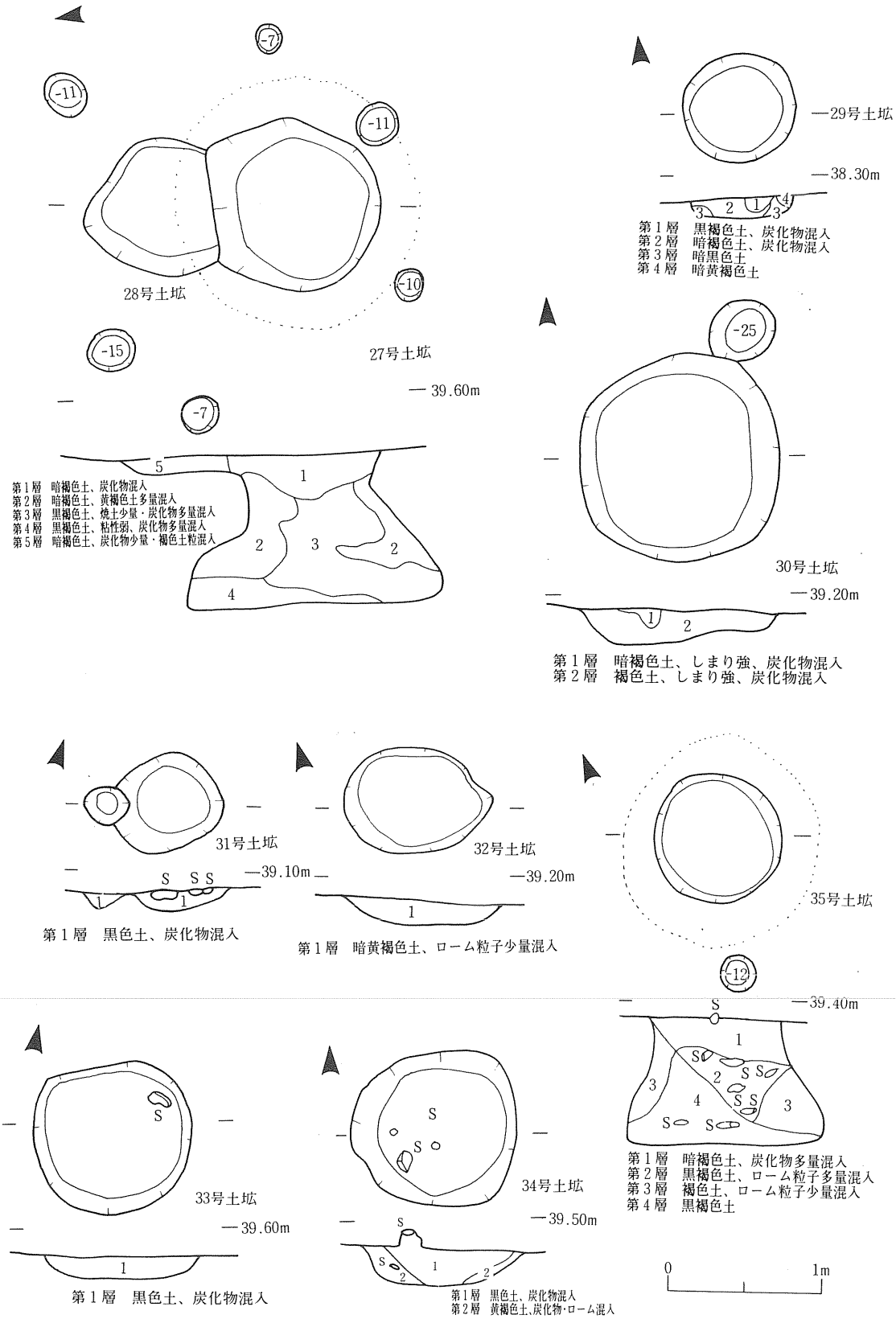
第１層　暗褐色土、黄褐色土多量混入
第２層　暗褐色土
第３層　黒褐色土、炭化物微量・黄褐色土少量混入



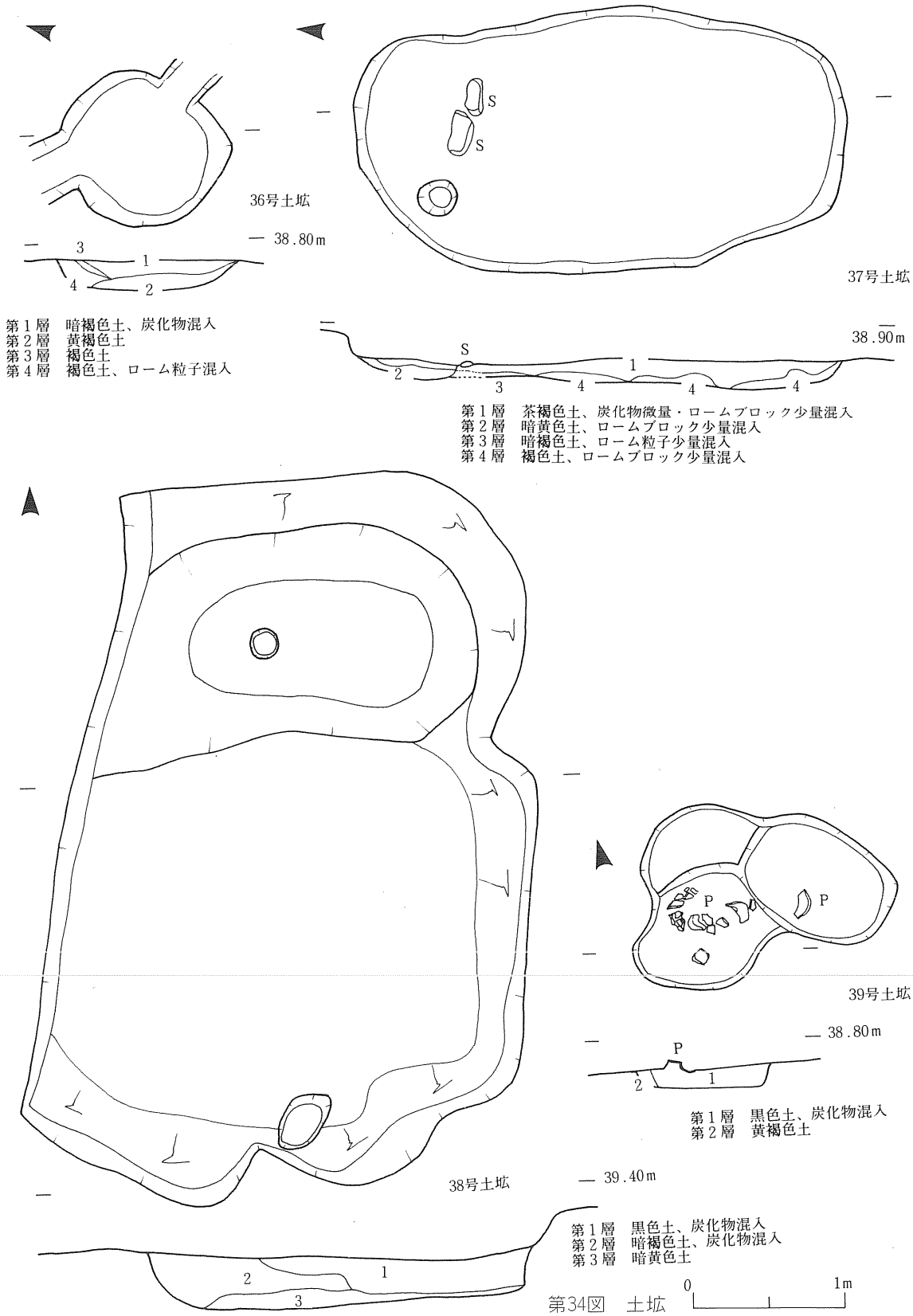
第１層　暗褐色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第２層　黄褐色土、炭化物微量混入

第32図　土坑

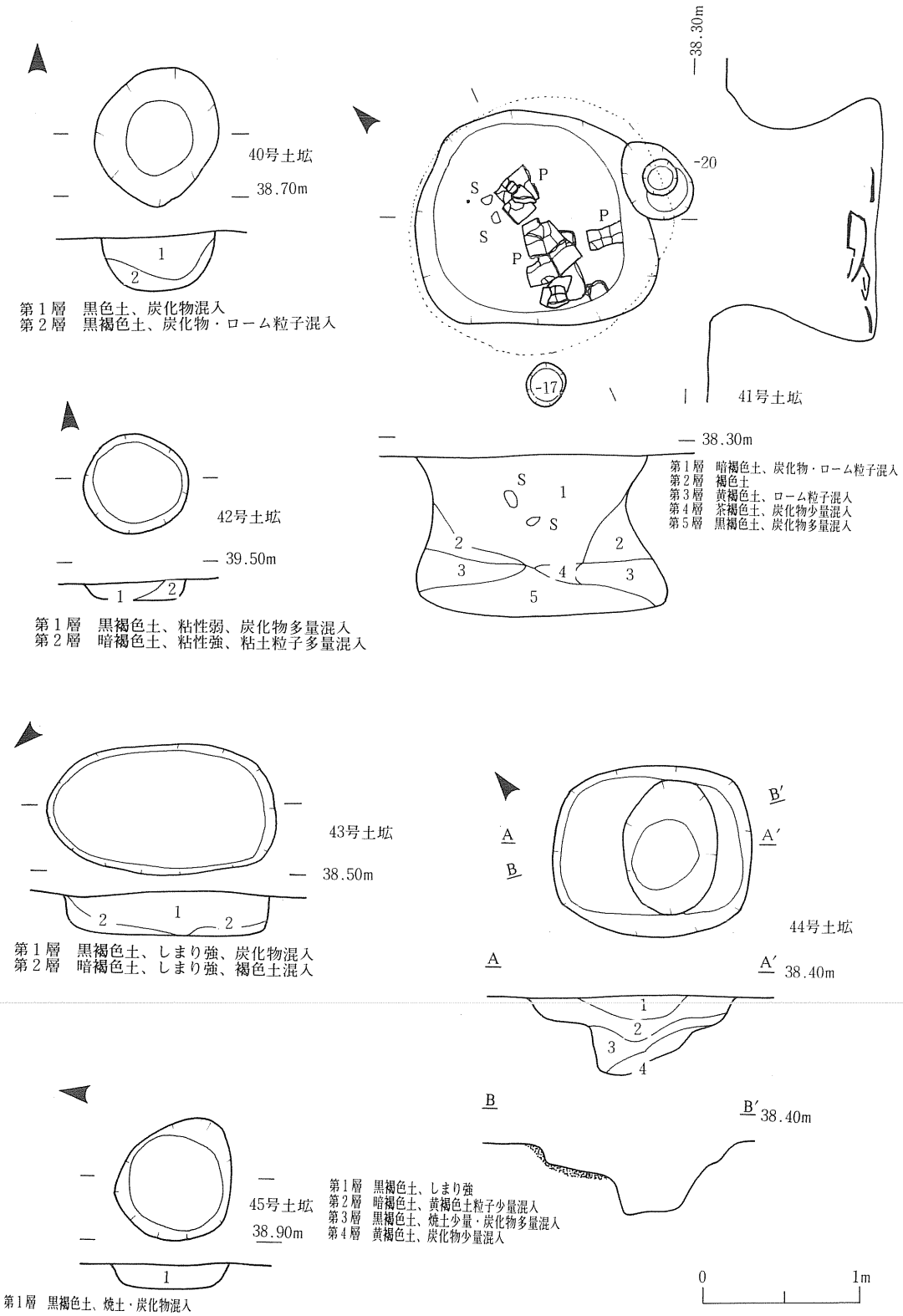
0　1m


28号土坑
27号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土多量混入
第3層　黒褐色土、焼土少量・炭化物多量混入
第4層　黒褐色土、粘性弱、炭化物多量混入
第5層　暗褐色土、炭化物少量・褐色土粒混入
29号土坑
38.30m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗黒色土
第4層　暗黄褐色土
30号土坑
39.20m
第1層　暗褐色土、しまり強、炭化物混入
第2層　褐色土、しまり強、炭化物混入
31号土坑
39.10m
第1層　黒色土、炭化物混入
32号土坑
39.20m
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子少量混入
35号土坑
39.40m
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　褐色土、ローム粒子少量混入
第4層　黒褐色土
33号土坑
39.60m
第1層　黒色土、炭化物混入
34号土坑
39.50m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、炭化物・ローム混入
0
1m

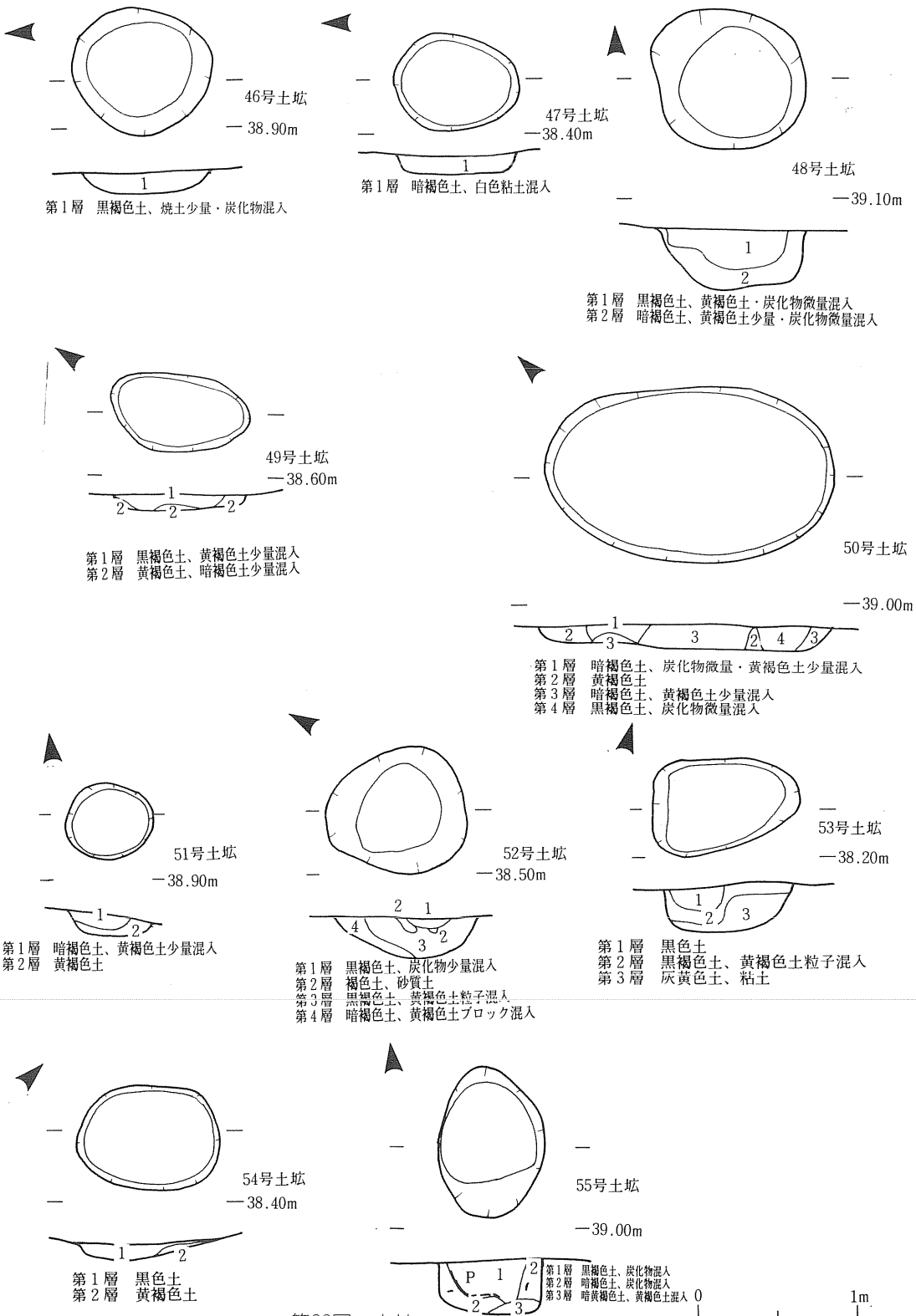
第33図　土坑


36号土坑
38.80m
3
1
4
2
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土
第3層　褐色土
第4層　褐色土、ローム粒子混入
S
S
37号土坑
38.90m
S
1
2
3
4
4
4
第1層　茶褐色土、炭化物微量・ロームブロック少量混入
第2層　暗黄色土、ロームブロック少量混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
第4層　褐色土、ロームブロック少量混入
P
P
39号土坑
38.80m
P
1
2
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土
38号土坑
39.40m
2
1
3
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗黄色土
0
1m

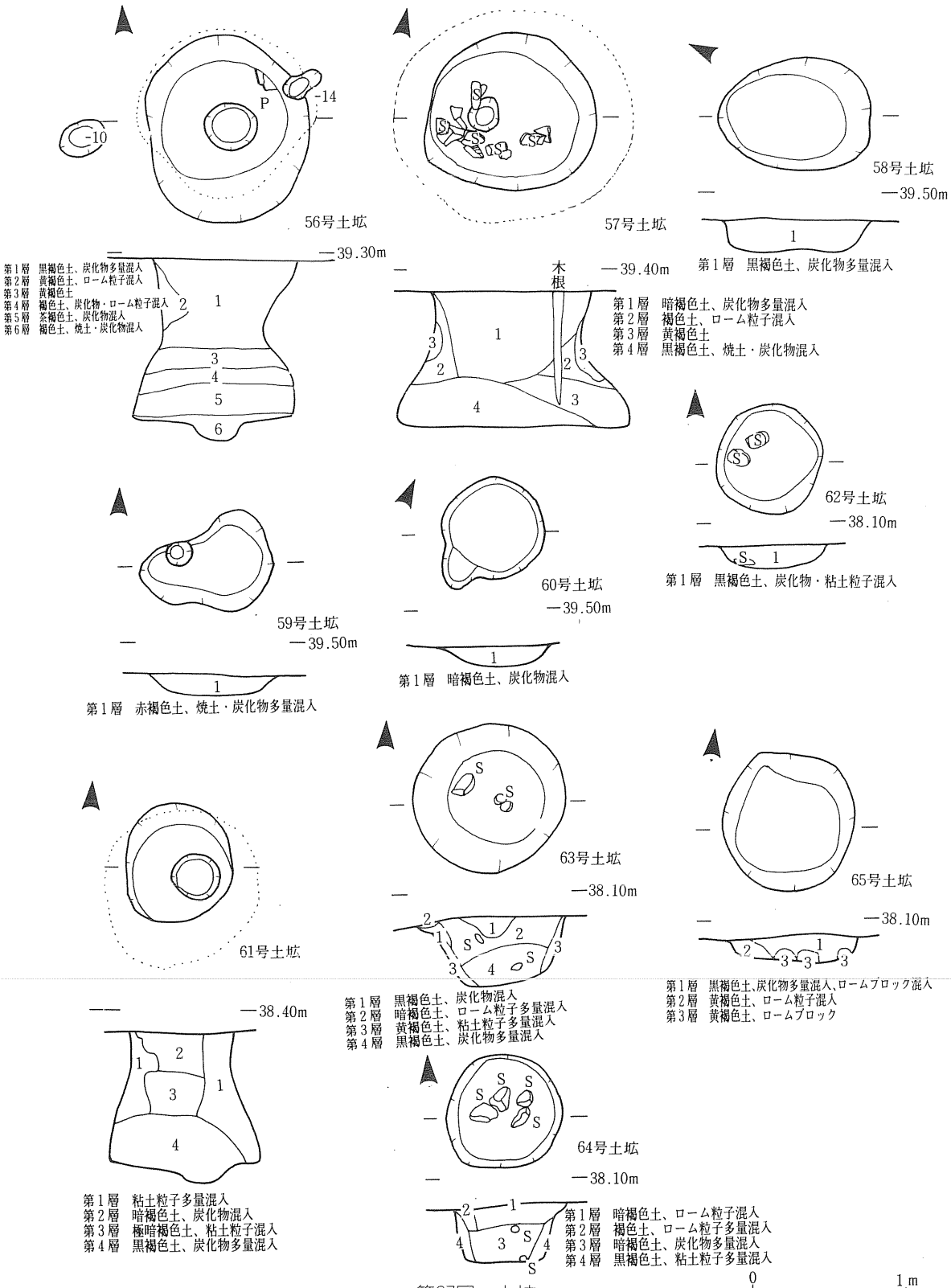
第34図　土坑


40号土坑
38.70m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
38.30m
-20
-17
41号土坑
38.30m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土
第3層　黄褐色土、ローム粒子混入
第4層　茶褐色土、炭化物少量混入
第5層　黒褐色土、炭化物多量混入
42号土坑
39.50m
第1層　黒褐色土、粘性弱、炭化物多量混入
第2層　暗褐色土、粘性強、粘土粒子多量混入
43号土坑
38.50m
第1層　黒褐色土、しまり強、炭化物混入
第2層　暗褐色土、しまり強、褐色土混入
44号土坑
38.40m
38.40m
45号土坑
38.90m
第1層　黒褐色土、しまり強
第2層　暗褐色土、黄褐色土粒子少量混入
第3層　黒褐色土、焼土少量・炭化物多量混入
第4層　黄褐色土、炭化物少量混入
第1層　黒褐色土、焼土・炭化物混入
0
1m

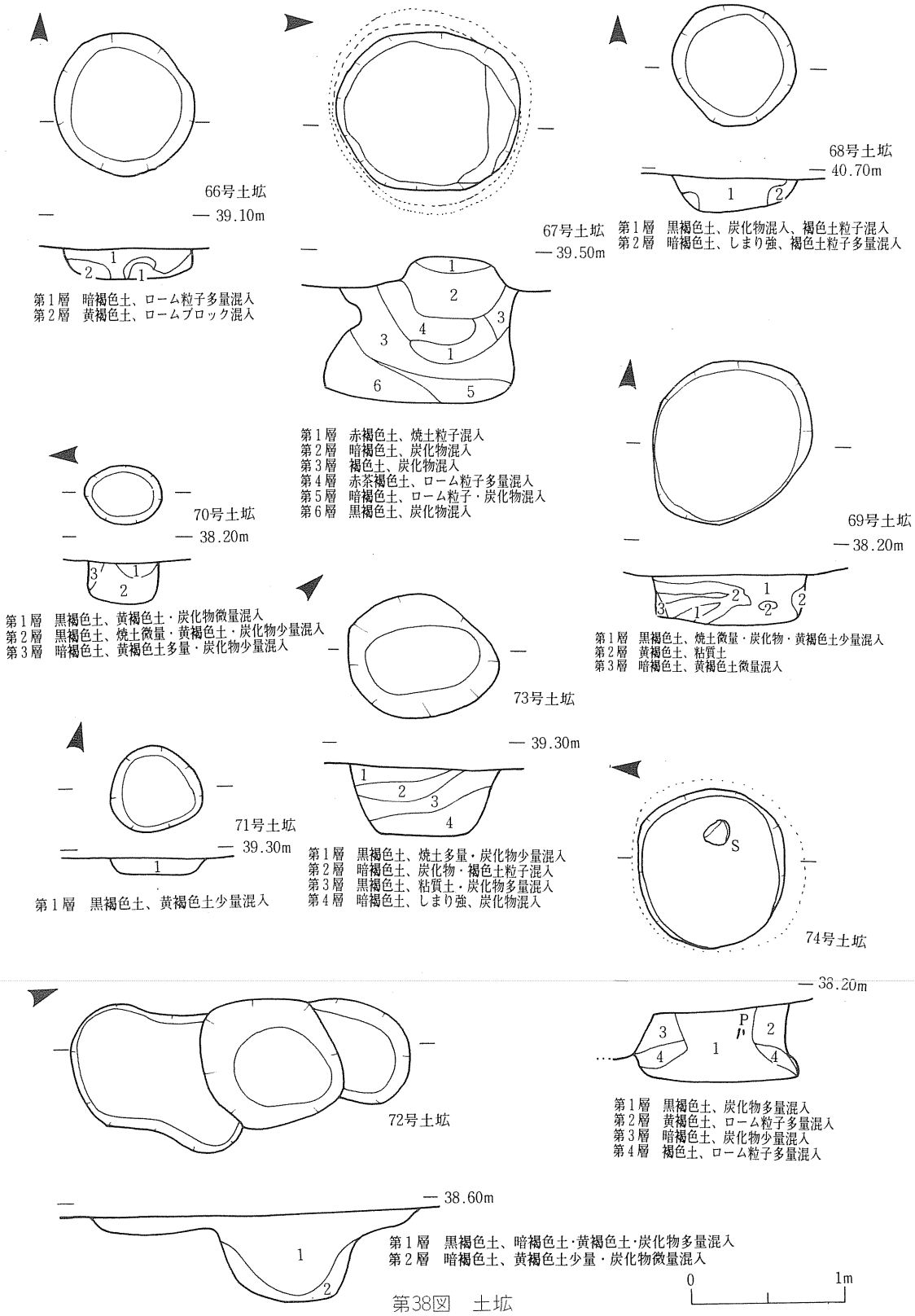
第35図　土坑


46号土坑
38.90m
第1層　黒褐色土、焼土少量・炭化物混入
47号土坑
38.40m
第1層　暗褐色土、白色粘土混入
48号土坑
39.10m
第1層　黒褐色土、黄褐色土・炭化物微量混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土少量・炭化物微量混入
49号土坑
38.60m
第1層　黒褐色土、黄褐色土少量混入
第2層　黄褐色土、暗褐色土少量混入
50号土坑
39.00m
第1層　暗褐色土、炭化物微量・黄褐色土少量混入
第2層　黄褐色土
第3層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第4層　黒褐色土、炭化物微量混入
51号土坑
38.90m
第1層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第2層　黄褐色土
52号土坑
38.50m
第1層　黒褐色土、炭化物少量混入
第2層　褐色土、砂質土
第3層　黒褐色土、黄褐色土粒子混入
第4層　暗褐色土、黄褐色土ブロック混入
53号土坑
38.20m
第1層　黒色土
第2層　黒褐色土、黄褐色土粒子混入
第3層　灰黄色土、粘土
54号土坑
38.40m
第1層　黒色土
第2層　黄褐色土
55号土坑
39.00m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、黄褐色土混入
0
1m

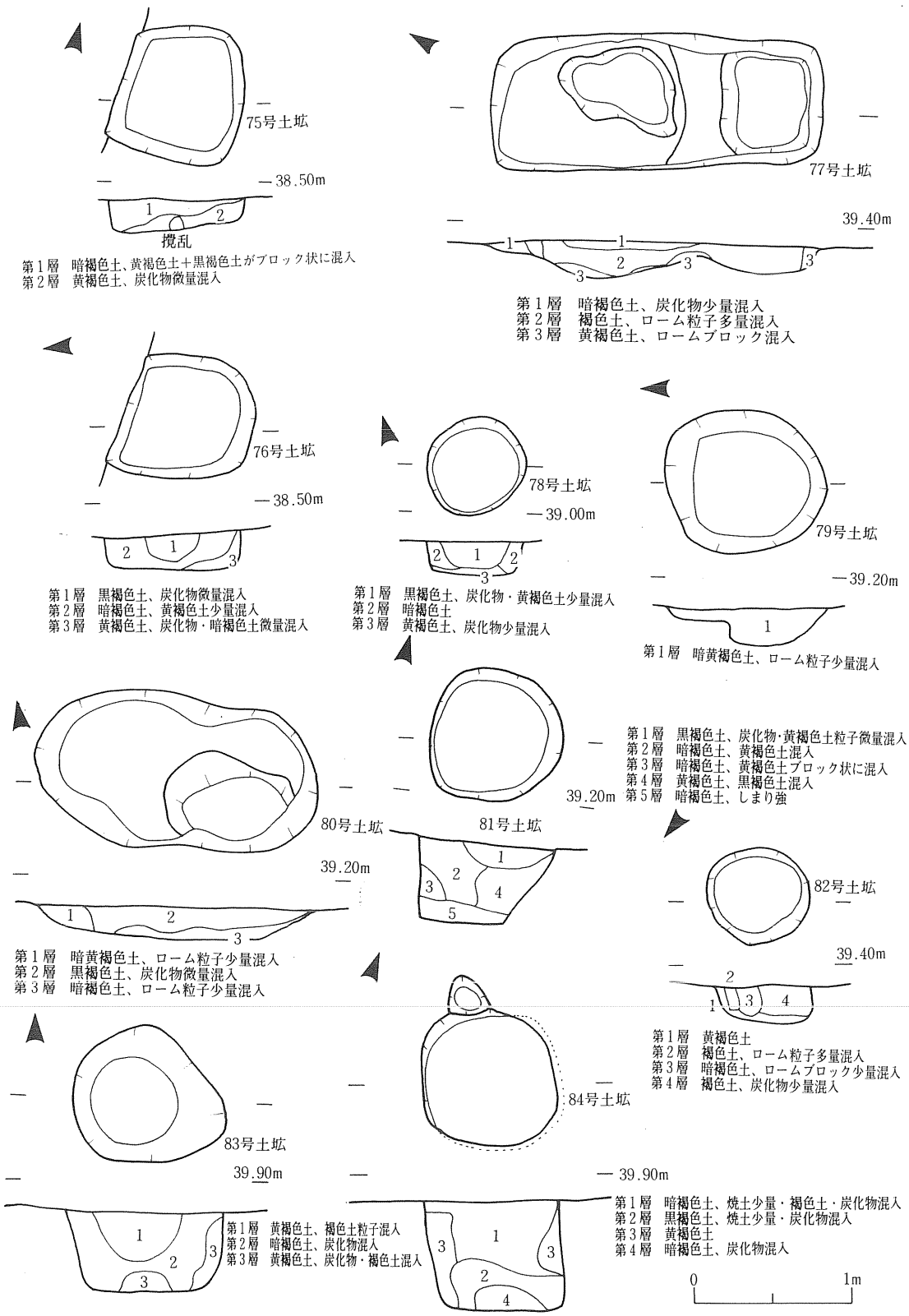
第36図　土坑


56号土坑
-10
-14
P
—39.30m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
第4層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　茶褐色土、炭化物混入
第6層　褐色土、焼土・炭化物混入
57号土坑
—39.40m
木根
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
第4層　黒褐色土、焼土・炭化物混入
58号土坑
—39.50m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入
59号土坑
—39.50m
第1層　赤褐色土、焼土・炭化物多量混入
60号土坑
—39.50m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
62号土坑
—38.10m
第1層　黒褐色土、炭化物・粘土粒子混入
61号土坑
—38.40m
第1層　粘土粒子多量混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　極暗褐色土、粘土粒子混入
第4層　黒褐色土、炭化物多量混入
63号土坑
—38.10m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黄褐色土、粘土粒子多量混入
第4層　黒褐色土、炭化物多量混入
65号土坑
—38.10m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入、ロームブロック混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、ロームブロック
64号土坑
—38.10m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土、炭化物多量混入
第4層　黒褐色土、粘土粒子多量混入
0
1m

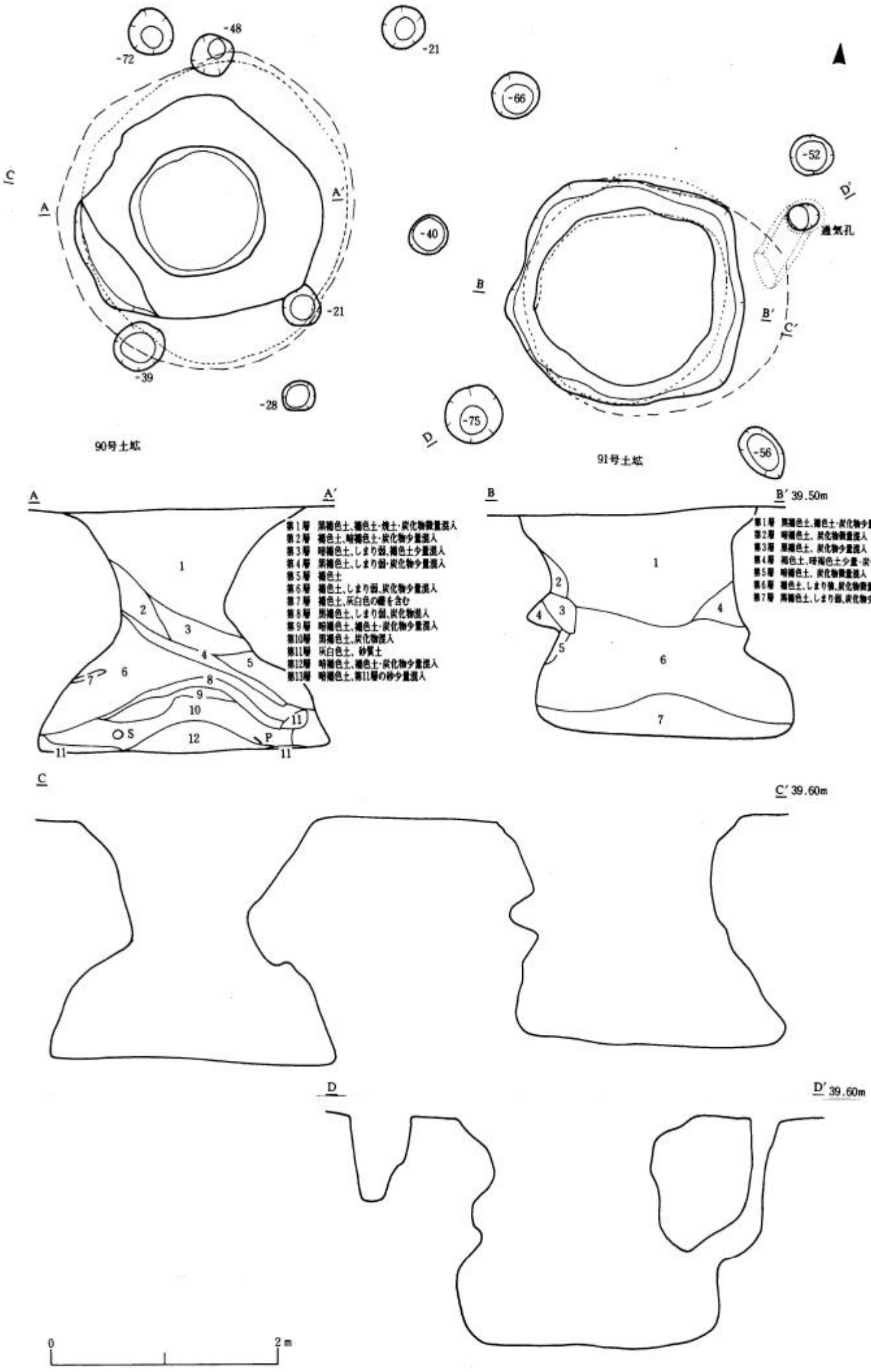
第37図　土坑


66号土坑
39.10m
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　黄褐色土、ロームブロック混入
67号土坑
39.50m
第1層　赤褐色土、焼土粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土、炭化物混入
第4層　赤茶褐色土、ローム粒子多量混入
第5層　暗褐色土、ローム粒子・炭化物混入
第6層　黒褐色土、炭化物混入
68号土坑
40.70m
第1層　黒褐色土、炭化物混入、褐色土粒子混入
第2層　暗褐色土、しまり強、褐色土粒子多量混入
69号土坑
38.20m
第1層　黒褐色土、焼土微量・炭化物・黄褐色土少量混入
第2層　黄褐色土、粘質土
第3層　暗褐色土、黄褐色土微量混入
70号土坑
38.20m
第1層　黒褐色土、黄褐色土・炭化物微量混入
第2層　黒褐色土、焼土微量・黄褐色土・炭化物少量混入
第3層　暗褐色土、黄褐色土多量・炭化物少量混入
71号土坑
39.30m
第1層　黒褐色土、黄褐色土少量混入
73号土坑
39.30m
第1層　黒褐色土、焼土多量・炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、炭化物・褐色土粒子混入
第3層　黒褐色土、粘質土・炭化物多量混入
第4層　暗褐色土、しまり強、炭化物混入
74号土坑
38.20m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土、炭化物少量混入
第4層　褐色土、ローム粒子多量混入
72号土坑
38.60m
第1層　黒褐色土、暗褐色土・黄褐色土・炭化物多量混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土少量・炭化物微量混入
0
1m

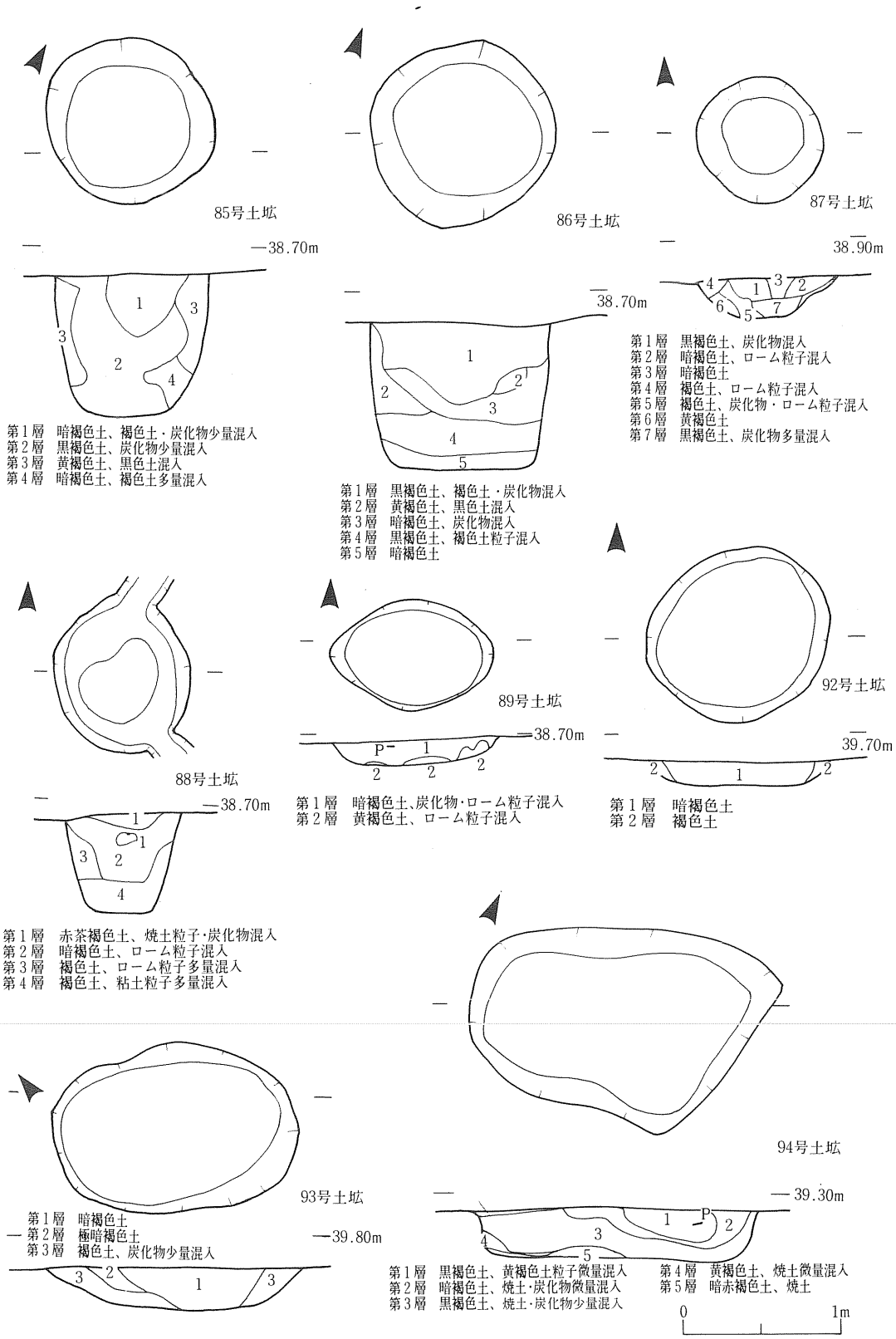
第38図　土坑


75号土坑
38.50m
1
2
撹乱
第1層　暗褐色土、黄褐色土＋黒褐色土がブロック状に混入
第2層　黄褐色土、炭化物微量混入
77号土坑
39.40m
1
1
2
3
3
3
第1層　暗褐色土、炭化物少量混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黄褐色土、ロームブロック混入
76号土坑
38.50m
2
1
3
第1層　黒褐色土、炭化物微量混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第3層　黄褐色土、炭化物・暗褐色土微量混入
78号土坑
39.00m
2
1
2
3
第1層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第2層　暗褐色土
第3層　黄褐色土、炭化物少量混入
79号土坑
39.20m
1
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子少量混入
80号土坑
39.20m
1
2
3
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子少量混入
第2層　黒褐色土、炭化物微量混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
81号土坑
39.20m
1
2
3
4
5
第1層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土粒子微量混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土混入
第3層　暗褐色土、黄褐色土ブロック状に混入
第4層　黄褐色土、黒褐色土混入
第5層　暗褐色土、しまり強
82号土坑
39.40m
2
1
3
4
第1層　黄褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土、ロームブロック少量混入
第4層　褐色土、炭化物少量混入
83号土坑
39.90m
1
2
3
3
第1層　黄褐色土、褐色土粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　黄褐色土、炭化物・褐色土混入
84号土坑
39.90m
3
1
3
2
4
第1層　暗褐色土、焼土少量・褐色土・炭化物混入
第2層　黒褐色土、焼土少量・炭化物混入
第3層　黄褐色土
第4層　暗褐色土、炭化物混入
0
1m

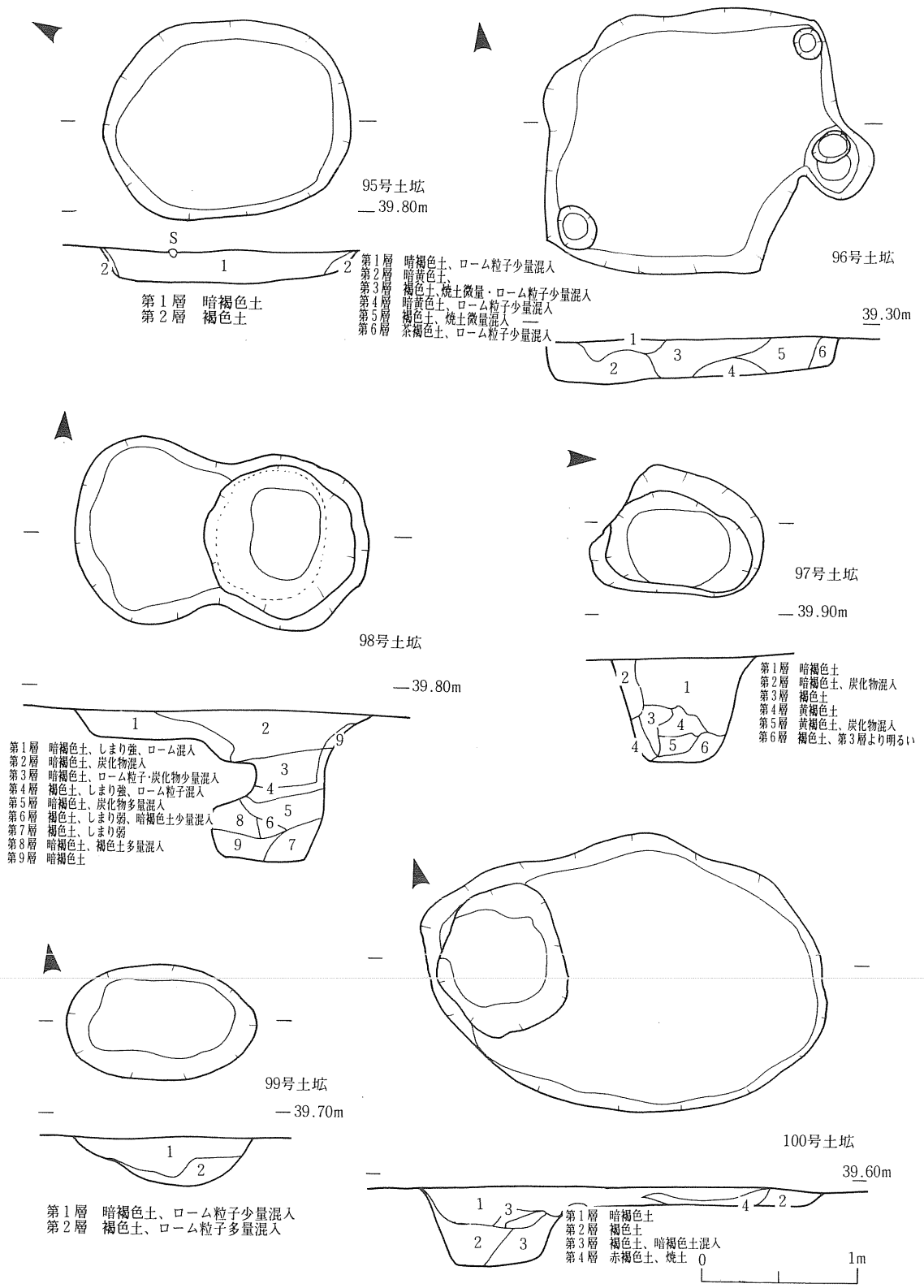
第39図　土坑


90号土坑
91号土坑
通気孔
A
A′
B
B′ 39.50m
C
C′ 39.60m
D
D′ 39.60m
第1層 黒褐色土、褐色土・焼土・炭化物微量混入
第2層 褐色土、暗褐色土・炭化物少量混入
第3層 暗褐色土、しまり弱、褐色土少量混入
第4層 黒褐色土、しまり弱・炭化物少量混入
第5層 褐色土
第6層 褐色土、しまり弱、炭化物少量混入
第7層 褐色土、灰白色の礫を含む
第8層 黒褐色土、しまり弱、炭化物混入
第9層 暗褐色土、褐色土・炭化物少量混入
第10層 黒褐色土、炭化物混入
第11層 灰白色土、砂質土
第12層 暗褐色土、褐色土・炭化物少量混入
第13層 暗褐色土、第11層の砂少量混入
第1層 黒褐色土、褐色土・炭化物少量混入
第2層 暗褐色土、炭化物微量混入
第3層 黒褐色土、炭化物少量混入
第4層 褐色土、暗褐色土少量・炭化物微量混入
第5層 暗褐色土、炭化物微量混入
第6層 褐色土、しまり強、炭化物微量混入
第7層 黒褐色土、しまり弱、炭化物少量混入
0
2m

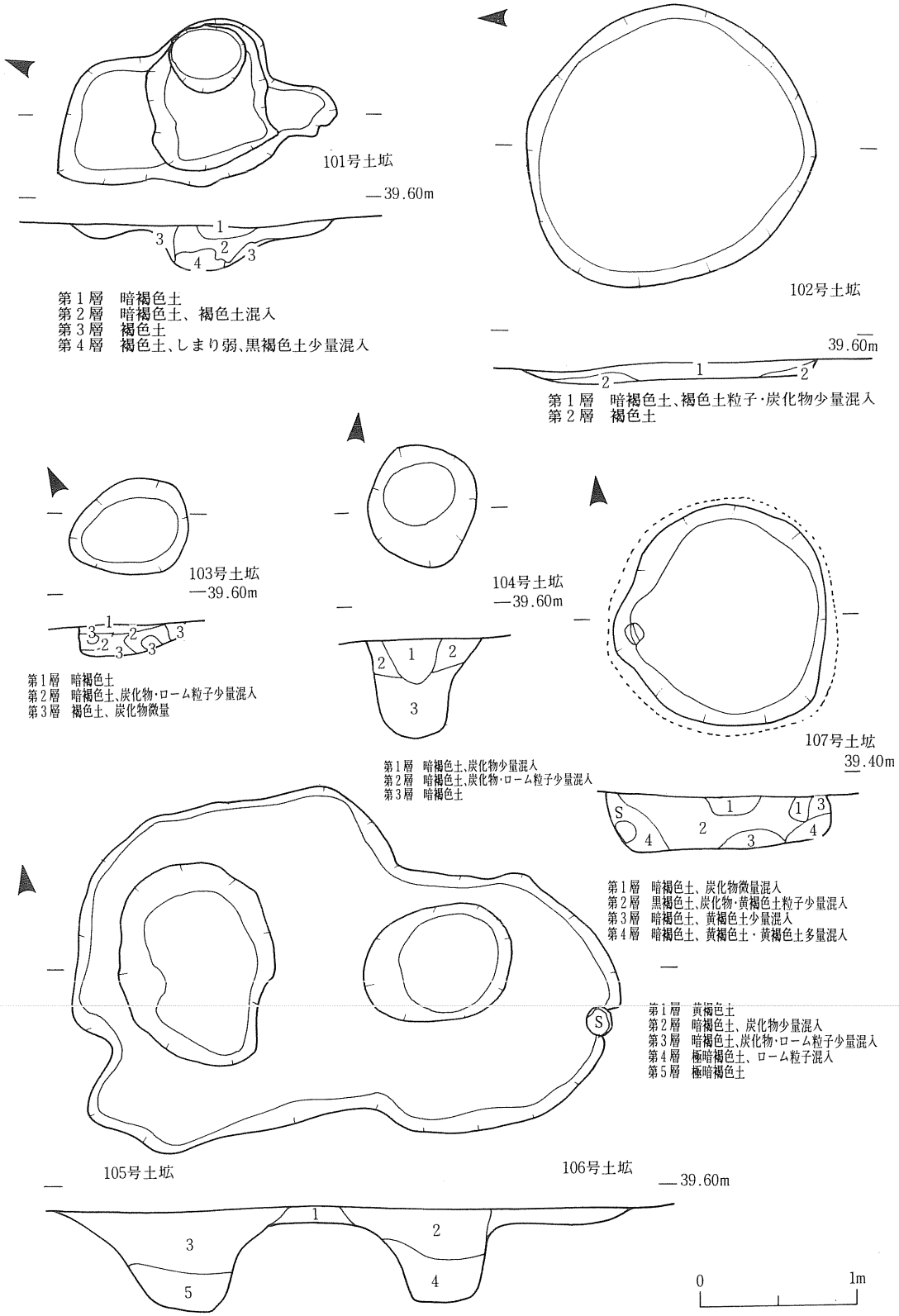
第40図　土坑


85号土坑
38.70m
第1層　暗褐色土、褐色土・炭化物少量混入
第2層　黒褐色土、炭化物少量混入
第3層　黄褐色土、黒色土混入
第4層　暗褐色土、褐色土多量混入
86号土坑
38.70m
第1層　黒褐色土、褐色土・炭化物混入
第2層　黄褐色土、黒色土混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　黒褐色土、褐色土粒子混入
第5層　暗褐色土
87号土坑
38.90m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第4層　褐色土、ローム粒子混入
第5層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第6層　黄褐色土
第7層　黒褐色土、炭化物多量混入
88号土坑
38.70m
第1層　赤茶褐色土、焼土粒子・炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土、ローム粒子多量混入
第4層　褐色土、粘土粒子多量混入
89号土坑
38.70m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
92号土坑
39.70m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
93号土坑
39.80m
第1層　暗褐色土
第2層　極暗褐色土
第3層　褐色土、炭化物少量混入
94号土坑
39.30m
第1層　黒褐色土、黄褐色土粒子微量混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物微量混入
第3層　黒褐色土、焼土・炭化物少量混入
第4層　黄褐色土、焼土微量混入
第5層　暗赤褐色土、焼土
0
1m

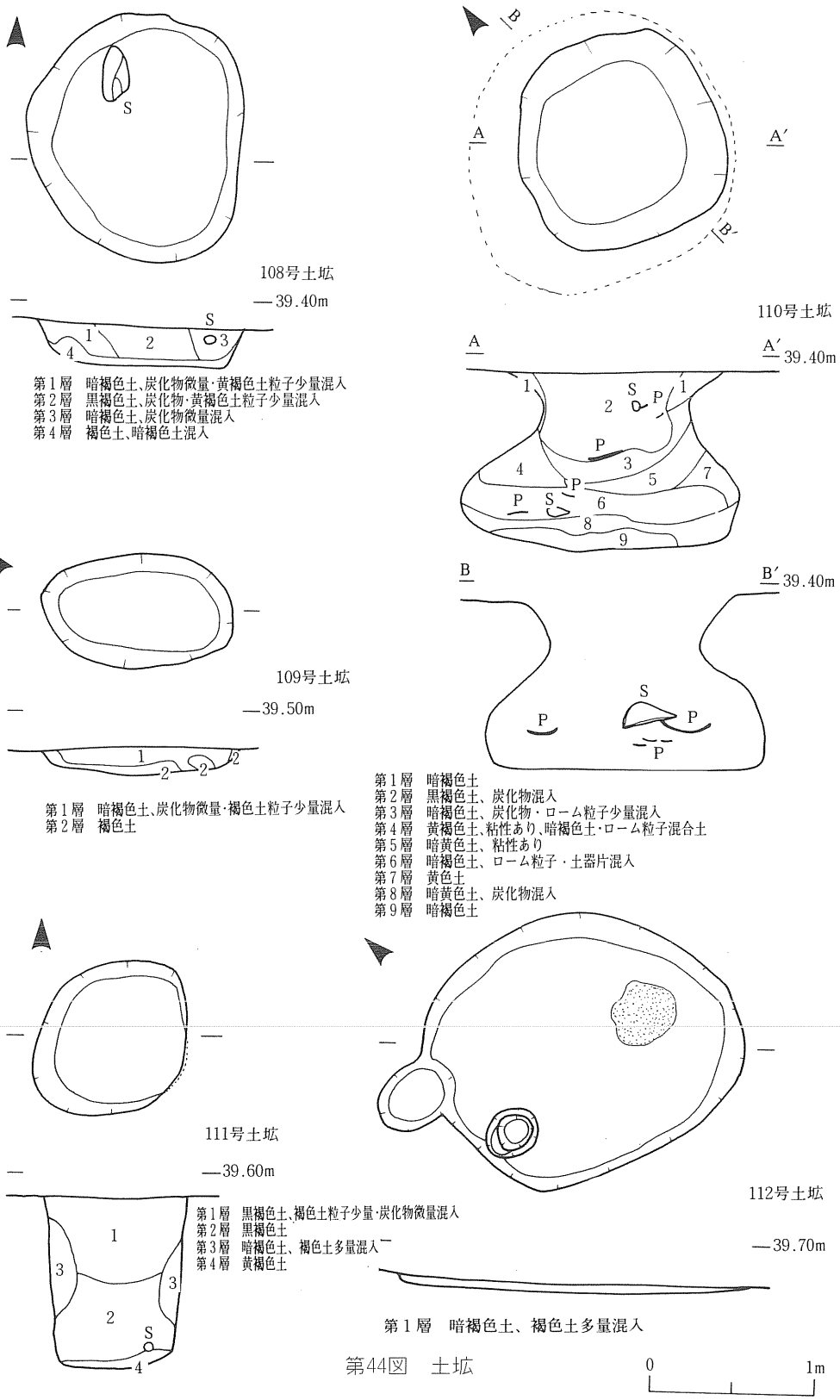
第41図　土坑


95号土坑
39.80m
S
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
96号土坑
39.30m
第1層　晴褐色土、ローム粒子少量混入
第2層　暗黄色土、
第3層　褐色土、焼土微量・ローム粒子少量混入
第4層　暗黄色土、ローム粒子少量混入
第5層　褐色土、焼土微量混入
第6層　茶褐色土、ローム粒子少量混入
98号土坑
39.80m
第1層　暗褐色土、しまり強、ローム混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子・炭化物少量混入
第4層　褐色土、しまり強、ローム粒子混入
第5層　暗褐色土、炭化物多量混入
第6層　褐色土、しまり弱、暗褐色土少量混入
第7層　褐色土、しまり弱
第8層　暗褐色土、褐色土多量混入
第9層　暗褐色土
97号土坑
39.90m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土
第4層　黄褐色土
第5層　黄褐色土、炭化物混入
第6層　褐色土、第3層より明るい
99号土坑
39.70m
第1層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
100号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
第3層　褐色土、暗褐色土混入
第4層　赤褐色土、焼土
0
1m

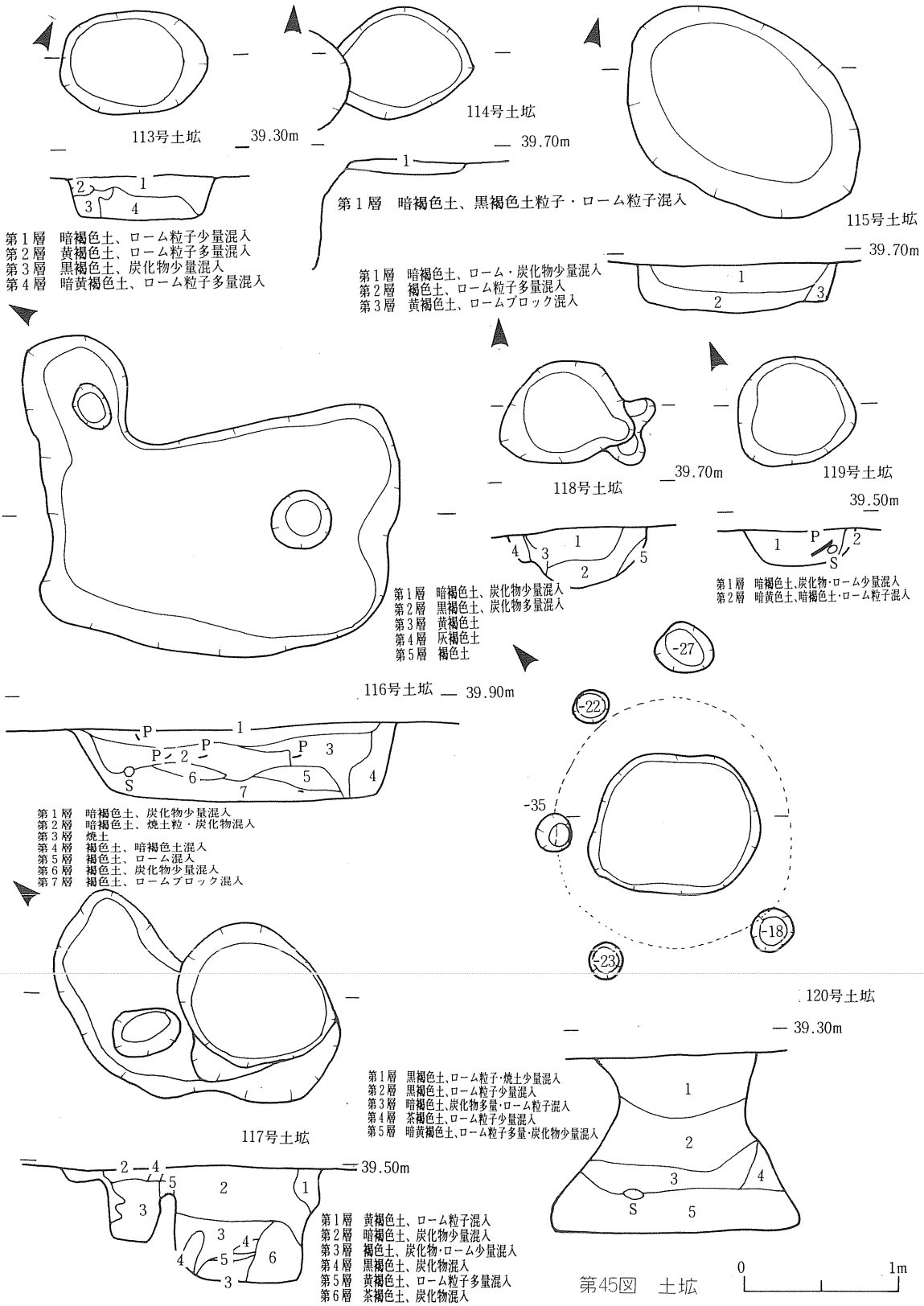
第42図　土坑


101号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、褐色土混入
第3層　褐色土
第4層　褐色土、しまり弱、黒褐色土少量混入
102号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土、褐色土粒子・炭化物少量混入
第2層　褐色土
103号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子少量混入
第3層　褐色土、炭化物微量
104号土坑
39.60m
第1層　暗褐色土、炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子少量混入
第3層　暗褐色土
107号土坑
39.40m
第1層　暗褐色土、炭化物微量混入
第2層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土粒子少量混入
第3層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第4層　暗褐色土、黄褐色土・黄褐色土多量混入
第1層　黄褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物少量混入
第3層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子少量混入
第4層　極暗褐色土、ローム粒子混入
第5層　極暗褐色土
105号土坑
106号土坑
39.60m
0
1m

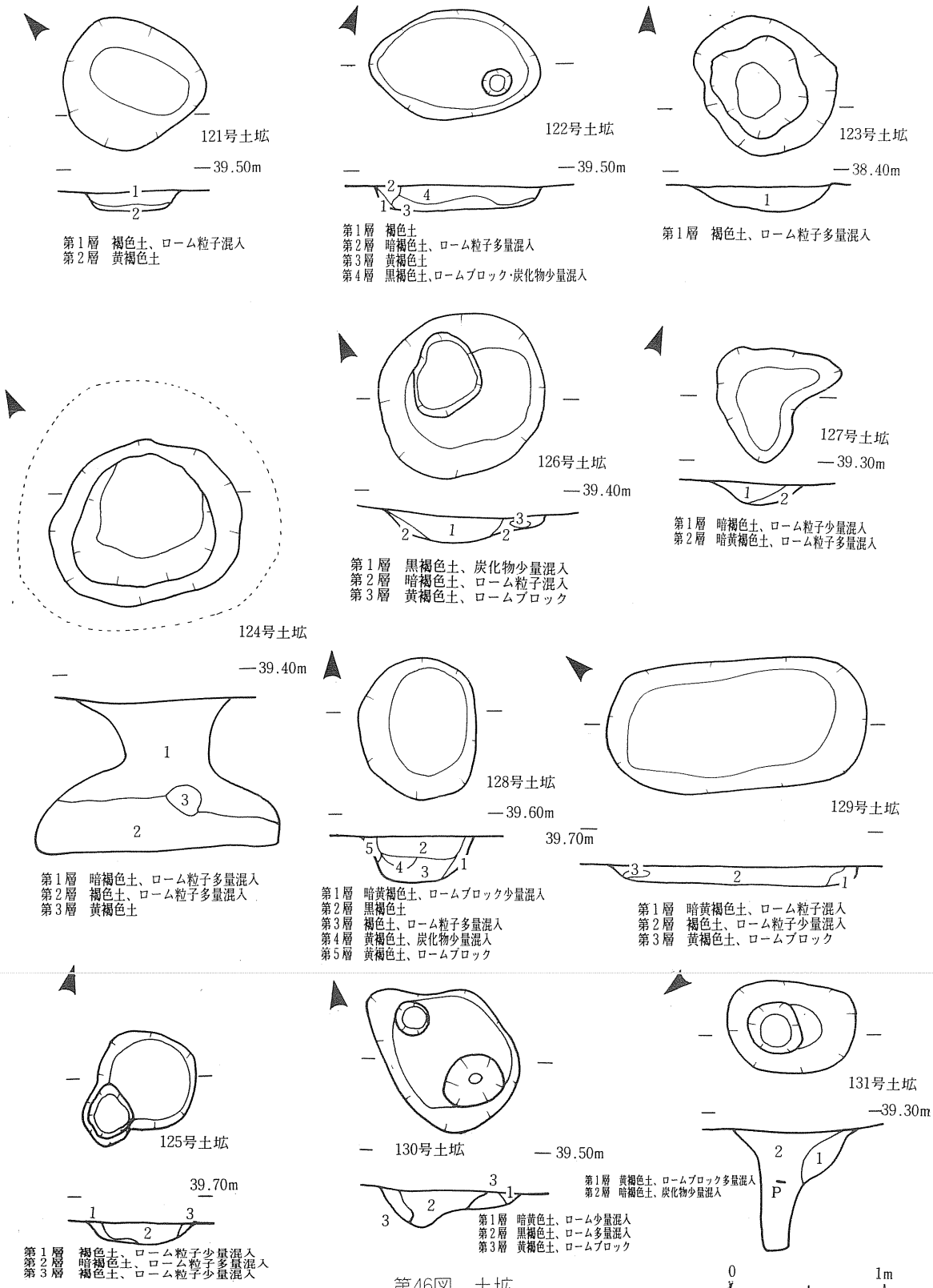
第43図　土坑


108号土坑
39.40m
第1層　暗褐色土、炭化物微量・黄褐色土粒子少量混入
第2層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土粒子少量混入
第3層　暗褐色土、炭化物微量混入
第4層　褐色土、暗褐色土混入
110号土坑
39.40m
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子少量混入
第4層　黄褐色土、粘性あり、暗褐色土・ローム粒子混合土
第5層　暗黄色土、粘性あり
第6層　暗褐色土、ローム粒子・土器片混入
第7層　黄色土
第8層　暗黄色土、炭化物混入
第9層　暗褐色土
109号土坑
39.50m
第1層　暗褐色土、炭化物微量・褐色土粒子少量混入
第2層　褐色土
111号土坑
39.60m
第1層　黒褐色土、褐色土粒子少量・炭化物微量混入
第2層　黒褐色土
第3層　暗褐色土、褐色土多量混入
第4層　黄褐色土
112号土坑
39.70m
第1層　暗褐色土、褐色土多量混入
0
1m

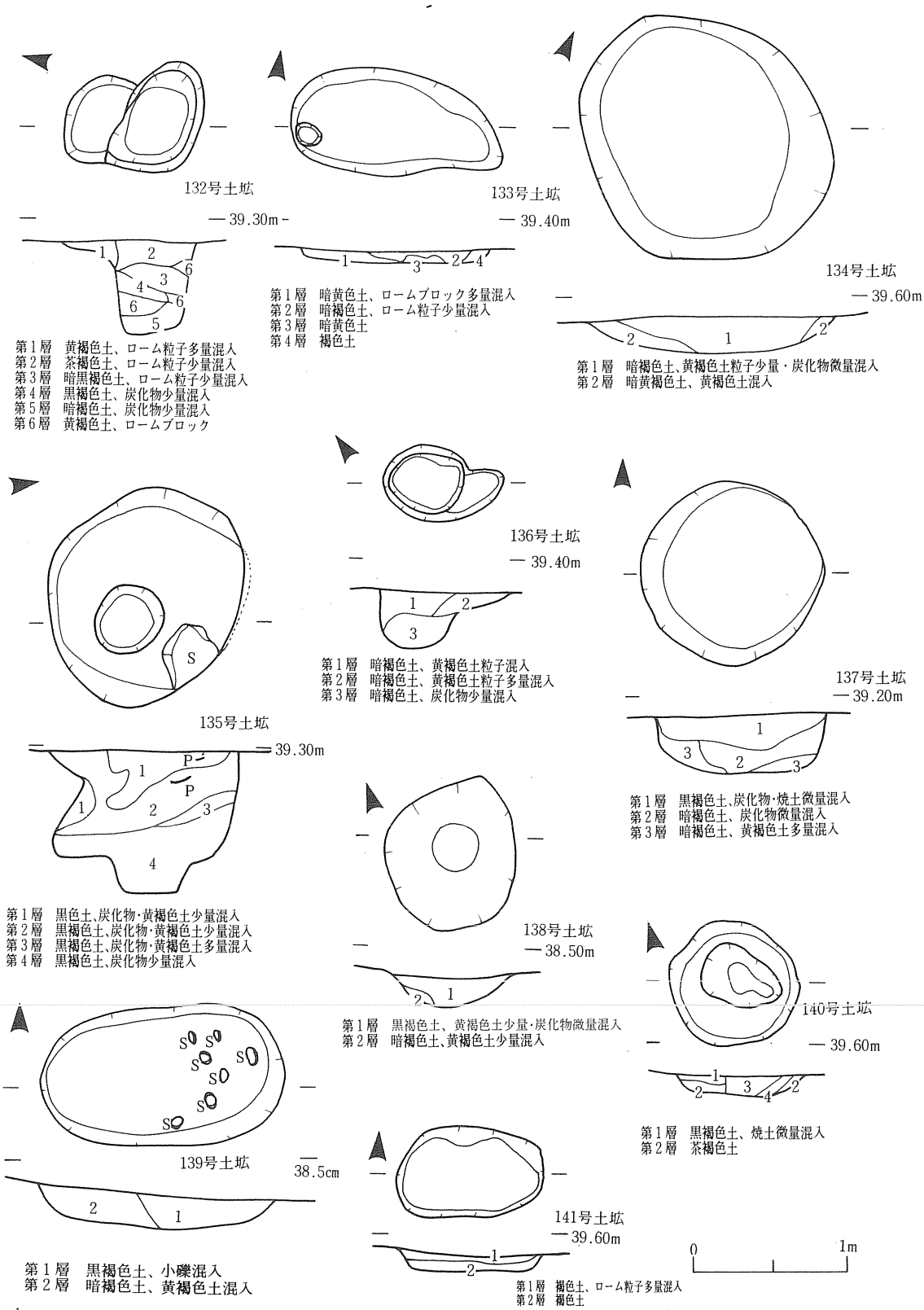
第44図　土坑


113号土坑
39.30m
114号土坑
39.70m
115号土坑
39.70m
第1層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黒褐色土、炭化物少量混入
第4層　暗黄褐色土、ローム粒子多量混入
第1層　暗褐色土、黒褐色土粒子・ローム粒子混入
第1層　暗褐色土、ローム・炭化物少量混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黄褐色土、ロームブロック混入
118号土坑
39.70m
119号土坑
39.50m
第1層　暗褐色土、炭化物少量混入
第2層　黒褐色土、炭化物多量混入
第3層　黄褐色土
第4層　灰褐色土
第5層　褐色土
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム少量混入
第2層　暗黄色土、暗褐色土・ローム粒子混入
116号土坑
39.90m
第1層　暗褐色土、炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、焼土粒・炭化物混入
第3層　焼土
第4層　褐色土、暗褐色土混入
第5層　褐色土、ローム混入
第6層　褐色土、炭化物少量混入
第7層　褐色土、ロームブロック混入
120号土坑
39.30m
第1層　黒褐色土、ローム粒子・焼土少量混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子少量混入
第3層　暗褐色土、炭化物多量・ローム粒子混入
第4層　茶褐色土、ローム粒子少量混入
第5層　暗黄褐色土、ローム粒子多量・炭化物少量混入
117号土坑
39.50m
第1層　黄褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物少量混入
第3層　褐色土、炭化物・ローム少量混入
第4層　黒褐色土、炭化物混入
第5層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
第6層　茶褐色土、炭化物混入
0
1m

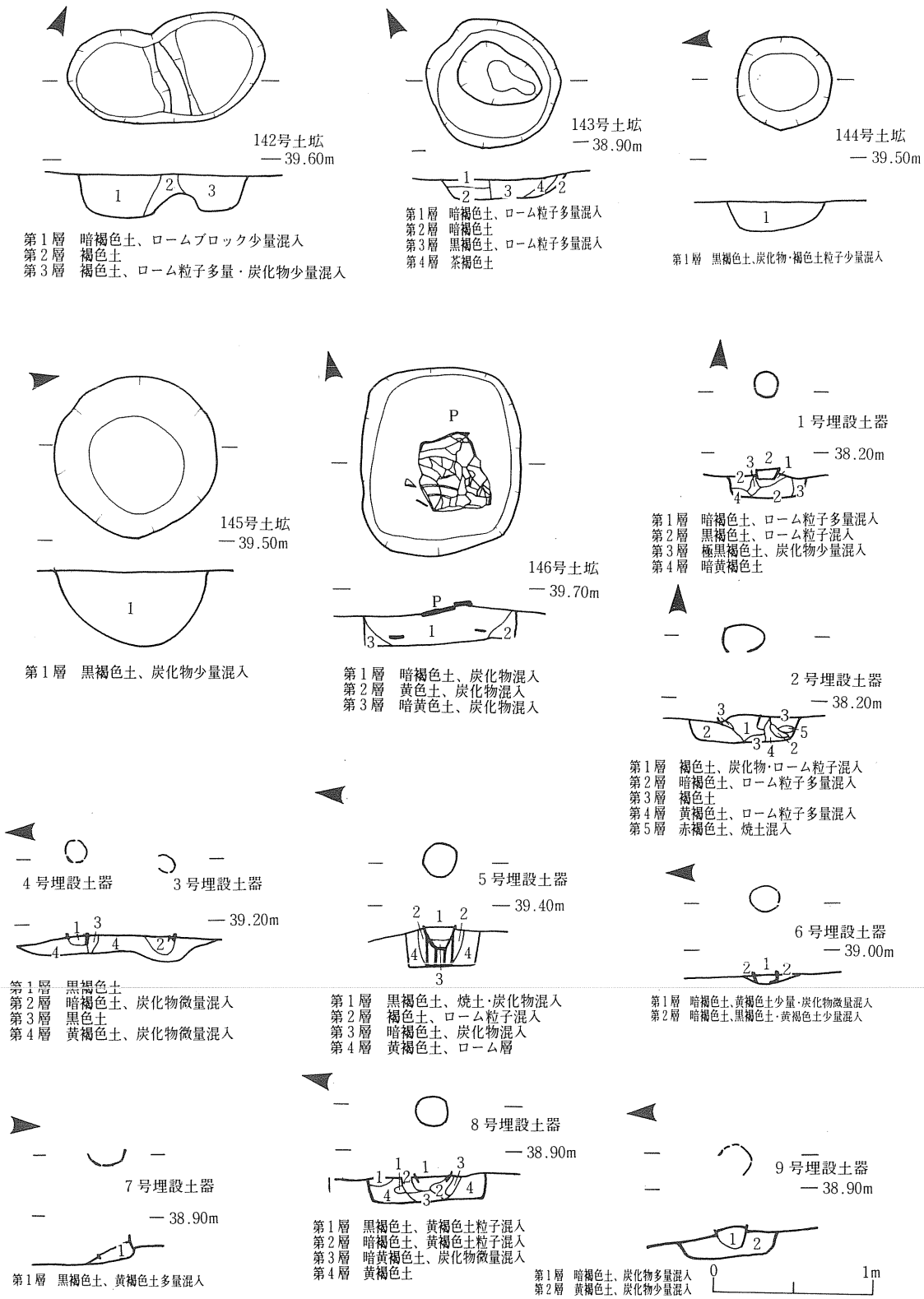
第45図　土坑


121号土坑
39.50m
第1層　褐色土、ローム粒子混入
第2層　黄褐色土
122号土坑
39.50m
第1層　褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黄褐色土
第4層　黒褐色土、ローム粒子・炭化物少量混入
123号土坑
38.40m
第1層　褐色土、ローム粒子多量混入
124号土坑
39.40m
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黄褐色土
126号土坑
39.40m
第1層　黒褐色土、炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、ロームブロック
127号土坑
39.30m
第1層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子多量混入
128号土坑
39.60m
第1層　暗黄褐色土、ロームブロック少量混入
第2層　黒褐色土
第3層　褐色土、ローム粒子多量混入
第4層　黄褐色土、炭化物少量混入
第5層　黄褐色土、ロームブロック
129号土坑
39.70m
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子少量混入
第3層　黄褐色土、ロームブロック
125号土坑
39.70m
第1層　褐色土、ローム粒子少量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　褐色土、ローム粒子少量混入
130号土坑
39.50m
第1層　暗黄褐色土、ローム少量混入
第2層　黒褐色土、ローム多量混入
第3層　黄褐色土、ロームブロック
131号土坑
39.30m
第1層　黄褐色土、ロームブロック多量混入
第2層　暗褐色土、炭化物少量混入
P
0
1m

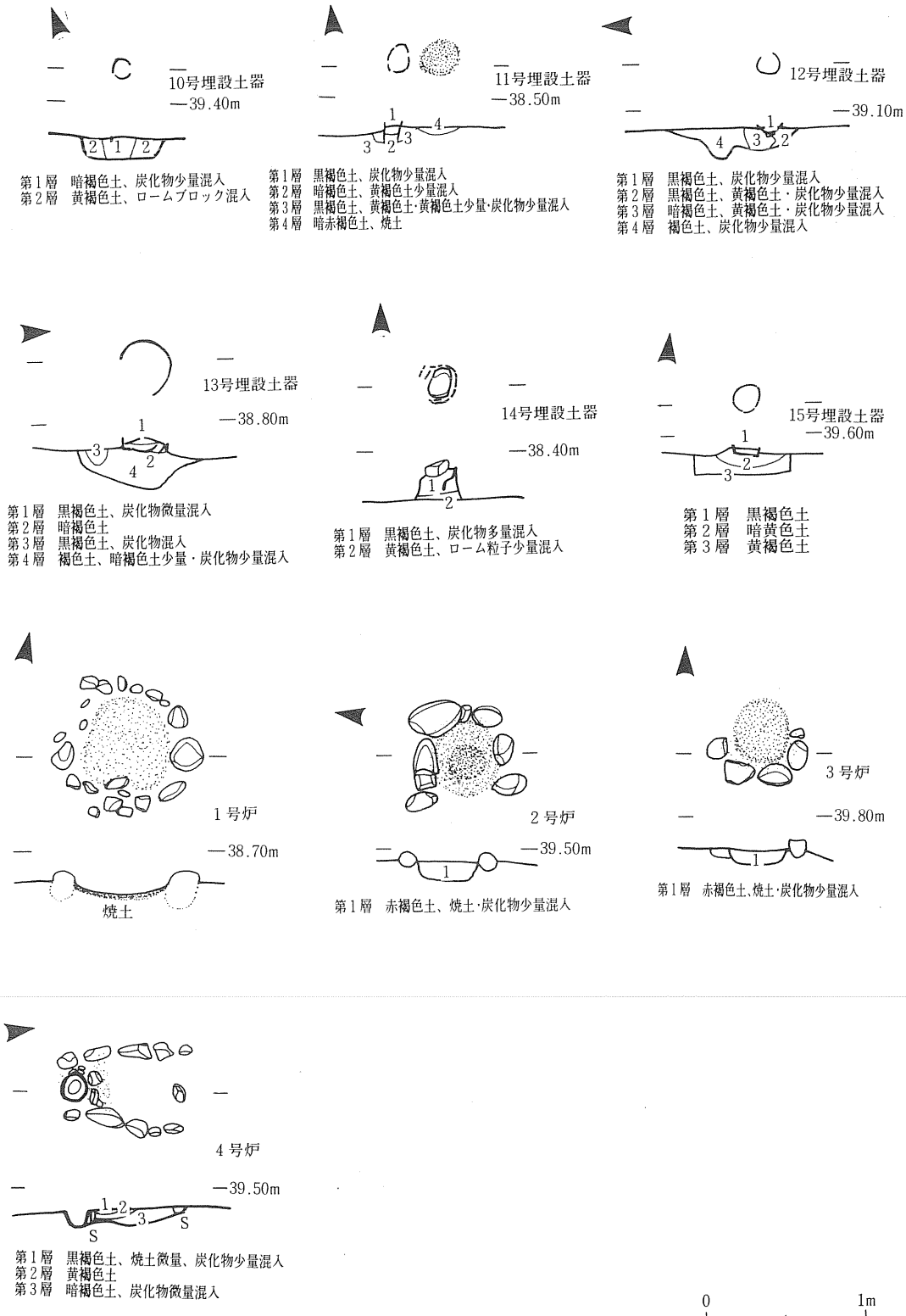
第46図　土坑


132号土坑
— 39.30m -
第1層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　茶褐色土、ローム粒子少量混入
第3層　暗黒褐色土、ローム粒子少量混入
第4層　黒褐色土、炭化物少量混入
第5層　暗褐色土、炭化物少量混入
第6層　黄褐色土、ロームブロック
133号土坑
— 39.40m
第1層　暗黄色土、ロームブロック多量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
第3層　暗黄色土
第4層　褐色土
134号土坑
— 39.60m
第1層　暗褐色土、黄褐色土粒子少量・炭化物微量混入
第2層　暗黄褐色土、黄褐色土混入
135号土坑
— 39.30m
第1層　黒色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第2層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第3層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土多量混入
第4層　黒褐色土、炭化物少量混入
136号土坑
— 39.40m
第1層　暗褐色土、黄褐色土粒子混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土粒子多量混入
第3層　暗褐色土、炭化物少量混入
137号土坑
— 39.20m
第1層　黒褐色土、炭化物・焼土微量混入
第2層　暗褐色土、炭化物微量混入
第3層　暗褐色土、黄褐色土多量混入
138号土坑
— 38.50m
第1層　黒褐色土、黄褐色土少量・炭化物微量混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
139号土坑
38.5cm
第1層　黒褐色土、小礫混入
第2層　暗褐色土、黄褐色土混入
140号土坑
— 39.60m
第1層　黒褐色土、焼土微量混入
第2層　茶褐色土
141号土坑
— 39.60m
第1層　褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　褐色土
0
1m

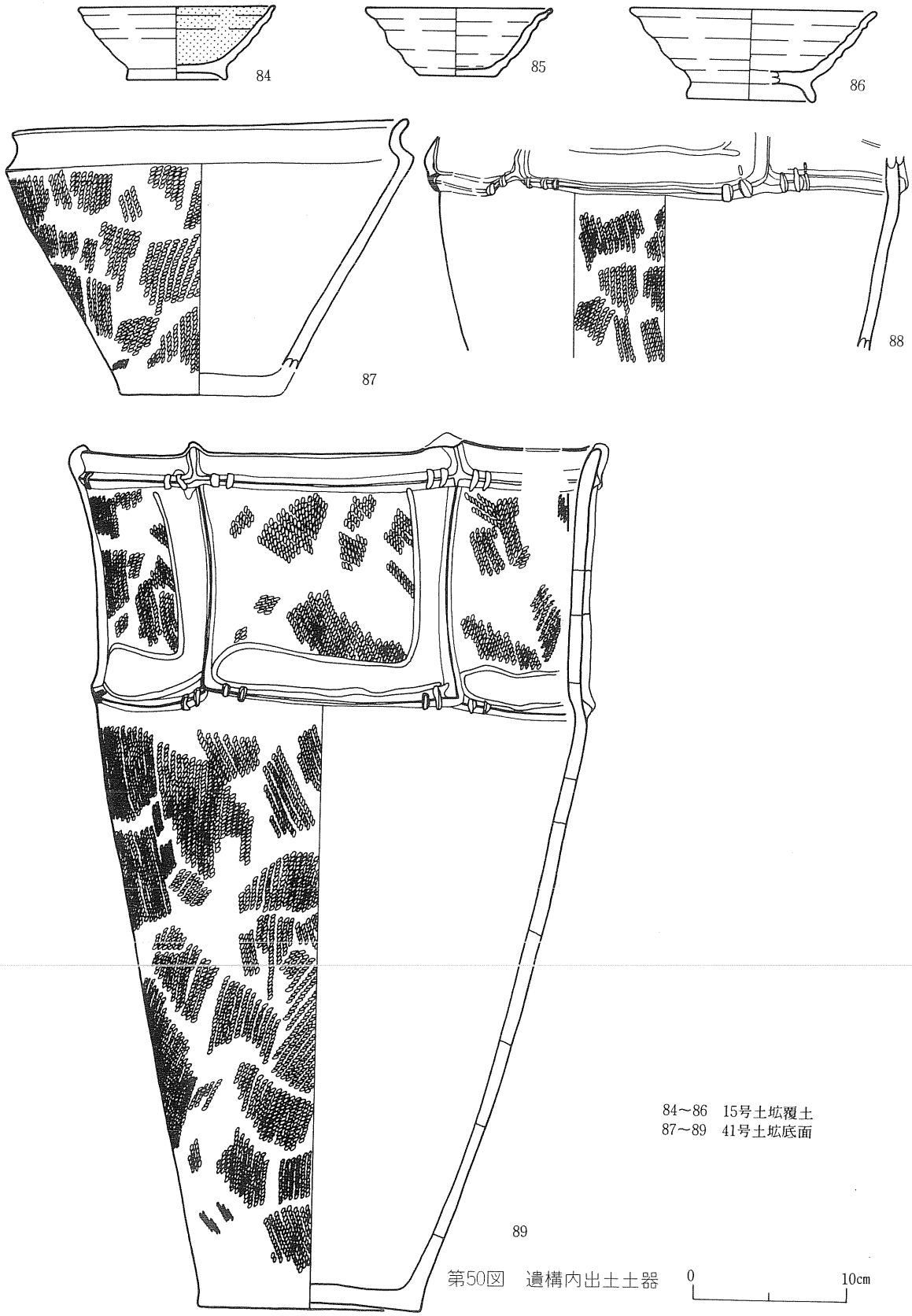
第47図　土坑



第48図　土坑、土器埋設遺構



第49図　土器埋設遺構、炉

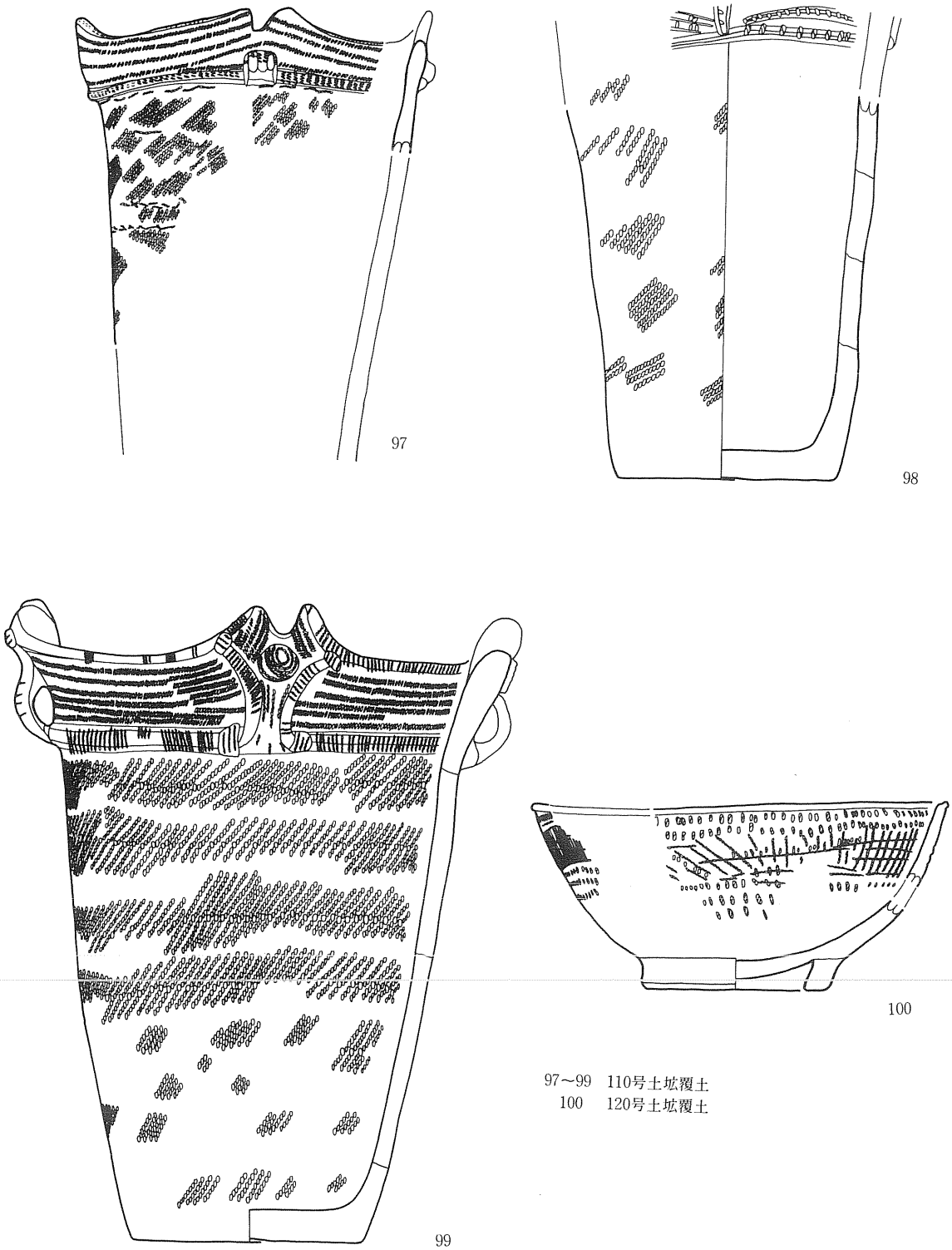


84～86　15号土坑覆土
87～89　41号土坑底面

第50図　遺構内出土土器　0　10cm

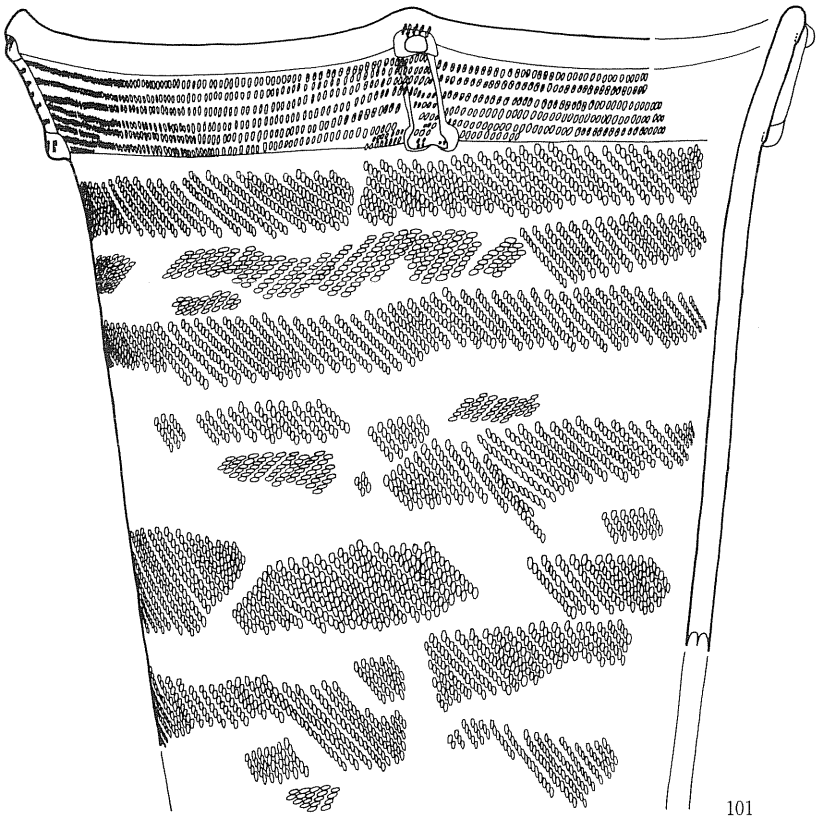
90～93　57号土坑底面
94　58号土坑覆土
95　85号土坑覆土
96　90号土坑覆土

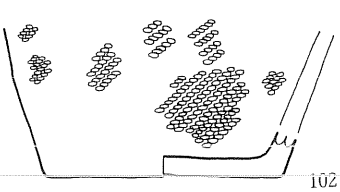
第51図　遺構内出土土器

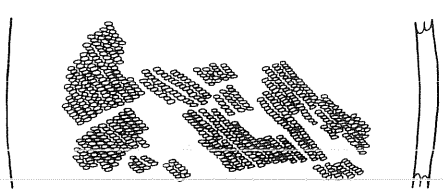


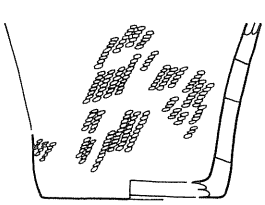
97～99　110号土坑覆土
100　120号土坑覆土

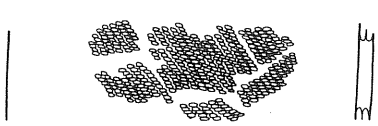
第52図　遺構内出土土器











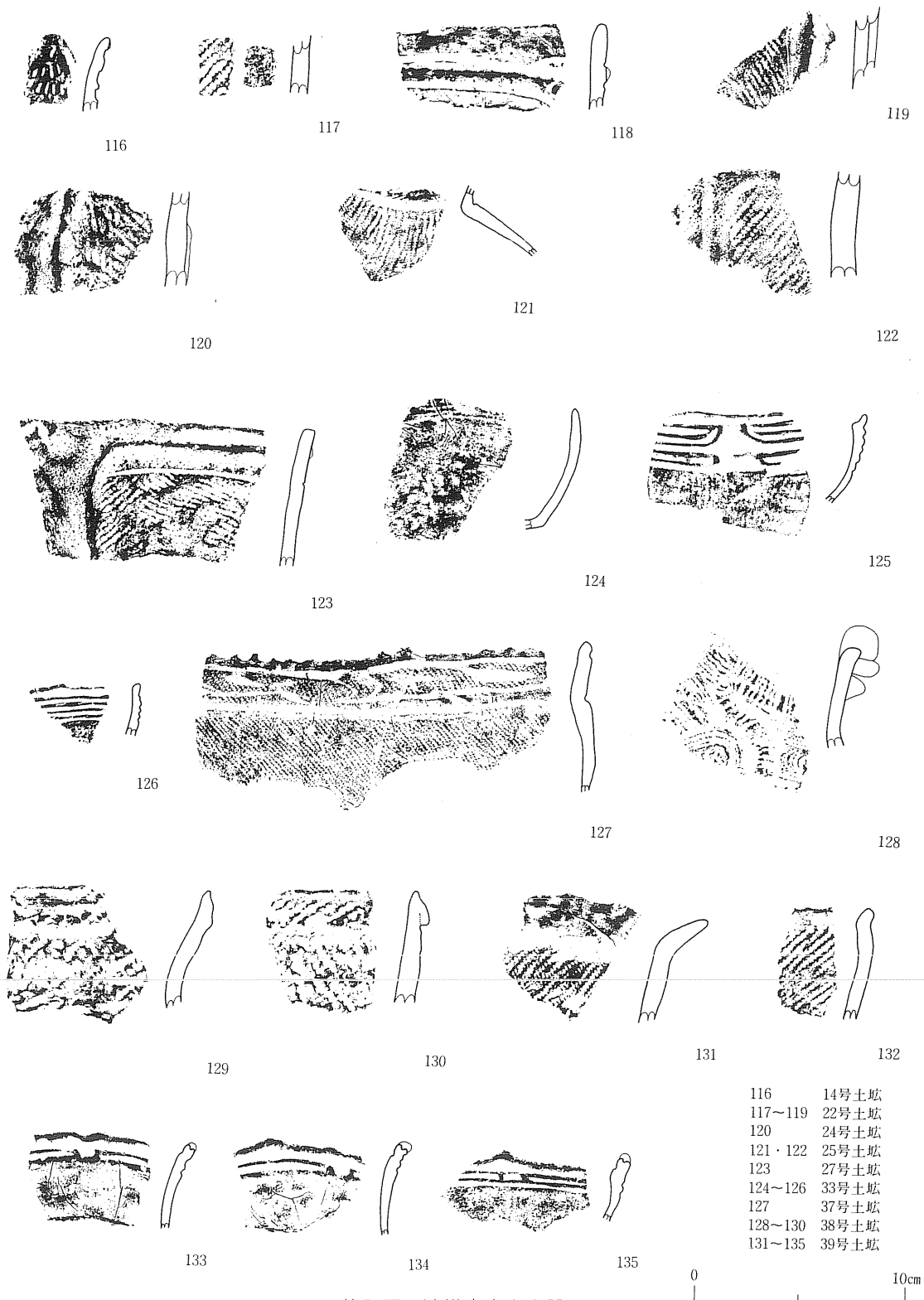
101　146号土坑覆土
102　1号埋設土器
103　2号埋設土器
104　3号埋設土器
105　4号埋設土器

0　10cm

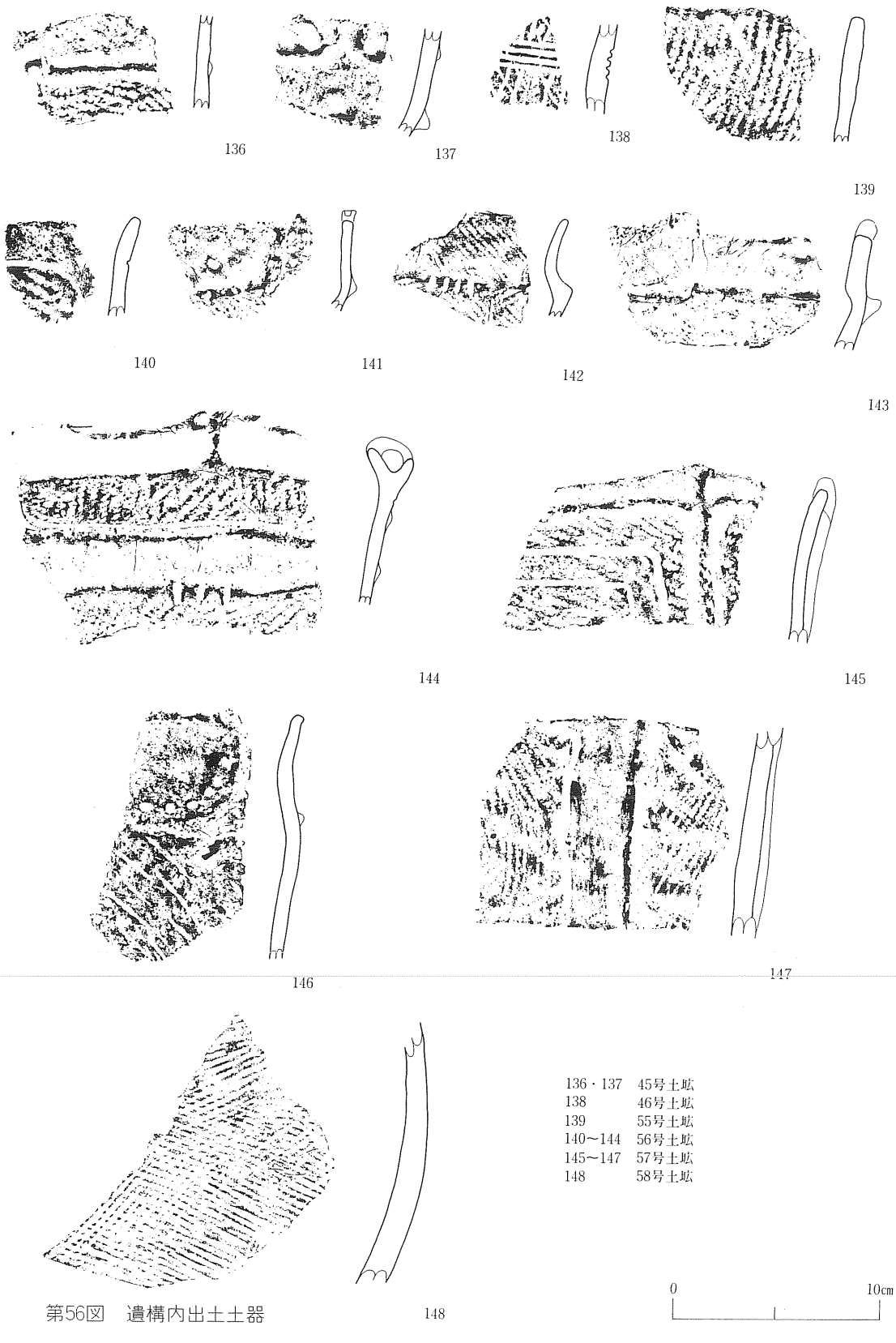
第53図　遺構内出土土器

106　5号埋設土器
107　6号埋設土器
108　7号埋設土器
109　8号埋設土器
110　9号埋設土器
111　10号埋設土器
112　11号埋設土器
113　12号埋設土器
114　13号埋設土器
115　14号埋設土器
116　15号埋設土器

第54図　遺構内出土土器



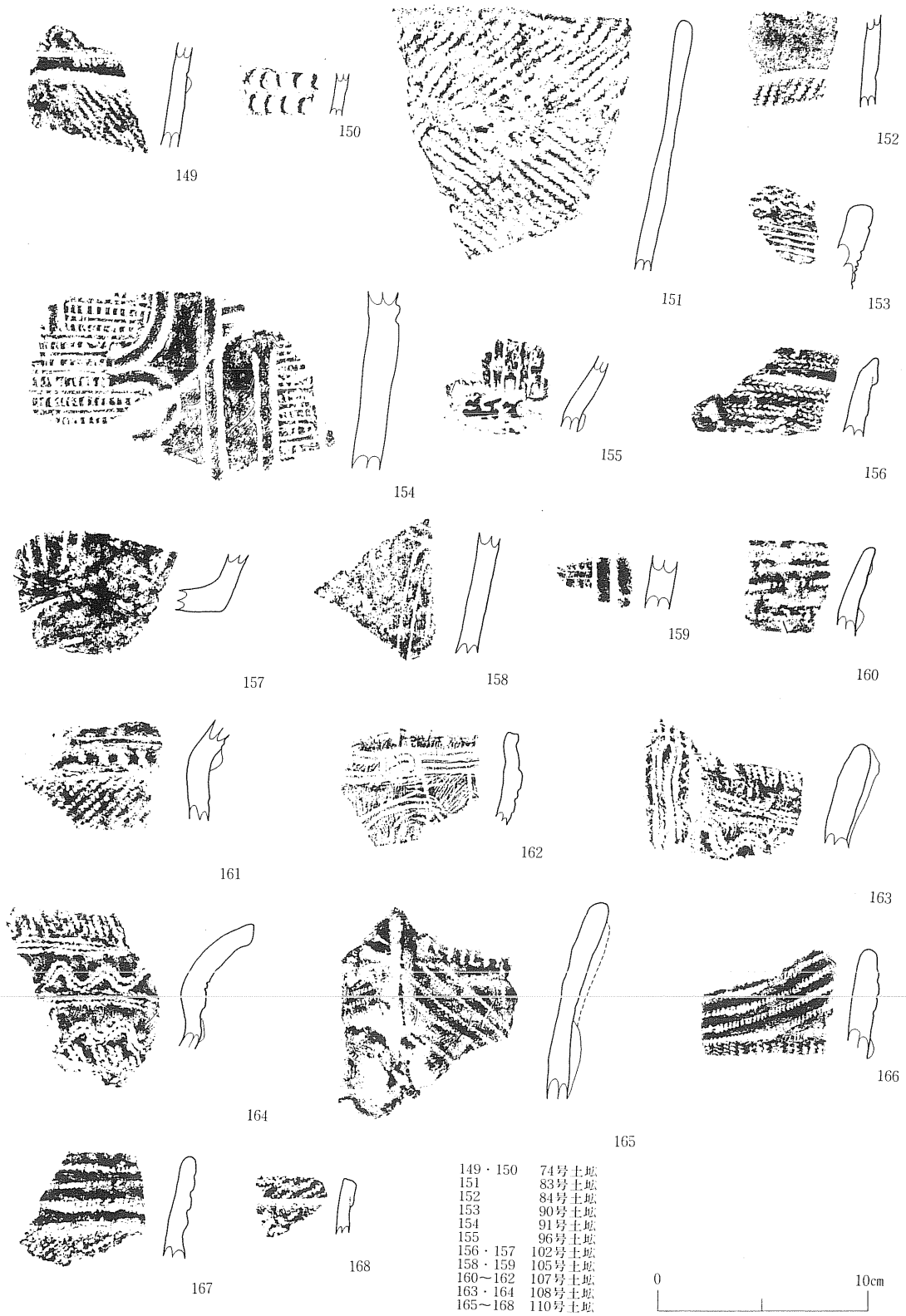
第55図　遺構内出土土器



136・137　45号土坑
138　46号土坑
139　55号土坑
140～144　56号土坑
145～147　57号土坑
148　58号土坑

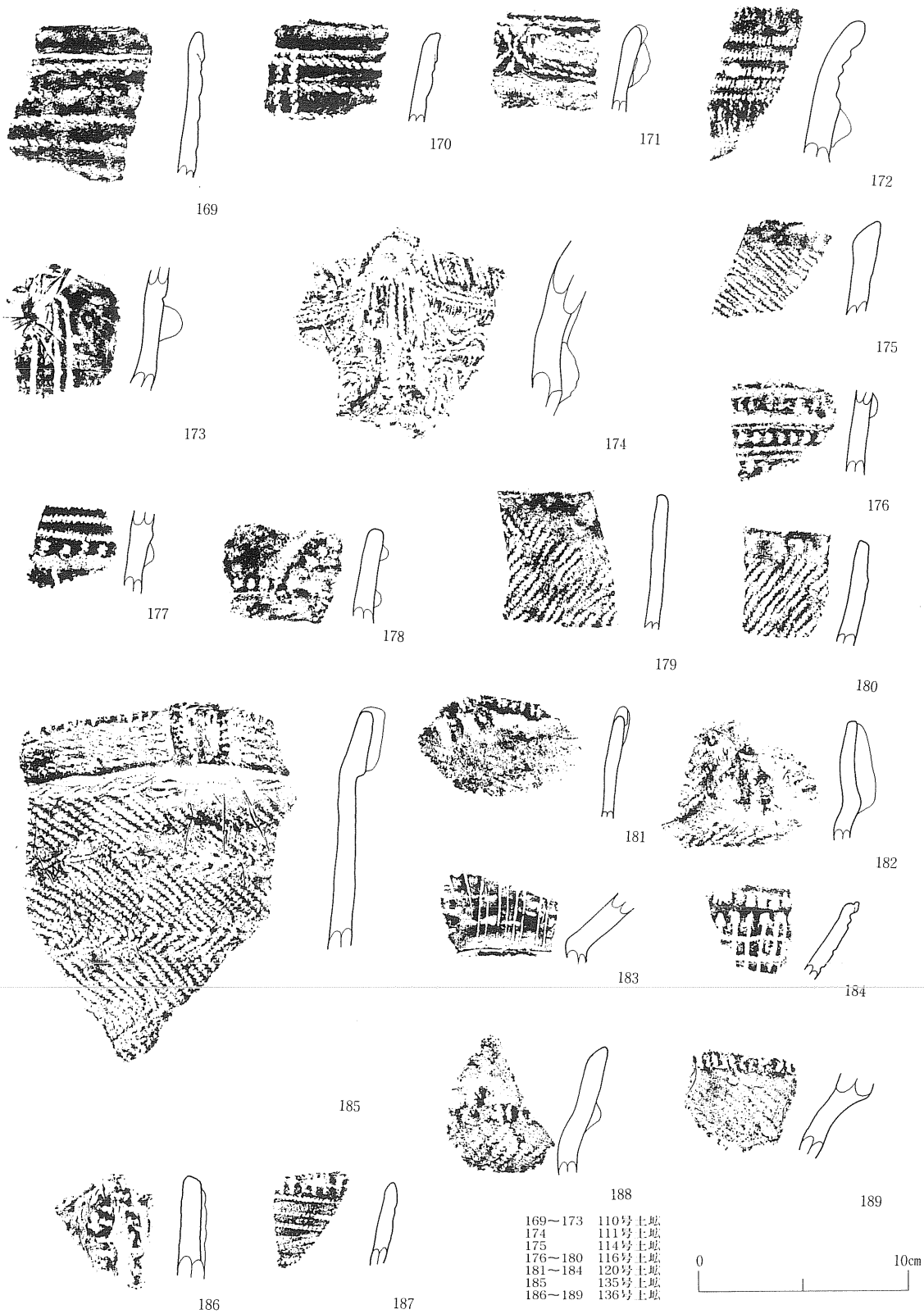
0　10cm

第56図　遺構内出土土器

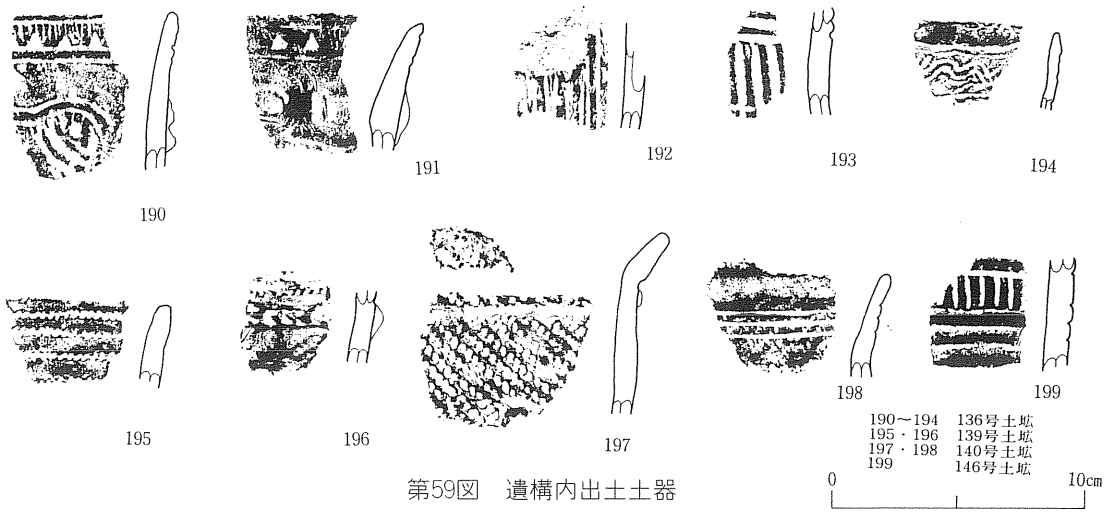


149・150	74号土坑
151	83号土坑
152	84号土坑
153	90号土坑
154	91号土坑
155	96号土坑
156・157	102号土坑
158・159	105号土坑
160～162	107号土坑
163・164	108号土坑
165～168	110号土坑

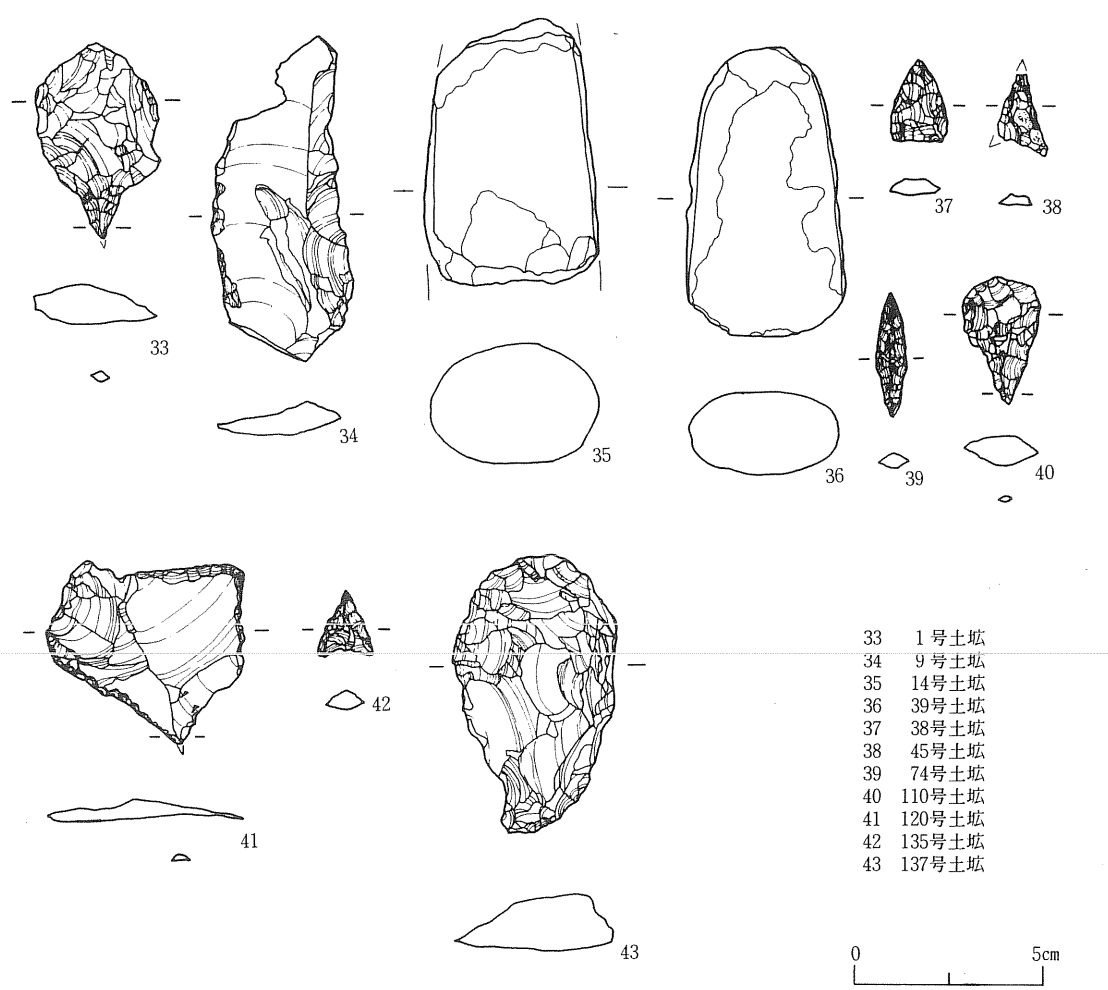
第57図　遺構内出土土器



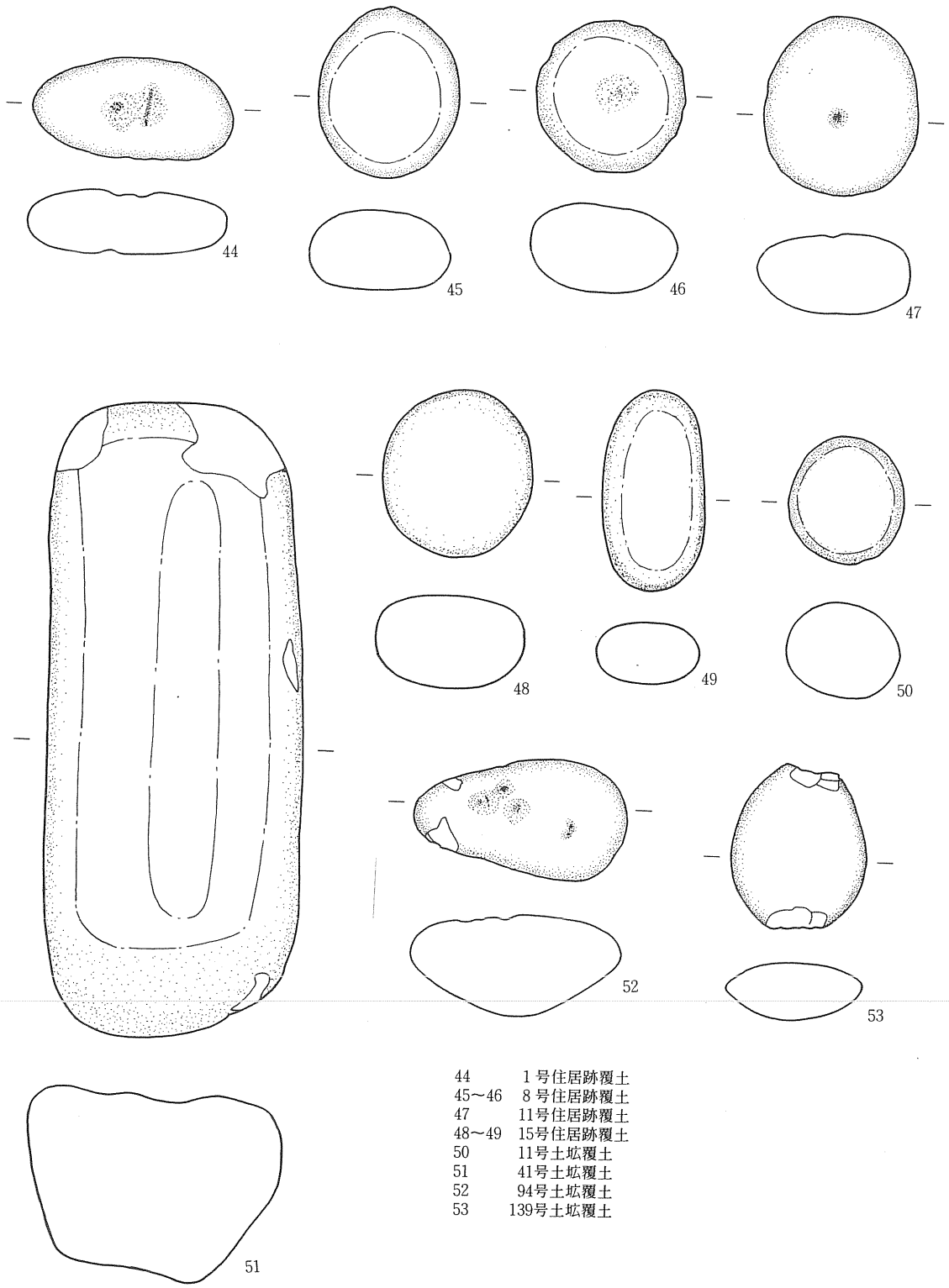
第58図　遺構内出土土器



第59図　遺構内出土土器



第60図　遺構内出土石器



44　　1号住居跡覆土
45～46　8号住居跡覆土
47　　11号住居跡覆土
48～49　15号住居跡覆土
50　　11号土坑覆土
51　　41号土坑覆土
52　　94号土坑覆土
53　　139号土坑覆土

第61図　遺構内出土石器

0　10cm

1号建物跡（第62図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。本建物跡の南側は切土による整地を行なっている。

梁行3間＝5.65m（西から1.85m＋1.9m＋1.9m）×桁行7間＝12.75m（1.9m＋1.7m＋1.85m＋1.85m＋1.8m＋1.8m＋1.85m）の西側に廂の付く掘立柱建物跡で、北側に梁行1間＝1.6m×桁行7間＝13.3m（西から1.9m＋1.85m＋1.9m＋1.9m＋1.95m＋1.85m＋1.95m）の掘立柱建物跡が付属し、桁行を南北棟建物跡の梁行に柱筋を揃え、全体が「L」字形を呈する。南北棟建物跡の廂は南から1番目と2番目を欠く。建物方向は南北棟建物跡が西で北へ37°、東西棟建物跡が北で東へ37°振れている。南北棟建物跡の掘り方は身舎が径50～80cm、深さ40～80cmの円形、楕円形で、廂が径50～60cm、深さ40～55cmの円形、楕円形を呈し柱痕は全体の7割確認され、16～20cmの円形である。8個の柱穴からは柱遺材が検出され、材質は杉と考えられる。覆土に拳大位の礫が多く入っていた。東西棟建物の掘り方は径55～70cm、深さ40～80cmの円形、楕円形を呈する。柱痕の確認できるのもあり、16～20cmの円形である。覆土に角礫や小石が入っており、一部は根固としている。南列の柱穴は覆土下層に砂質土が多量に混入し柱アタリに扁平な川原石を設置したり、下部礫層の礫を利用して根石としているものもある。

2号建物跡（第63図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

梁行2間＝4.7m（北から2.3m＋2.4m）×桁行5間＝9.5m（西から1.9m＋1.9m＋1.9m＋1.95m＋1.85m）の掘立柱建物跡である。建物方向は北で西へ2.5°振れている。掘り方は径50～60cm、深さ40～60cmの円形、楕円形を呈する。柱痕の確認できるものもあり、径15～18cmの円形である。

3号建物跡（第64図）

調査区北側で検出した。

1間（1.4m）×1間（1.4m）の身舎に4面廂が付く掘立柱建物跡である。廂は南と北が3間＝3.15m（西から1.15m＋1.0m＋1.0m）、東と西が2間＝2.5m（北から1.35m＋1.15m）で西面が北へ1間（1.0m）延びる。建物方向は西で北へ30°振れている。掘り方は径30～40cm、深さ15cmの円形、楕円形を呈する。柱痕の確認できるものはない。

4号建物跡（第65図）

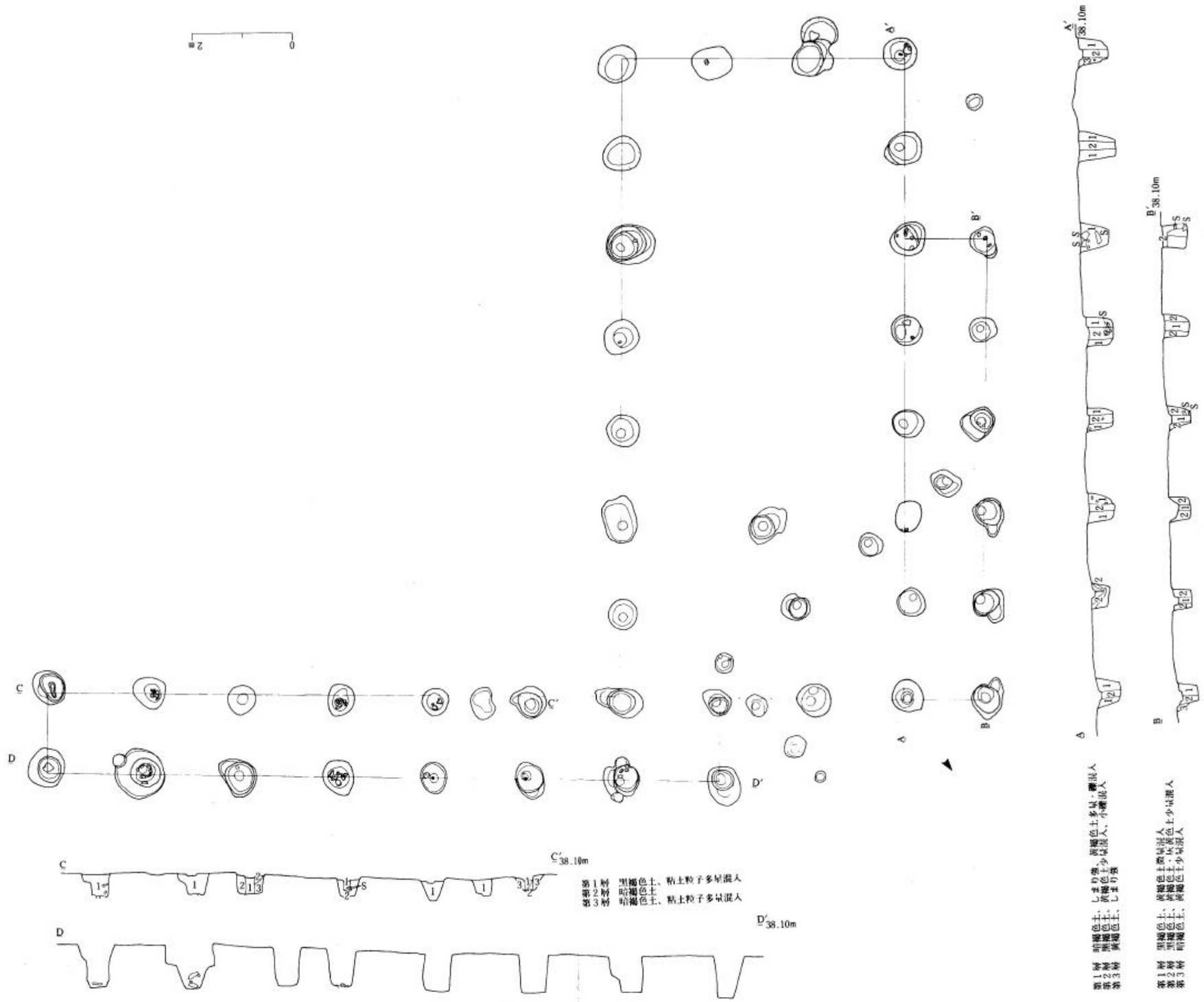
調査区北側で検出した。

梁行1間＝2.1m×桁行6間＝11.25m（西から1.9m＋1.9m＋1.75m＋1.85m＋1.9m＋1.95m）で北側に廂の付く掘立柱建物跡である。建物方向は北で東へ34°振れている。掘り方は身舎、廂共に径30～40cm、深さ20～30cmの円形を呈する。柱痕の確認できるものはない。5号建物跡に切られている。

5号建物跡（第65図）

調査区北側で検出された。

梁行1間＝2m×桁行5間＝9.6m（西から1.9m＋1.9m＋1.95m＋1.95m）で北側に廂の付く掘



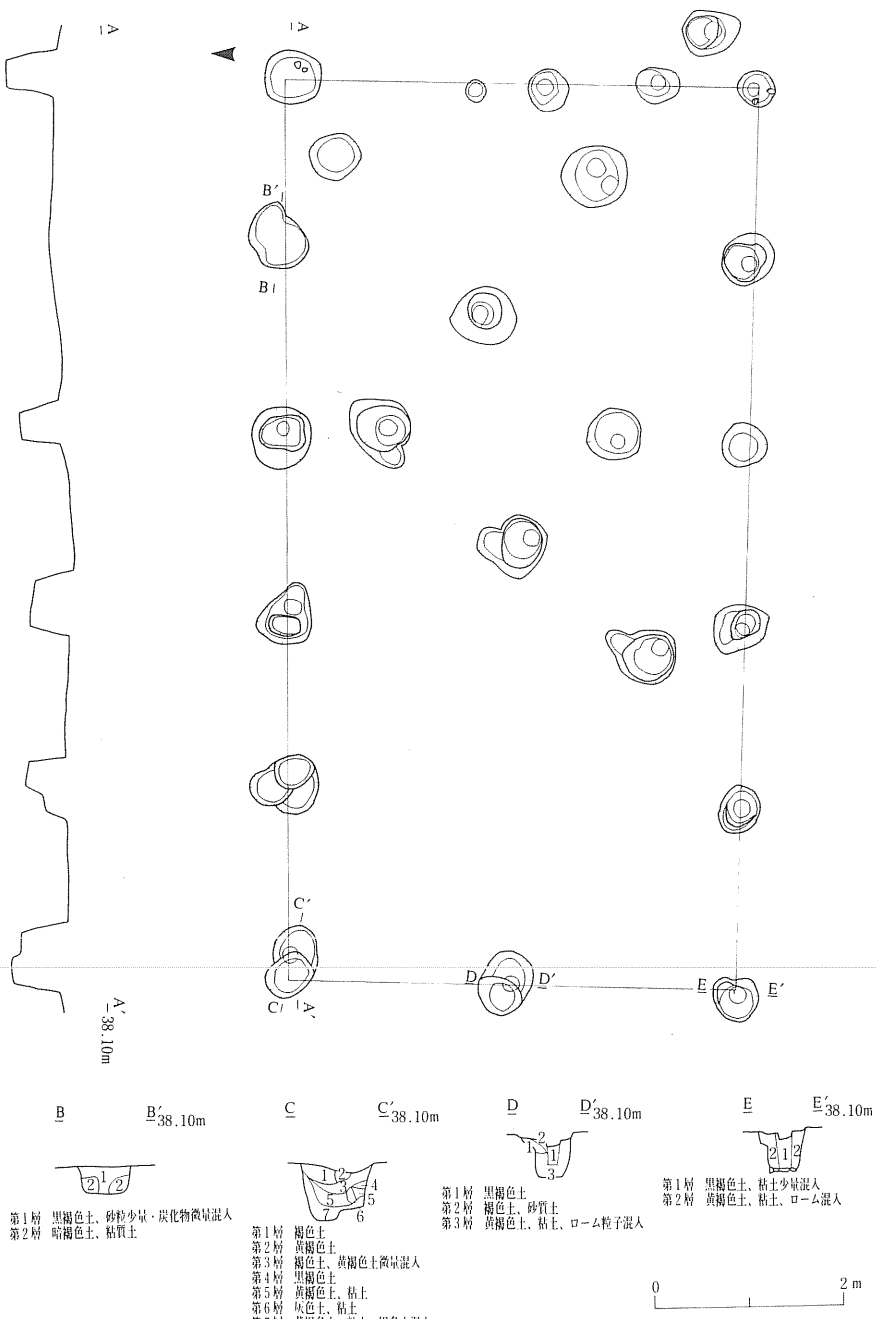
第1層　明褐色土、しまり強、黄褐色土多量・礫混入
第2層　黒褐色土、黄褐色土少量混入、小礫混入
第3層　黄褐色土、しまり強
第1層　黒褐色土、黄褐色土微量混入
第2層　黒褐色土、黄褐色土・灰黄色土少量混入
第3層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第1層　黒褐色土、粘土粒子多量混入
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土、粘土粒子多量混入
A
A′
38.10m
B
B′
38.10m
C
C′
38.10m
D
D′
38.10m
S
0
2 m

第62図　1号建物跡

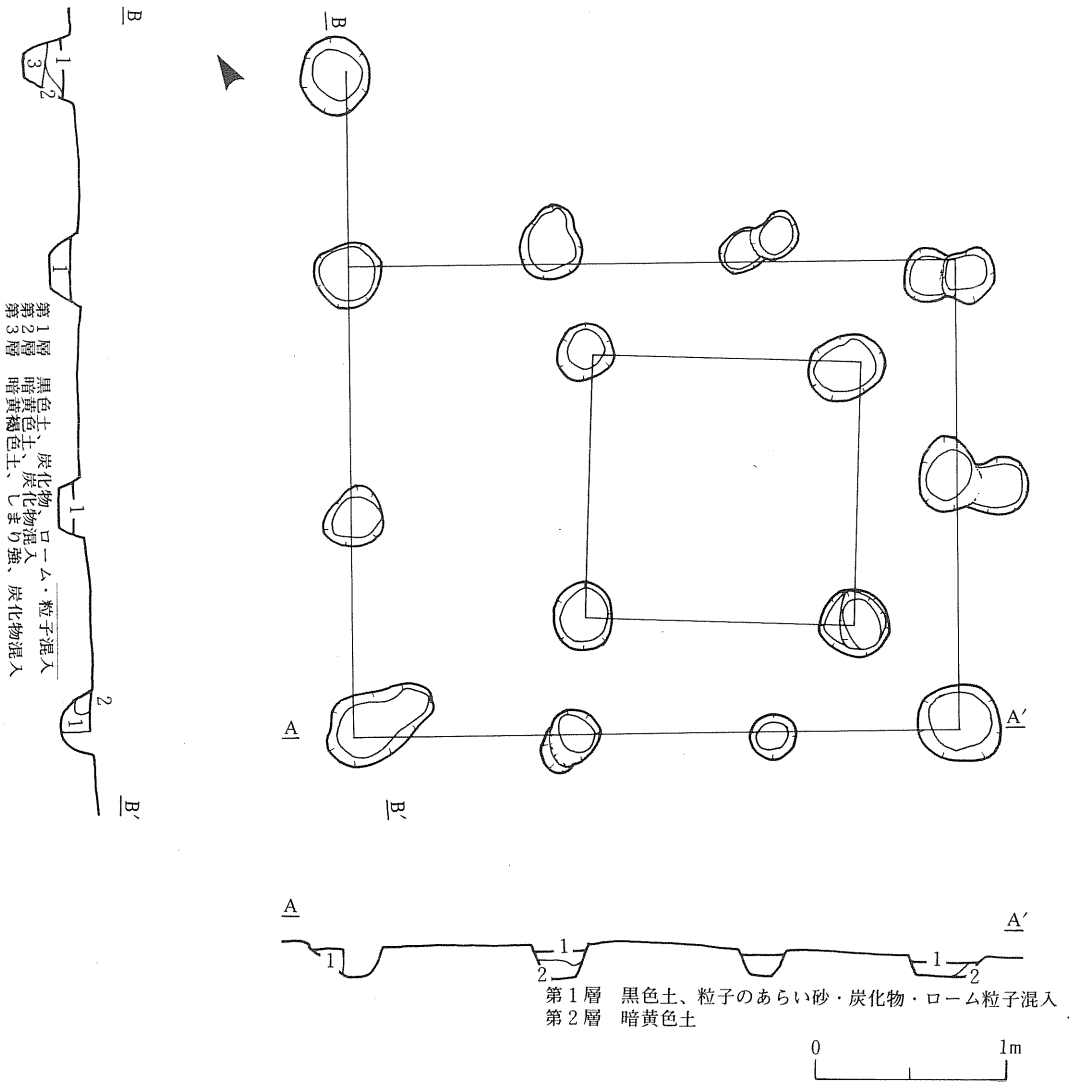
立柱建物跡である。建物方向は北で東へ33°振れている。 掘り方は身舎、廂共に径40～60cm、深さ40～60cmの円形、楕円形を呈する。柱痕の確認できるものもあり、径15～20cmの円形である。４号建物跡を切っている。

６号建物跡（第66図）

調査区北側で検出された。



第63図　２号建物跡



第64図　3号建物跡

梁行1間＝2m×桁行5間＝9.6m（西から1.9m＋1.95m＋1.95m＋1.9m＋1.9m）で北側に廂の付く掘立柱建物跡である。建物方向は北で東へ33°振れている。掘り方は南西が径50～60cm、深さ40～60cmの円形、楕円形を呈する。北面と廂が同時に掘られ50～60cm×150～170cmの長方形で、深さ20～40cm、柱を据える部分はさらに10～20cm掘り込んでいる。柱痕の確認できるものもあり、径15～20cmの円形である。

その他の建物跡（第127図）

7～10号は調査区中央部、11～14号は調査区南側で検出された。

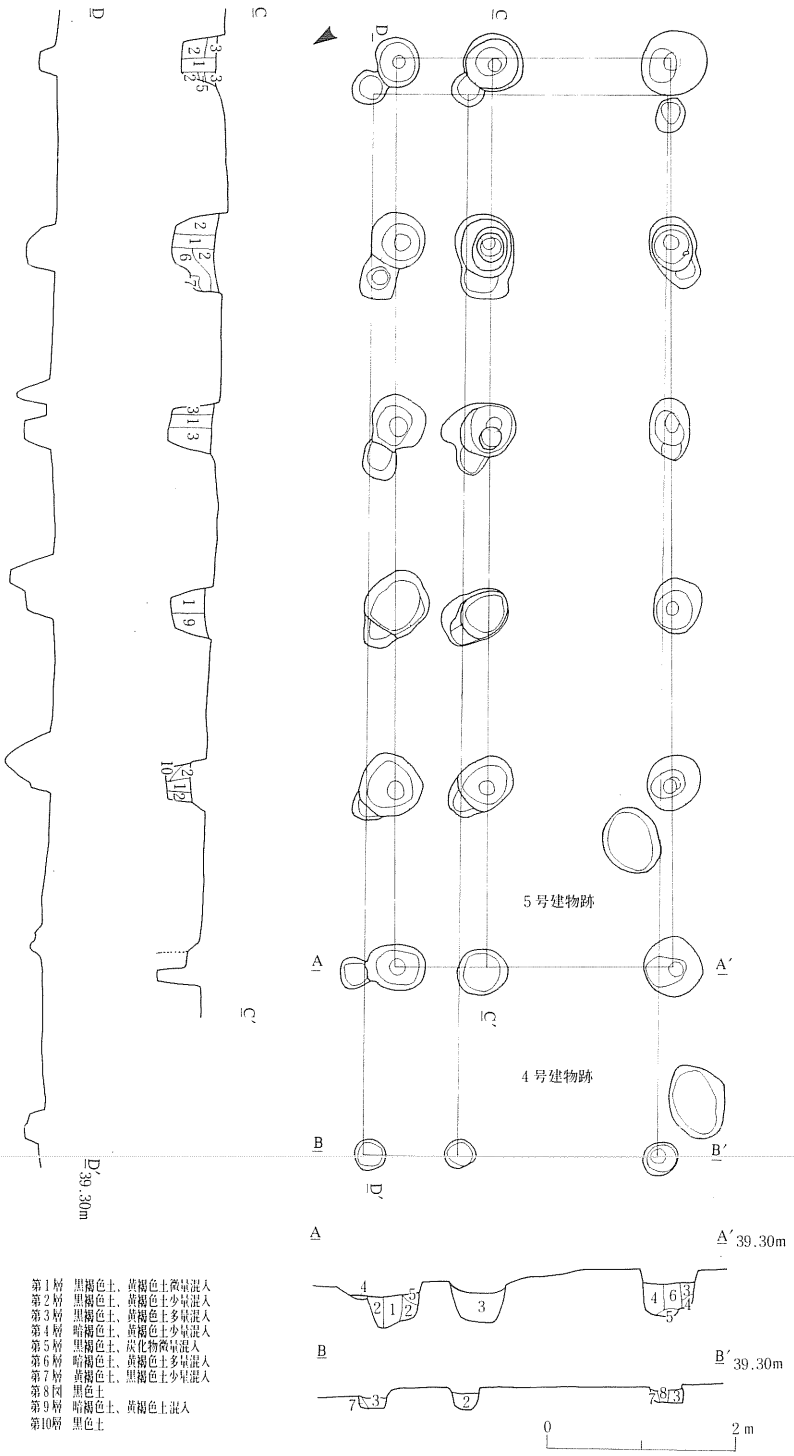
7・10号は掘り方径30～40cm、深さ30～50cmの円形、楕円形を呈し、7号が1間×2間、8・9・10号が1間×1間である。11～14号は掘り方径60～100cm、深さ80～100cmの円形、楕円形を呈する。

11・14号が1間×3間、12号が1間×4間、13号が1間×2間である。掘り方覆土より縄文土器片が出土する柱穴が多い。

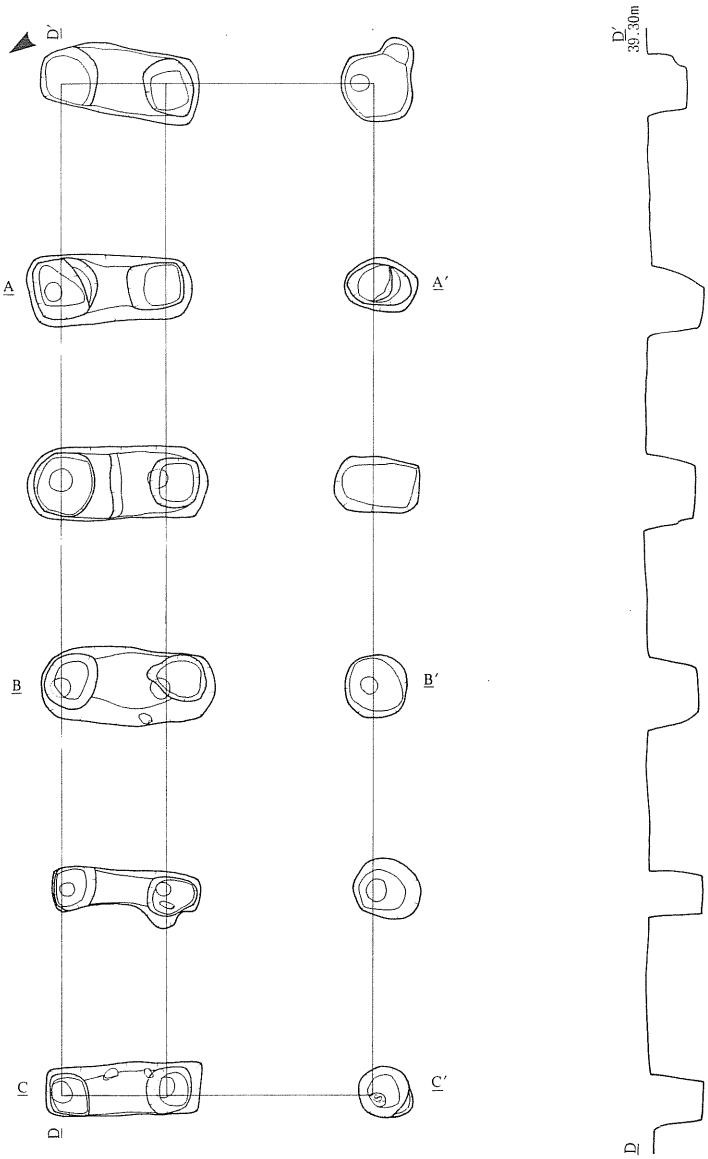
柱列（第127図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

1号が5間＝12.3m（西から2.5m＋2.4m＋2.4m＋2.5m＋2.5m）、2号が4間＝（西から1.9m＋2.0m＋2.0m＋1.9m）の掘立柱である。掘り方は共に径20～30cm、深さ15～20cmの円形を呈する。柱痕は確認できなかった。2号柱列の東から1番目と2番目が2号住居跡を切っている。



第65図　4・5号建物跡



第1層　黒褐色土、黄褐色土少量混入
第2層　黒褐色土
第3層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第4層　暗褐色土、黄褐色土（径3㎝程度のブロック）混入
第5層　黒褐色土、黄褐色土少量混入
第6層　黄褐色土、暗褐色土少量混入
第7層　黒褐色土、黄褐色土微量混入
第8層　黒褐色土、黄褐色土少量混入
第9層　黒褐色土、黄褐色土多量混入
第10層　黒褐色土、黄褐色土微量混入

第1層　黒褐色土、黄褐色土微量混入
第1′層　黒褐色土、黄褐色土少量混入
第2層　暗褐色土、褐色土ブロック状に混入
第3層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第4層　黒褐色土、黄褐色土ブロック状に混入
第5層　暗褐色土、黄褐色土多量混入
第6層　暗褐色土＋黄褐色土の小ブロック混入
第7層　黒褐色土、黄褐色土微量混入
第8層　黒褐色土、褐色土ブロック状に混入

第1層　黒褐色土、しまり弱、褐色土少量混入
第2層　黒褐色土、しまり無、褐色土微量混入
第3層　黒褐色土＋黄褐色土
第4層　黄褐色土
第5層　黒褐色土、褐色土ブロック状に混入
第6層　黒褐色土＋黄褐色土
第7層　暗褐色土
第8層　暗褐色土、黄褐色土少量混入
第9層　褐色土

0　2m

第66図　6号建物跡

出土土器

遺構内、遺構外の土器について群・類に分けて述べてみたい。

1群土器（第72図239～250）

口縁部に斜位格子目文を施すものである。左傾を先に施すものが多い。

A－1類（239～244）

口縁部が直立する深鉢形土器で、わずかに外反するものもある。粘土紐貼り付けによる隆帯をもつもの、隆帯に連続爪形文を施すものがある。

A－2類（248・249）

口縁部が「く」の字状に内屈する深鉢形土器である。いずれも頸部に隆帯を巡らし、連続爪形文を施す。

A－4類（245～247）

口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器である。横位半隆起線の他に、245は粘土紐を貼り付けて連続爪形文を施し、246・247は半隆起線に連続爪形文を施す。

2群土器（第23図23～25、第57図155、第58図183、第71図225、第72～74図250～290）

口縁部に縦位方向の半隆起線を主に施すものである。キャリパー状をなす器形のものが多い。

A－1類（250）

口縁部がほぼ直立する深鉢形土器で、縦位半隆起線の間隔が比較的広くなっている。縄文を先に施し、撚糸圧痕文がみられる。

A－2類（251）

口縁部が内湾する深鉢形土器で、キャリパー状をなすものかもしれない。縦位半隆起線の間隔が比較的広くなっているもので、縄文を先に施す。

A－4類a（252～268）

口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器で、縄文を先に施すものである。キャリパー状の内湾度が強いもの（252・258）と、弱いもの（259～268）とがある。横位半隆起線に連続爪形文を施すものもある。

A－4類b（23～25・155・225・269～290）

口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器で、縄文のみられないものである。274～279はキャリパー状の内湾度が強い。284～287の頸部には横位半隆起線を4～5本平行して巡らし、そのうちの2本には連続爪形文を施す。225は粘土紐を曲線的に、また粘土粒の貼り付けがみられる。280・281は小孔をもつ突起が付く。278～280は口縁部に粘土貼り付けを行い（280は突起の下に）、半隆起線が渦巻状に施文される。

3群土器（第21図12、第22図17、第23図26～29、第59図190・191、第67図200、第71図226・227・229・230、第74・75図291～329）

口縁部に縦に短かい刻線を入れてその中に沈線が横走するもの、またその所々に三角形や円形の印刻を入れるもの、三角形印刻文、蓮華状文等を施すものである。厳密には縦位刻線に横位沈線が走るものと、印刻や蓮華状文は分離すべきところであるが、一括した。

A－1類（230）

口縁部がほぼ直立する深鉢形土器である。口縁部は三角形印刻文、格子目文、半隆起線文、それに無文部がみられ、小突起をもつ。胴部は木目状撚糸文を施した後に格子目文、半隆起線の直線・曲線で文様を構成する。

A－3類a（12・29・190・191・291～309）

口縁部が外反する深鉢形土器で、直立に近いものもみられる。横位無文帯を伴うものである。12は口径37cm、器高50.5cmである。口唇部に2個の小突起が付き、内面に玉抱き三叉文がみられる。口縁部は蓮華状文、縦位刻線の中も横位沈線が走るもの、横位無文帯、半隆起線を施す。頸部は蓮華状文、半隆起線文を施し、2個1対の突起をもつ。頸部の蓮華状文には2ヶ所が「∪」の字状にまた突起下には「∩」字状の貼り付けを施す。胴部は格子目を施した後に、半隆起線を直線・曲線に施文する。190・191は粘土貼り付けがみられる。

A－3類b（309・310）

口縁部が外反する深鉢形土器で、同一個体である。横位無文帯をもたないもので、口縁部上面の平行隆帯に連続爪形文がみられ、その下に三角形の印刻文を施すものである。

A－4類a（24・200・227・312～315）

口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器で、縦位半隆起線文を伴うものである。200は口径25cmで、平縁口縁をなす。口縁部に相対する2個の粘土紐貼り付け文、口唇部に相対する小突起をもつ。口縁部に2条、頸部には4条の横位半隆起線が巡る。縦位半隆起線は胴部にも施される。

A－4類b（316～329）

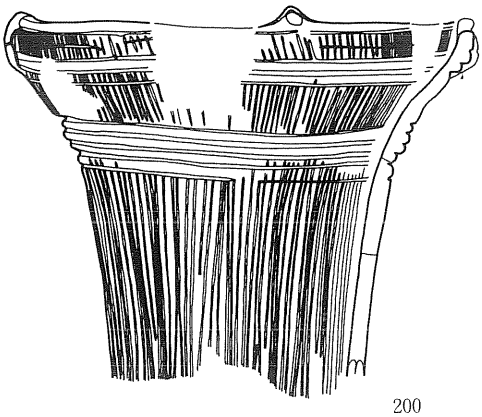
口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器で、横位無文帯を伴うものである。319は縦位刻線の中に横位沈線を走らせ、その所々に円形文がみられる。324・325・329の口唇部には突起が付き、329には小孔がみられる。320は口縁部に山形の突起をもち、突起には半隆起線、刻線、刺突などが施文される。

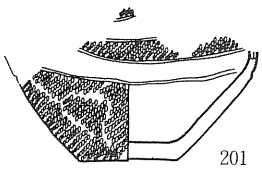
A－4類c（26～28）

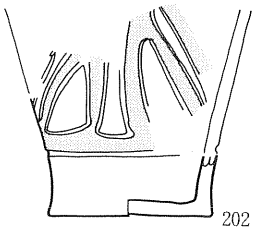
口縁部がキャリパーをなす深鉢形土器で、横位半隆起線文を伴うものである。27は1個、28は2個1対の突起が付き、半隆起線で文様を施文する。

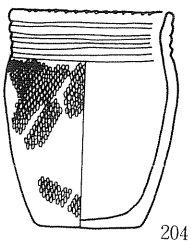
A－4類d（229）

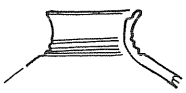
口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器で、縄文地文のみられるものである。口唇部に4個の小突起をもつ。突起下方に縦位に2本の粘土紐貼り付けを施すが剝落し、その下は半隆起線が引き継がれる。突起内面にも貼り付け文がみられる。

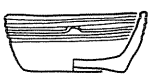

200

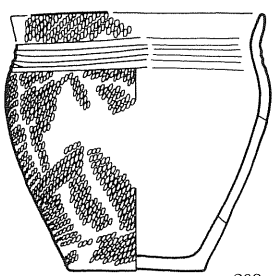

201

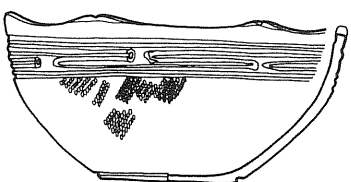

202

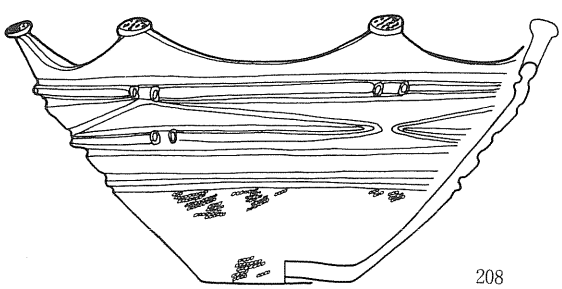

204

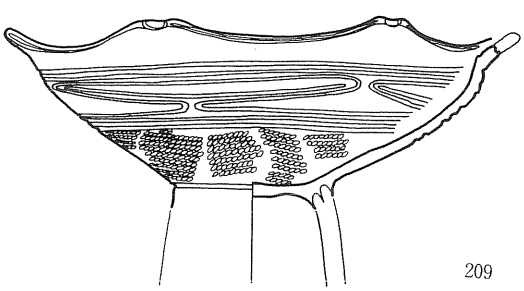

205

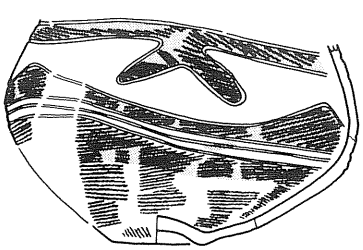

206

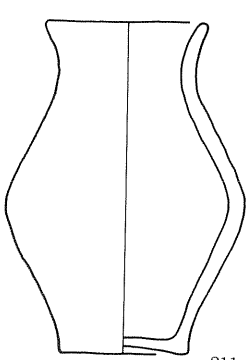

203

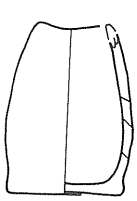

207


208


209

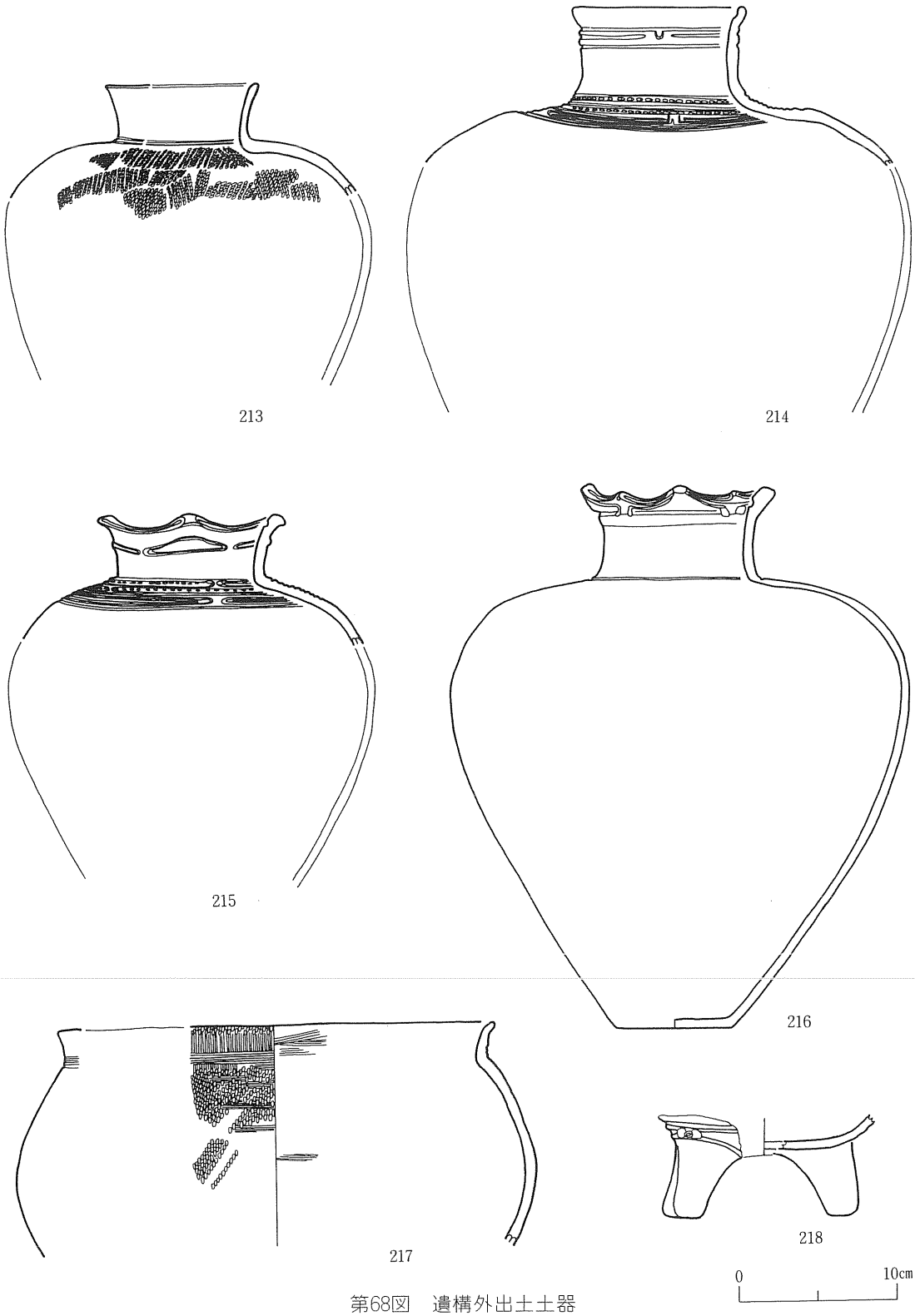

210


211

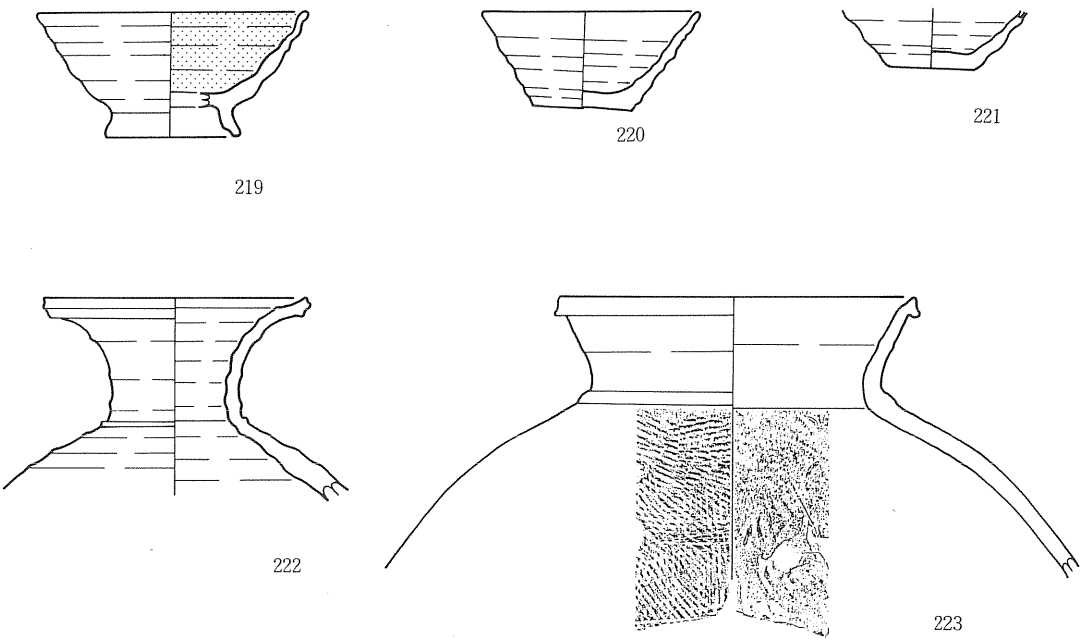

212

0　10cm

第67図　遺構外出土土器



第68図　遺構外出土土器



第69図　遺構外出土土器

B－1類（17）

口縁部が直立する鉢形土器で、口径8.2cm、器高15cmである。口縁部は縦に貼られた1本の粘土紐と、横位への刻み目文、半隆起線文からなる。胴部は直線、「U」の字状の半隆起線文と縦位の刻線からなる。

4群土器（第23図30・31、第76・77図330～340）

口縁部に横位無文帯を主文様とするもので、3群土器にみられる縦位刻線の中を横位沈線が走るもの、三角形印刻文、蓮華状文等をもたないものである。

A－3類（30・31・154・330～340）

口縁部がやや外反する深鉢形土器で、直立に近いものもある。横位半隆起線の中が無文帯となる。333は半隆起線上に連続爪形文を施す。

5群土器（第71図228、第76・77図344～359）

鼓形の器形をなすものを一括した。

A－5類（228・344～359）

口縁部が強く内湾して上部が立ち上がり、鼓形の胴部をなす深鉢形土器である。228は口縁部湾曲部に刻み目文、格子目文、半隆起線文、無文部がみられ、立ち上がり部分は横位無文帯、4条の横位半隆起線文、口唇部近くには刻み目文を施す。344～359は同一個体も数点みられるようである。344～351は口縁部、352～358は胴部、359は胴下部である。口縁部内湾部は三角形印刻文、刻み目

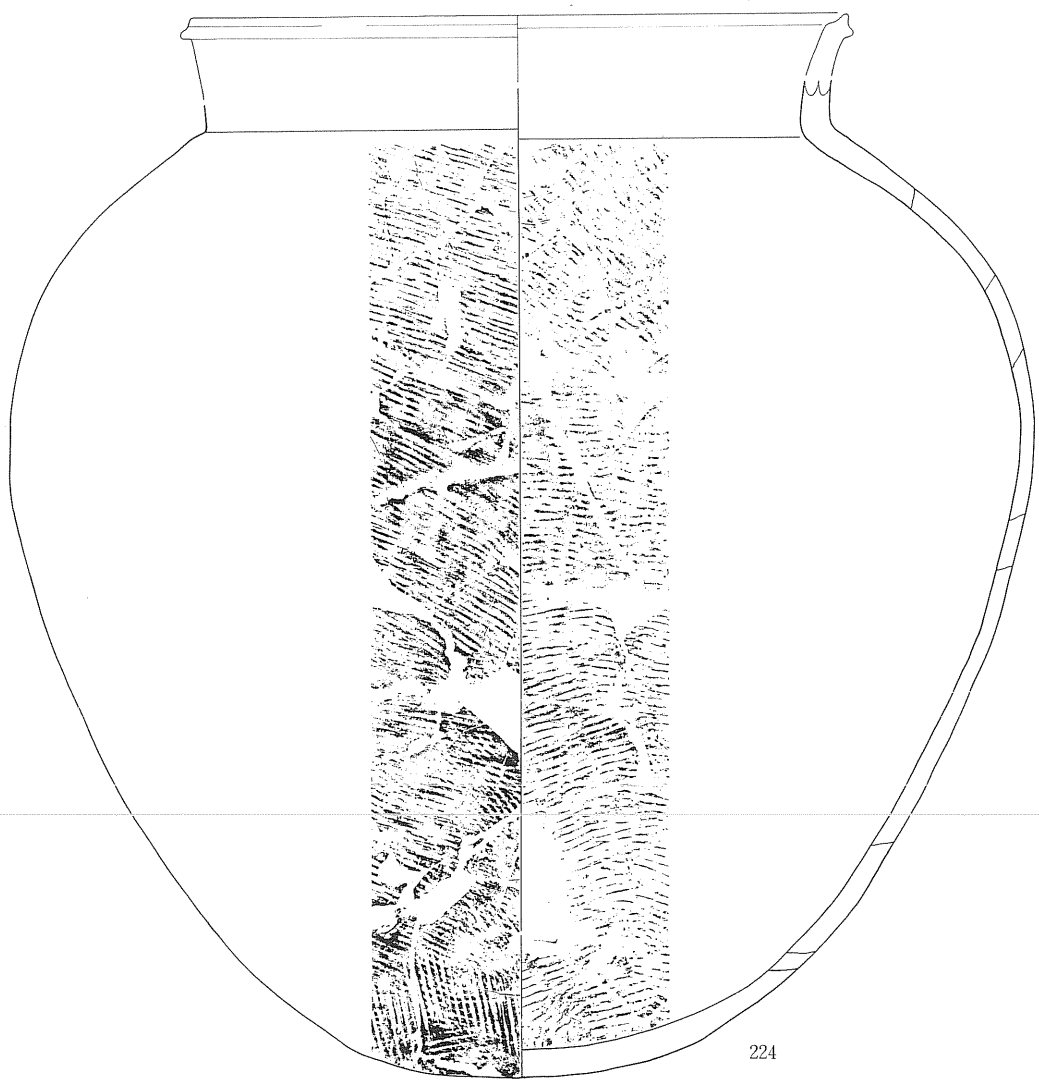
文、格子目文、半降起線文、無文部等で構成され、345は三角状の鋭い突起をもつ。胴部は縦位半隆起線、格子目文、無文帯等で構成される。

6群土器（第23図32～34、第71図231・232、第77・78図360～368）

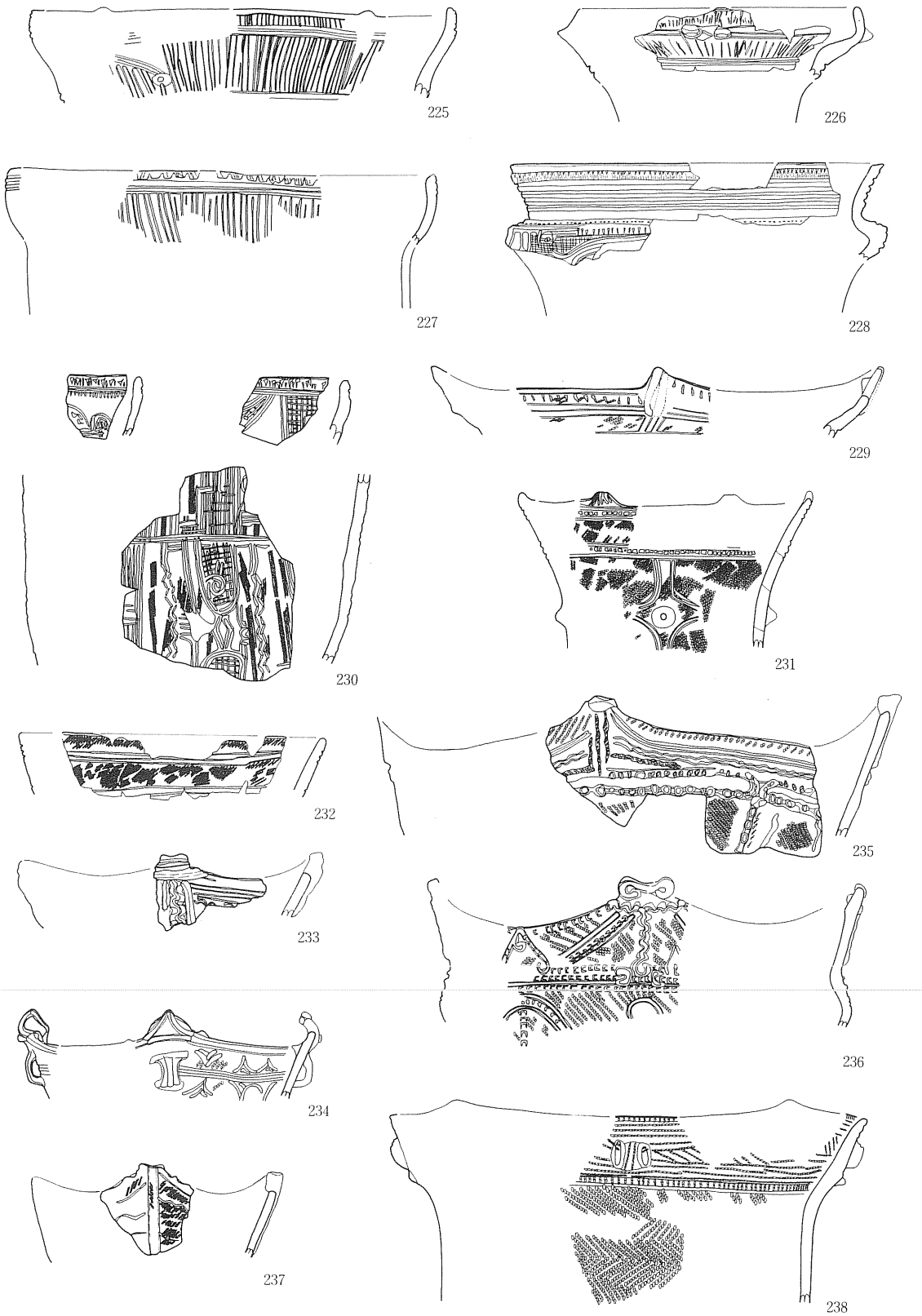
口縁部に横位半隆起線で区画し、地文である縄文や撚糸文が残っているものである。

A－1類（33・34・360～367）

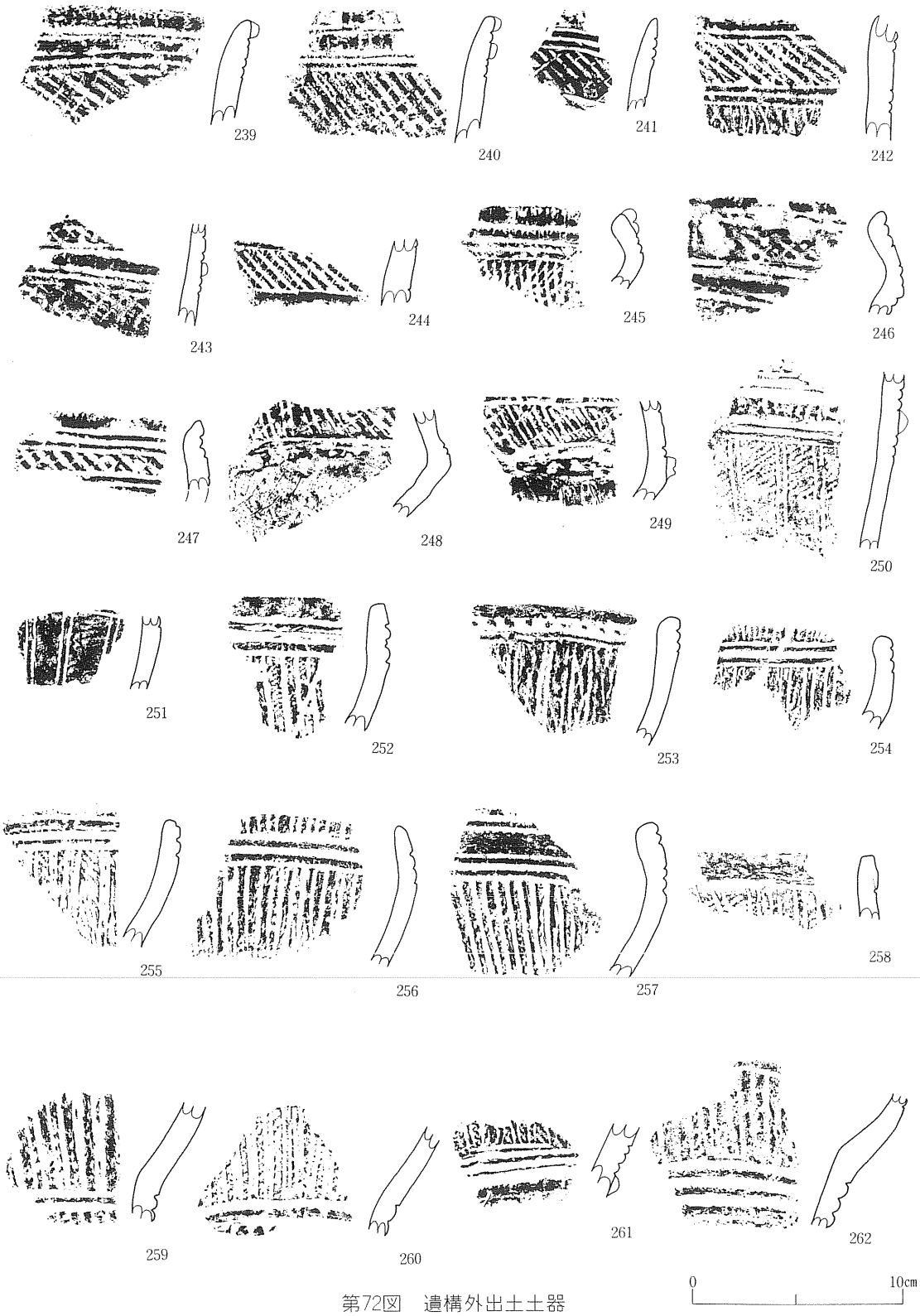
口縁部が直立する深鉢形土器である。363は半隆起線に連続爪形文を施す。366は粘土紐を巡らし地文は撚糸文である。



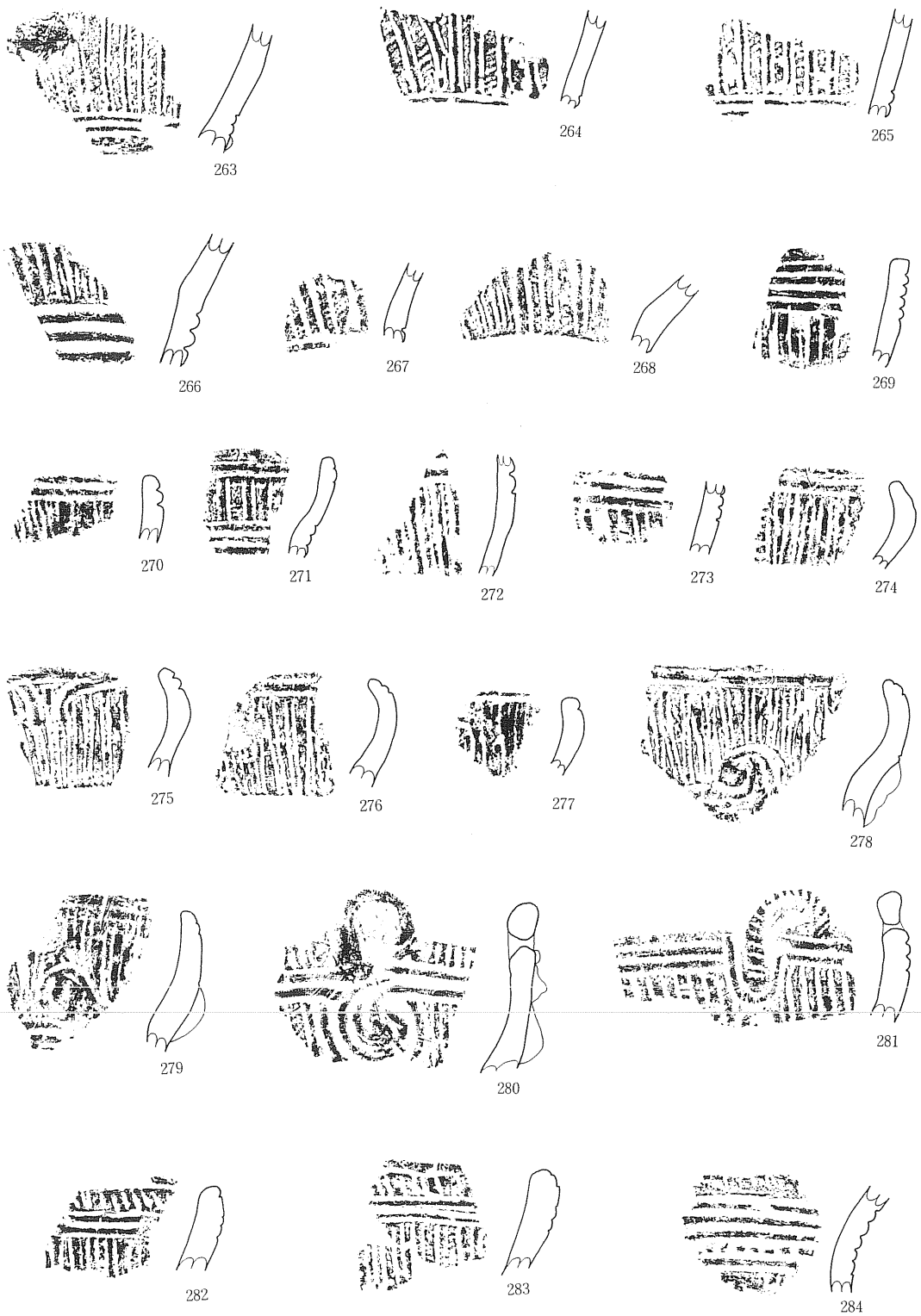
第70図　遺構外出土土器



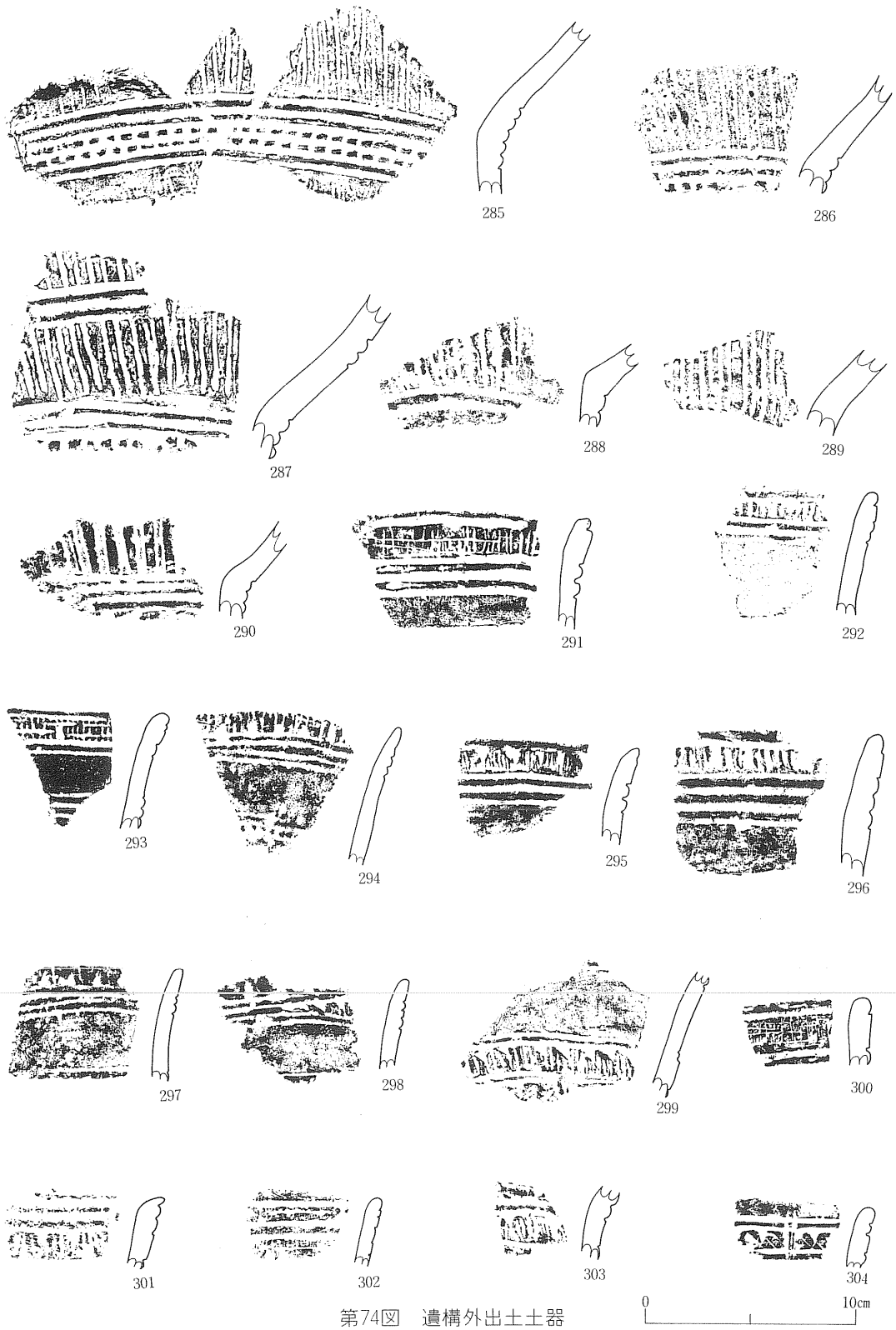
第71図　遺構外出土土器



第72図　遺構外出土土器



第73図　遺構外出土土器



第74図　遺構外出土土器

A－3類（32・231・232・368）

口縁部が外反する深針形土器である。231は口唇部に4個の突起をもち、突起には刻みを入れている。口縁部の横位半隆起線に連続爪形文を施す。胴部は円形の粘土貼り付けがみられ、それを囲うように半隆起線を曲線的に施す。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。232は平縁口縁で地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

7群土器（第57図154、第76図341～343、第78図369～379）

胴部破片で、半隆起線による直線・曲線文のみられるものである。口縁部形状、文様が不明であり、2～6群に含まれると考えられる。

A類（154・341～343・369～379）

深鉢形土器である。154・341～343は格子目文、369～379は縄文を地文としている。154・341～343は縦・横位の直線と曲線で文様を作り出す。369・370は直線・曲線・菱形、371～375は直線と「Ｌ」字状文で文様を作り出す。376～379は直線・曲線・孤状及び横位直線の端が渦巻文で終わるものである。

8群土器（第79・80図380～425）

いわゆる粗製土器で、縄文と撚糸文がみられる。380は口縁部が「く」の字状に内屈する。381・383はゆるく内湾するもので、他はほとんど直立ないし外反する。外面に段をもつ口縁が多く、口唇部が平らなものと尖るものがある。385～388には横位の撚糸圧痕がみられ、419・420は無文である。

9群土器（第71図235、第81図426～434）

口縁部に半隆起緑による平行・波状文を横位に施すもので、縄文のみられるものである。

A－3類（235・426～434）

口縁部が外反する深鉢形土器である。426～434は内湾気味に立ち上がる。426・428は山形口縁をなし、縦に直線・波状の貼り付けを行う。235は山形口縁の頂部に縦に撚糸圧痕文を3条施文する。

10群土器（第71図233、第81図435～441）

口縁部に半隆起線による平行・波状文を横位に施すもので、縄文のみられないものである。

A－3類（233・435～441）

口縁部の外反する深鉢形土器である。233・238・441は縦位に粘土紐の貼り付けを行い、233には突起が付く。

11群土器（第81図442・443）

口縁部に半隆起線で鋸歯状文を施すものである。鋸歯状文は比較的大きい。

A－3類（442・443）

口縁部が大きく外反する深鉢形土器である。442は刺突を施す半隆起線の間に、443は半隆起線間に縄文施文後に鋸歯状文を施す。

12群土器（第82図444・445）

幅広の口縁部に、半隆起線による平行・波状文を横位に施すものである。10・11群土器と文様構成は近似する。

A－3類（444・445）

口縁部がゆるく外反する深鉢形土器である。444は縄文を施した後に半隆起線を施し、縦位の粘土紐貼り付けがみられる。445には縄文がみられない。

13群土器（第71図234）

口縁部に横位平行沈線を施し、その上下に連弧文を施すものである。

A－3類（234）

口縁部が外反する深鉢形土器である。縄文を施してから沈線で文様を構成する。口唇部に突起が口縁部に橋状把手が付く。

14群土器（第71図236、第82図446～458）

口縁部に、平行する半隆起線間に連続爪形文を施文するものである。

A－3類（236・446～458）

口縁部が外反する深鉢形土器である。452・453・456は内湾気味に立ち上がり、450・451は山形状をなす把手部である。446～449は波状の半隆起線文がみられる。縄文地文のもの(446～452・454・459)とないもの（453・455～457）がある。

15群土器（第82・83図459～465）

胴部破片で、縄文地文施文後に半隆起線を施すものである。直線・曲線・孤線・鋸歯状などの文様で構成される。

16群土器（第83図466～473）

口縁部に縦位の粘土紐を貼り付けるものをまとめた。

A－3類（466～473）

口縁部が外反する深鉢形土器である。刺突文、撚糸圧痕文、半隆起線文等の施文である。

17群土器（第51図96、第52図100、第58図184、第83図474）

縦位方向に撚糸圧痕及び刻み目を平行に施し、その中に横位方向へ撚糸圧痕を施すものである。

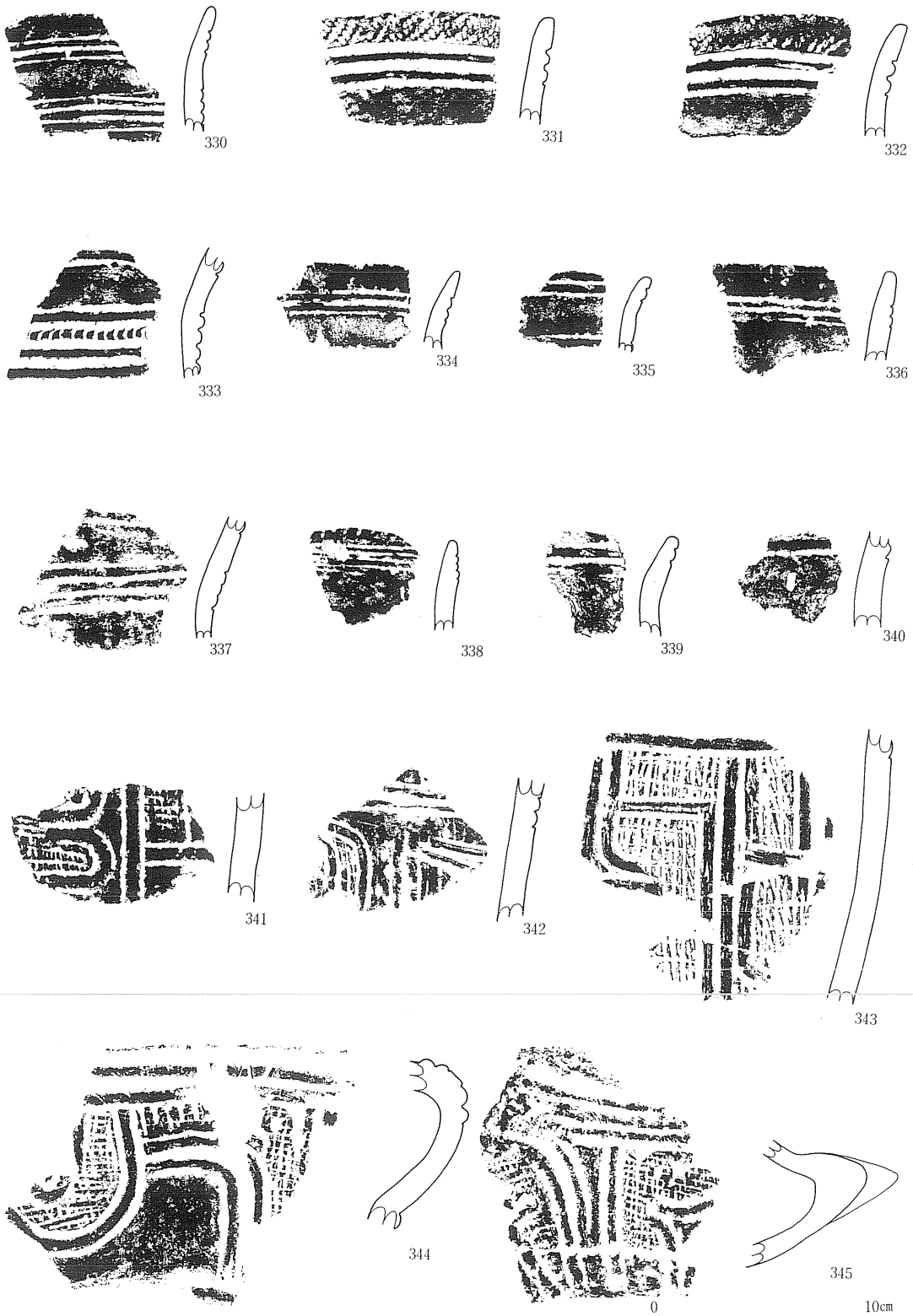
A－1類（96）

口縁部が直立する深鉢形土器で、頸部は若干外反気味である。口径28.5cm、器高40cmである。口縁部に4本の懸垂文がみられ、縦・横・斜位の撚糸圧痕と下部の撚糸文で文様が作り出されている。胴部は無文である。

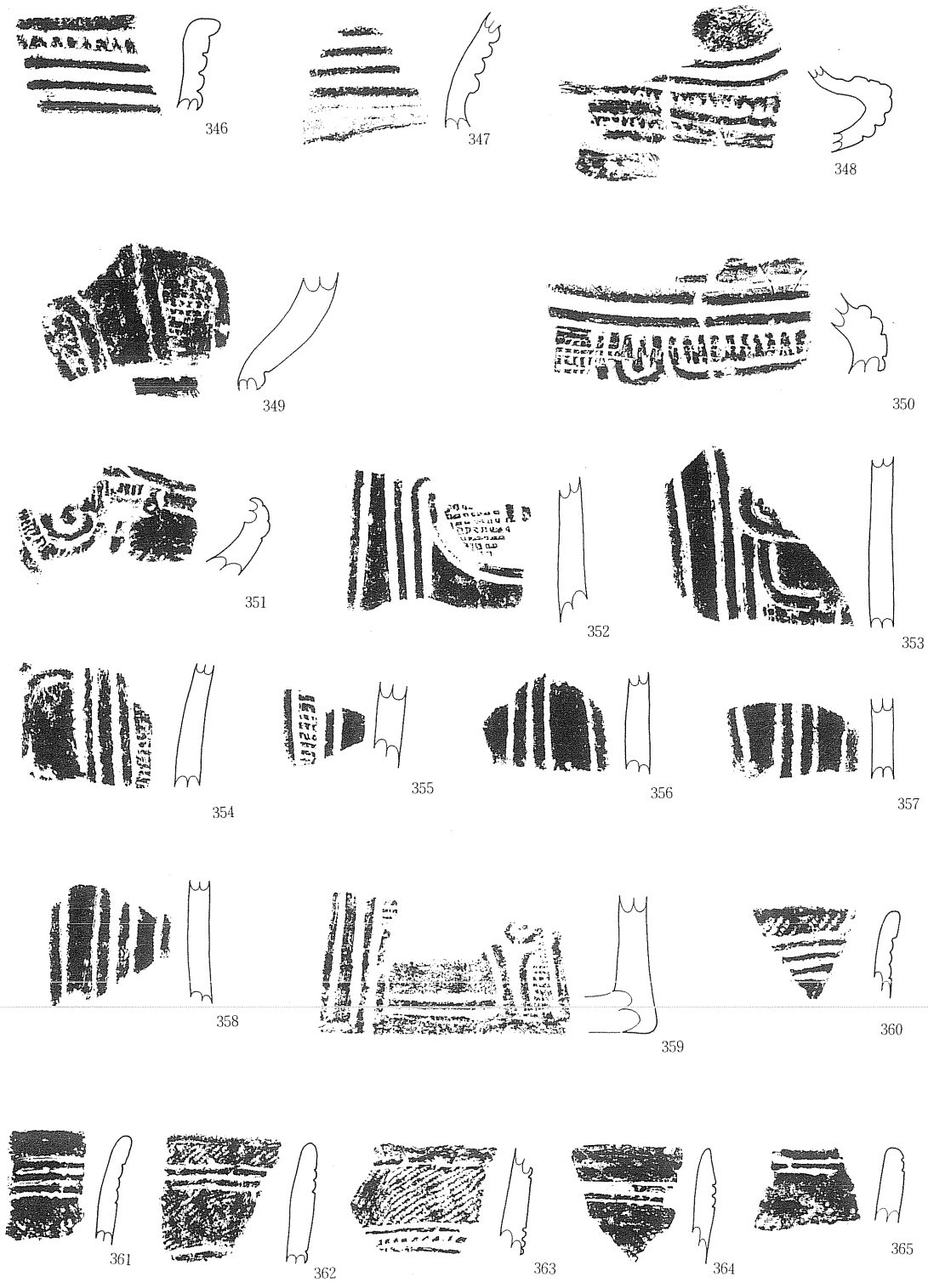
C－3類（100・184・474）

浅鉢形の器形をなすものである。100には台が付いている。縦位に撚糸圧痕及び一部に刻み目を施し、横位に撚糸圧痕を施す。

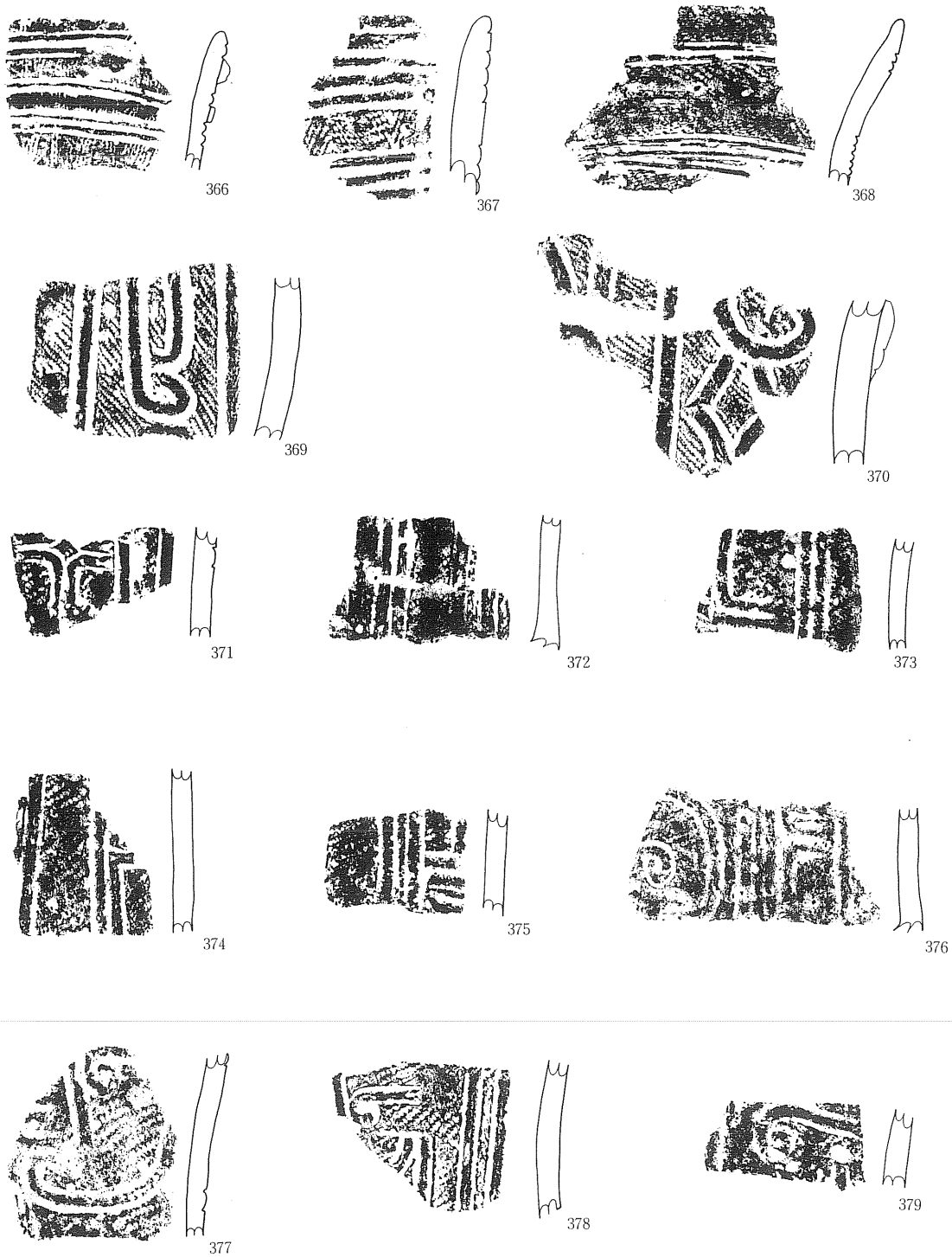
第75図　遺構外出土土器



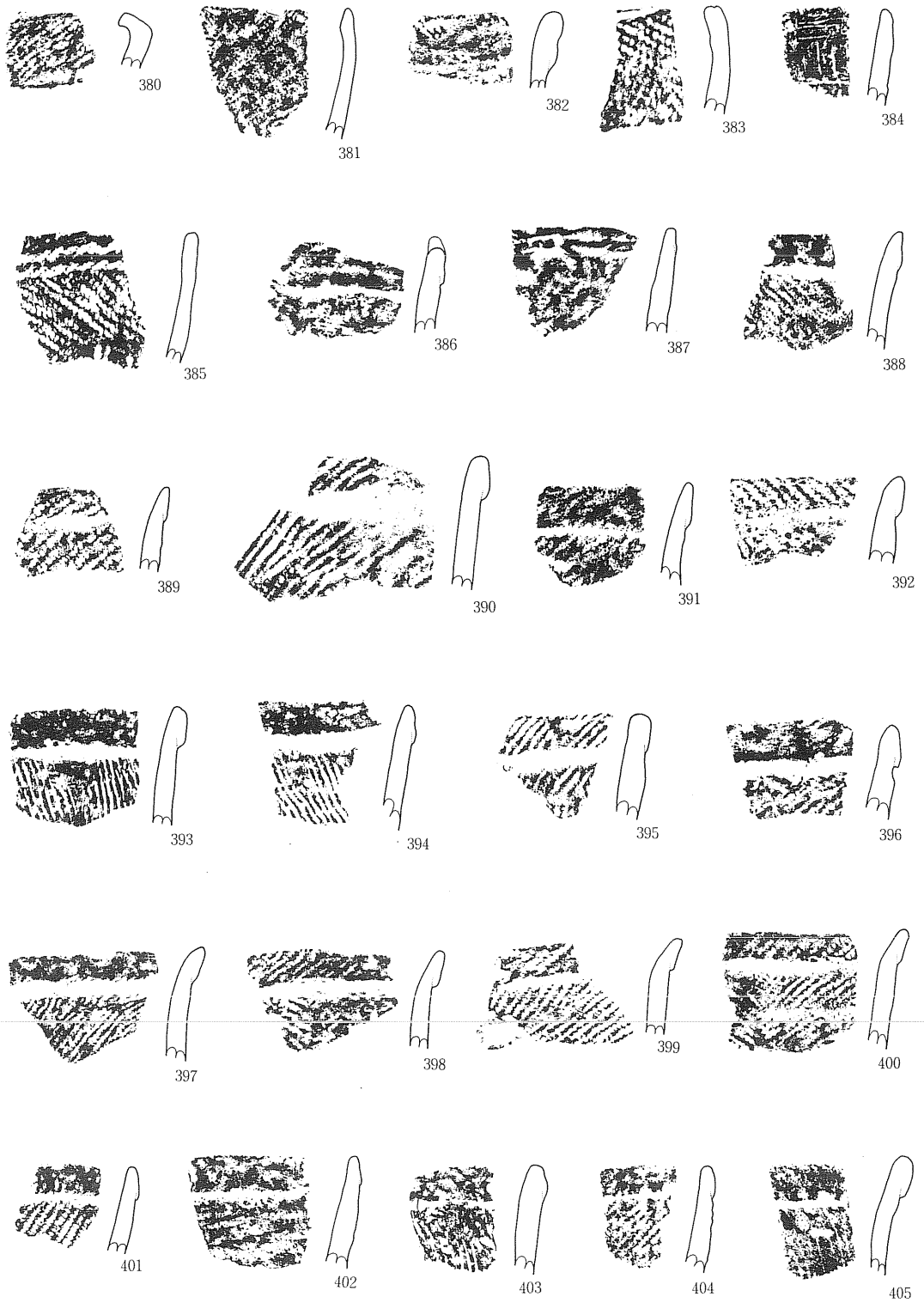
第76図　遺構外出土土器



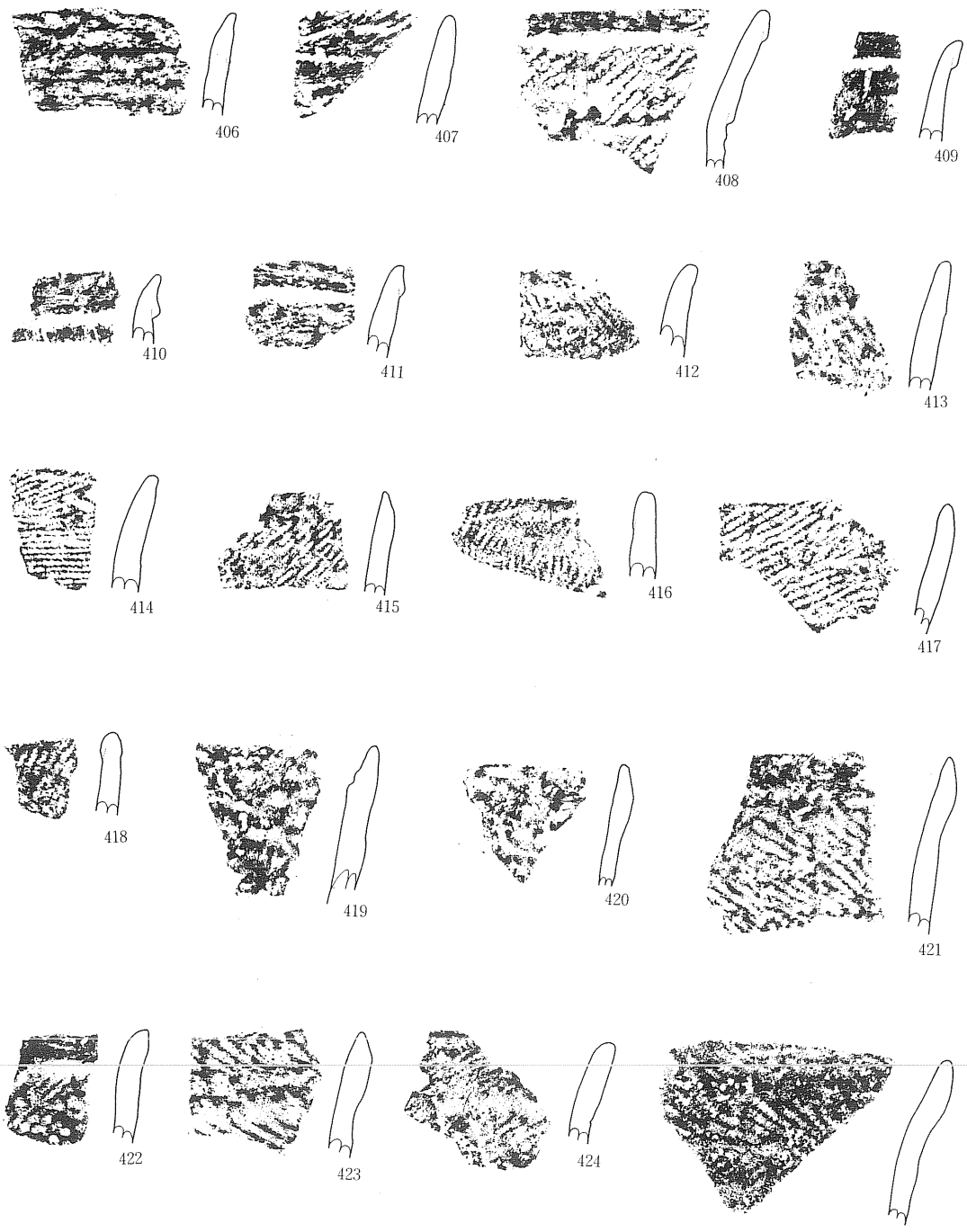
第77図　遺構外出土土器



第78図　遺構外出土土器

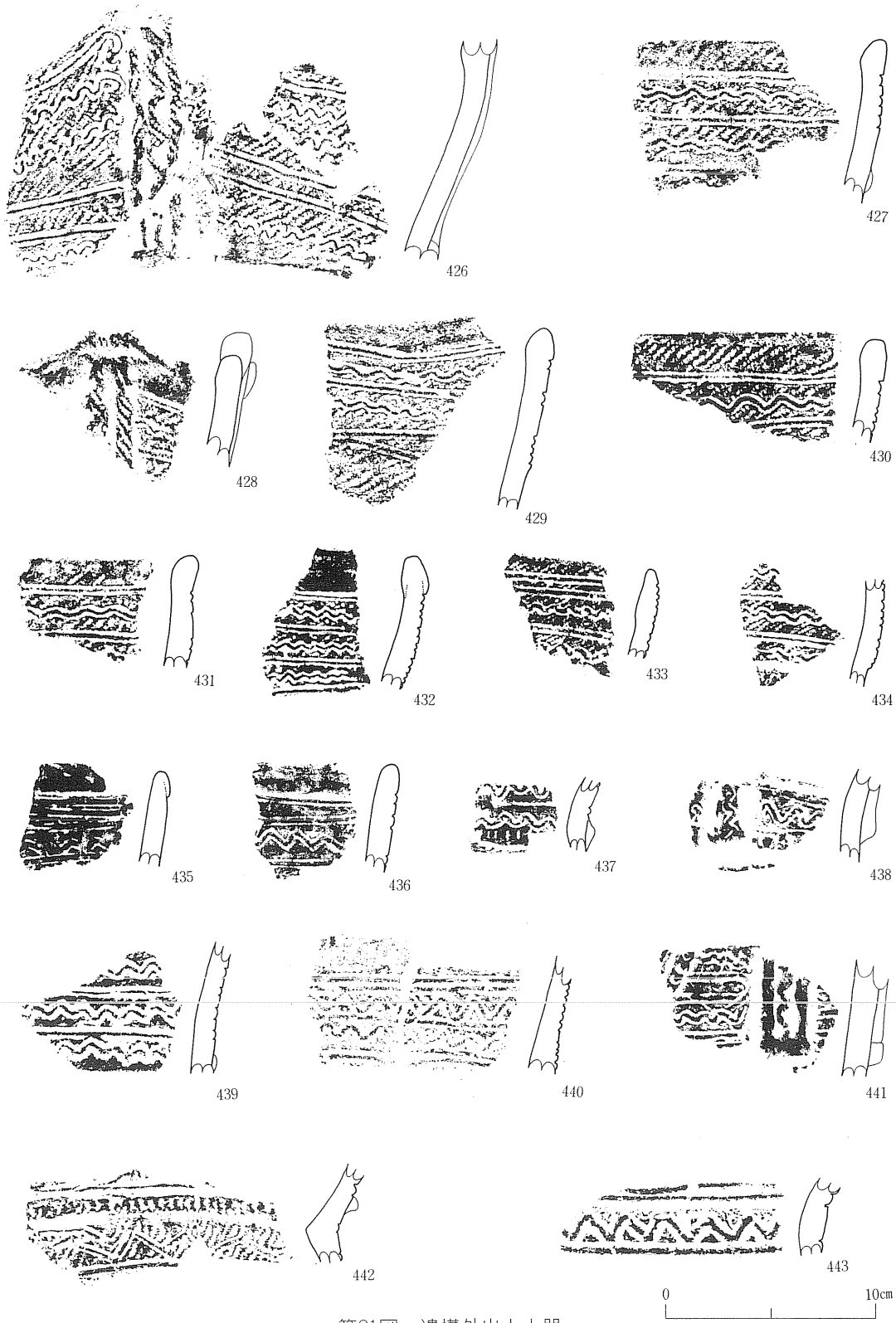


第79図　遺構外出土土器

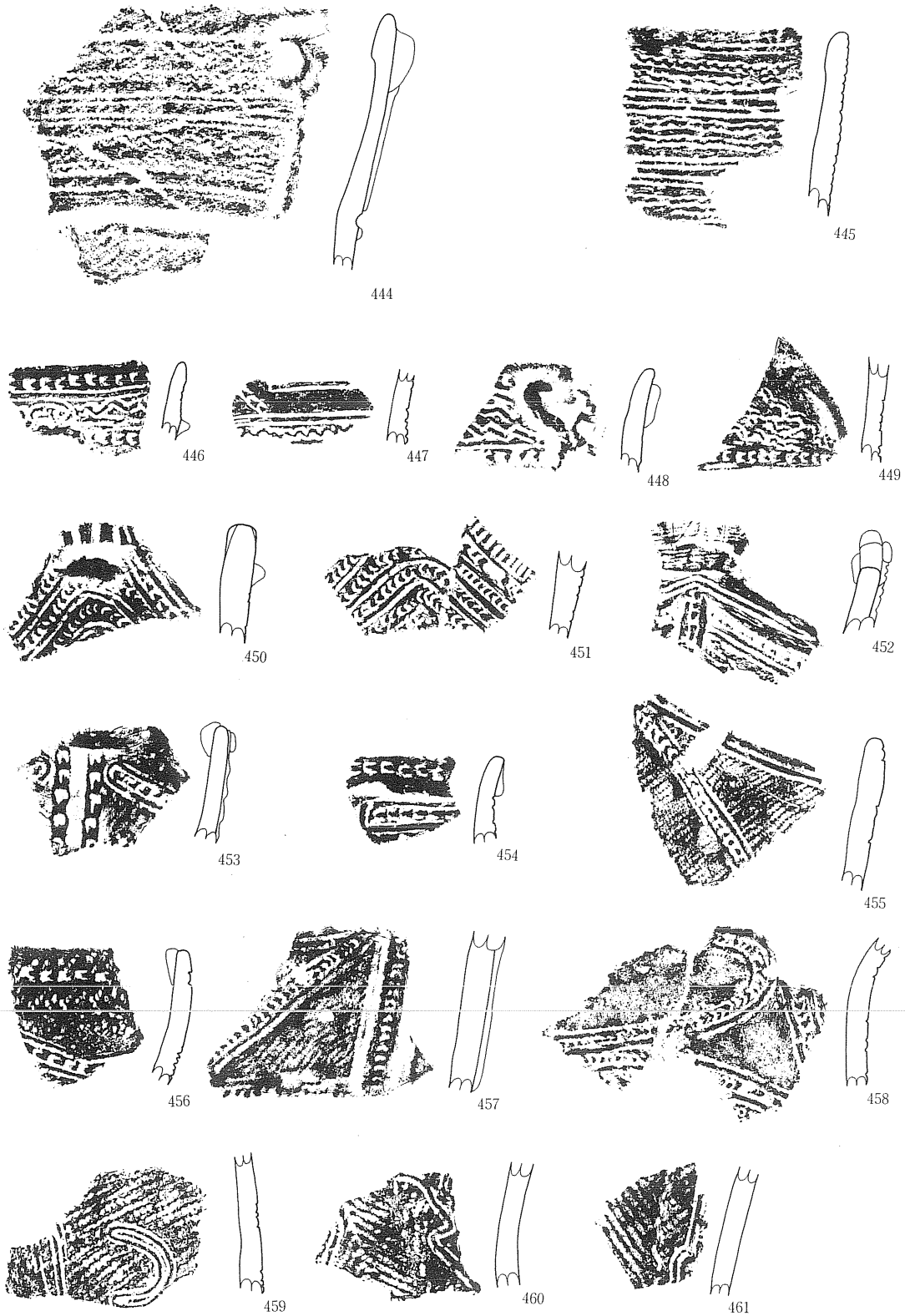


第80図　遺構外出土土器

0　10cm



第81図　遺構外出土土器



第82図　遺構外出土土器

18群土器（第83図475・476）

破片で全容をうかがう事ができないが、撚糸文施文後に半隆起線で孤状に区画をし、半截竹管状工具内面による斜方向からの刺突を充塡させるものである。

Ａ－３類（475・476）

口縁部が外反する深鉢形土器で、山形口縁をなす。口唇部は撚糸圧痕による刻み目を施し、山形口縁の頂部を除いて外側へほぼ直角に折れる。

19群土器（第83・84図477～482）

撚糸文を器面全面に施すもので、口縁部は横位方向へ、胴部は縦位方向へ施す。

Ａ－３類（477～482）

口縁部が外反する深鉢形土器で、全て同一個体である。 478には粘土紐貼り付けによる懸垂文がみられ、 482には補修孔を穿っている。

20群土器（第84図483～487）

器面に斜位格子目文のみられるものである。

Ａ－３類（483～487）

口縁部が外反する深鉢形土器で、同一個体と考えられる。口縁部は粘土紐貼り付けや、斜位格子目文、横位半隆起線文を施す。胴部は斜位格子目文施文後に、縦・横位、鋸歯状等で文様構成を行う。

21群土器（第84図488～496）

口縁部に横・斜位方向への沈線を引き、沈線に沿って刺突を加える。区画された中に刺突を基点にするように弧状をなす沈線を下方へ平行施文するものである。

Ａ－３類（490～496）

口縁部がゆるく外反する深鉢形土器で、491～496は同一個体である。 493には三ヶ月形の貼り付け文がみられる。胴部地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）で、結び目文がみられる。

Ａ－４類（488・489）

口縁部がキャリパー状をなす深鉢形土器で、同一個体である。沈線による直線・弧線文や刺突を施し、頸部には隆帯が巡る。

22群土器（第23図20～22、第26図75～79、第52図97・99、第53図101、第57図160・165～167、第58図172・185、第71図238、第85・86図497～517）

口縁部に撚糸圧痕や単軸絡条体圧痕を平行して施文するもので、口唇部や頸部隆帯、粘土紐貼り付けによる懸垂文や突起にも施される。

Ａ－３類（20～22・75～79・97・99・101・160・165～167・172・185・238・497～517）

口縁部が外反する深鉢形土器である。器肉が厚く、円筒形をなすものである。口縁部が強く外反するもの、直立に近いもの、内湾気味に外反するものがある。口縁部文様帯は比較的広いが、97・

185のように狭いものもある。口縁部は二又の山形口縁と平縁口縁とがある。97は口径22.5cmで二又の山形口縁をもつ。口縁部は単軸絡条体圧痕を平行に施文する。頸部には隆帯が巡り、山形口縁の下に粘土貼り付け文がみられる。頸部隆帯にも単軸絡条体圧痕を施す。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。99は口径32cm、器高40.5cmで、二又の山形口縁をなす。口縁部は単軸絡条体圧痕を平行に施文し、山形口縁の下に橋状把手を付け、把手上部にはボタン状の貼り付け文がみられる。頸部に隆帯が巡り、隆帯・把手・口唇部には撚糸圧痕が施される。地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。101は口径42.5cmでゆるい山形口縁をなす。口縁部は山形口縁の頂部より懸垂文が付く。単軸絡条体圧痕を平行に施文し、懸垂文にもみられる。地文はＲＬ原体を使用し、縦位・横位回転による羽状縄文もみられる。238はゆるい山形口縁をなし、４単位である。口縁部は横位に平行する撚糸圧痕の中に斜位の撚糸圧痕が施文される。山形口縁と山形口縁の間には２個１対の突起をもつ。頸部には隆帯が巡り撚糸圧痕を施す。地文はＬＲ・ＲＬ原体による羽状縄文である。185・497～501は懸垂文、504～508はボタン状の貼り付け文をもつ。

23群土器（第25図60、第57図163・164、第58図174、第86・87図518～528）

口縁部に横位方向へ２～３条の平行撚糸圧痕文や、「∪」・「∩」字状や波状、鋸歯状に撚糸圧痕を施文するもので。口唇部や頸部隆帯、粘土紐貼り付けによる懸垂状文にも施される。

Ａ－３類（60・163・164・174・518～528）

口縁部が外反する深鉢形土器で、器肉が厚く、円筒形をなすものである。22群土器にみられた二又の山形口縁はなく、「∩」字状や「Ｘ」字状の懸垂状文が多い。520の粘土紐貼り付けによる懸垂状文は複雑で、単軸絡条体圧痕が施文される。523・526～528は横位へ平行する撚糸圧痕の原体と、その中の鋸歯状や縦位に施される撚糸圧痕の原体は異なるものである。526・527は同一の個体である。

24群土器（第24図43～49、第87図529・530）

口縁部に横位方向へ２～３条の平行撚糸圧痕や刺突を施文するものである。口唇部や頸部隆帯、粘土紐貼り付けによる懸垂状文にも撚糸圧痕を施す。

Ａ－３類（43～49・529・530）

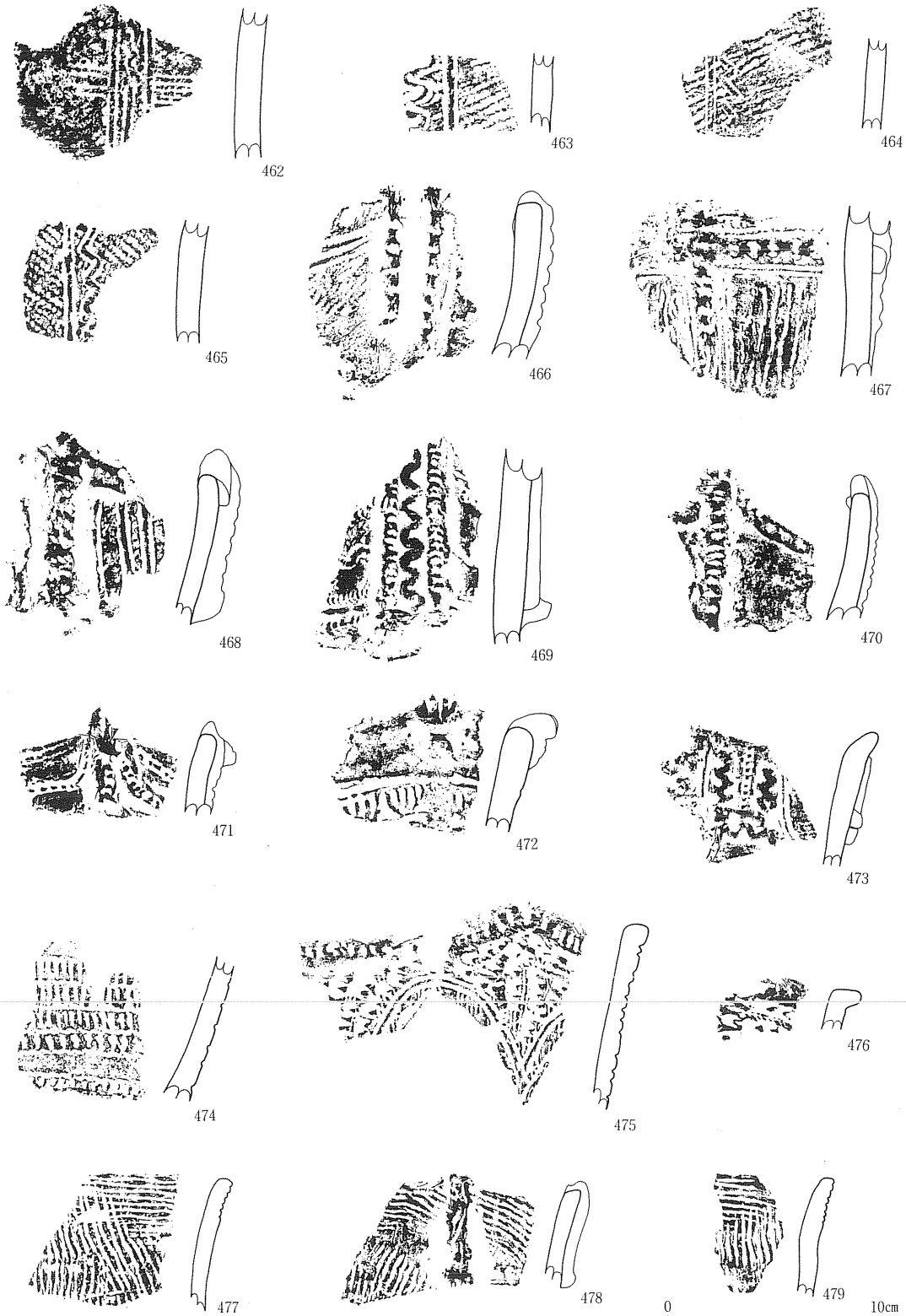
口縁部が外反する深鉢形土器で、器肉が厚く、円筒形をなすものである。43～45・48・49は比較的太目の粘土紐を貼り付け、胎土に砂が多く入っている。46・47・529・530は比較的細目の粘土紐隆帯を貼り付け、胎土に砂が少なく、焼成良好である。

25群土器（第25図50～52、第88図531・532）

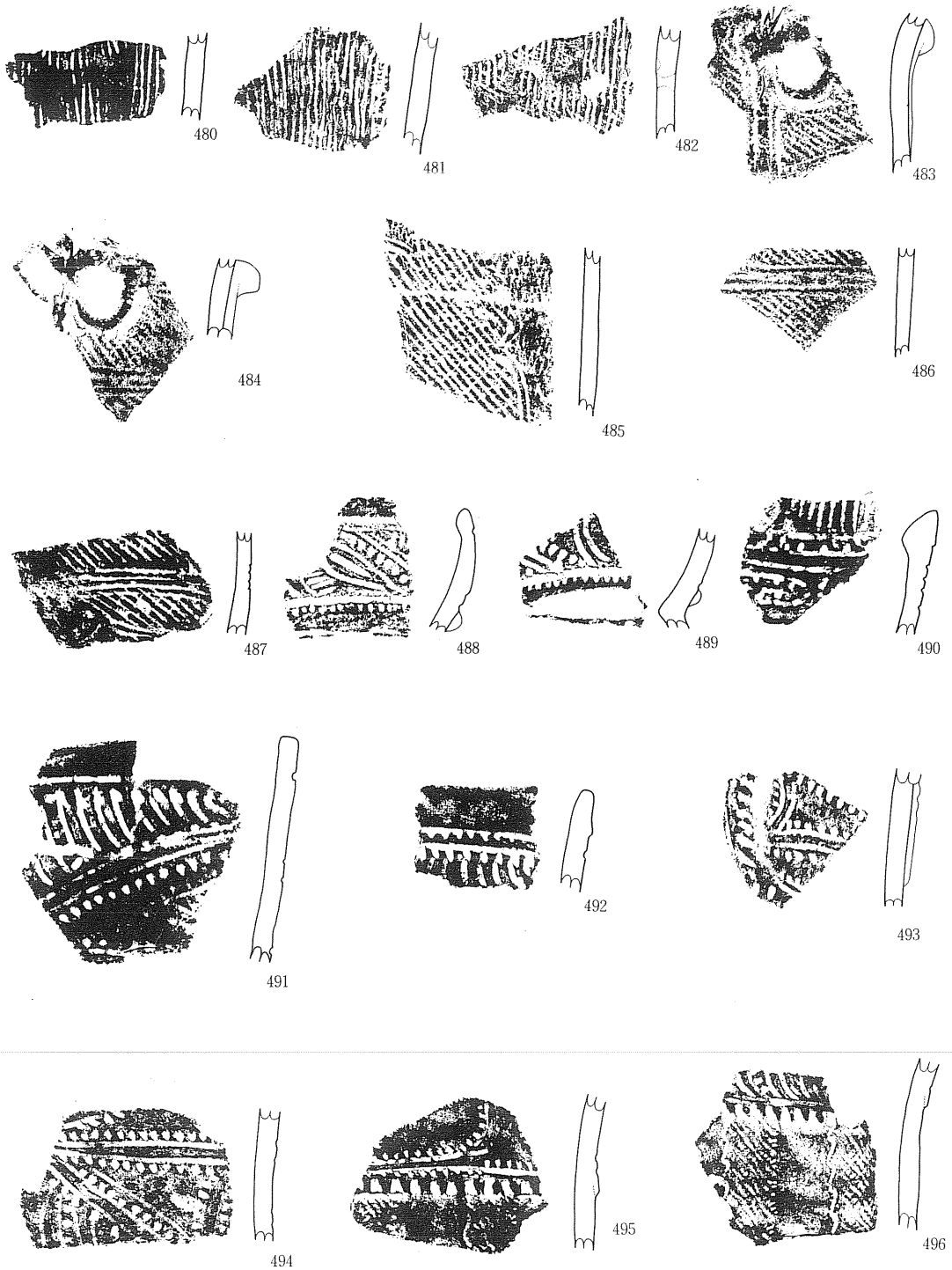
地文である縄文施文後に、撚糸圧痕を直線・曲線・「Ｙ」字状に施すものである。

Ａ－１類（50～52・531）

口縁部が直立する深鉢形土器である。口唇部付近は横位に平行して、胴部は縦位に撚糸圧痕を施し、端を環にしている。50の口唇部には小突起が付き、両面から指先で挟み込むようにし、くぼん



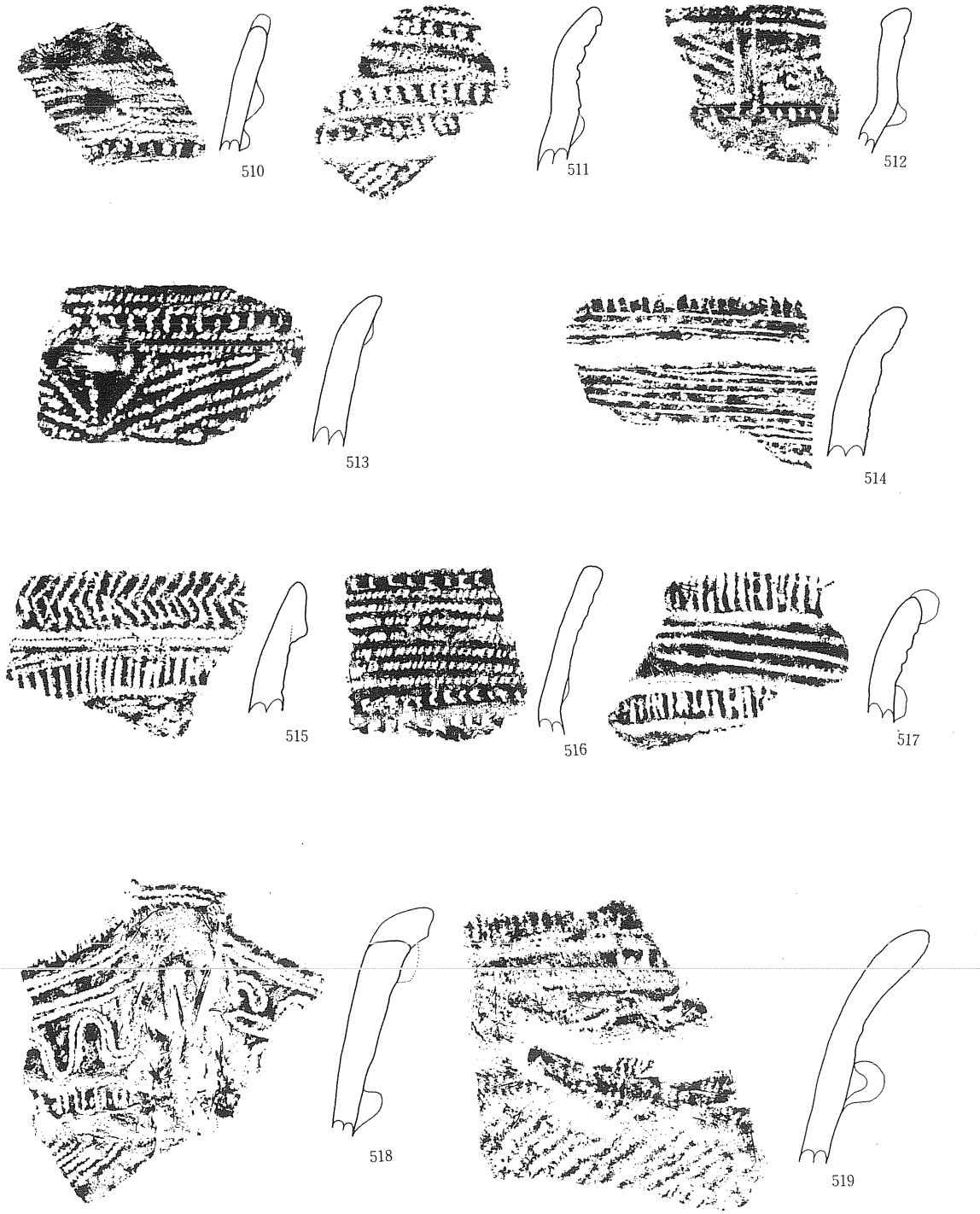
第83図　遺構外出土土器



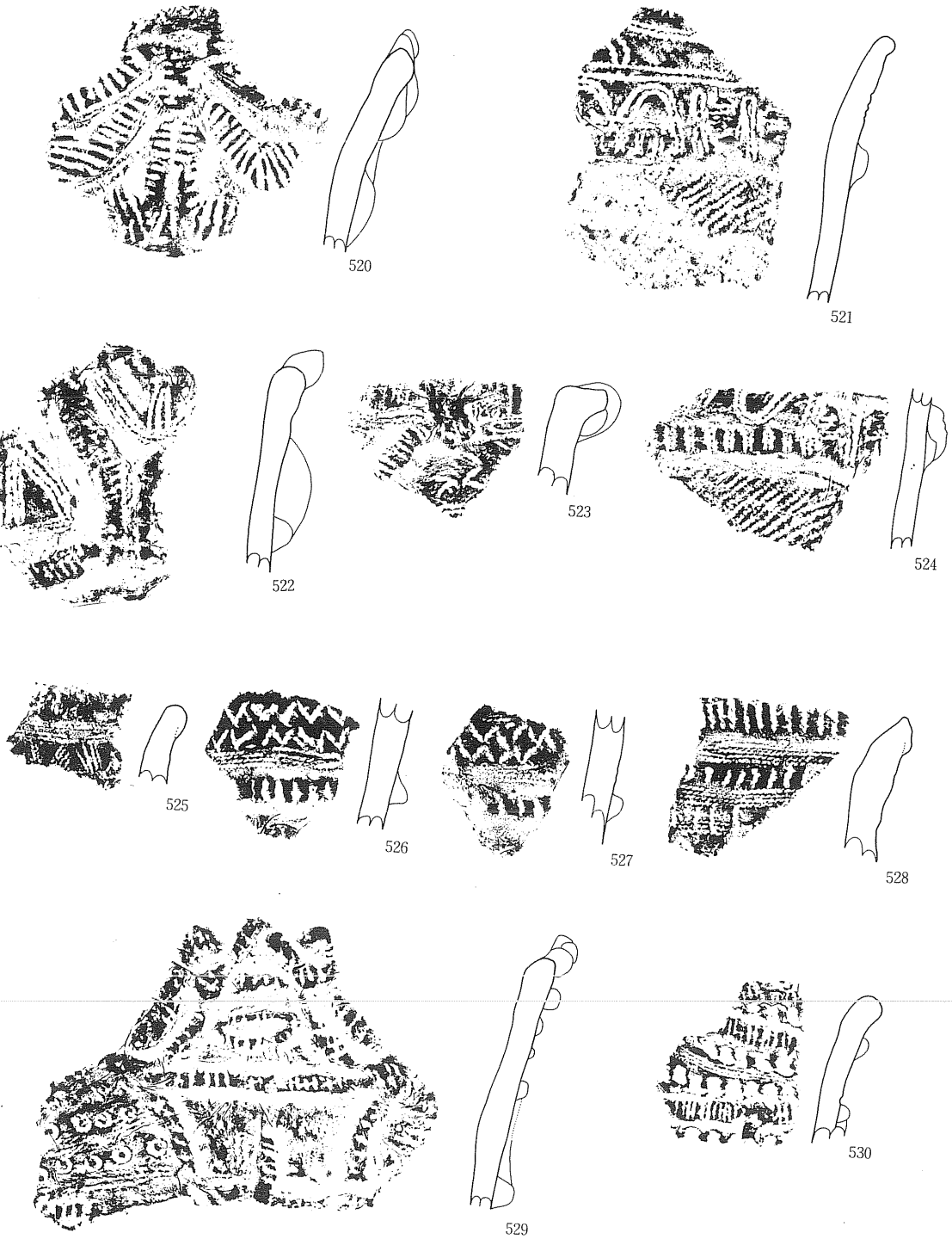
第84図　遺構外出土土器

0　10cm

第85図　遺構外出土土器



第86図　遺構外出土土器



第87図　遺構外出土土器

でいる。

Ａ－２類(532)

口縁部が内湾する深鉢形土器で、キャリパー状をなすものかもしれない。平行する隆起線の両脇に撚糸圧痕を施し、その間に弧状に撚糸圧痕を施す。

26群土器（第22図14）

浅鉢形をなす器で、粘土紐を貼り付けて文様を作り出し、体部下半は無文帯となるものである。

Ｃ－２類（14）

浅鉢形土器である。４個の突起をもち、３個は２～３個の粘土貼り付け、１個は２個の突起を鋸歯状に貼り付けた粘土紐で連絡する。その下には「の」の字状に粘土紐を貼り付ける。各突起間にも「の」の字状の粘土紐貼り付けを行う。頸部には粘土紐を巡らし、等間隔に棒状工具の側面を押し当てて刻み目状に文様を施している。

27群土器（第25図65、第51図93、第88図533～536）

口縁部に粘土紐を渦巻き状に貼り付け、その両側に沈線等で調整するものである。

Ａ－２類（65・533～536）

口縁部が内湾する深鉢形土器である。65・534・535は渦巻き文が口唇部より突出している。

Ｃ－２類（93）

浅鉢形土器である。相対して２個の把手が付き、把手上には粘土紐を渦巻き状に貼り付けている。１個の把手間には相対して「Ｃ」字状の貼り付けがみられる。頸部下は無文である。

28群土器（第20図４・５、第22図13・15・16、第24図53・54、第25図61・62・66～68・70・71、第55図117・122、第56図140、第57図152、第67図201、第88図537～543）

地文施文後に、沈線区画の磨消帯を曲線的に施すものである。ほとんどが破片で文様を明確につかめないが、縦位方向へ展開するものと横位方向へ展開するものがある。口縁部が無文帯で胴部地文のみのものも数点含めた。

Ａ－２類（16・537）

口縁部が内湾する深鉢形土器である。16は胴部が膨らむ器形で、口縁部無文帯、胴部にＬＲ単節斜縄文（斜位方向）を施す。537は区画内に刺突を施す。

Ａ－３類（15・53・140・538～543）

口縁部が外反する深鉢形土器で、直立に近いものもある。平縁口縁が比較的多い。

Ｂ類（201）

鉢形をなす器形と考えられるが、浅鉢形をなすものかもしれない。口縁部形状は不明である。磨消帯は横位方向へ展開し、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。

29群土器（第25図55～57、第50・51図87～92、第54図106・109・111・114、第55図118～120・123、第56図136・141～147、第57図149、第88図544～548）

粘土紐貼り付けによる隆起線間を磨消しするもの、隆起線に２～３個１対の刻み目を施すもの、口縁部が複雑な作りをなすものである。

Ａ－１類（56・88～90・92・106・109・111・114・118・124・141～147・545）

口縁部が直立する深鉢形土器で、若干外反気味のものもある。頸部が内湾して口縁部が直立するものが多く、口縁部文様帯は比較的広い。88～90・109は同じような文様展開で、刻み目を施した隆起線によって区画され、「Ｌ」字状に沈線区画の磨消帯が施される。89は口径36cm、器高59cmで地文はＲＬ単節縄文（縦位・横位回転）である。口縁部のみに文様を施すものと、92・106・114・145・147のように胴部にまで延びるものがある。92・114・145・147は隆起線と沈線区画の磨消帯が、106は隆起線が胴部まで延びる。

Ａ－２類（548）

口縁部が内湾する深鉢形土器である。連続刺突文、隆起線区画の磨消帯を施す。

Ａ－３類（546・547）

口縁部が外反する深鉢形土器である。連続刺突文、隆起線文を施す。

Ｃ－３類（87）

浅鉢形土器で、頸部が内側に折れ、口縁部が外反する。口縁部は無文帯、体部はＲＬ単節斜縄文（横位・斜位回転）が施される。

30群土器（第67図202）

胴部に平行沈線で文様を作るものである。

Ａ類（202）

深鉢形土器の胴下半部で、口縁部形状は不明である。三角形を基本とする沈線で文様が展開し、沈線間にはベニガラが塗布されている。

31群土器（第55図127）

口縁部に入組文を施すものである。

Ｂ類（127）

鉢形土器で、体部に丸味をもつ。口唇部に刻みを施す。

32群土器（第89図549）

口縁部に刻み目文をもつもので、体部に磨消縄文手法を用いて文様を施す。

Ｂ類（549）

鉢形土器である。

33群土器（第89図550）

口縁部に平行沈線を施すもので、体部に磨消縄文手法を用いて文様を施す。

Ｂ類（550）

鉢形土器である。口唇部に刻み目文、口縁部内面に沈線が巡る。

34群土器（第51図95、第55図124、第67図203～205）

口縁部に平行沈線を施すものである。

Ｂ類（124・203・204）

鉢形土器である。124は２条の平行沈線が巡り、体部は無文である。203は3条、204は４条の平行沈線が巡り、地文ＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。204の口唇部には刻み目がみられる。

Ｄ類（95・205）

壺形土器である。95は粘土瘤が付き、ベニガラが塗布されている。205は口縁部内面に沈線が巡る。

35群土器（第23図35・36、第54図113、第55図125・126・133～135、第67図206・207、第68図214～216・218、第89図551～570、第90図583・584）

口縁部に工字文を施すものである。

Ｂ類（35・36・125・126・207・551～554・559～564・566～570・583・584）

鉢形土器である。工字文の沈線を２個１対の粘土瘤で連絡するものがある。口唇部に刻み目や沈線を施し、突起をもつものがある。口縁部内面に沈線の巡るものがある。 207は６個の突起をもつ。

Ｄ類（133～135・214～216・555～558）

壺形土器である。口唇部に突起をもち、口縁部は２個１対の粘土瘤で沈線を連絡するものが多い。肩部の張る器形で、工字文や平行沈線の間に連続刺突文を施すものがみられる。 213も本類に含まれるものであろうか。

Ｇ類（113）

台付鉢である。口唇部に沈線が施され、突起をもつ。口縁部内面及び台部外面に沈線が巡る。

Ｌ類（206・218）

206は口径7.5cm、器高3.1cmの小形品である。 218は４脚をもつものである。

36群土器（第23図37・38、第67図208・219、第89・90図571～582・585～588）

口縁部に変形工字文の施すものである。

Ｂ類（37・38・208・571～582・585～588）

鉢形土器である。口唇部に刻み目や沈線を施し、突起をもつものがある。口縁部内面に沈線の巡るものがある。 208は刺突を施した粘土瘤の付く突起が６個みられる。口縁部は２個１対の粘土瘤が沈線を連絡している。内面には沈線が巡る。地文はＬＲ単節斜縄文（斜位方向）である。 580・587・588の口縁部には縄文がみられ、585と586、587と588は同一個体である。

Ｇ類（209）

高坏形土器であるが台部は欠損する。体部は浅鉢形をなし、６個の山形口縁をもち、口唇部には沈線が施される。

37群土器（第67図210、第90図589）

磨消縄文手法を施すものである。

B類（210・589）

鉢形土器である。210は体部が膨らむ器形をなし、上部を欠く。横位方向へ地文である撚糸文を施した後に、沈線で区画して磨消しを行う。磨消帯は横方向へ展開し、体部中程の磨消帯には「八」状文が3ヶ所残り、それらの中間は狭くなっている。589は沈線区画の磨消縄文を、変形工字文風に施す。地文にベニガラが塗布されている。

38群土器（第23図39・40）

列点文を施すものである。

E－3類（39・40）

口縁部が外反する甕形土器である。3条の平行沈線を施し、その下に列点文が巡る。39は口唇部に縄文がみられ、小突起をもつ。口縁部内面に1条の沈線が巡る。

39群土器（第23図41・42、第90図590～593）

鋸歯状文を施すものである。

B－3類（590・591）

口縁部が外反する鉢形土器である。平行沈線の下に3条の沈線の鋸歯状文が巡る。591の内面には刷毛目文がみられる。

E－3類（41・42・592・593）

口縁部が外反する甕形土器である。41・42は同一個体である。刷毛目調整後、4本の平行沈線の下に鋸歯状文が巡る。592・593は同一個体である。数条の平行沈線の中と下に鋸歯状文が巡る。

40群土器（第68図217、第90図594～601）

刷毛目調整を施すものである。縄文のみられるものは、刷毛目調整後に施文される。

D類（597）

壺形土器の頸部である。外面は横位・斜位に、内面に横位に刷毛目調整を施す。

E－3類（217・594～596・598～601）

口縁部の外反する甕形土器である。217は頸部に3条の平行沈線が巡り、刷毛目調整は外面が口縁部（縦位）、胴部（横位）、内面が口縁部（横位）と胴部（横位）の一部に認められる。595・598は口縁部が強く外反し、595には3条の平行沈線が巡る。599は胴部、600・601は胴下部の破片であるが、本類に含まれると考えられる。

41群土器（第67図211・212）

無文をなすものである。

D類（211）

壺形土器である。口径8.5cm、器高17.6cmで、胴部が「く」の字状に膨らむ。器面全面が磨かれている。

L類（212）

口径4cm、器高9cmのミニチュア土器で、口縁部がすぼむ器形である。胎土に小石粒を多く含み器面に露出している。

42群土器（第91図602～613）

いわゆる粗製土器である。甕形土器と鉢形土器がみられ、口縁部が直立するものと外反するものがある。口唇部に棒状工具の側面を押圧した刻み目を施すもの、沈線を施すもの、縄文のみられるものがある。口縁部はほとんどが無文帯をなすものである。外面に煤状炭化物の付着するものが多い。605の口縁部内面には1条の沈線が巡る。

43群土器（第50図84・86、第69図219）

土師器を一括した。

H類（84・86・219）

84・219は内面黒色処理の施された台付坏である。84は摩滅が著しく底部切り離しは不明である。内面体部は横位方向に、底部は放射状にミガキを施している。219は底部切り離し回転糸切り後に台を付けている。内面体部は横位方向に、底部は放射状にミガキを施している。86は内面黒色処理を施さないもので、ミガキもない。台付坏で、底部切り離し回転糸切り後に台を付けている。

44群土器（第20図6～11、第50図85、第69図220・221）

赤褐色土器を一括した。

E類（9・11）

いずれも甕形土器で、口縁部が外反してからふたたび垂直に立ち上がる。9はロクロ成形、11はロクロ成形後、ヘラケズリ整形を行う。

F類（6）

皿である。底部切り離しは回転糸切り、無調整である。

H類（7・8・10・85・220・221）

坏である。全て底部切り離しは回転糸切り、無調整である。7の内面には煤状炭化物の付着が認められる。

45群土器（第51図94、第56図148、第69・70図222～224）

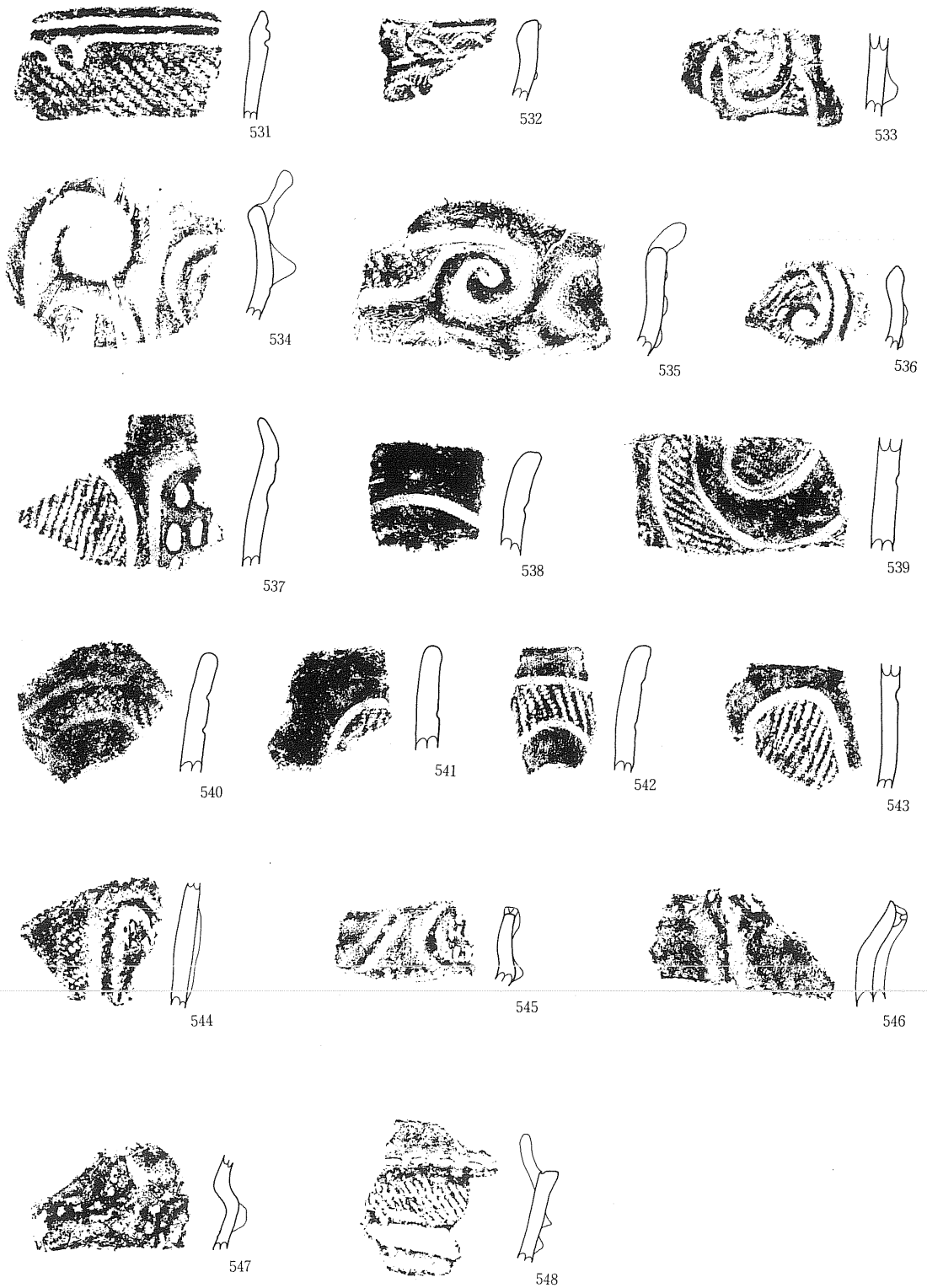
須恵器を一括した。

D類（94・222）

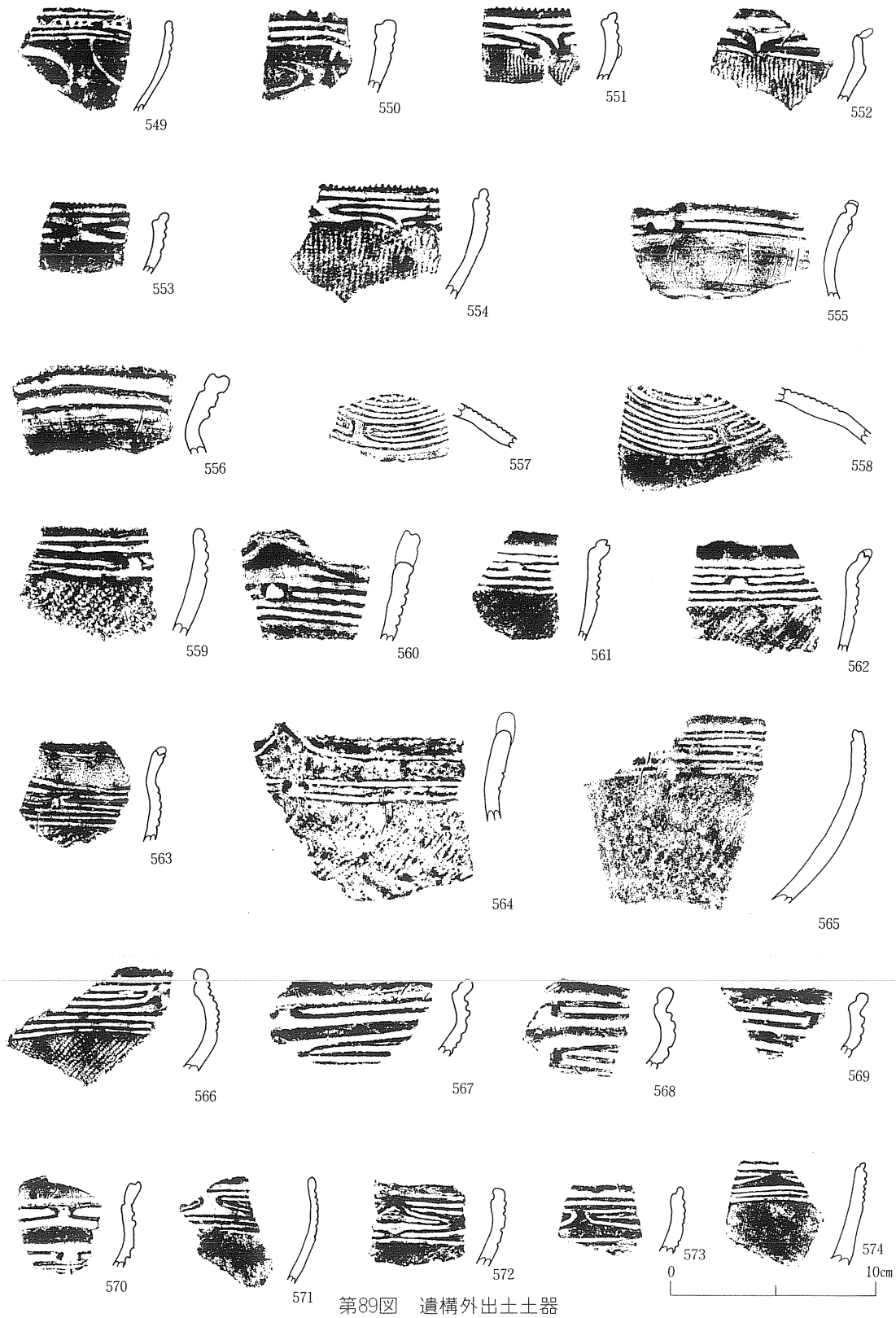
壺形土器である。94は口縁部が外反する。胴部外面は叩き板痕が認められ、ロクロ成形後にヘラケズリ整形を行う。内面は胴上部が横位に、胴下半は縦位にカキ目を施す。222は口縁部が大きく外反する。ロクロ成形で、頸に一条の環が巡る。

E類（148・223・224）

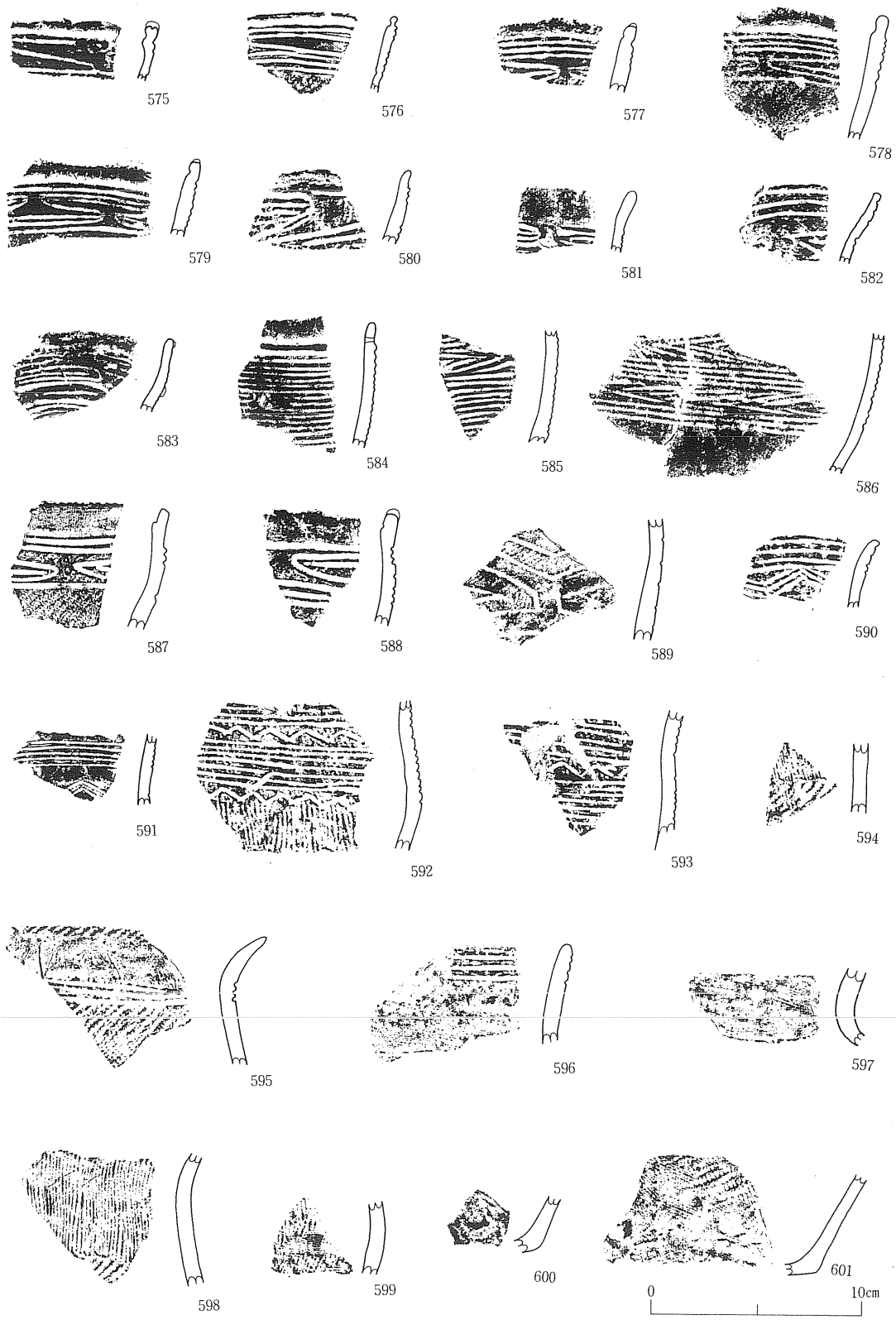
須恵器大甕である。223は口径19cmで、丸底を呈すと考えられる。胴部外面は平行タタキ板痕、



第88図　遺構外出土土器



第89図　遺構外出土土器

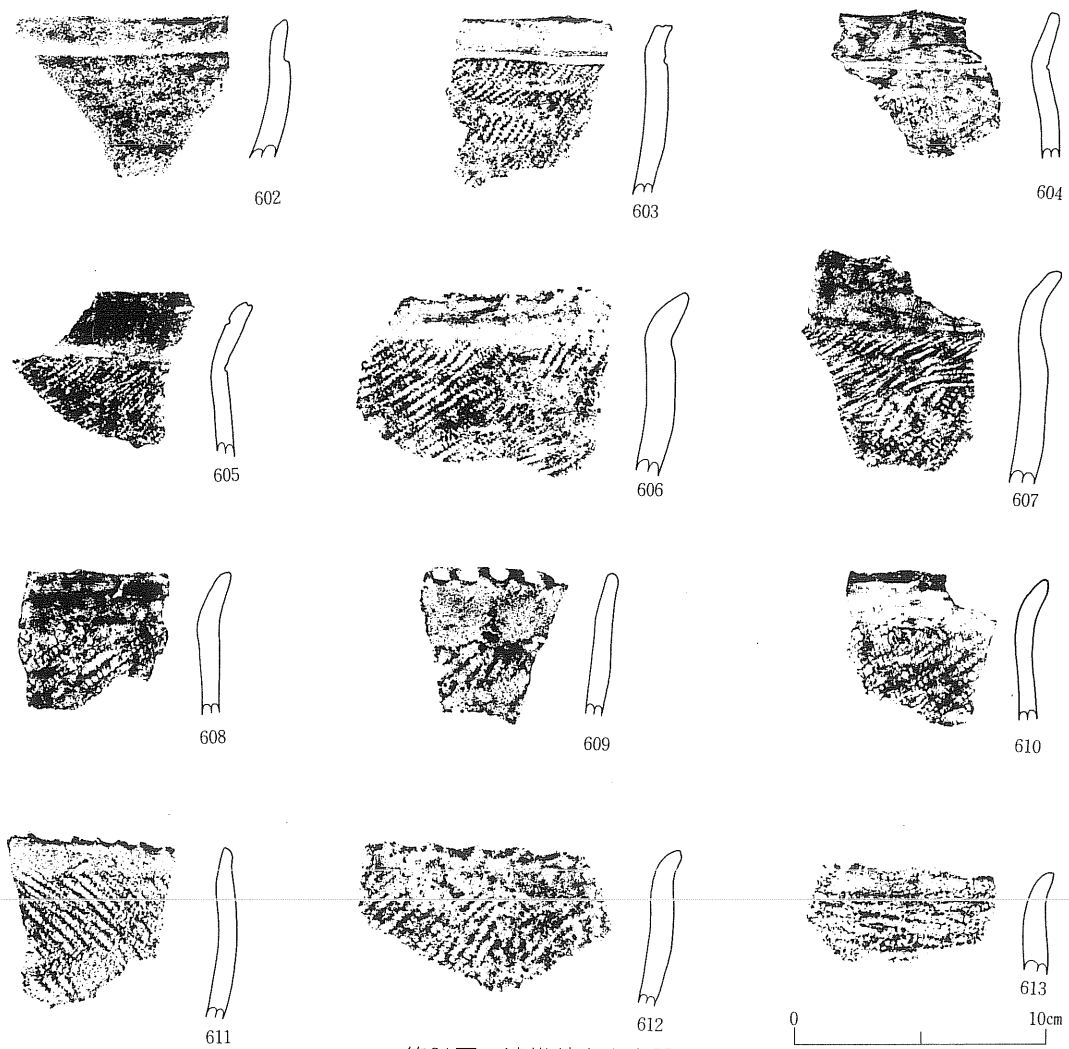


第90図　遺構外出土土器

内面は上半が同心円、下半が平行アテ板痕の認められるものである。口縁部は横ナデが行なわれ、胴部外面には幅1cmの帯状の擦痕が回る。 224は推定口径44.5cm、器高72.8cm、胴部最大径69.2cmで、丸底を呈し、口縁部を欠く。胴部外面は平行タタキ板痕、内面は平行アテ板痕が認められる。色調は肌色で、焼成が弱く、生焼けのようである。

46群土器（第92図614～626）

土器底部である。調査区南東の沢部から出土した土器底部に圧痕文のあるものを限定したもので

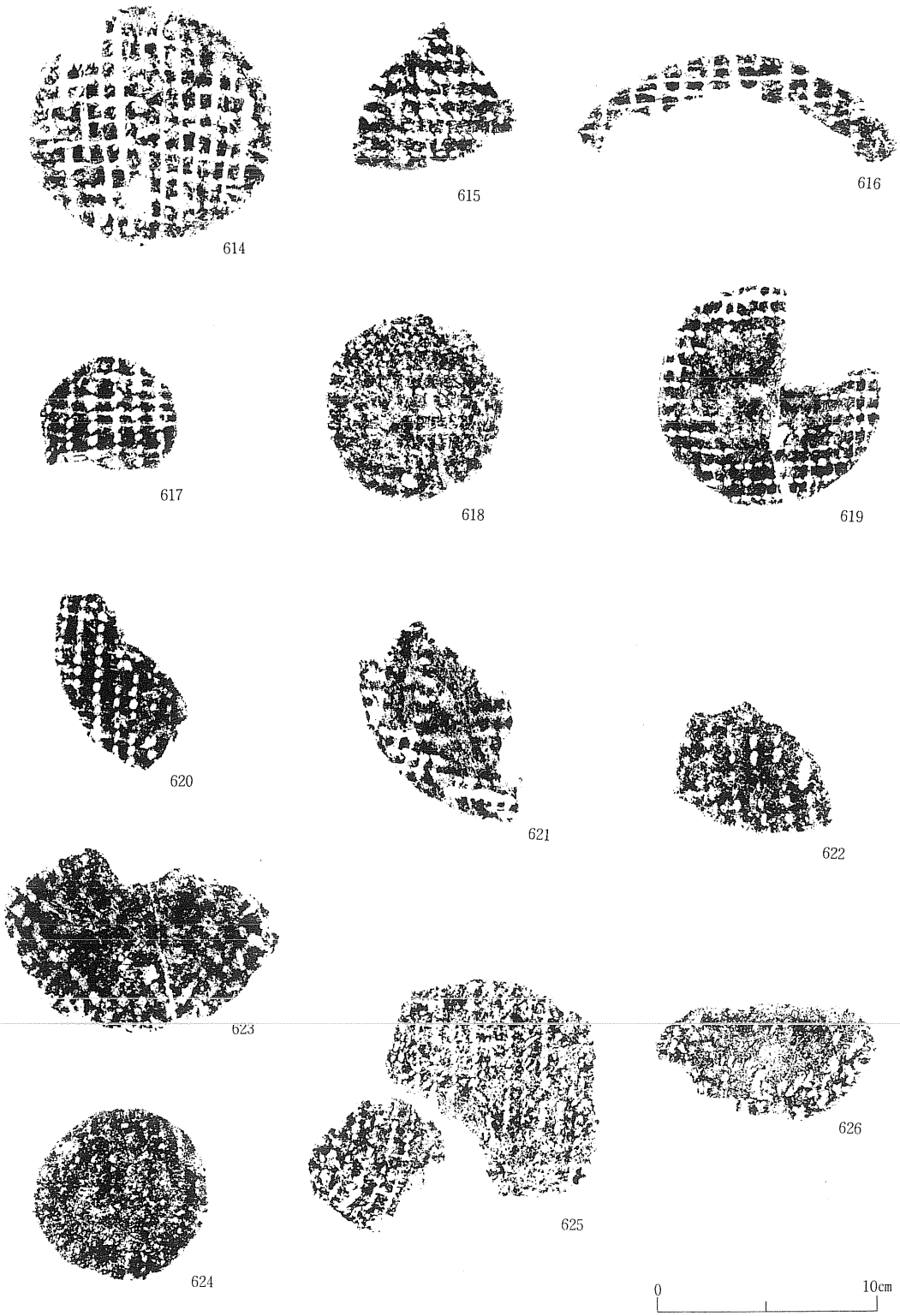


第91図　遺構外出土土器

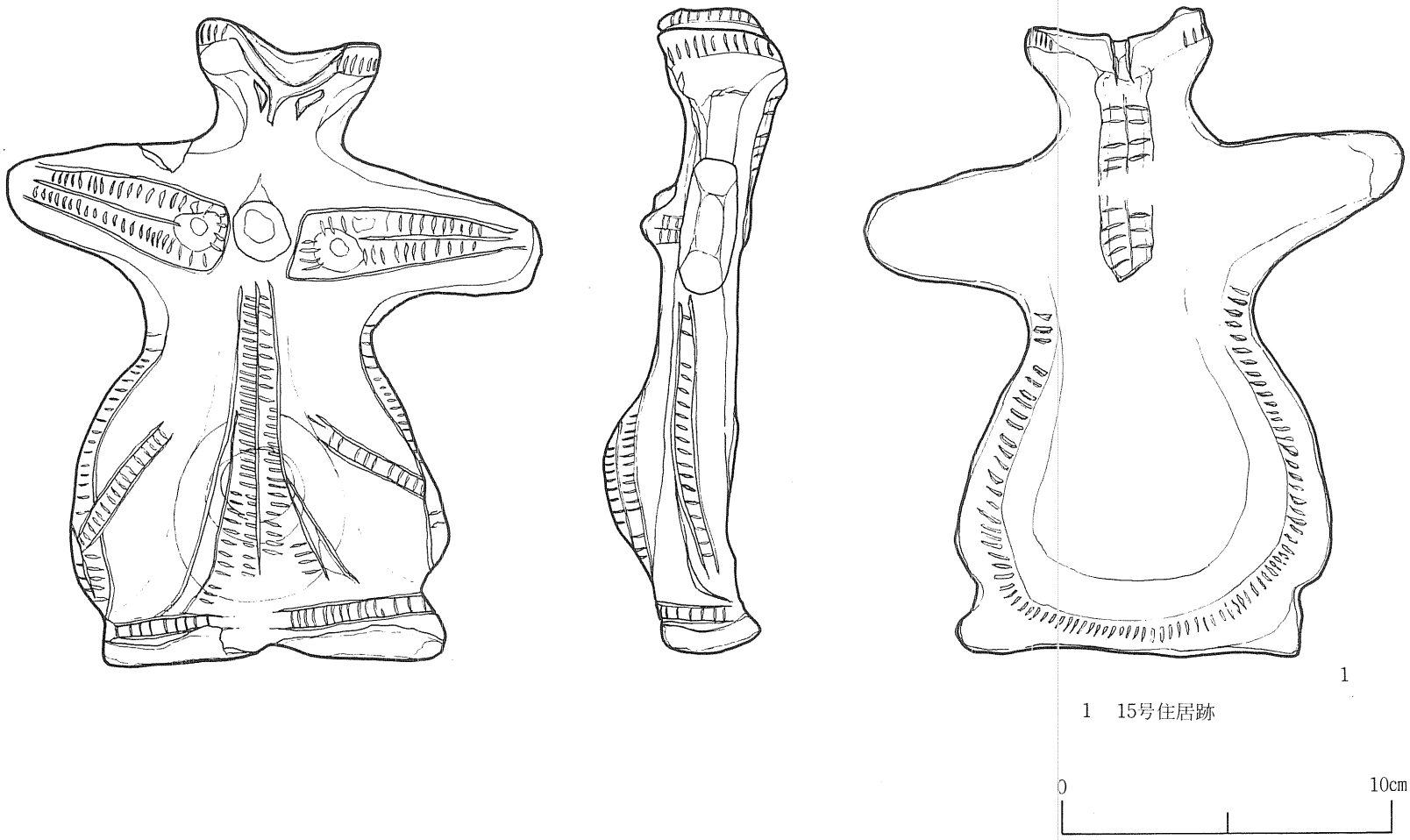
スダレ状圧痕のものがほとんどで、多くは圧痕にナデ調整を施し、底部圧痕が判然としないものが多く、これらは胎土、焼成等から北陸系土器に見られる。

土製品（第93～96図）

1～6は土偶である。1はほぼ完形品である。目は鋭く切り込まれている。乳房が貼り付けられ、その間にはくぼみがみられ、腹部は盛り上がっている。体の両面に平行する沈線を入れ、後にその

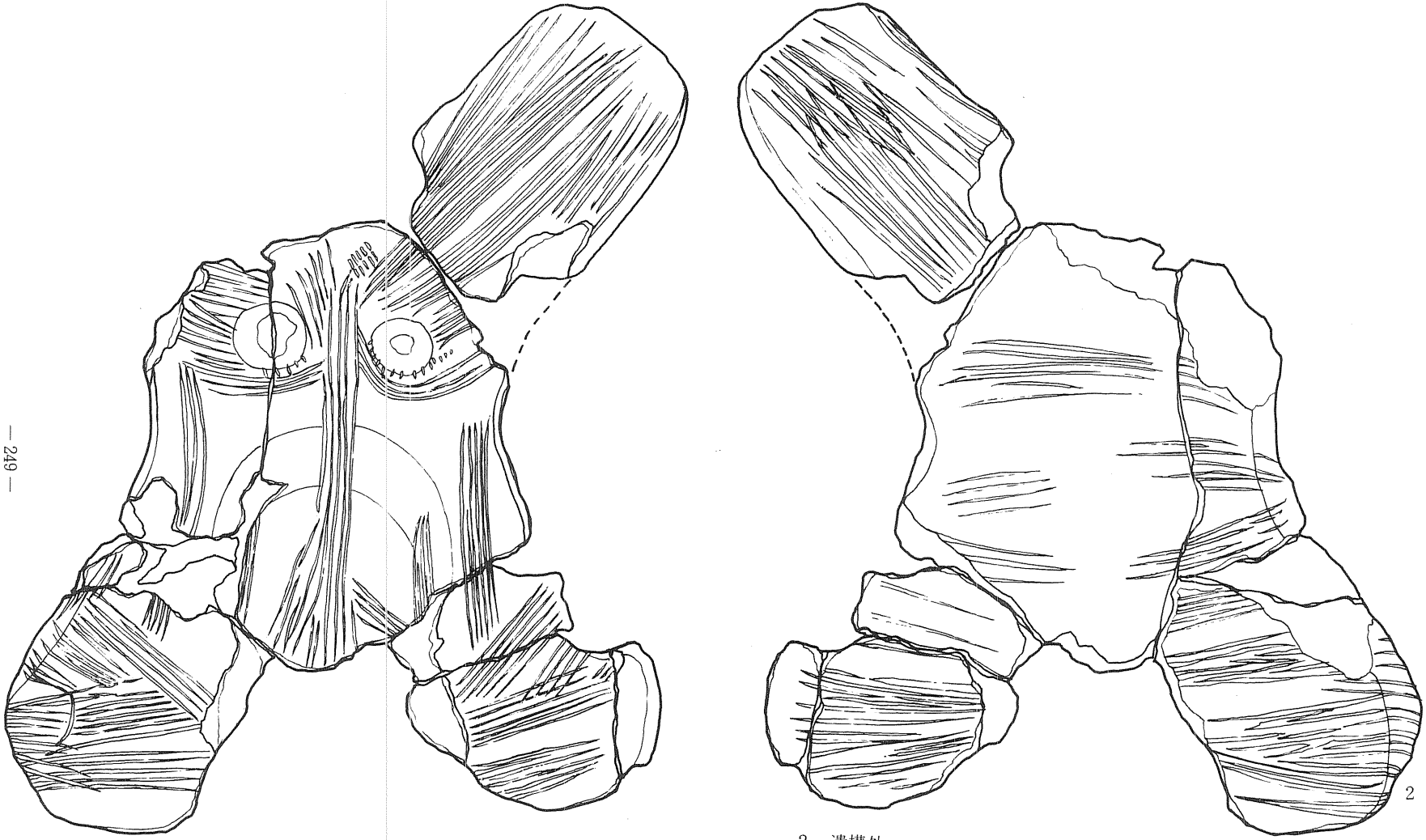


第92図　遺構外出土土器、底部



1　15号住居跡

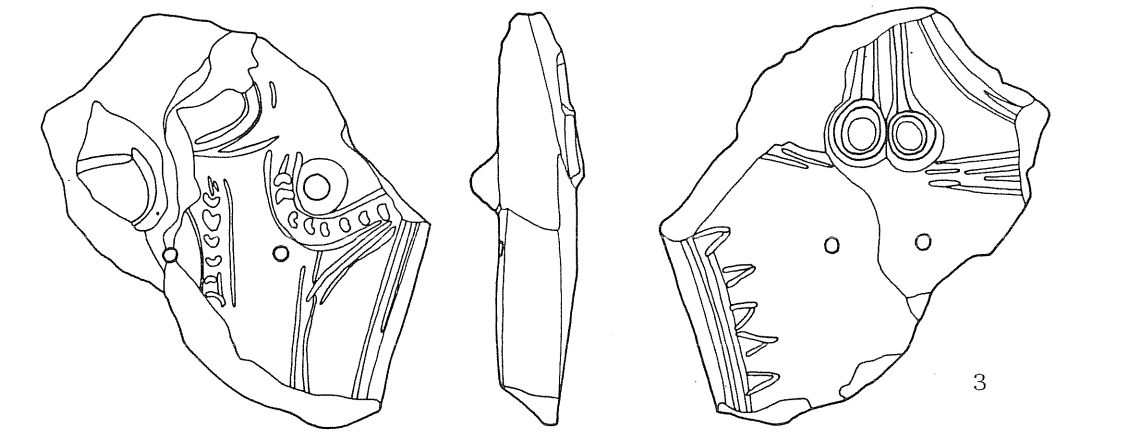
第93図　土製品

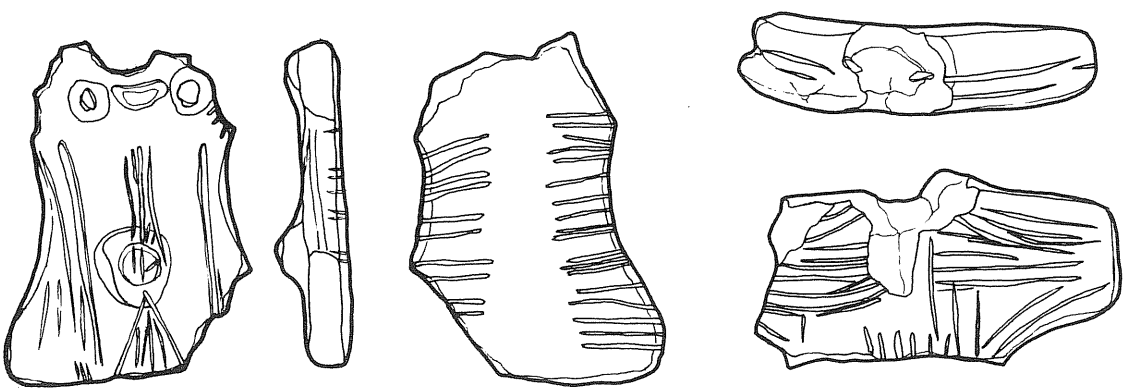


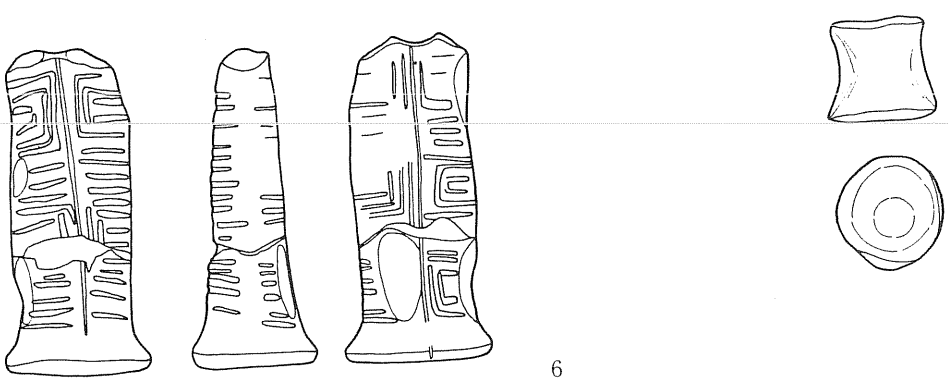
2　遺構外

0　10cm

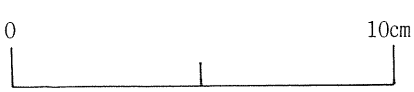
第94図　土製品







3～7　遺構外



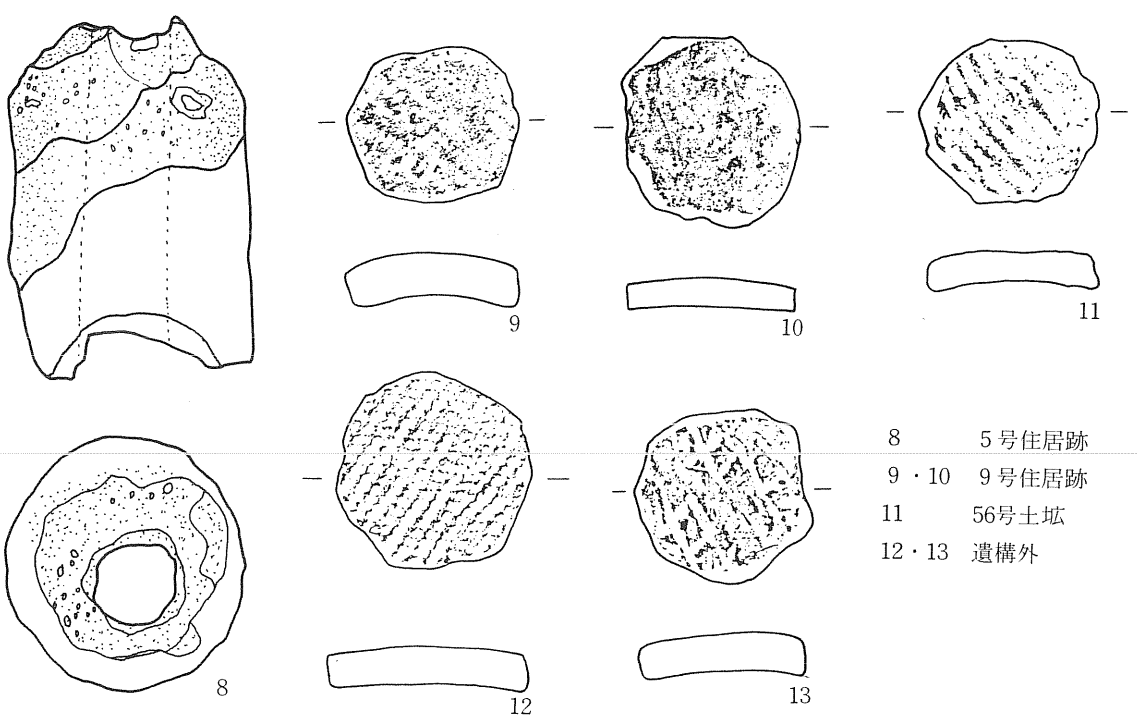
第95図　土製品

間に半截竹管状工具による連続爪形文を施す。背中に粘土紐が貼り付けられ、連続爪形文が施される。２は顔部と左腕を欠く。乳房が貼り付けられ、腹部は盛り上がっている。体の両面に幅0.8～1.3cmの条痕が施文されている。３は胴部である。左乳房が剝落し、乳房の間のやや上方にくぼみがみられる。乳房の下と胸部に平行沈線を施し、この間に半截竹管状工具内面による連続爪形文を施す。その他に数条の沈線を施して文様を付けている。乳房の下に２個の穴がみられ貫通している。背面には２本の粘土貼り付けと、数条の沈線で文様を付けている。４は胴部である。乳房が貼り付けられ、その間にはくぼみがみられる。腹部は粘土粒を貼り付けて突出させている。正面は縦位に背面は横位に沈線を施している。５は胸部及び右腕である。正面は両腕が横位に、胸部より下は縦位に半截竹管状工具内面による半隆起線文を施す。背面は無文である。６は上部を欠損する。正面と背面の中央に縦位の刻線を入れ、その両側には横位基調の刻線が施される。

７は耳飾りで、耳栓形をなすものである。

８はフイゴの羽口である。外径6.4cmの円筒形で孔は径2.3cmである。先端部が強く火熱を受けている。

９～13は再利用土製品（円盤状土製品）である。土器片を利用したもので、円形基調のものである。

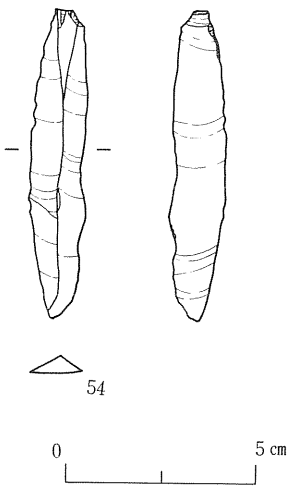


第96図　土製品

遺構外出土石器（第97～120図）

縦長剝片（第97図54）

先土器時代の縦長剝片でローム層からの出土である。長さ8.2㎝、幅1.4㎝で両側縁は全体に刃こぼれが見られる。石質は硬質頁岩。出土地点を拡張し、調査したがこの1点だけの出土であった。



第97図　遺構外出土石器

石鏃（第98図55～89）

有茎・無茎のものがあり、アスファルトの付着するものがある。72は鏃身がかなり長い。76は黒曜石製、他は硬質頁岩製である。

石錐（第98・99図90～104）

錐部の長いものと短いものがあり、つまみ部をもたないものもある。硬質頁岩製である。

石匙（第99～101図105～148）

縦型のものと横型のものがあり、つまみ部にアスファルトの付着するものがある。刃部が直線的なものと曲線的なものがあり、両面加工と片面加工のものがある。硬質頁岩製である。

石槍（第101図149）

木葉形をなすもので、両面加工を施す。硬質頁岩製である。

ヘラ状石器（第101・102図150～177）

左右対象で両面加工を施すものであるが、片面加工のものも数点みられる。刃部は平行するものと、三角形で三辺にもつものがあり、鋸や斧的な機能をなすものもある。硬質頁岩製である。

掻器（第102図178、第103図179）

178は二等辺三角形をなす。両面加工で、アスファルトが付着する。179は片面加工である。硬質頁岩製である。

削器（第103図180・181）

いずれも片面加工で、硬質頁岩製である。

三脚石器（第103図182）

三辺が弧状をなすもので、二辺が両面加工、一辺が片面加工である。

磨製石斧（第104～107図183～225）

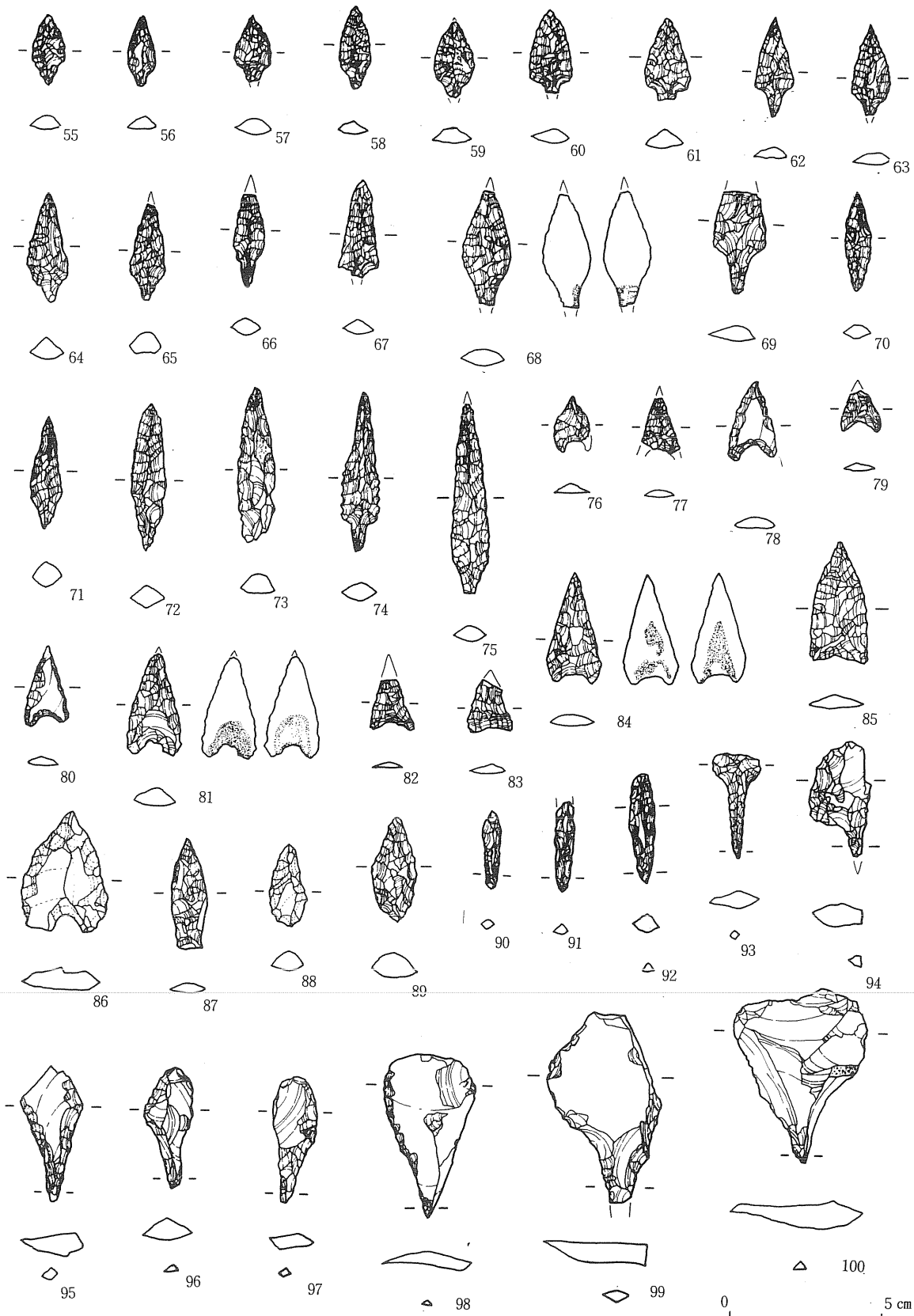
破損しているものが多い。刃部は丸味をもつものが多い。183・184は小形磨製石斧である。213はすり切り石斧である。凝灰岩製のものが多い。

環状石斧（第108図226）

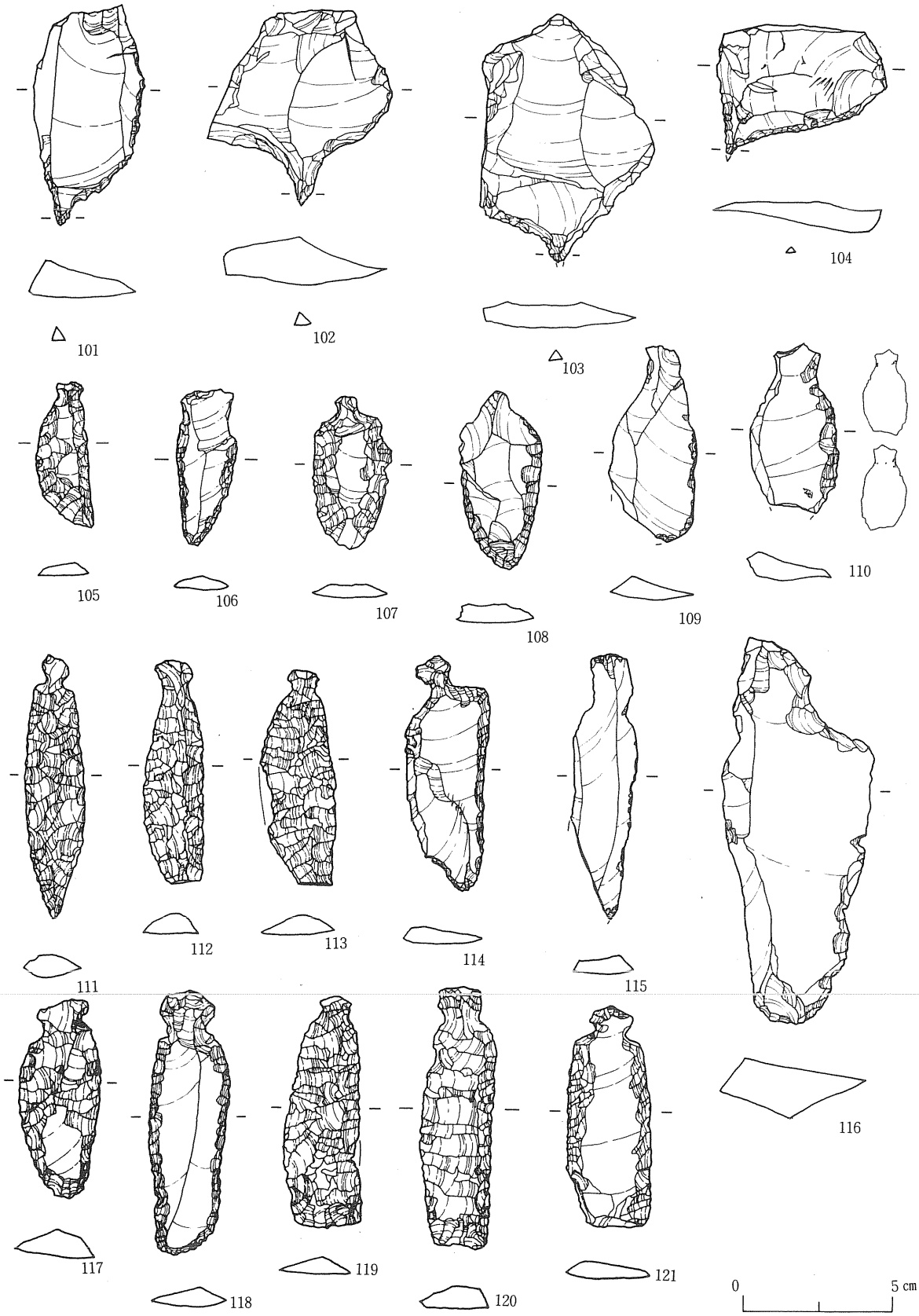
円盤状をなし、中心に孔をもつものである。凝灰岩製である。

独鈷石（第108図227）

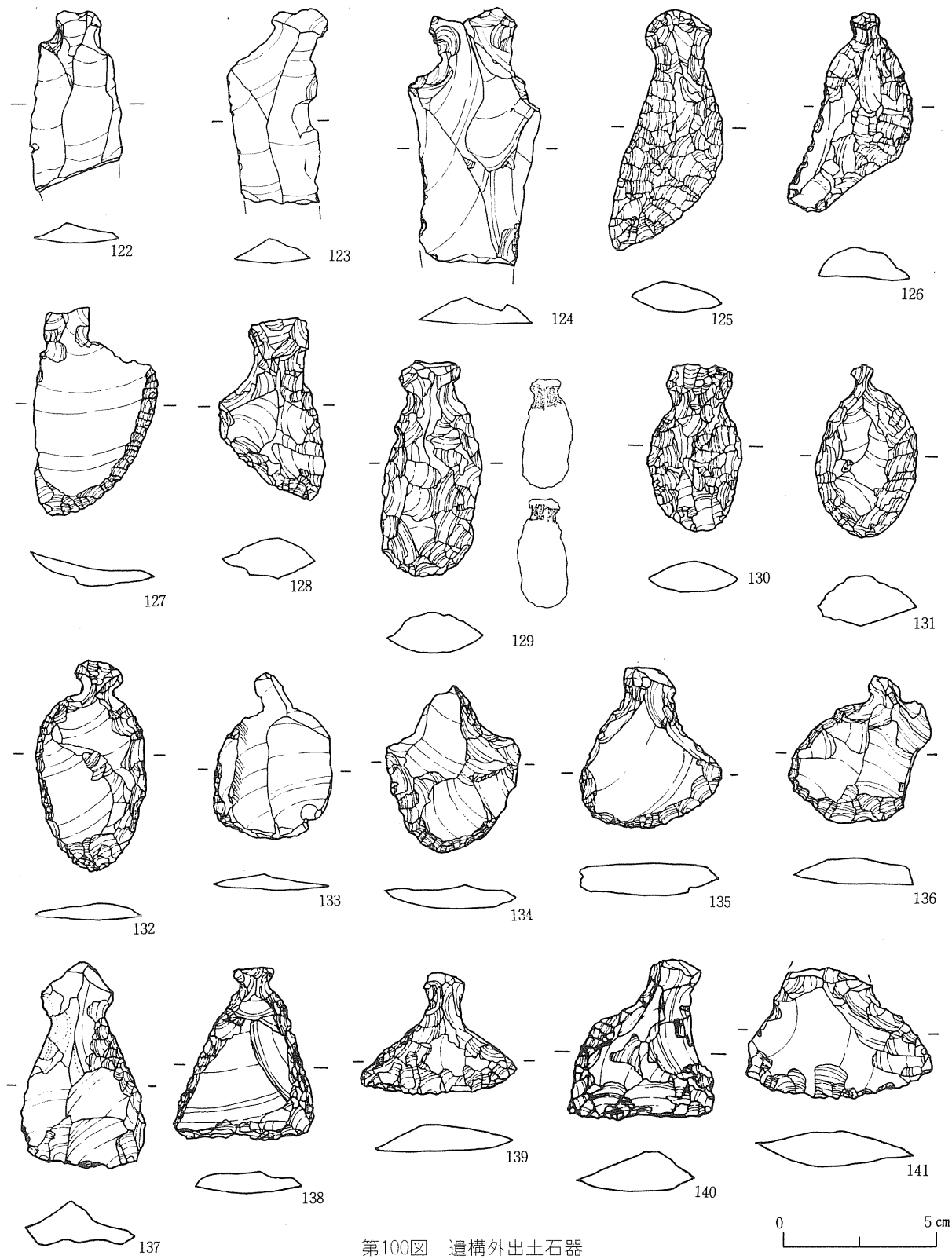
破損品で、凝灰岩製である。



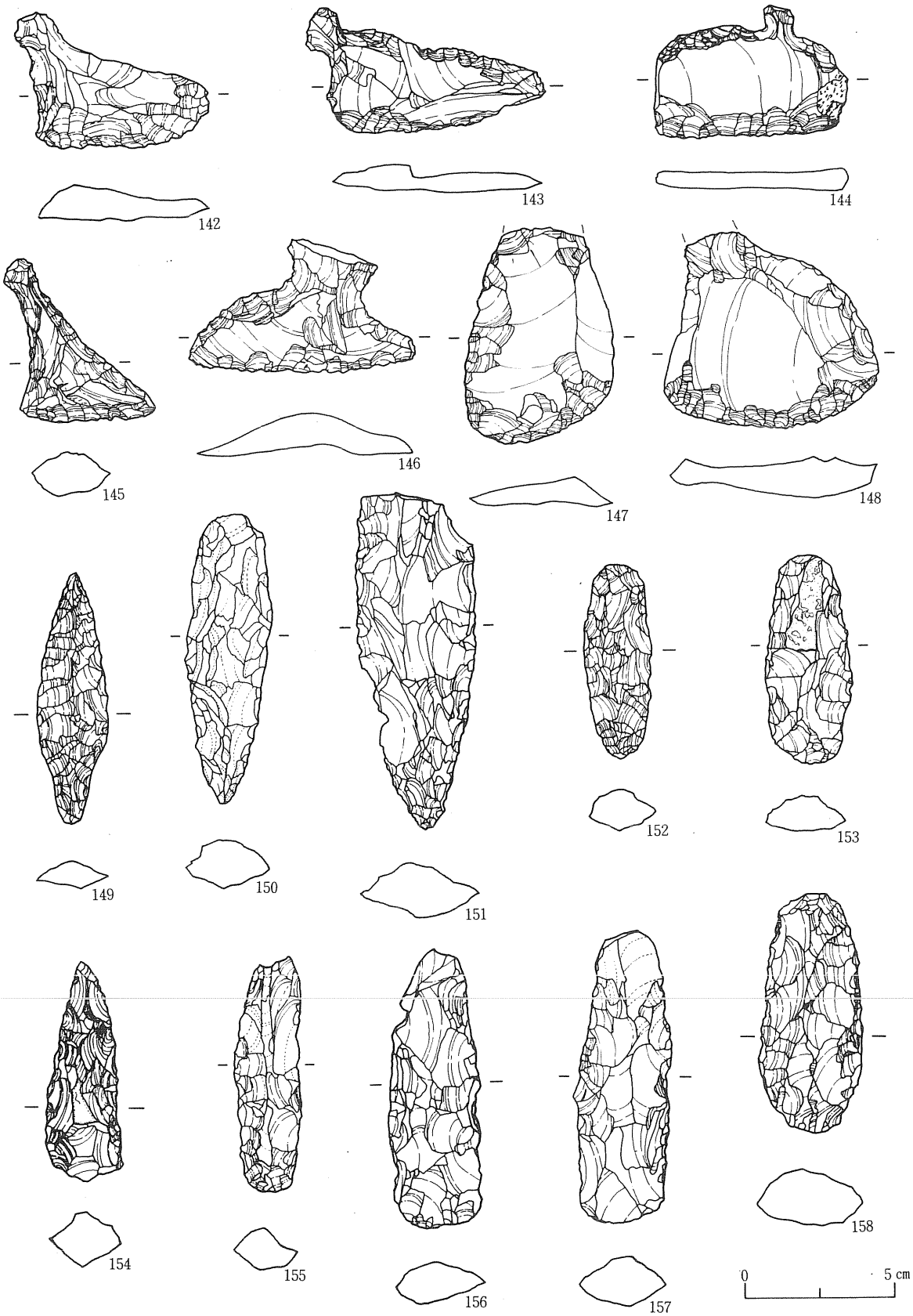
第98図　遺構外出土石器



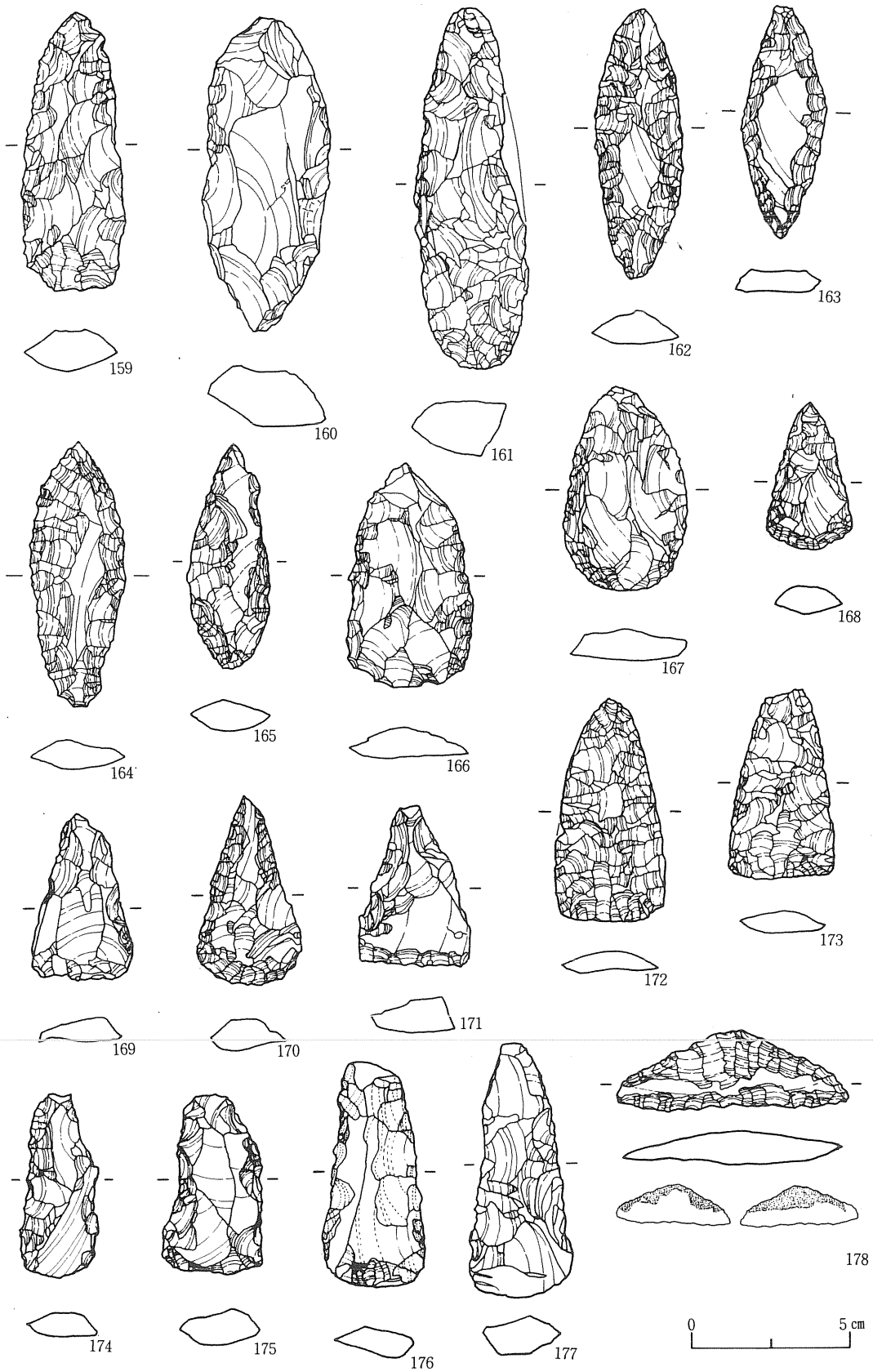
第99図　遺構外出土石器



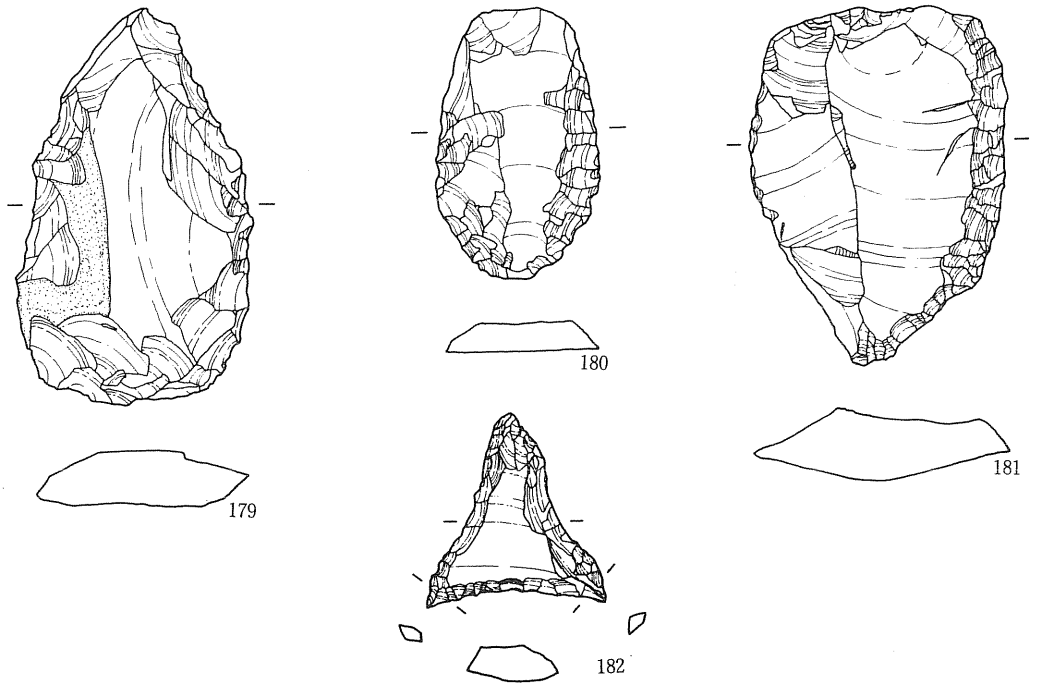
第100図　遺構外出土石器



第101図　遺構外出土石器



第102図　遺構外出土石器



第103図　遺構外出土石器

打製石斧（第108・109図228～238）

両面加工をなすもので、刃部は直線的なものと丸味をもつものがある。228・229は大形で、228は両頭をなす。硬質頁岩製が多い。

両面礫器（第109・110図239～244）

扁平な自然石の直線をなす1側縁に両面加工を施すものである。

石錘（第111・112図245～268）

扁平な自然石の両端を打ち欠いている。比較的丸味をなすものが多い。266～268はくぼみ石としての使用も認められる。

くぼみ石（第112～115図266～308）

くぼみ部が数ヶ所みられるもの、片面・両面のものがある。301～307は扁平な泥岩製のものを使用している。

磨石・敲石（第115～117図309～344）

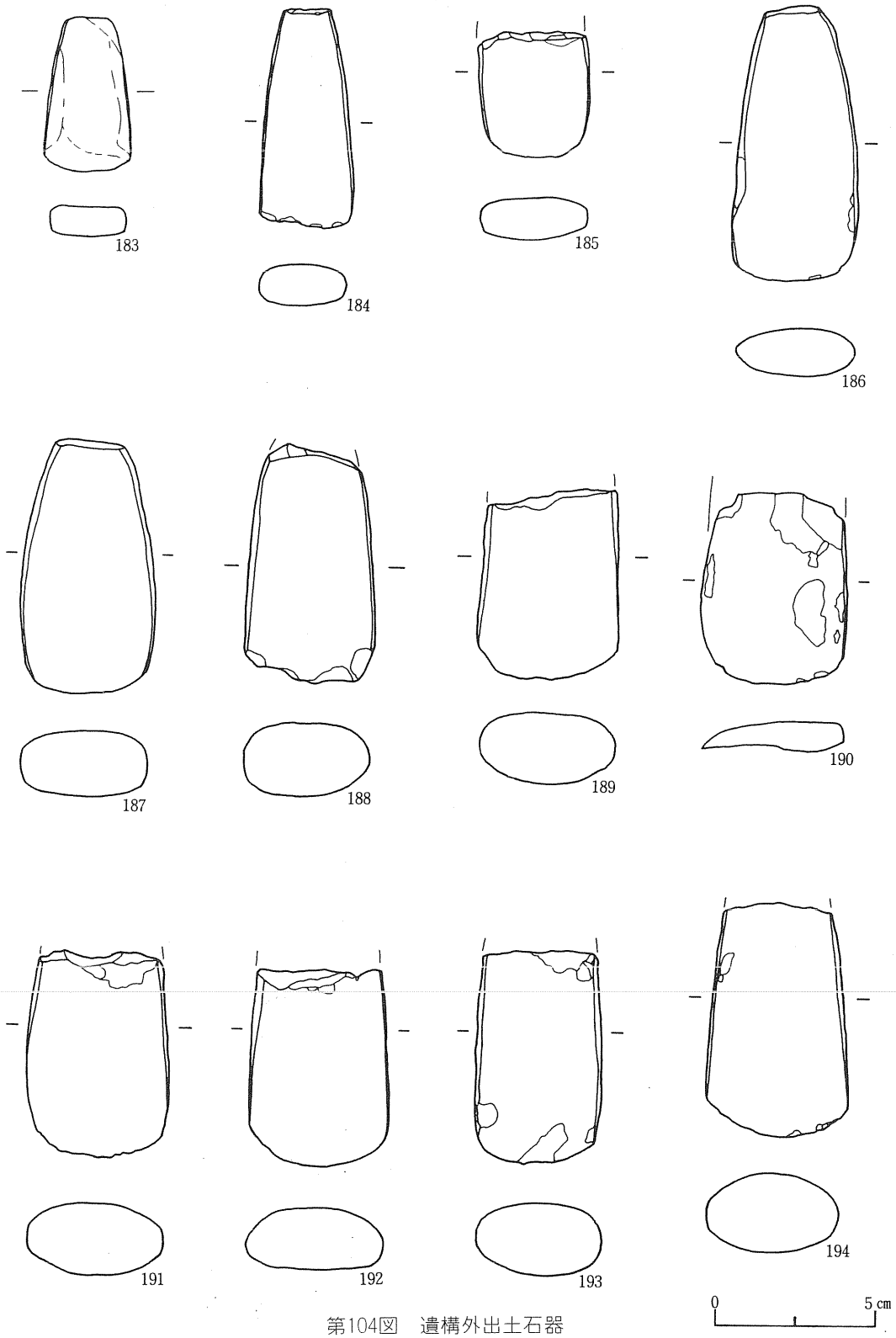
全面を磨るもの、側面に敲打痕の認められるものがある。

石皿（第117図345）

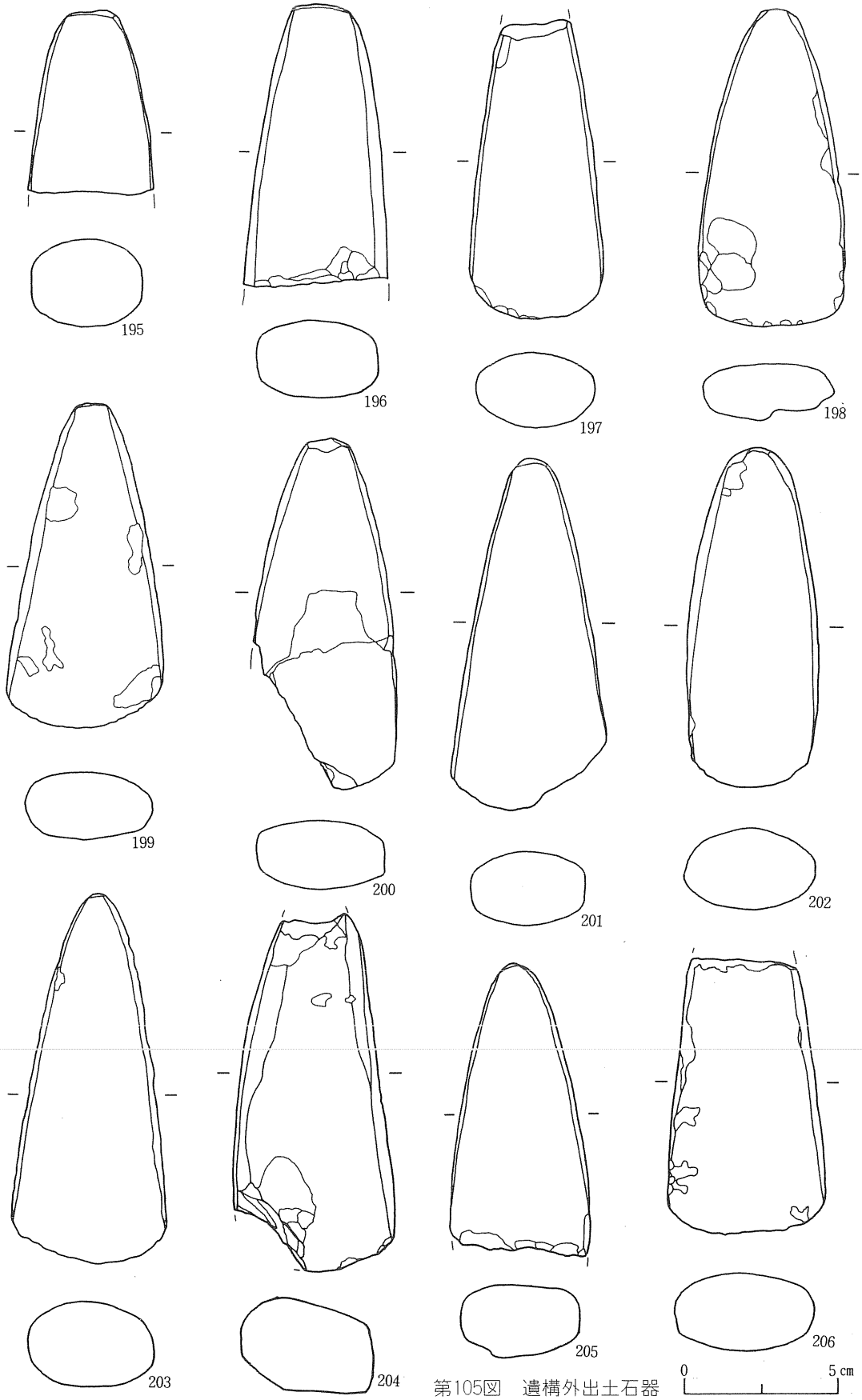
破損している。中心部がくぼんでおり、良く磨れている。安山岩製である。

石皿状石器（第118図346～351）

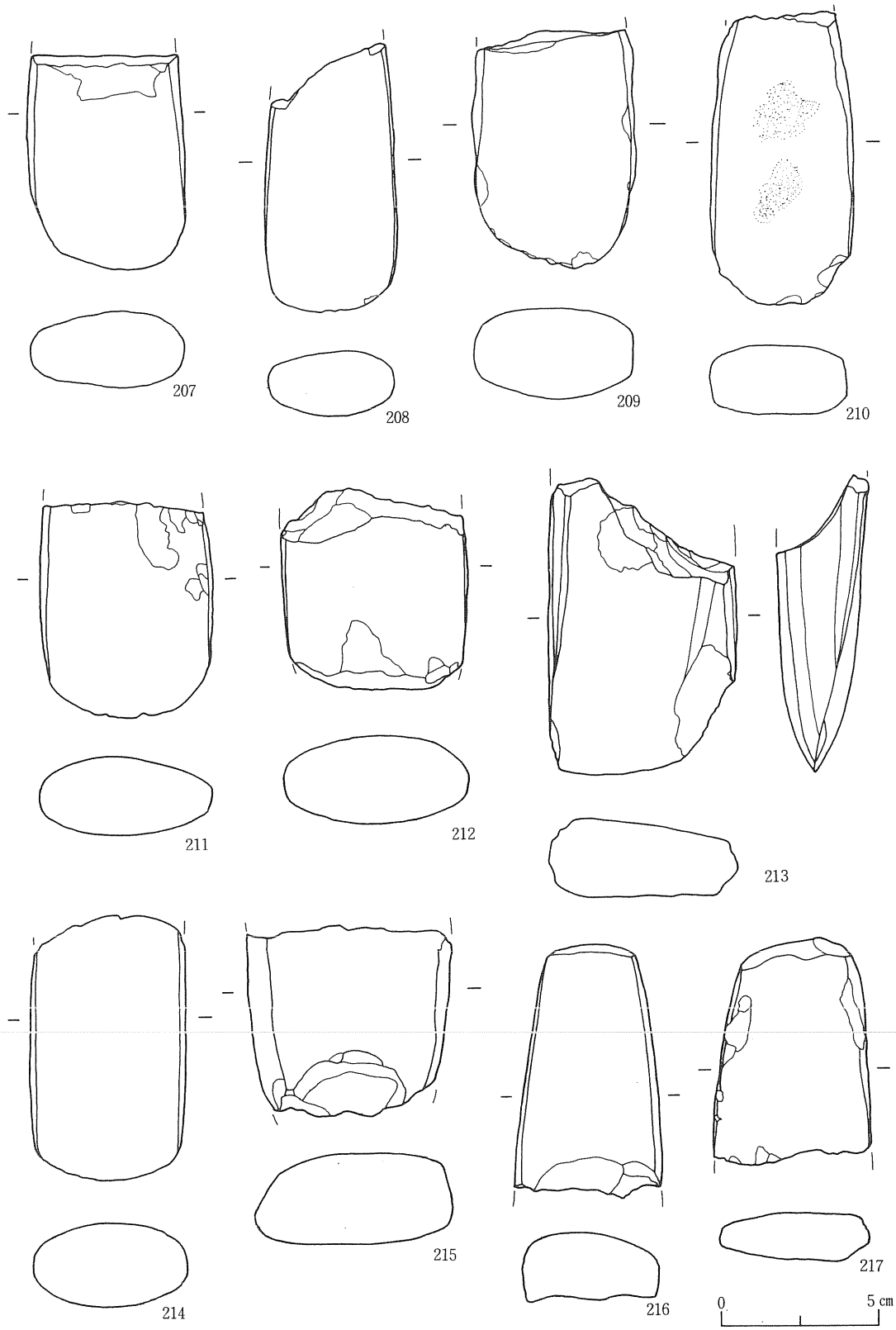
中心部が若干くぼみ、良く磨れている。台石的なものもある。



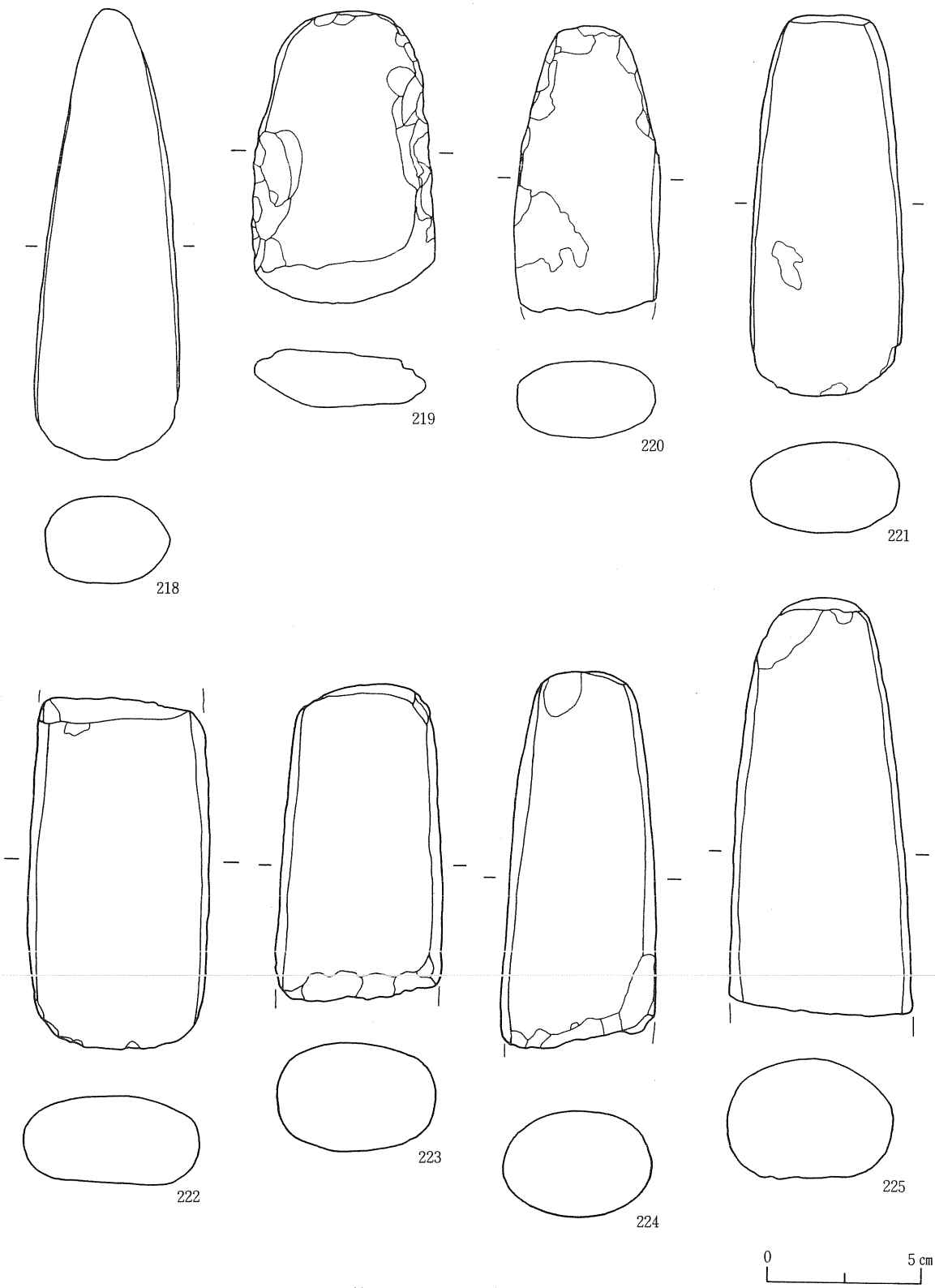
第104図　遺構外出土石器



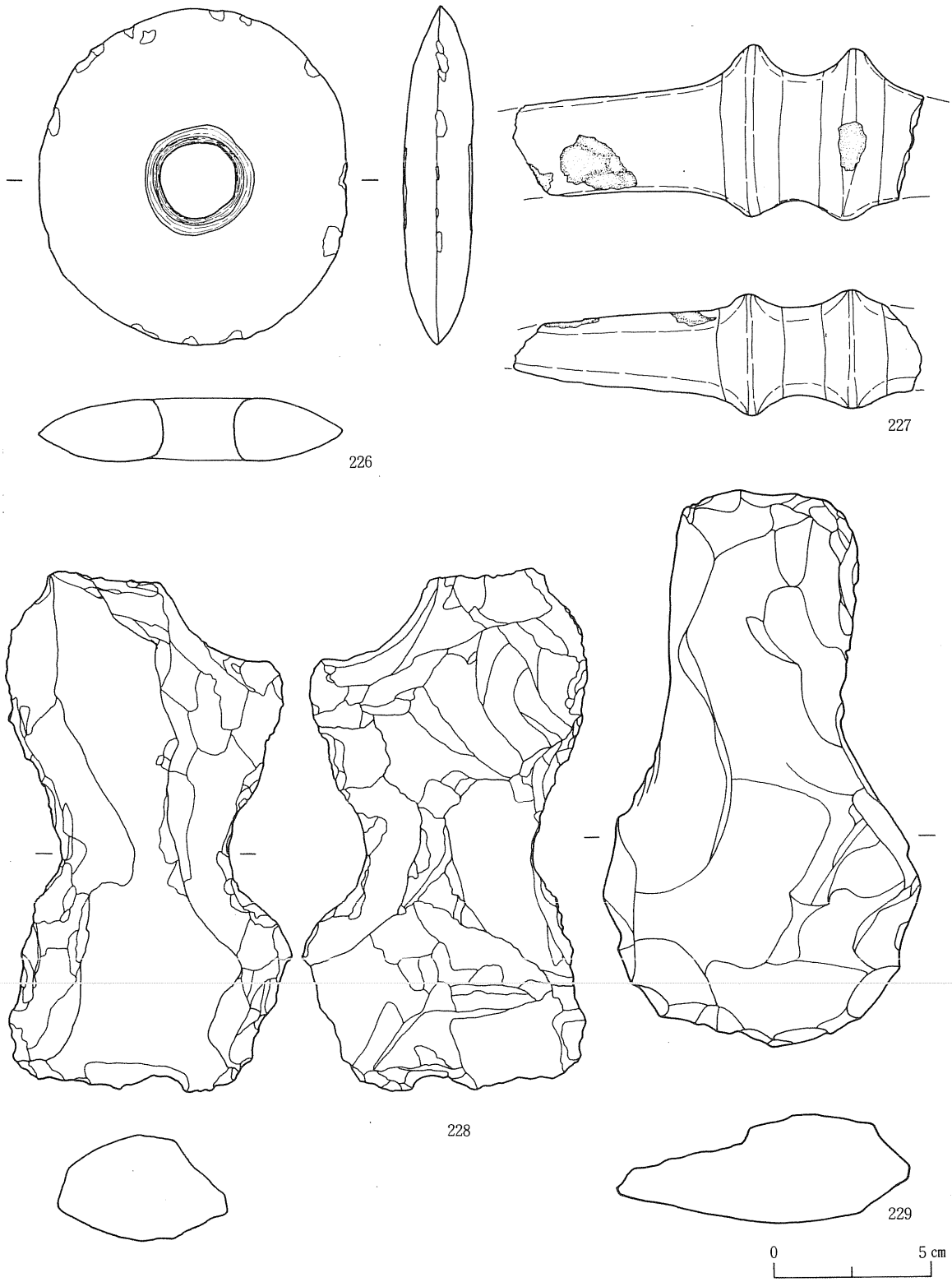
第105図　遺構外出土石器



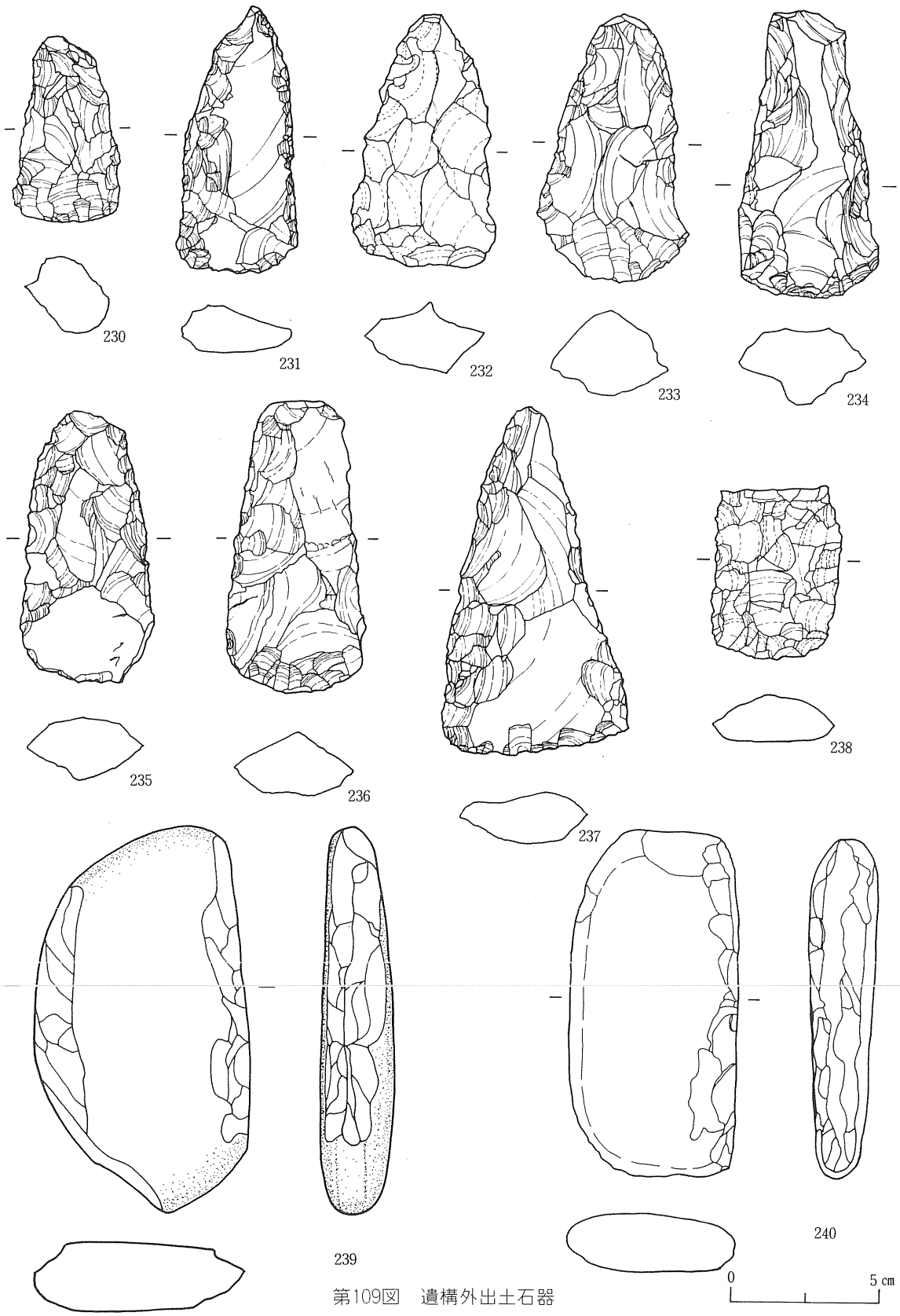
第106図　遺構外出土石器



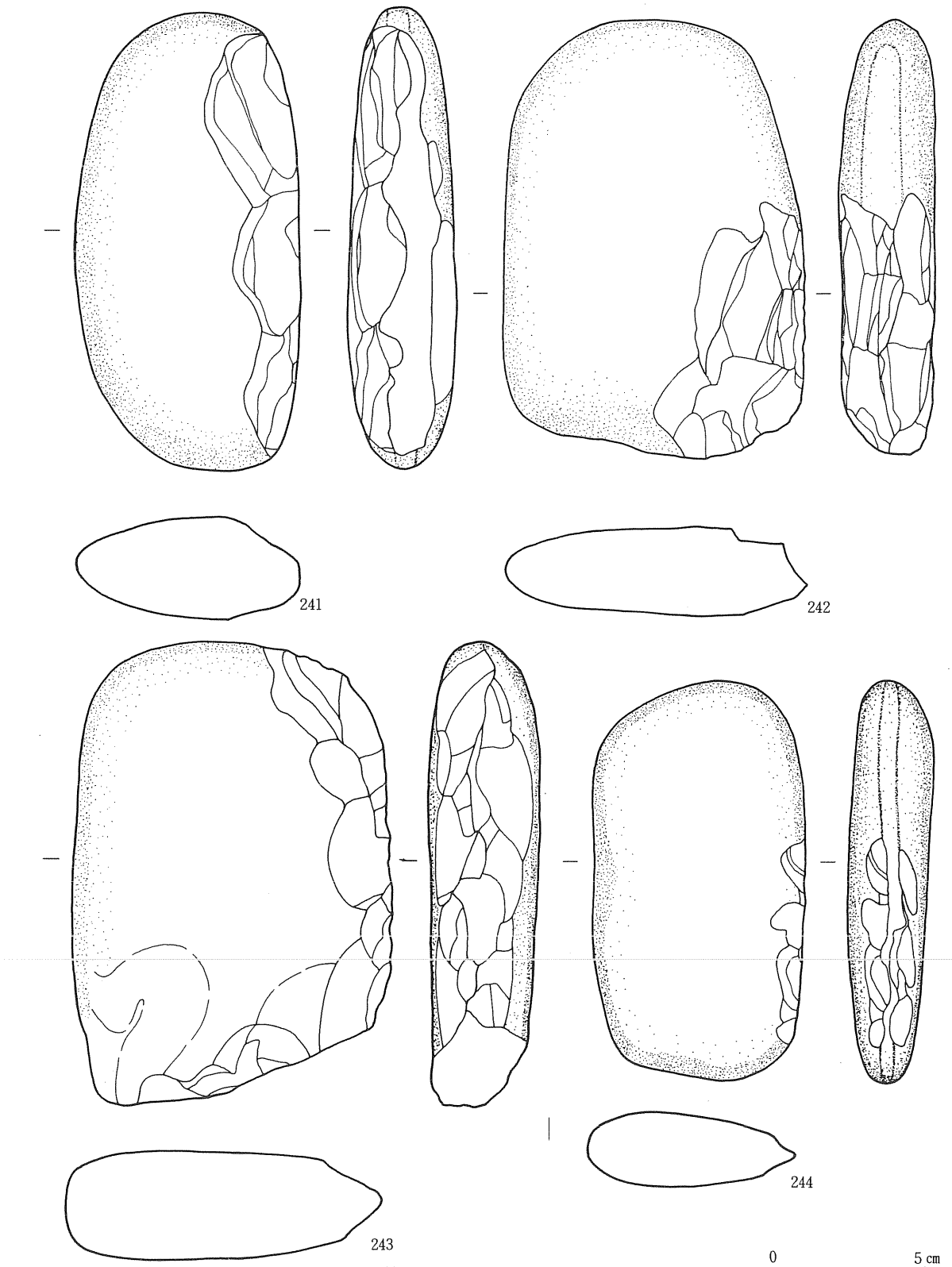
第107図　遺構外出土石器



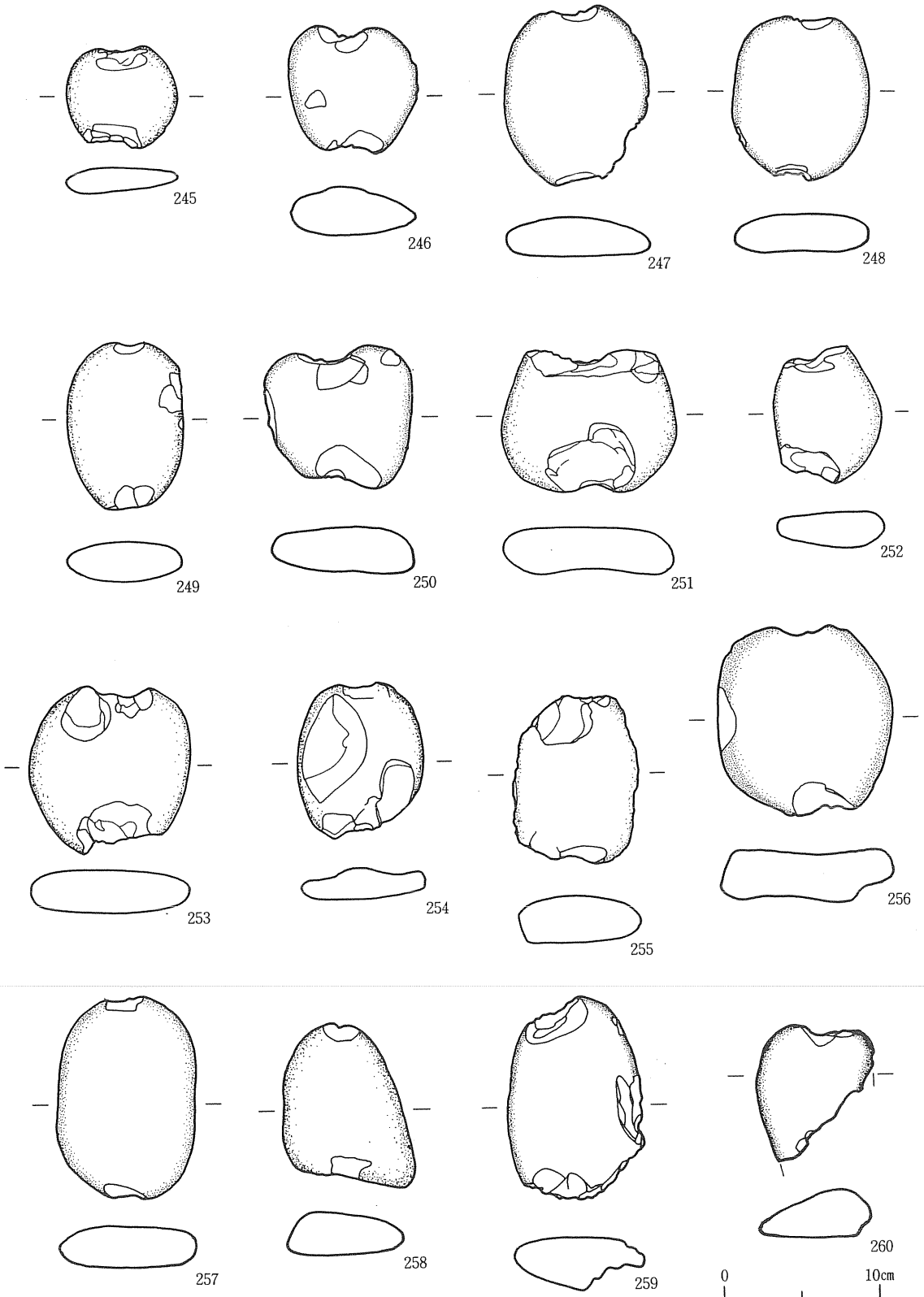
第108図　遺構外出土石器



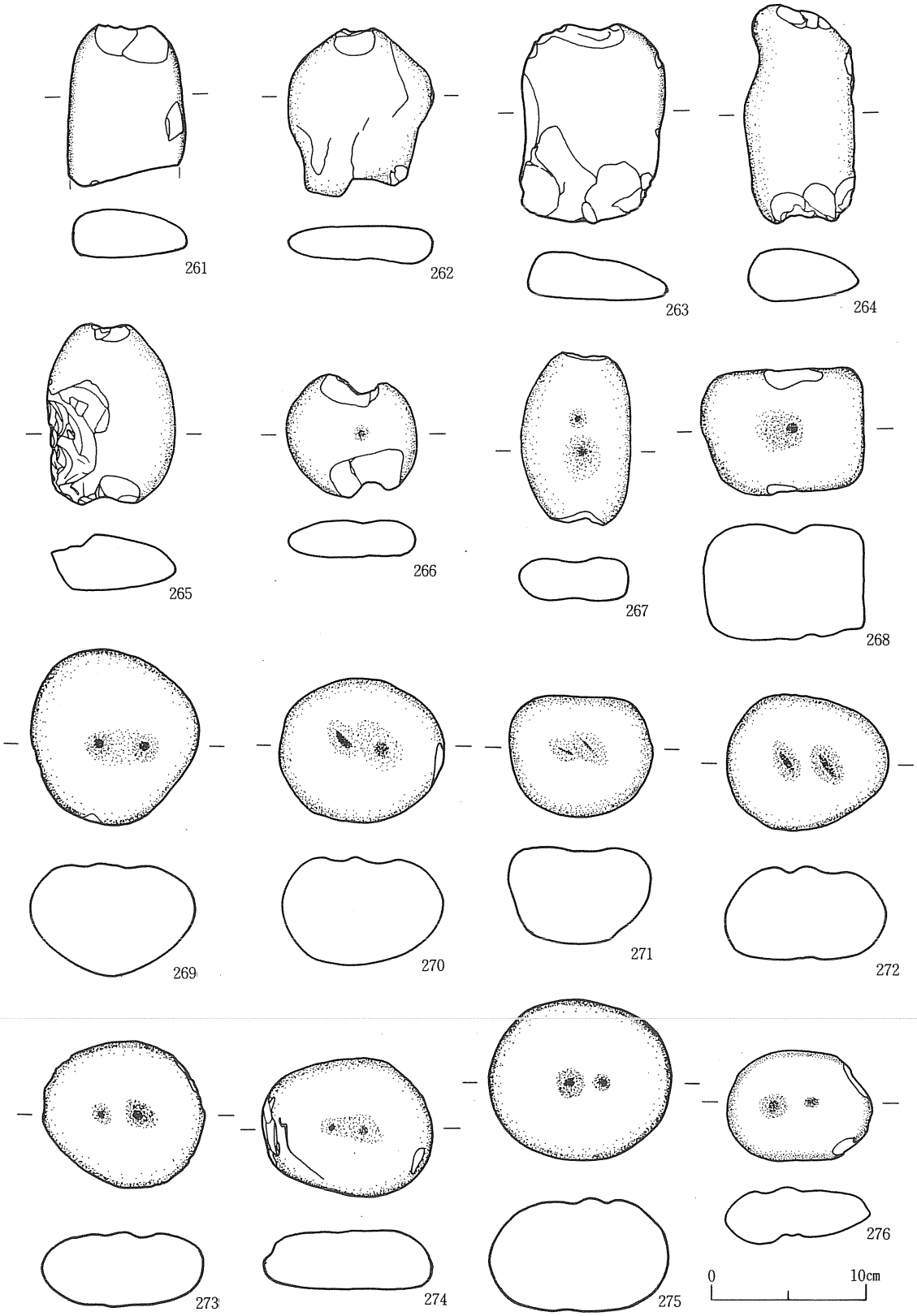
第109図　遺構外出土石器



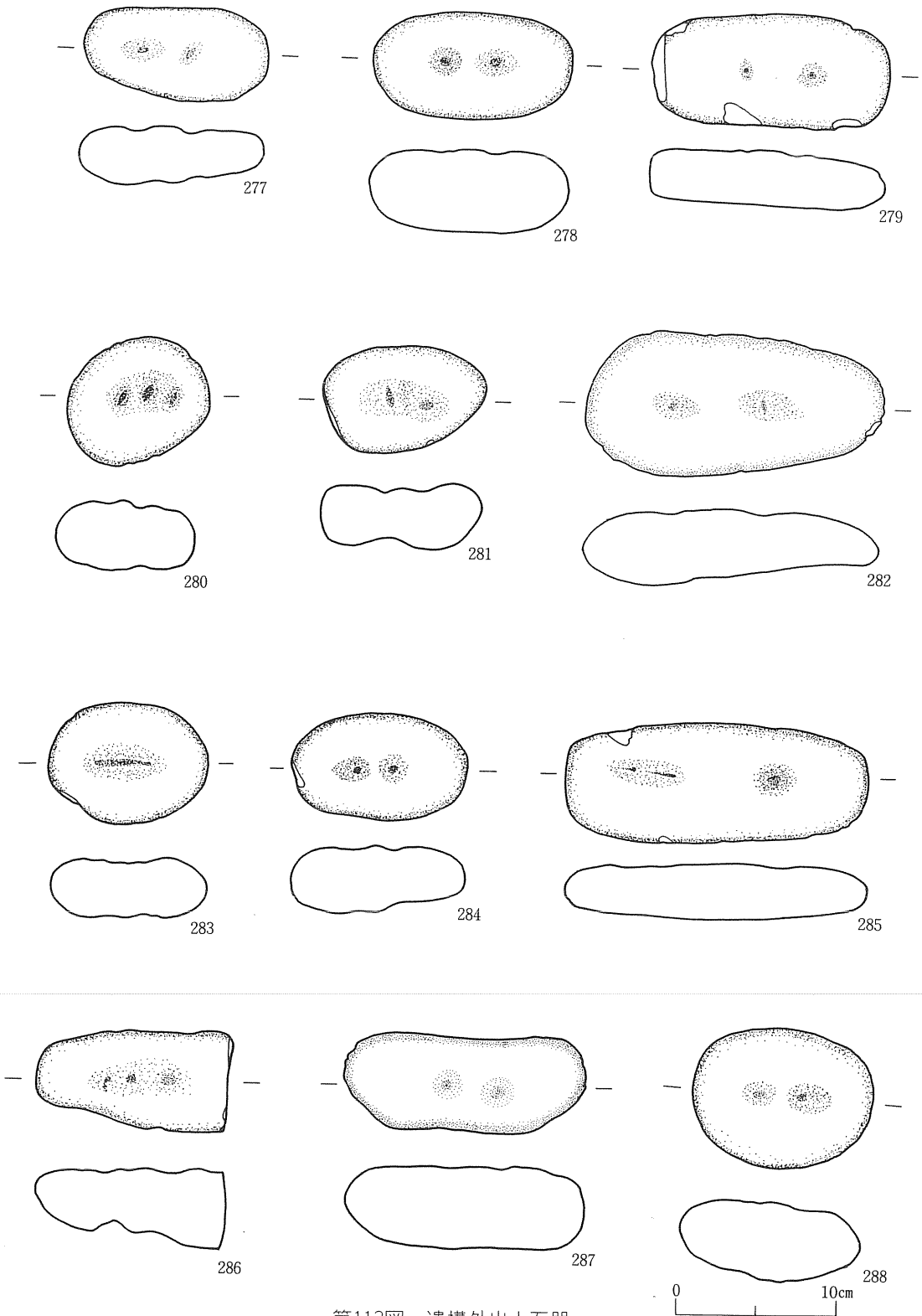
第110図　遺構外出土石器



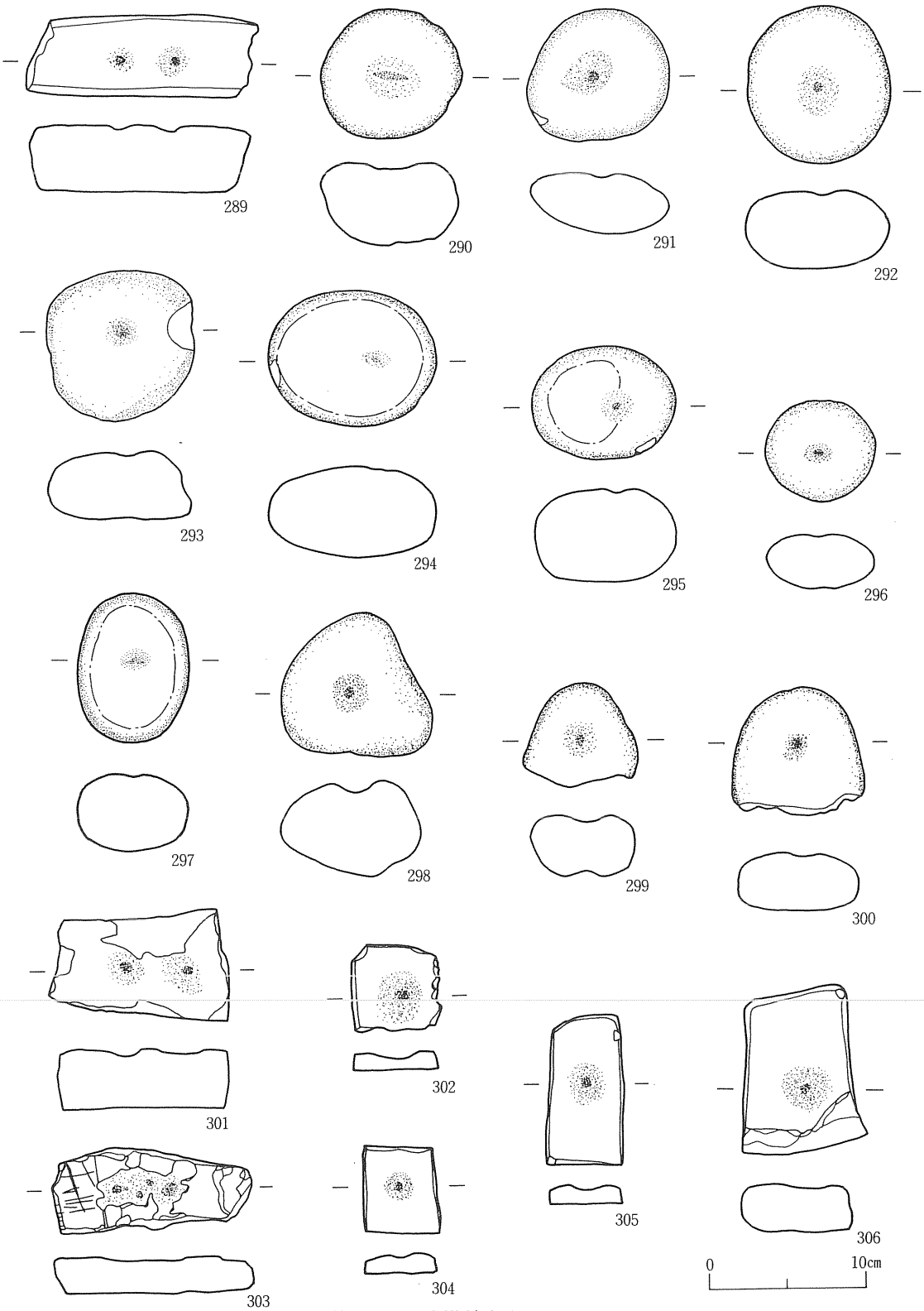
第111図　遺構外出土石器



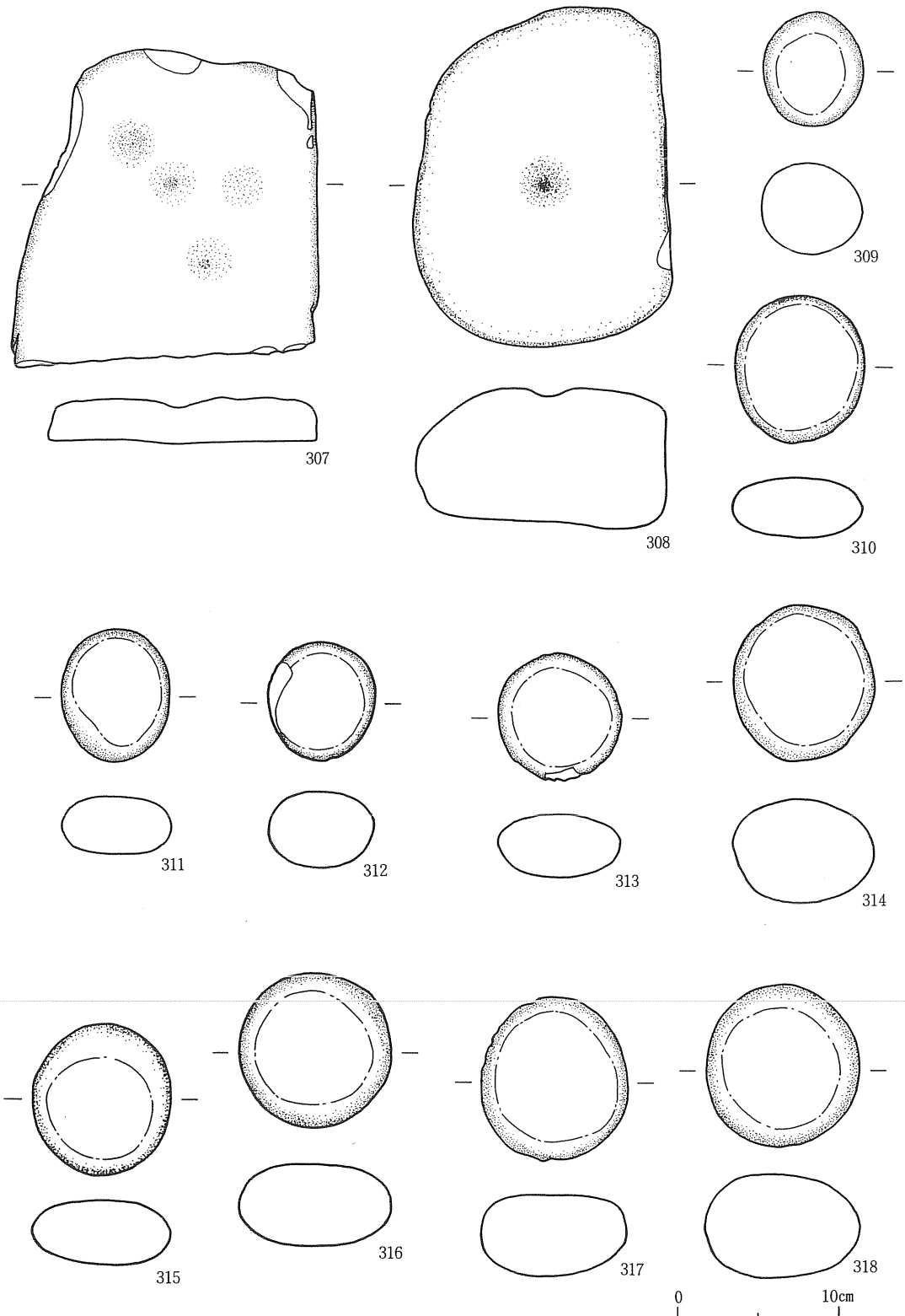
第112図　遺構外出土石器



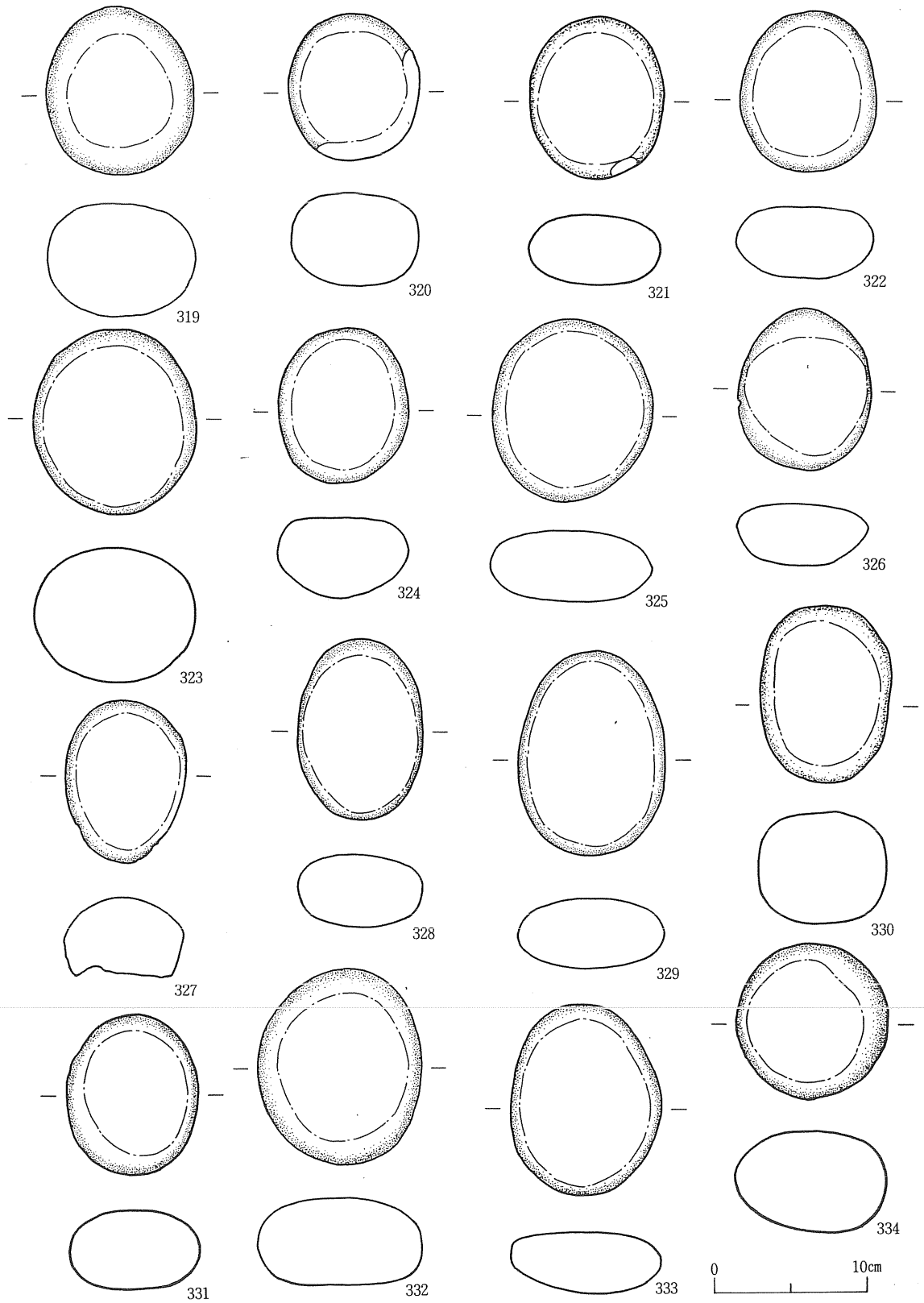
第113図　遺構外出土石器



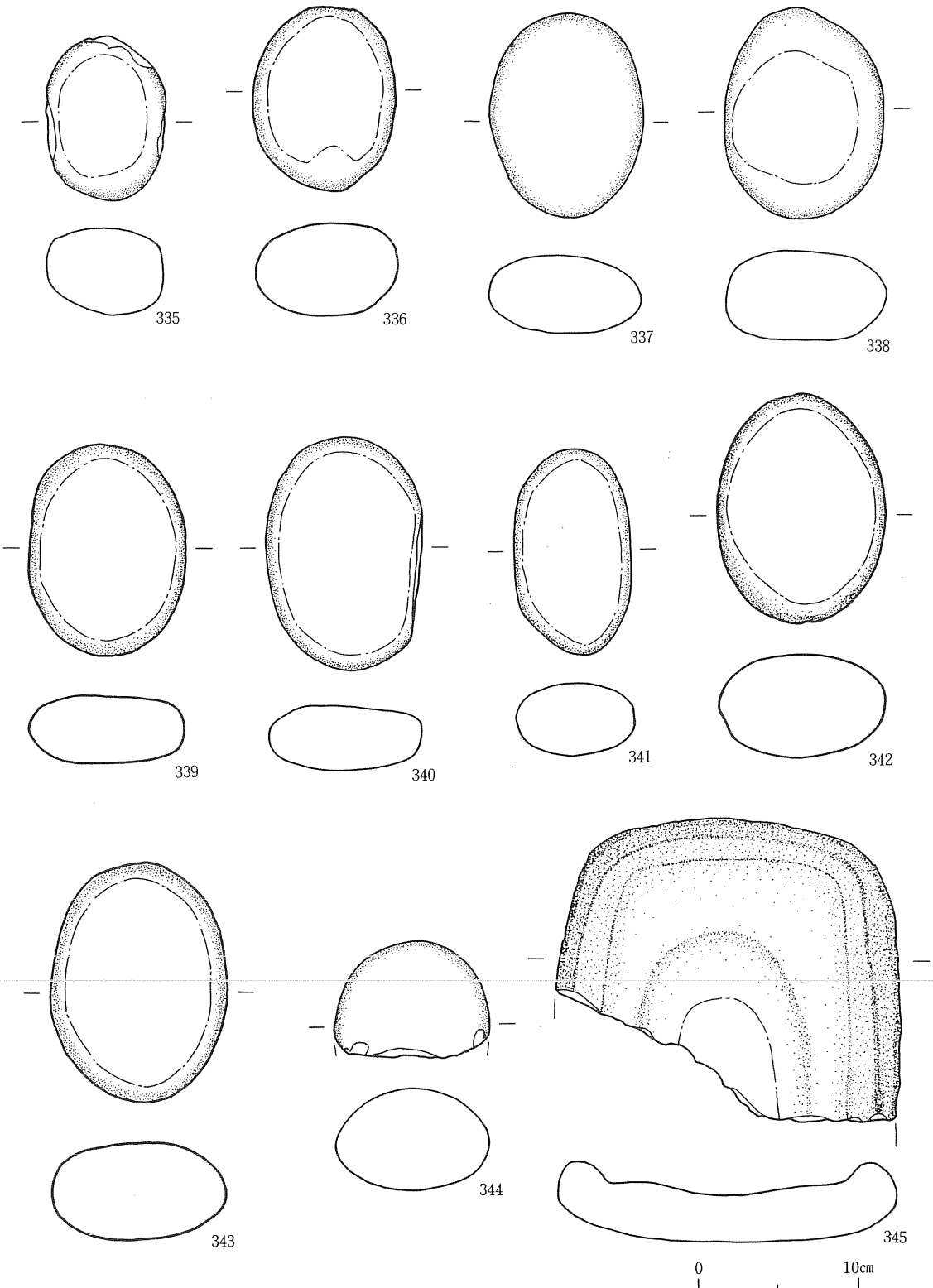
第114図　遺構外出土石器



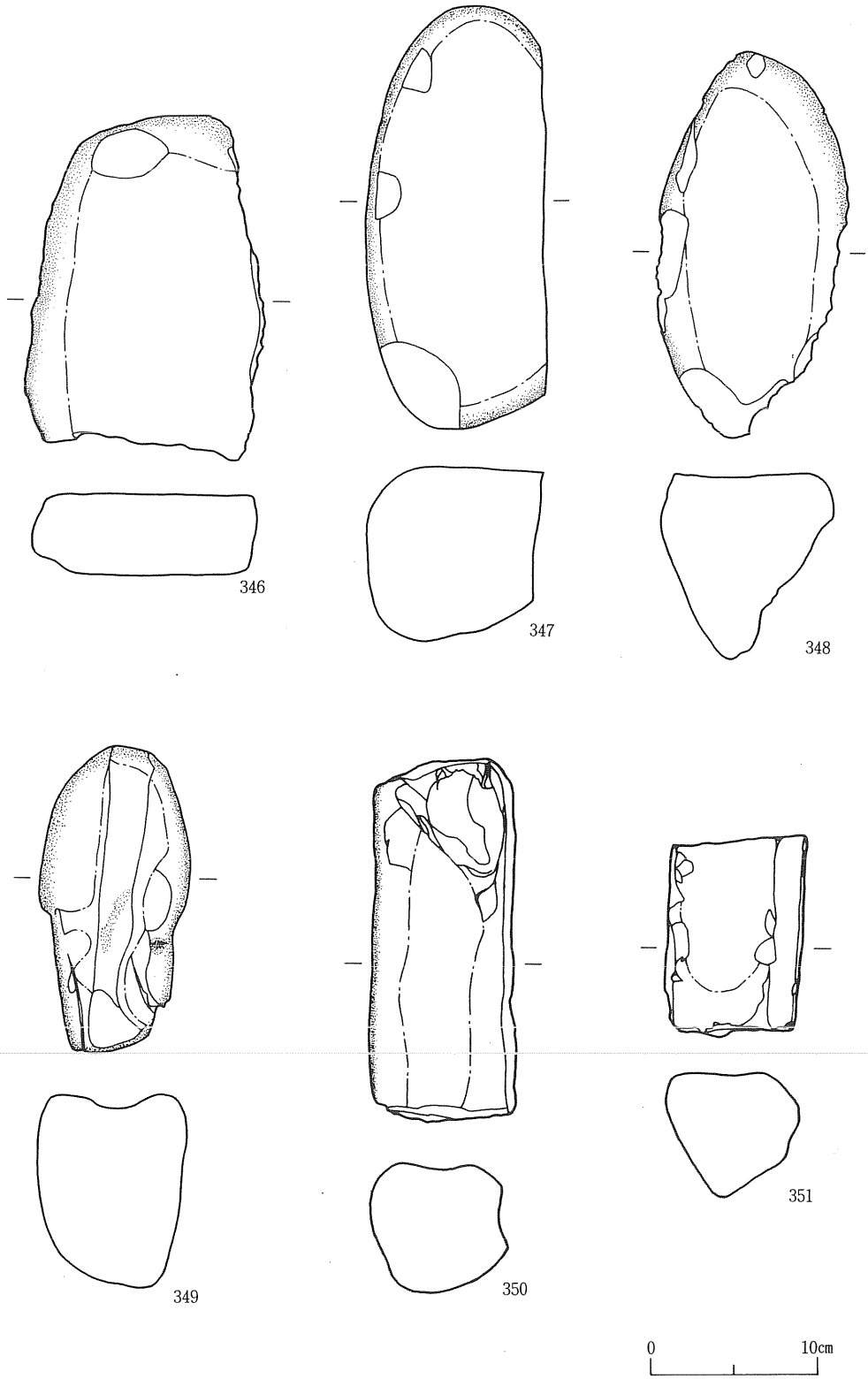
第115図　遺構外出土石器



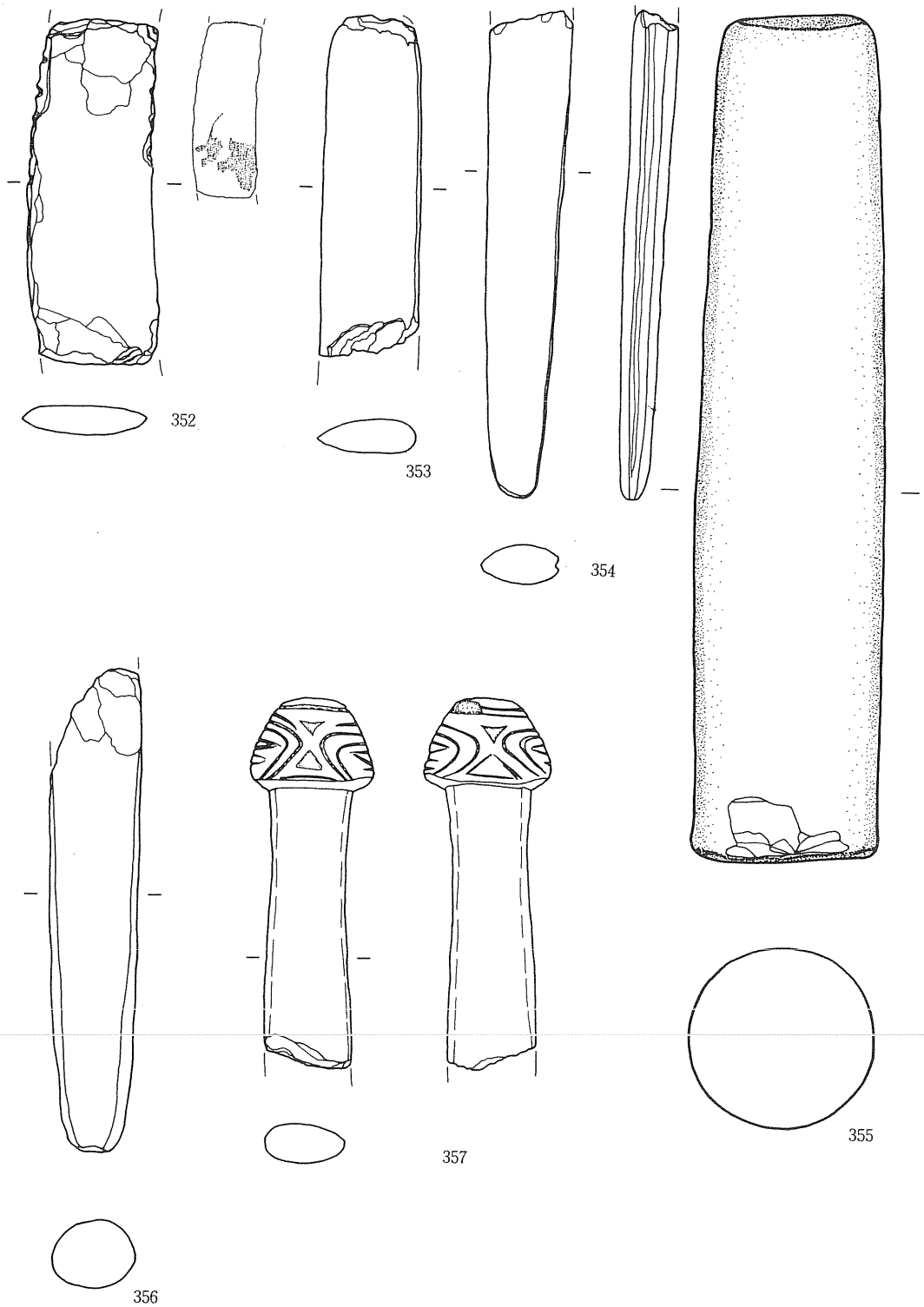
第116図　遺構外出土石器



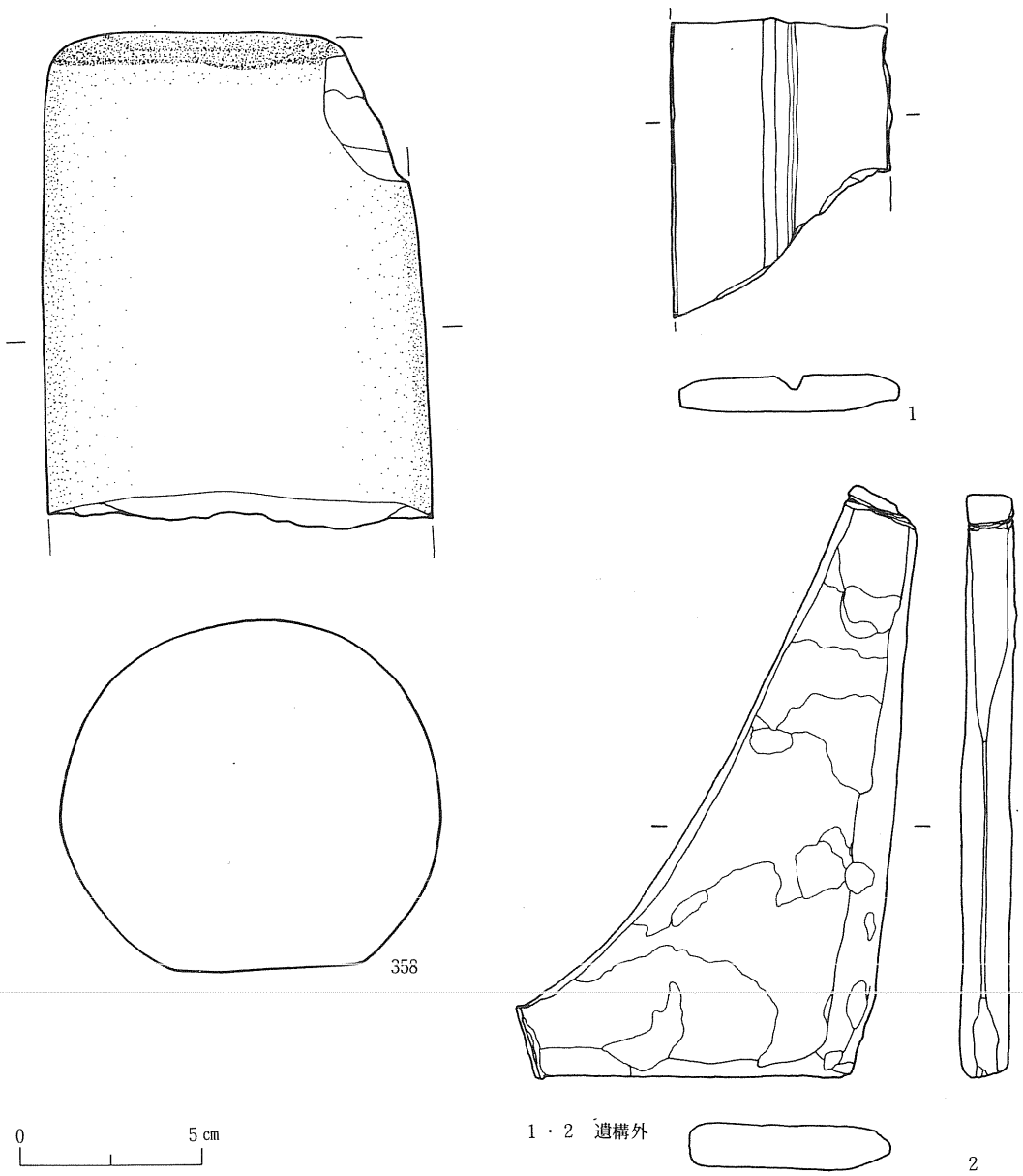
第117図　遺構外出土石器



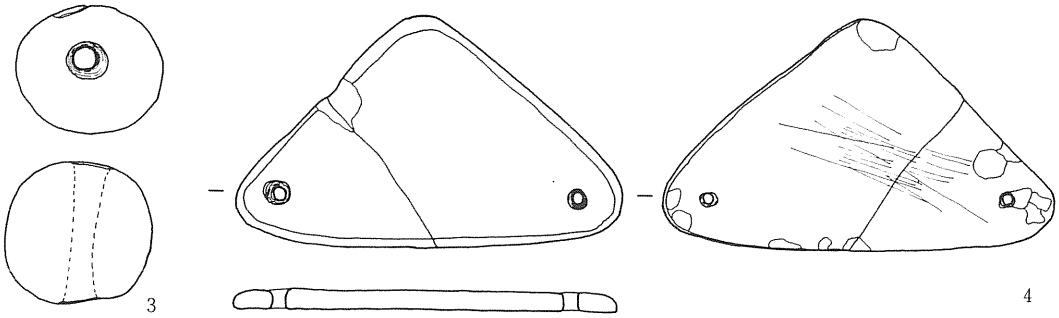
第118図　遺構外出土石器

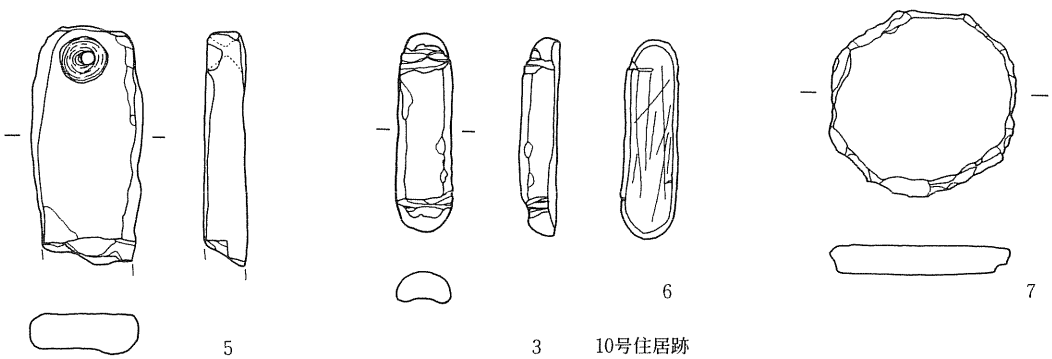


第119図　遺構外出土石器



第120図　遺構外出土石器、石製品

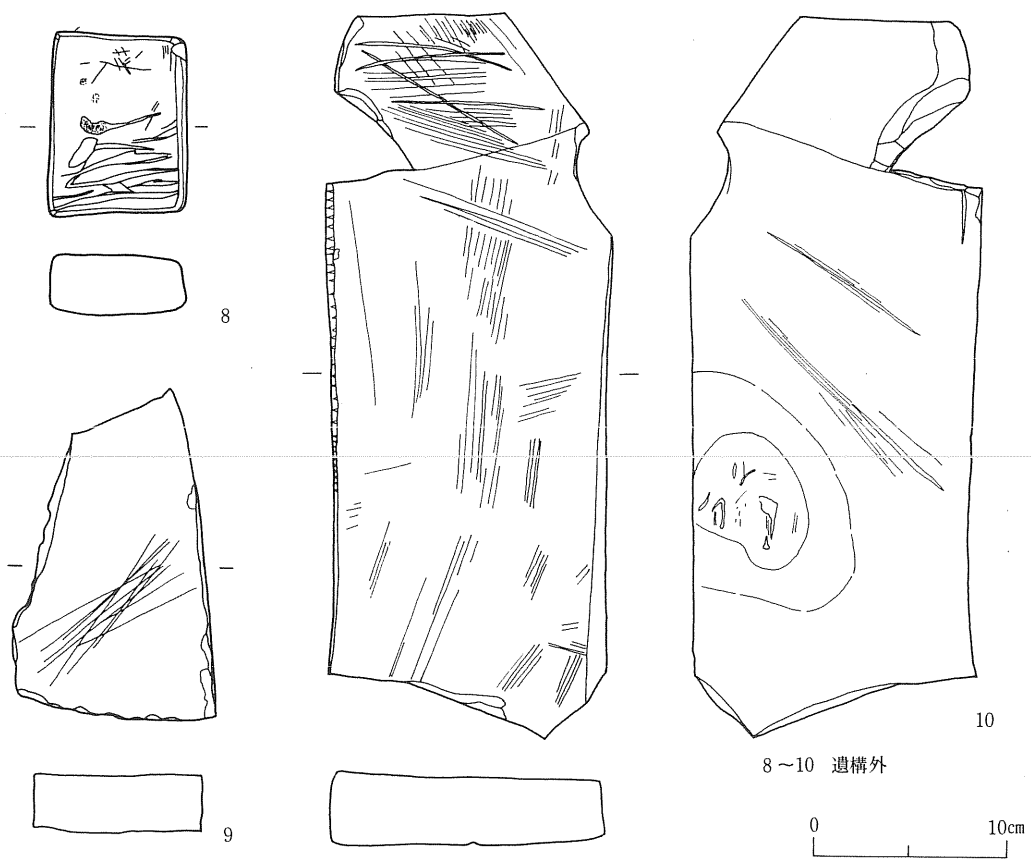




3　10号住居跡

4～6　遺構外

0　5 cm



8～10　遺構外

0　10cm

第121図　石製品

石剣（第119図352～354）

全て破損している。352にはアスファルトが付着する。 354の側面には溝が認められる。粘板岩製である。

石棒（第119・120図355～358）

355・358は円筒形をなし、358には平坦面がみられる。頭頂部は平らである。365は体部で、破損している。357は頭部に刻線で文様を施す。355・358は流紋岩製、356・357は粘板岩製である。

石製品（第120・121図１～10）

１は有溝石製品である。扁平な石の片面に断面が「Ｖ」字状の直線的な溝をもつものである。泥岩製である。２は三角形で石刀状をなすものである。直線的な一辺は磨って尖らせ、他の二辺も磨っている。上部には磨切りを行っている。泥岩製である。３～５は有孔石製品である。３はほぼ円形のものに両方から穿孔するものである。緑色凝灰岩製である。４は扁平で三角形のものに両面からの穿孔が２個施される。裏面に擦痕が認められる。泥岩製である。５は欠損品である。扁平な長方形のものに両面から穿孔するものである。泥岩製である。６は両端に磨切りを施すものである。裏面に擦痕が認められる。７は円盤状石製品で、扁平なものを打ち欠いたものである。泥岩製である。８～10は刻線礫で、扁平なものを使用している。泥岩製である。

坂ノ上Ｅ遺跡、住居跡（第122図）

昭和59年度発掘調査を実施した坂ノ上Ｅ遺跡の南東隅、つまり坂の上Ｆ遺跡と分ける東へ入り込んだ小沢の北側に検出されたもので、沢に向う斜面である。

プランは長軸5.3m、短軸約2.9mの長方形を呈し、多少開き気味である。確認面からの深さは北壁が最高で20cm、壁は垂直に立ち上がる。幅20cm、深さ20cmの周溝が検出され、溝内に６個のピットが確認された。溝は南側と東部の一部には見られなかったが、地形が関係しているものと考えられる。柱穴は南側でははっきりしないが周溝内、南東隅のピットは規則的である。中央部北寄りに長軸120cm、短軸94cm、深さ14cmの隅丸長方形の掘り込みが検出された。炉及びカマドは見られないが床面に焼土が堆積し、焼痕が認められ、中央部南寄りの掘り込み上部にも焼土が堆積していた（スクリーントーン）。床は平坦である。

出土遺物　（第123図）

土器（１～５）

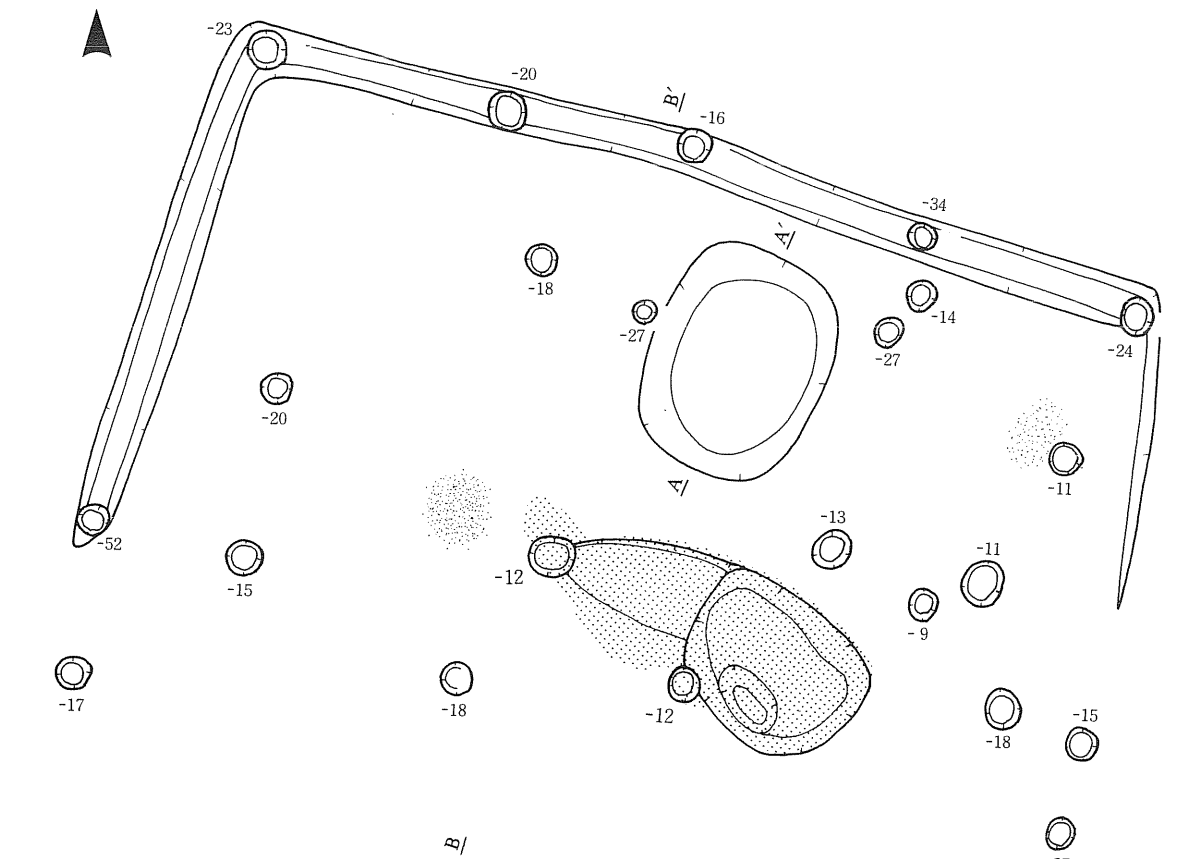
５は北東隅のピット、他は覆土出土である。１～４は縄文式土器である。１は鉢形土器の頸部及び胴部である。沈線を直線・円形に施して文様を作り出す。２・３は深鉢形土器である。磨消帯を有し、２は稜線区画である。４は頸部が内屈して口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部は無文帯をなし、頸部に下方からの刺突を施す。５は須恵器台付坏である。底部切り離し回転ヘラ切り後に台を付けている。青灰色を呈し、焼成良好である。

土製品（６）

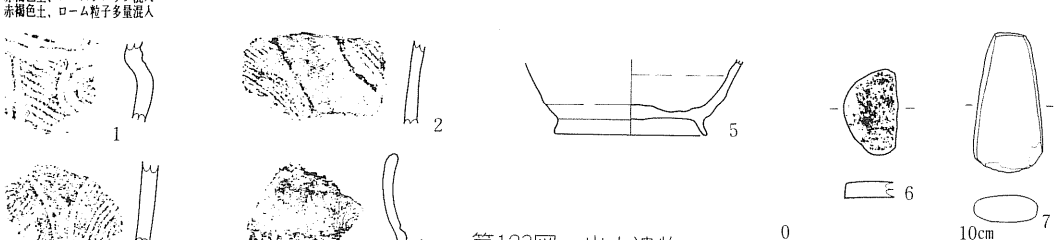
再利用土製品（円盤状土製品）である。欠損している。

石器（7）

小形磨製石斧である。石質は凝灰岩製である。



第122図　坂ノ上E遺跡住居跡



第123図　出土遺物

坂ノ上E遺跡出土鉄滓の分析結果について

東京工業大学工学部人文社会群

高　塚　秀　治

今回の分析は出土遺物のうち鉄滓、炉壁、砂鉄について行った。分析は化学組成を蛍光X線分析法、結晶組成を粉末X線分析法にて行った。分析試料は水道水でよく洗浄したのち、ダイアモンドカッターにて細分し、出来るだけ風化が進んでいない部分を選び、アセトンと蒸留水とでよく洗浄したのち、乾燥させ、乳針で微細な粉末とし、その一部を粉末X線用試料とし、残りを大気中900℃で約1日加熱し、付着有機物質、あるいは水分を除去し、更に四ホウ酸リチウムと共に電気炉（大気中1200℃、約2時間）で溶融し、ガラスビードを作り、蛍光X線分析用試料とした。したがって鉄成分の表示はすべてFe_2O_3となる。

1．鉄滓について

分析を行った鉄滓は17点（サンプルNo.1～17）であり、これを表1に示す。鉄滓は全般的にチタン成分が多く含まれており、結晶物質もウルボスピネル（$2FeO \cdot TiO_2$）、イルメナイト（$FeO \cdot TiO_2$）とから成っており、二価の鉄はそのほとんどがチタンとの化合物として存在している。他の地域に見られる鉄滓には一般的にそのほとんどに鉄カンラン石（$2FeO \cdot SiO_2$）が含まれ、この結晶鉱物（融点1205℃）が液相となり、環元された鉄（金属鉄）を再酸化されないように保護し、更に不純物質である鉄―チタン化合物を除去する役割を果していると考えられているが、ここに見られる鉄滓の分析を見るかぎり、鉄カンラン石はほとんど含まれていない。したがって鉄、チタンなどの成分以外はそのほとんどが非結晶物質となってしまったのであろう。このようにチタン成分の多く含まれる鉄滓には、我々が分析を行って来たもののうちでは概して東北地方にその例が多いが、これは製鉄に使用された砂鉄の質に由来していることが大きな理由となっているのであろう。このような質の悪い砂鉄から鉄を作っているにもかかわらず鉄の収率（砂鉄のTi/Fe値と鉄滓のTi/Fe値から計算された計算収率で、実際の収率はこの数値を

	A-1	2	3	4
SiO_2	25.40	17.18	29.33	24.20
TiO_2	15.22	18.00	13.42	15.61
Al_2O_3	5.69	3.23	7.95	4.80
Fe_2O_3	48.60	56.75	44.74	50.88
MgO	2.51	2.66	1.82	2.19
CaO	0.75	0.64	0.70	0.62
K_2O	0.99	0.73	1.28	0.96
MnO	0.71	0.75	0.62	0.68
P_2O_5	0.11	0.07	0.12	0.06
Ti/Fe	0.268	0.272	0.257	0.263

表1

	A-5R（炉壁）	A-5W（炉壁）
SiO_2	71.36	71.15
TiO_2	0.81	0.79
Al_2O_3	20.32	20.26
Fe_2O_3	3.72	3.67
MgO	1.23	1.35
CaO	0.20	0.43
K_2O	2.29	2.29
MnO	0.04	0.04
P_2O_5	0.02	0.02
Ti/Fe	——	——

表2

下回るのが普通である）は高く、下限は50.2%であり、上限は80.7%という値が求められる。

2．炉材について

炉材試料は表面がスラグ化した熔壁（試料No.5）を用いた。スラグ化した部分をダイアモンドカッターにて分離し、更に色調によって2種類に分けて見た。すなわち熔融部に近い白色部分（A－5W）と赤褐色部分（A－5R）とである。化学組成を表2に示すが、各成分は全く良く一致している。結晶組成はいずれもアルファーコーツ（SiO_2）と共通しているが、A－5Rの方が結晶度がはるかに高いことが認められるが、これはA－5Wが高温部により近くにあるために起る現象である。組成から粘土と砂を混合して炉材としスサを混ぜて炉を構築したのだろう。

3．砂鉄について

砂鉄の化学組成を表3に示す。チタン成分は12.56%と比較的高い値を示しており、結晶組成はチタノマグネタイト（チタンを固溶したマグネタイト＝チタン磁鉄鉱）のみであった。先に示した鉄滓の収率は、この砂鉄を出発物質として考えたものであり、この地域の砂鉄の特徴を示すものであろう。

	A-Is（砂鉄）
SiO_2	1.11
TiO_2	12.56
Al_2O_3	0.39
Fe_2O_3	83.04
MgO	1.86
CaO	0.21
K_2O	tr
MnO	0.83
P_2O_5	tr
Ti/Fe	0.130

表3

まとめ

遺構について

本遺跡で検出された遺構は北、西、南に入り込んだ沢に面する台地縁辺部に主として構築されている。各時期によって台地上の選定に違いがみられる。縄文時代中期初頭の竪穴住居跡６軒、同中期末の竪穴住居跡６軒、弥生時代の竪穴住居跡１軒、平安時代の竪穴住居跡２軒、時期不明のもの１軒、時期不明の掘立柱建物跡14棟、土坑146基等である。

縄文時代中期初頭の住居跡群（６、８、10、14、15、16号住居跡）は遺跡の南、南東部に位置する。８号住居跡は19m×6.1mの隅丸長方形を呈する大形住居跡であり、当台地上では初めての検出である。大形住居の在り方、機能については種々の課題があるが、８号住居跡内の遺物出土量は少なく、円筒上層ｂ式期の土器片を含めた数点にとどまり、石器も石鏃、石匙、ヘラ状石器、磨製石斧、磨石、くぼみ石等数点の出土である。１点のみではあるが北東隅で比較的大形の台石が床面直上から出土している。量的保証はないが磨石と台石が確認されており、住居跡内からの植物遺体等の出土はないが、渡辺誠氏の提唱する「共同作業場」説(註1)は雪国である点も考慮して支持できるであろう。15号、16号住居跡はともに２段構造の床面を有する住居跡で、能代市「杉沢台遺跡」(註2)検出の住居跡（時期は縄文前期末～中期初頭）の床面も２段構造を特徴としている。出土遺物、遺構からも円筒文化の系譜をたどれそうである。16号住居跡の時期は出土遺物から円筒上層ａ式期であるが15号住居跡は極めて出土遺物が少なく（縄文地文の土器片数点）、住居内地西隅に石棒（全長108cm（推定）径約15cm）の砕片が炭化物、焼土とともにまとまって検出され、住居東壁際に土偶（第93図１）がほぼ完形で発見されており、この住居の特殊性を示す出土状況と言える。これら中期初頭の住居群は６軒とも地床炉を有し、８号、10号、15号、16号住居跡の長軸方向は北東である。この住居群の東側から入り込んだ沢は16号住居跡の北西まで進み、浅い沢である。後述する円筒上層a式、大木7a式併行、北陸系土器の出土はこの沢部からの検出であり、この期の遺物の大部分を占める。捨て場としての性格を考えてさしつかえないものであろう。ただし、この沢を南北に通る農道（15号、16号住居跡西側）の部分は未調査であり、昭和60年度に再調査する予定である。沢の利用については調査後、結論を出したいと考えている。

縄文時代中期末の住居跡は北側沢縁部（１号、２号、９号住居跡）と南東沢縁部（11号、12号、13号住居跡）に位置する。南東部の住居跡は同時期住居跡群と離れているが、北側の住居跡は小沢を隔てた「坂ノ上Ｅ遺跡」との関連というよりは「坂ノ上Ｅ遺跡」の一部として捉えられるものである。この期の遺跡は新都市開発計画地域内で今までに11ヶ所(註3)も確認されており、今後の調査では増加する可能性がある。これまでの調査では住居の軒数に違いはみられるが、規模は大形、中形、小形の住居が存在し、中形、小形の住居跡が多く見られる。炉の形態はいわゆる複式炉と称されるもので、本遺跡においてもその組み合せは５タイプ①石囲土器埋設部＋石組部（１号住居跡）②土器埋設部＋掘り込み部＋掘り込み部（２号、９号住居跡）③土器埋設部＋石組部＋掘り込み部（12

号住居跡）⑤石囲土器埋設部＋石組部＋掘り込み部（13号住居跡）に分類ができ、各同時期遺跡においても複式炉の形態は〈土器埋設部〉〈石囲土器埋設部〉〈石組部〉〈掘り込み部〉の各２部又は３部のそれぞれの組み合せで構成されるものである。住居規模、時期によって定形化される傾向は判然としないが、本遺跡の11号、12号、13号住居の炉の中軸方向は北東～南西を示している。この時期の住居跡は切り合いがほとんどみられないこと、土器型式等から、ある一定期間内における住居存在数を把握することは困難であるが、この台地上の縄文時代中期末の各集落間の在り方について総合的な分析と検討が必要とされる。（今年度調査した「下堤Ｅ遺跡」では同一住居内で炉の新旧関係が確認された例が５軒あり、複式炉、土器埋設炉から石囲い炉への移行がつかまえられている。）

弥生時代の住居跡は西側沢縁部に面する台地中央部に１軒検出された（７号住居跡）。

秋田県内で弥生時代の住居跡が確認されたのは昭和58年、若美町「横長根Ａ遺跡」[註4]が初めてであり、その後、秋田市「湯ノ沢Ａ遺跡」[註5]、河辺町「風無台Ⅱ遺跡」[註6]で相ついで検出され、今年度は本遺跡南の「狸崎Ａ遺跡」でも住居跡１軒が確認されている。「狸崎Ａ遺跡」を除いた前記４住居跡のプランは円形を基調とし、周溝（壁溝）をもち、炉は石囲い炉と地床炉があるが、「横長根Ａ遺跡」「湯ノ沢Ａ遺跡」の炉内及び周辺には礫が検出され（火熱を受けていないが、横長根Ａ遺跡では炉に付隋するものと報告されている）、本住居跡の炉内北側に見られた2個の礫は火熱を受けており、やはり炉に付設したものと考えられるが形態ははっきりしない。柱は炉を中心とした４本が主柱である点は共通する。規模については「横長根Ａ遺跡」6.7m、「湯ノ沢Ａ遺跡」11.6×10.7m、「風無台Ⅱ遺跡」約８×７ｍ、「狸崎Ａ遺跡」7.9×6mで比較的大形化し、「坂ノ上Ｆ遺跡」12.4×11mが最大の面積を持つ。また、本住居跡の周溝は南東で一部途切れ、中央にピットが確認された。台地における住居跡の位置等から出入口施設を想定できるものである。

本台地で検出された弥生時代の住居の在り方はその占地において東側が開いた舌状台地の先端部中央に１軒の構築を特徴とする（湯ノ沢Ａ遺跡では弥生時代の住居跡が２軒検出されているが、２号住居跡は倉庫的性格の遺構と考えている）。これは、この地域に限定された弥生期の集落の様相を示しているのか今後の資料増加を待つ他ないが、昭和60年、発掘調査予定の「地蔵田Ｂ遺跡」は面積も広く、弥生時代の遺物が確認されている遺跡であり期待される。

平安時代の住居跡は４号、５号住居跡であり、ともに住居東壁南寄りにカマドを持つもので、出土遺物は赤褐色土器の坏（底部切り離し回転糸切り無調整）、甕口縁部（ロクロ成形後ヘラケズリ整形）形）と５号住居跡からはふいごの羽口が出土している。これら赤褐色土器の年代については10世紀前後と考えられ、北側の小沢をはさんで「坂ノ上Ｅ遺跡」の製鉄炉（１基）、炭焼窯（１基）が昭和59年度に調査され、遺物は全く出土していないが炉の形態等から９～10世紀と考えられている。[註7.8] ５号住居跡のふいご羽口出土をもって、この製鉄炉との関連を捉えたい所であるが決定に至らない。今調査において前記「坂ノ上Ｅ遺跡」の製鉄炉、炭焼窯の東側で住居跡が１軒検出された。住居跡

は長方形を呈し、３面に周溝がみられるもので斜面に構築されている。出土遺物は縄文時代土器と北東隅柱穴からの須恵器台付坏であり、縄文式土器は住居跡への流れ込みで、１点の出土であるが須恵器台付坏がこの住居の年代を推定できる。この須恵器台付坏は底部切り離しが回転ヘラ切り後に台を付けたもので９世紀前～中頃と考えられる。最近、鹿角郡小坂町所在の「白長根館Ⅰ遺跡」(註9)において平安時代の住居跡が11軒検出され、プランは長方形で周溝があり、内部に炉状の施設を持つもので、うち６軒から羽口と鉄滓が出土し、SI16、17、18の住居跡はいずれも斜面に構築され、製鉄関連の工房跡と考えられている報告がある。本住居跡内からは羽口、鉄滓等の出土はないものの須恵器台付坏の時期等から製鉄炉と関連する遺構と考えられる。

調査区北側に集中している掘立柱建物跡群は10棟を数えるが、遺構内からの関連遺物はなく、沢を隔てて近接する製鉄炉等の関連、また時期についても不明である。

（註）

（註１）　渡辺　誠「縄文時代の植物食」　1974　雄山閣
　　渡辺　誠「縄文人とトチの実」　1985　帝塚山考古学No.５

（註２）　秋田県教育委員会「杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書」　1981

（註３）　「下堤Ｂ遺跡」「下堤Ｅ遺跡」「下堤Ｆ遺跡」「下堤Ｇ遺跡」「坂ノ上Ｅ遺跡」「湯ノ沢Ａ遺跡」「湯ノ沢Ｂ遺跡」「湯ノ沢Ｃ遺跡」「湯ノ沢Ｄ遺跡」「野畑遺跡」「台Ａ遺跡」

（註４）　秋田県若美町教育委員会「横長根Ａ遺跡」　1984

（註５）　秋田市教育委員会「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」湯ノ沢Ａ遺跡　1984

（註６）　昭和59年度、秋田県教育委員会で発掘調査を実施している七曲臨空港工業団地造成地域内で確認されている。当開発計画地域の台地と岩見川をはさみ南東対岸に位置する。

（註７）　秋田市教育委員会「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」坂ノ上Ｅ遺跡　1984

（註８）　菅原俊行「竪形炉をもつ製鉄址」　秋田市坂ノ上Ｅ遺跡、季刊考古学　第８号　1984

（註９）　秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅻ」　白長根館Ⅰ遺跡　1984

遺物について

ここでは特に縄文時代中期前葉の土器群と弥生時代の土器群についての概略を記述してみたい。

縄文中期初頭の土器は遺構内外から出土しているが、特に調査区南東部の東側から入り込んだ沢からの検出でこの期の捨て場と考えている所からの土器を主体にした。

出土土器は円筒上層ａ式、大木7a式（併行式）、北陸系の土器、石器で、北陸系土器の出土量が夥しい。最近、県内で北陸系土器を伴出する遺跡が増加しているがこれほど多量に出土した例はない。県内において北陸系土器が出土する時期は縄文時代前期末から中期前半であり、通称御所野台地と呼ばれるこの計画地域内でも縄文時代前期末～中期前半の過渡的様相を示す遺跡（下堤Ｄ遺跡[註1]、下堤Ｇ遺跡・湯ノ沢Ｂ遺跡[註2]）が知られている。しかし、本遺跡出土の土器については縄文時代前期末の出土土器はなく、中期初頭、円筒上層ａ式期、大木7a式期にほぼ限定されるもので北陸地方の土器編年と比較すると同時にこの時期に伴う北陸系土器の在り方を検討することは可能であるが、出土状況からしても北陸地方の如く土器編年を組み立てることは困難と言える。北陸系土器群については、石川県鹿島町徳前に所在する「徳前Ｃ遺跡」[註3.4]出土土器を中心に参考とした。１群～７群までを北陸系土器として扱ったが７群土器は胴部破片であり、２群～６群土器の一部と考えられるものである。

この沢部から一括で出土した土器の中では量的に少ないものの、22群土器は口縁部に撚糸圧痕、単軸絡条体圧痕を平行に施し、口唇部や頸部隆帯、それに粘土紐貼付けによる懸垂状文、突起にも施文されるもので円筒上層a_1式土器である。23群土器は口縁部に横位方向へ２～３条の平行撚糸圧痕文や「Ｕ」「∩」字状、波状、鋸歯状に撚糸圧痕を施文するもので口唇部、頸部隆帯、粘土紐貼付けによる懸垂状文にも施される円筒上層a_2式土器である。[註5]

９群～21群土器は大木7a式に比定される一群で（東北南部においても大木7a式期の比較資料が少なく、今後の増加が待たれる分野である）、深鉢形土器が圧倒的に多く、浅鉢形土器も含まれている。深鉢の口縁は外反するものがほとんどで、内湾しながらゆるく外反するものもある。口縁は山形口縁と平坦口縁のものがあり、山形口縁（４単位）を有するものが多い。口縁部、頸部の施文は半截竹管状工具を用いた半隆起線文による横位方向への文様構成が主体であり、平行文、波状文、コンパス文、鋸歯状文、爪形文等を施文し、山形口縁頂部下には粘土紐を縦位に貼り付けるものが多くこれら隆帯には撚糸圧痕が施される。沈線による施文は少なく、平行する２条の沈線で横位方向への連弧文の土器（第71図234）や口縁部の沈線間に波状沈線文の施されるもの（第71図237）などである。東北南部出土の大木7a式土器と比較すると施文方法に相違が認められるが、器形、文様構成等に類似性を見い出すことができよう。（第84図490）の土器は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢形土器と思われる。沈線と刺突による文様構成で五領ヶ台式土器の系統が考えられる。８群土器は粗製土器を一括した群である。深鉢形が主体で文様は縄文、撚糸文、無文の土器がみられ、口縁部は複合口縁をなすものが多く大木7a式、下小野式との関連をたどれる一群である。１群～７群の北

陸系土器は前述の土器群とともに縄文中期初頭に位置づけられるもので、新保様式の範疇で理解され、１群土器（口縁部に斜位格子目文を施文するもの）、２群土器（口縁部に縦位半隆起線文を施すもの）、３群土器（口縁部の縦位刻線に横位に沈線が直交し、三角形印刻文、蓮華状文をもつもの）、４群土器（口縁部に横位無文帯を主にもつもの）、５群土器（器面全体に刻目文・格子目文・縦位、横位半隆起線文・無文帯・三角形印刻文等で区画した鼓形の土器である）、６群土器（口縁部の横位半隆起線文間に縄文・撚糸文が残るもの）に類別を行なった。北陸地方の縄文時代前期末葉から中期の土器編年は、最近の調査資料から編年が検討されているがここでは本遺跡と比較的類縁性の見られる「徳前Ｃ遺跡」の西野秀和氏による編年[註6]に対比すると、本遺跡の１～６群土器は「徳前Ｃ遺跡」の第２群土器以降に該当し、新保様式（第３群1A類、第３群1B類、第６群３類）、新崎様式の第１形式（中平式、第３群1C類、第６群４類）土器まで包含されることとなるが様式内の細分は無理であり、出土状況から円筒上層ａ式、大木7a式期の編年に比定される北陸系土器と理解する事が妥当であると思われる。秋田県山本郡八竜町「萱刈沢貝塚」[註7]に好例がみられる。この貝塚は円筒下層ｄ式～上層ａ式期、大木7a式～8b式期の貝塚で、５号住居跡から円筒上層ａ式土器と大木7a式、新崎式の土器が伴出しているもので注目される。

このほど「秋田県における北陸系土器について」という研究報告[註8]が富樫泰時代によって著わされ、県内で北陸系土器出土の遺跡は日本海沿岸に集中する傾向があるものの、北は米代川上流から南は雄物川上流でも確認され、今後全域で確認されることは確実であろうと予想して、さらに山内清男氏が指摘した「侵入的又は貫入的」に土器が入ってきたとは思われないほどの出土量がみられ、頻繁に交流のあったことを示唆している[註9]。今後、日本海沿岸各地域においてこの期の遺跡増加に伴ない各文化圏との関わり方へ波及していく問題と考えられるのである。縄文中期初頭の土器が最も多く出土した沢部は一部農道で、未調査である。昭和60年度に追調査する予定であり、調査後、再検討したいと考えている。

弥生時代の住居跡は１軒の検出で、この台地における弥生住居の在り方に特徴があることに若干触れた。出土土器は34群～42群が該当すると考えられるものである。ただし、これら土器群は層位的に捉えられたものではなく、住居跡内覆土からの出土状態においても同一層内出土として確認された土器を含めた一群である。

土器には鉢、壺、高坏、甕の器形があり、蓋はみられない。文様は平行沈線文・工字文・変形工字文・磨消縄文・列点文・鋸歯状文・刷毛目文・無文の土器が認められ、東北北部、中部、南部の各地域の弥生期の特徴を有する土器が混在し、それだけ土器形式の異なる土器を含んでいる（大洞Ａ式、大洞A′式、砂沢式期（山王Ⅲ層式）、宇津ノ台式、志藤沢式期）。しかし、遺構と遺物出土の状況から、これら土器群はほぼ同時性と理解され得ると考えられるもので、この地域における、縄文時代晩期末の経済社会から弥生時代の経済社会へ移行する過程での生活基盤の態勢は稲作農耕社会を受け入れる下地が出来上がり、急速に到来してきた稲作農耕社会へ地域性を持続しながら転換し

て行ったものであろう。非常に概念的なまとめになってしまった事を反省し、昭和60年度に遺跡の南東に所在する同時期の「地蔵田B遺跡」の調査後に改めて土器の検討を加えたい。

（註）

（註1）　秋田市教育委員会「秋田市下堤D遺跡発掘調査報告書」　1982

（註2）　秋田市教育委員会「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」下堤G遺跡湯ノ沢B遺跡　1983

（註3）　石川県「鹿島町史」資料編上巻、（鹿島町の考古資料）　1982

（註4）　石川県立埋蔵文化財センター「鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅳ）」　1983

（註5）　円筒上層a式は「石神遺跡」1970で江坂輝弥氏によって2型式に分類され、層位的にも認められている。

（註6）　（註4）と同じ

大区分	様式	形式名	徳前C遺跡の代表的器種	北陸の主要遺跡	中部	関東	東北
前期		福浦上層式	第1群3・4	吉峰 小浦			
前期	朝日下層・新保様式	（第1形式） 朝日下層式	（第1群）	朝日貝塚	踊場	十三菩提	円筒下層d
中期	朝日下層・新保様式	（第2形式） 新保式	第2群 第3群1A類	野島大門 新保 西中	梨久保式第3群 （藤森1967） （梨久保式） 梨久保式第2群 （藤森1967）	（五領ヶ台）	円筒上層a 大木7a
中期	朝日下層・新保様式	（第3形式） （第3段階）	第3群1B類 第6群3類	東間坂手山 古屋谷 徳前			
中期	新崎様式	（第1形式） 中平式	第3群1C類 第6群4類	中平 通り鼻			
中期	新崎様式	（第2形式） 新崎Ⅰ式		新崎 厳照寺 堀松貝塚		（勝坂）	
中期	新崎様式	（第3形式） 新崎Ⅱ式		赤浦 上山田貝塚	新道		

編年対応表試案（西野編年表）

（註7）　八竜町教育委員会「萱刈沢貝塚」　山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査報告書　1979

（註8）　富樫泰時「秋田県における北陸系土器について」　本荘市史研究、第四号　1984

（註9）　本遺跡出土の北陸系土器を実見された小島俊彰氏は土器は基本的に北陸地方と類似するが、文様構成に若干の差異を認めざるを得ないと指摘された。これは北陸地方から東北地方への土器文化の移行が間接的である可能性を提示しているし、各地域の遺跡出土土器の胎土分析等を行ない比較検討する必要性も課題としていよう。

参　考　文　献

須藤　隆：「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」　文化　第33号　1970

須藤　隆：「土器組成論」　考古学研究　第19巻４号　1973

児玉　準：「男鹿半島の弥生式土器」　男鹿半島研究　別冊　1975

青森県立郷土館：「宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書」　1979

山形県教育委員会：「郷の浜Ｊ遺跡」　1981

山形県埋蔵文化財調査団

丹羽　茂：「大木式土器」　縄文文化の研究　４縄文土器Ⅱ　雄山閣　1981

北上市教育委員会：「滝ノ沢遺跡」　1983

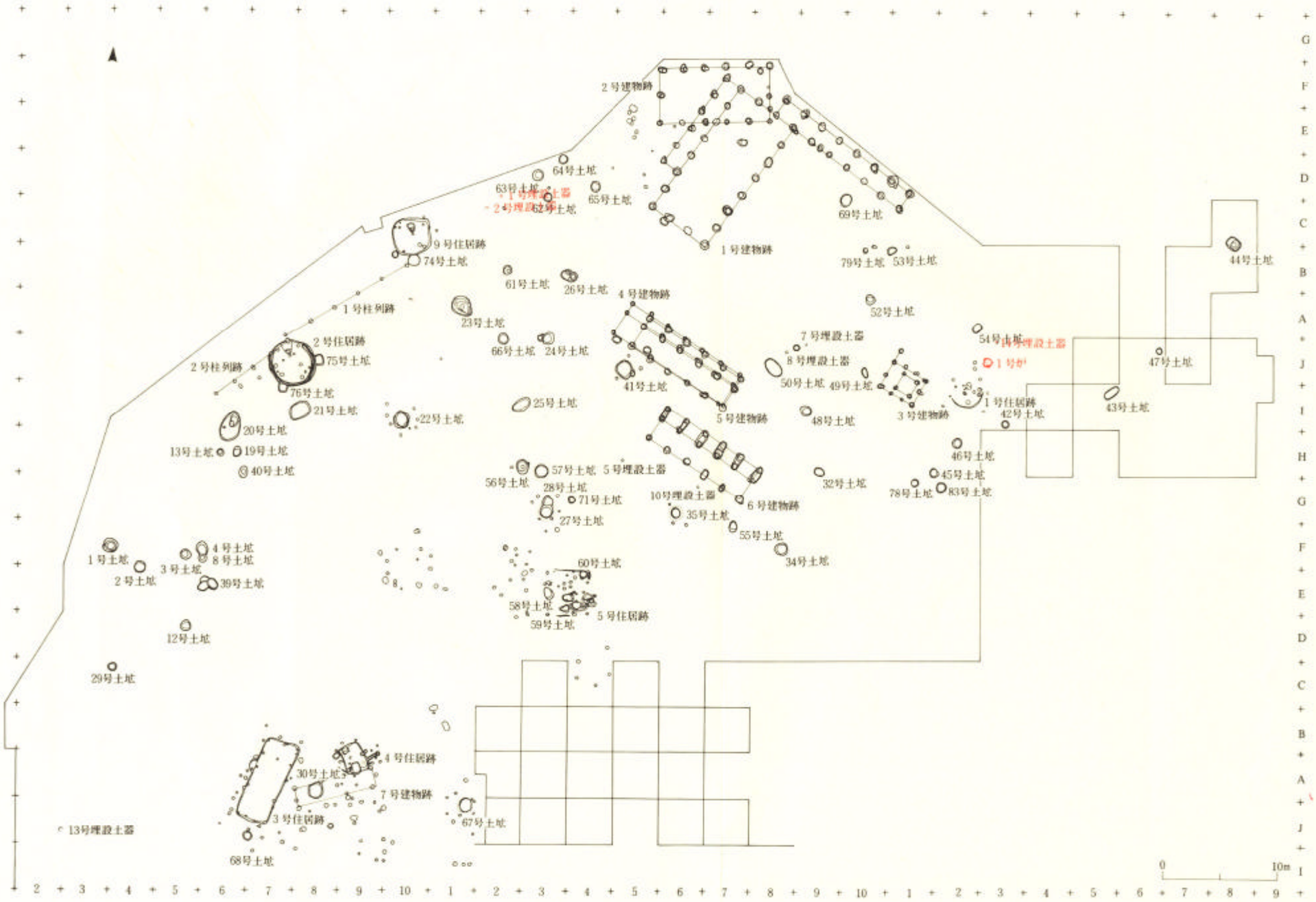
新潟県佐渡郡小木町教育委員会：「長者ヶ平」　1983

秋田県教育委員会：「平鹿遺跡」発掘調査報告書　1983

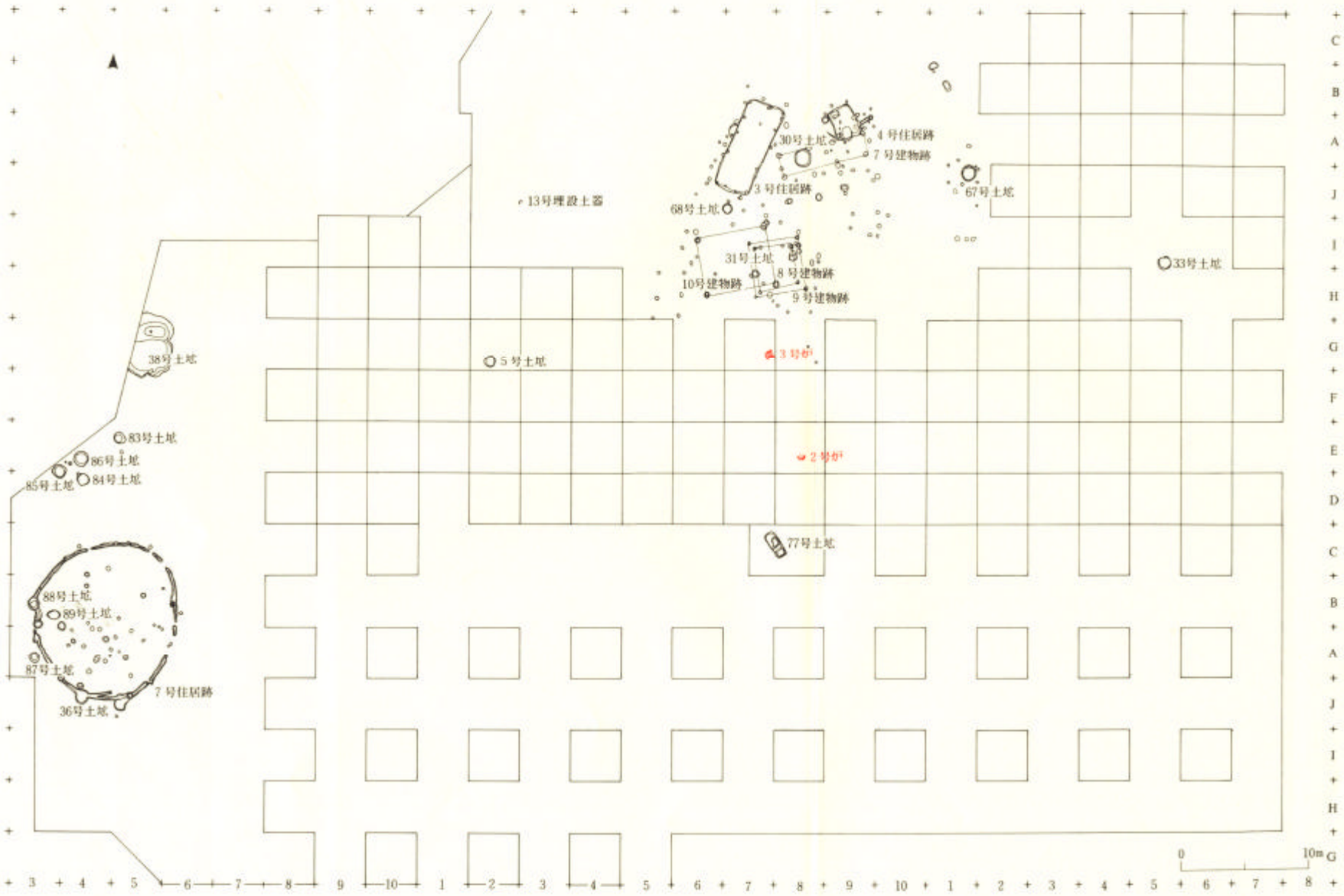
能都町教育委員会：「真脇遺跡」発掘調査概報　1984

須藤　隆：「東北における稲作の開始」　月刊考古学ジャーナルNo.228　1984

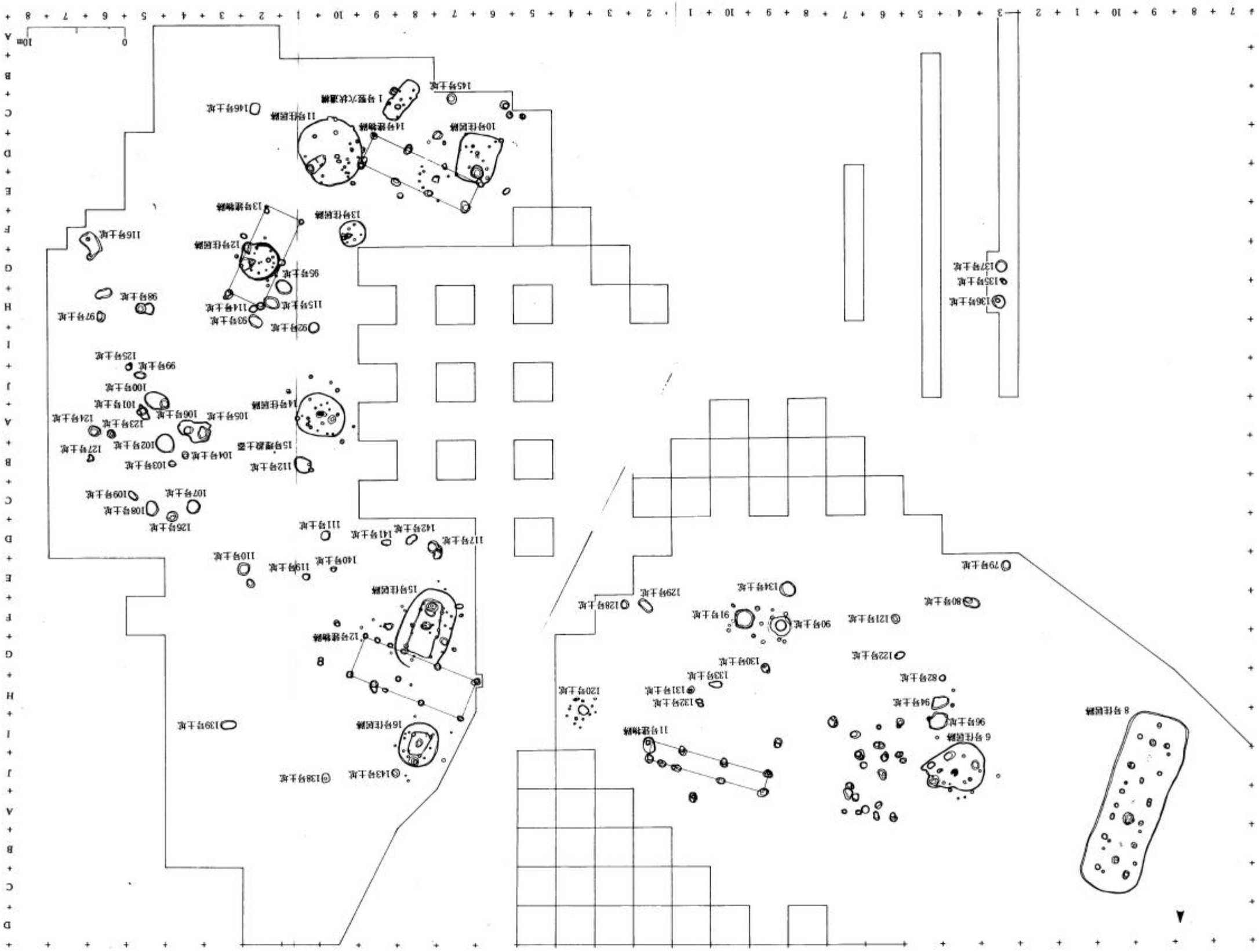
秋田県教育委員会：「三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡」発掘調査報告書　1984


2 号建物跡
1 号建物跡
3 号建物跡
4 号建物跡
5 号建物跡
6 号建物跡
7 号建物跡
1 号住居跡
2 号住居跡
3 号住居跡
4 号住居跡
5 号住居跡
9 号住居跡
1 号柱列跡
2 号柱列跡
1 号埋設土器
2 号埋設土器
5 号埋設土器
7 号埋設土器
8 号埋設土器
10号埋設土器
13号埋設土器
14号埋設土器
1 号ガ
1 号土坑
2 号土坑
3 号土坑
4 号土坑
8 号土坑
12号土坑
13号土坑
19号土坑
20号土坑
21号土坑
22号土坑
23号土坑
24号土坑
25号土坑
26号土坑
27号土坑
28号土坑
29号土坑
30号土坑
32号土坑
34号土坑
35号土坑
39号土坑
40号土坑
41号土坑
42号土坑
43号土坑
44号土坑
45号土坑
46号土坑
47号土坑
48号土坑
49号土坑
50号土坑
52号土坑
53号土坑
54号土坑
55号土坑
56号土坑
57号土坑
58号土坑
59号土坑
60号土坑
61号土坑
62号土坑
63号土坑
64号土坑
65号土坑
66号土坑
67号土坑
68号土坑
69号土坑
71号土坑
74号土坑
75号土坑
76号土坑
78号土坑
79号土坑
83号土坑
0
10m

第124図　調査区北側



第125図　調査区中央部



8号住居跡
6号住居跡
96号土坑
94号土坑
82号土坑
122号土坑
121号土坑
90号土坑
91号土坑
80号土坑
134号土坑
79号土坑
11号建物跡
132号土坑
131号土坑
133号土坑
130号土坑
120号土坑
129号土坑
128号土坑
143号土坑
138号土坑
16号住居跡
139号土坑
12号建物跡
15号住居跡
140号土坑
119号土坑
110号土坑
117号土坑
142号土坑
141号土坑
111号土坑
126号土坑
108号土坑
107号土坑
109号土坑
112号土坑
15号埋設土器
104号土坑
103号土坑
102号土坑
127号土坑
105号土坑
106号土坑
123号土坑
124号土坑
14号住居跡
101号土坑
100号土坑
99号土坑
125号土坑
92号土坑
93号土坑
115号土坑
114号土坑
97号土坑
98号土坑
95号土坑
12号住居跡
116号土坑
13号住居跡
13号建物跡
136号土坑
135号土坑
137号土坑
10号住居跡
14号建物跡
11号住居跡
146号土坑
1号竪穴状遺構
145号土坑
0
10m
D C B A J I H G F E D C B A J I H G F E D C B A
7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8

第126図　調査区南側

第127図　遺構配置図

調査区北側（北→）

調査区西側（南→）

図版 1

調査区南側（西→）

調査区南側（北→）

図版 2

1号住居跡（北→）

2号住居跡（北→）

図版 3

3号住居跡（北→）

14号住居跡（西→）

図版 4

5号住居跡（西→）

6号住居跡（北→）

図版5

7 号住居跡（東→）

8 号住居跡（北→）

9号住居跡（東→）

10号住居跡（北→）

図版 7